
MERCENARY return Muv-Luv World

C E L L E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M E R C E N A R Y r e t u r n M u v - L u v W o r l d

【Nコード】

N 2 9 1 2 0

【作者名】

C E L L E

【あらすじ】

AC世界を体験したUL冥夜End後の武が名を変え奔走する物語です。

注意

この作品は1992年Start原作改編モノです。当分原作改編の為の下準備が続きます。

不知火無双です。かと思えば武御雷も無双です。と思えば（ryとばかりに戦術機が魔改造されていきます。いいかえると技術開発系

の K A I H A T S U ものです
一部 E x 編の設定を流用します。
叢の設定を追加しました。A C 4 の設定を追加しました。この二つ
は現在技術のみのクロスです。

お読みの前に

別所で投稿しているマブラヴとアーマードコアクロス『MERCE
NARY from Muv-Luv World』のアナザース
トリーです。

もし彼が、最底辺からの再出発を強いられBETA蔓延る地獄に帰
還したら…?という構想のもと筆を走らせています。

★Warning★

この作品は中二病型フロム脳患者が執筆しています。クロスオーバ
ーによる改変の為フロムネタやオリジナル戦術機及びオリジナル・
原作キャラ魔改造が出没します。またアーマードコアクロスと言
いましたがそれ以外のフロムソフトウェア作品からもネタを供給し
ております。

お読みの前に（後書き）

本編は次のページからとなります…

prologue..” Raven” of white wing

あいとゆうきのおとぎばなし。

ひとりのゆうしゃとなかまたちがえがくものがたり。

ゆうしゃはあいをしり、ゆうきをしり、かなしみをこえてしんじつをしる。

ゆうしゃはなかまをえ、そしておおいなるやみをうちはらう。

：それが、御伽噺。救いを求め、救いとなることで全てを救った英雄の物語。

そして、これは英雄となるべきものが歩んだ、英雄の為の血塗られた怪物となる物語。

prologue..” Raven” of white wing

——青年は、荒野に一人で佇んでいた。

——嘗て傍らに居た少女の姿は何処にも無く

——共に戦場を駆け抜けた戦友は皆先に逝ってしまった。

——自分を導いた先任士官、将官もまた一人、一人と旅立ち。

——愛した女性^{ヒト}は彼方の星へと戻れぬ旅路に就いた。

ここは地獄。黙示録が紡いだこの世の終わり。

太陽系第3惑星地球、そこは異星起源種—Being of the Extra Terrestrial origin which is Adversary of human race—略称、BETAにより蹂躪されていた。

彼にとっての勝利への分水嶺は既に過ぎ去り、ただ彼を突き動かすのは亡き友と遙か遠き地に居る恋人への思い。

——冥夜、すまない。再び逢うのは無理そうだ：

心中で恋人へ詫び、懷にある刀の鏢——彼女の写し身とも呼べる皆琉神威の鏢——にそつと触れ、彼は覚悟を決める。

纏うは時の『政威大將軍』煌武院悠陽に賜りし全高18mの紅き鋼の鎧—戦術歩行戦闘機、略称戦術機：TSF—Type00R武御雷。握り締めるは2丁の32mmと120mmの複合砲：87式突撃砲、背負うは二振りの巨大な刀：74式近接長刀。

「こちらCP（command post）、白が：じゃなかったわね。御剣中佐、聞こえるかしら？」

どこことなく飄々とした声で無線を寄越したのは嘗ての彼の恩師であり世界を救う聖母を目指した魔女：香月 夕呼。

「こちらニブルヘイム01……武でいいですよ。夕呼先生」

「はあ：だからあたしは先生じゃないって言ってるでしょ？それに：結局人類どころか『教え子』を誰一人幸せに出来なかった無能よ？」

そう皮肉げに呟く彼女の声には諦観と自嘲が籠もっていた。

彼女は嘗て人類を救うべくオルタネイティヴ第4計画を総責任者として率いていた。

彼女の語る因果律量子論：それは難解でありまた利用して事象を説明出来るが理解は殆ど不可能と呼べるものだった。しかし彼の青年白銀 武：いや、御剣家の養子である御剣 武が『この世界に呼ばれた』事はその理論でしか説明出来ない。

彼女は第4計画の為にありとあらゆるモノを利用した。だが親友、母国すら利用してまで追いかけた彼女の夢は儚く散り、今は人員が完全に不足した帝国近衛軍のCP将校の末席にまで身を窺っている。尤も彼、御剣 武中佐の専属のようなものだが。

——オルタネイティヴ計画：

1966に始まる第1計画ではBETAの思考、言語解析によるコミュニケーションの確立を目指した。

だが本計画は全くBETAについて解明出来ず失敗に終わる。

続いて1967年、国際恒久月面基地『プラトール1』がBETAに

より攻撃される事件：サクロボスコ事件から人類対BETAの戦争、即ち第1次月面戦争が勃発。

これによりオルタネイティヴ計画は第2段階：BETAを捕獲し調査、解析する計画に移行した。

代謝低下酵素の発見など人類への貢献は高いのだがBETAに対しては炭素生命体であるということのみであり果たして払われた莫大な犠牲、代償に対し見合うかどうかは如何とも言い難い。

続いて同年にオルタネイティヴ1の失敗に対し『ESP（超能力者）により直接思考を読み取る』というソ連案が採択され第3予備計画としてソビエト科学アカデミーに国連予算の提供が開始された。

1973年、BETAの着陸ユニットがウイグル自治区カシユガルに落下、BETAの基地であるハイヴが建設され事実上の地球侵略が開始される。

これを受け目立った成果の無い第2計画は破棄、前述の第3予備計画が正式にソ連主導のオルタネイティヴ3として発動することとなる。

その後人類は核兵器と戦術機を用いて反撃するも大地を放射能で汚すだけに終わり、敗戦を重ね続けた。

第3計画では投薬などによりESPに目覚めた人間を人工子宮にて培養し人工ESP発現体を「量産」した。そこに人道的見地などなく、量産された人工ESP発現体は来るべき時のため一部は戦術機のパイロット一衛士となるべく訓練され、一部は諜報活動一皮肉にも人間相手のだが一に従事した。

そして1992年、ハイヴを拡大するBETAに対しインドでの勢

力圏挽回を懸けてボパールハイヴ（H13・甲13目標：カシユガ
ルを1としたナンバリング）攻略作戦、通称スワラージ作戦が発動。
この作戦には宇宙戦力が初めて投入され、軌道爆撃、降下部隊など
その後のハイヴ攻略戦術のセオリーが確立された作戦であるが：

遂にこの作戦にESP発現体を含む特殊戦術情報部隊がハイヴ地下
茎構造に突入、リーディング（読心）による情報収集やプロジェク
ション（心象投影）による意思疎通を試みるも得られた成果は『B
ETAに意識はある』ということのみに終わった。

さて、先天才『横浜の牝狐』『極東の魔女』と呼ばれる香月夕呼
の台頭は1991年に遡る。

若干17歳の学徒であった彼女は独自理論『因果律量子論』を発表、
これが日本帝国オルタネイティヴ計画招致委員会の目に止り、帝国
大学応用量子物理研究室へと編入される。

1994年にオルタネイティヴ4予備計画の招集が始まり、これに
日本、カナダ、オーストリアが立候補。国連常任理事国間の政治問
題まで発展する。

翌年の1995年、オルタネイティヴ3をシェイプした香月夕呼
博士の案一対BETA諜報員育成計画一が採用されオルタネイティ
ヴ4が発動、第3計画は本計画に接收された。

そしてこれに対抗していたのがオルタネイティヴ5予備計画である。

事は更に遡り1988年、第3計画に見切りを付けた米国が次期予
備計画の招集を待たずBETA由来の新元素により作成された新型
爆弾―5次元効果爆弾、通称G弾―によりハイヴを一掃するという

対BETA戦略を計画案として提示する。

しかし本計画案は1989年に被害影響予測が不可能な事を理由にユーラシア各国が反対、国連は同案の不採用を決定した。

国連の決定に対し米国は独自の対BETA戦略を強行し、国連に対するあからさまなロビー活動を開始。

1996 年米国の提案から第5予備計画が招集される。

翌年1997年、1950年に米欧共同の系外惑星探査プロジェクト・ダイダロス計画の際打ち上げられた探査機イカロス1の信号をNASAが受信に成功し、蛇遣い座バーナード星系に移住適合性Aの地球型系外惑星を発見。これを受け系外惑星への避難を先の不採用案に加え尖鋭化したオルタネイティブ5予備計画が正式に決定される。

第4計画が早期に格上げされた要因にはこの強引なロビー活動に対する国連の反発があった。

近年の詳細を語るならば先進戦術機開発計画、通称プロミネンス計画開始が1996 年、朝鮮半島からの撤退支援作戦・光州作戦が1998年。同年にBETAが日本本土侵攻：当時の首都である京都も陥落、BETAは横浜まで侵攻しハイヴを建設、『この世界の白銀 武』が死亡したのもこの頃である。これを受け政府は東京に遷都する。

1999年、本州奪還・明星作戦、米国では現行機F-15強化構想、フェニックス構想が始動。

2000年横浜基地においてオルタネイティヴ4占有区画稼働開始。
同年日米共同戦術機開発計画・XFJ計画が承認される。

そして2001年は人類にとって激動の年となった：

彼、御剣 武：旧姓白銀は『この世界』の人間ではない。彼はBE
TAもいない、『ごく普通の世界の普通の学生』であった。だが彼
は何の因果かこの世界：パラレルワールドへと喚ばれてしまったの
だ。2001年10月22日。廃墟と化した横浜に。

そして彼は通っていた高校：この世界では国連軍横浜基地となつて
いた場所に辿り着き、ここで生き抜くため衛士を目指すこととなる。

第207衛士訓練学校所属207B分隊。

榊 千鶴

彩峰 慧

珠瀬 壬姫

鎧衣 美琴

そして、

御剣 冥夜

彼らはかつてのクラスメートとほぼ同じ存在。尤も鎧衣に関しては
性別が逆転しているが。

そして彼らの師、神宮寺 まりも もまた然り。

戦争もなく平和な世界からこのパラレルワールドに来た彼にとってこの世界は、正しく地獄だった。

筋力、体術では同年代の女の子に軽く負け徹底的に鍛え直され、触った事のない銃の組み立てから扱いまでぐうの音も出ないほどに扱かれ、サバイバル訓練：自衛隊のレンジャー訓練のような事もした。

座学では隊の運営法や戦場での規律、効率的な殺し方等々『普通』は学ばない事を徹底に仕込まれた。

仲間に助けられっぱなしであったが、彼はそれを何とか乗り切り、そして仲間は未熟な彼を支え続けた。

そして迎えるのは卒業試験ー通常訓練の卒業であり、これを終えた後は衛士となるための訓練が待ち構えているーである総戦技演習。これに合格しなくては衛士への道はなく、白銀が所属する207B分隊にとってはラストチャンスであった。

結論から言うと彼らはアクシデントがあったものの総戦技演習を無事修了、衛士育成過程へと進む。

そしてお荷物であった彼は遂にその絶対的な才能を見せ付ける。

類を見ないレベルの高さの衛士適性、変則的で他の追随を許さない三次元機動。

彼は衛士となるべく生まれたかのような圧倒的才能を持っていた。

そして訓練を続ける中、1組の男女が恋に落ちる…

そう、御剣訓練兵と白銀訓練兵だ。

数多の厳しい訓練、彼女の警護に就いていた帝国近衛軍所属の月詠真那中尉との衝突を乗り越え結ばれる二人。

だが世界は非情であった。

本来ならば救世主の再誕を祝うべきクリスマスに唐突に告げられたオルタネイティヴ4凍結及びオルタネイティヴ5への即時移行…

彼らに突きつけられたのは所属していた横浜基地がオルタネイティヴ4占有区画であった事、そして今まで白銀を支え利用していた香月副司令の失脚…

詳細について語られる事は無かった。

N e e d t o K n o w n…

兵には認められた情報レベルの情報しか与えられない。

後に彼には一枚のチケットが渡される。それは地球脱出の移民船のチケットだった。

コレがあれば地獄の地球を脱出出来る…

だが彼はそれを恋人である御剣 冥夜に託した。家柄や状況から式も上げずにいた恋人に生き残って欲しい。自分が生きて戦った証を残して欲しい…

彼はそう思っていた。そして彼女もまたそう思っていたのである。

そう、彼が手にしたチケットは元々御剣 冥夜に託される筈のものだったのだ。

移民船が発し人類は最大であり恐らく最後になる大反攻作戦、通称戦略呼称『バビロン作戦』を開始する。

大量のG弾によるハイヴ攻略作戦…地球を不毛の焦土と化しながら作戦は進められる。

そしてハイヴに立ち向かう衛士の中には、第207B分隊の衛士たちも名を連ねていた。

極東、ジャール大隊と共にエヴェンスクハイヴと赴く衛士の中には極東最高のスナイパーと謳われた珠瀬 壬姫が。

中東、アンバールハイヴにて米軍・国連仕様の突撃砲AMWS-21を片手に迫りくるBETAに抗う鎧衣 美琴、彩峰 慧が。

欧州、迫りくる恐怖を振り払い止む事を知らない鉄の雨の中にて貸

与された74式近接戦闘長刀を片手に奮戦する榊 千鶴が。

そして、日本の悲願佐渡島ハイヴの攻略には白銀 武と原隊復帰した神宮司 まりもが。

しかしバビロンの名の通り、人類が目指した頂なき塔は脆くも崩れ去る。

1つ、2つと怒濤の進撃にてハイヴを落とした人類であったが4つ目、2003年のリヨンハイヴ攻略作戦にて遂に敵性技術の塊であるG弾が無効化される事態が発生。

作戦を主導していた米国はこの事態に混乱した。

：先の移民船に有能な人材は全て行ってしまった。残されたのは狂信的なG弾信奉者とノアの箱舟から零れた2流の政治家や技術者のみ。国内は一つに纏まる筈もなく小さくない命令系統の混乱が生じた。

混乱する米国に反し日本は比較的冷静な対処が出来た。というのもオルタネイティヴ4凍結の際散らばった香月女史および関連人員を確保、国内にて匿う体制を素早く整えたからだ。

表向きは極東戦線の劣勢に伴う人員の不足、本音は政治的なカードとして十分価値のある彼女たちを国内に留めたいがため。

混乱した米国を余所に將軍の名に纏まった帝国は普通ならば不可能なウルトラCを華麗に決めて見せたのだ。

そうして彼女達を引き入れG弾の問題点——凶悪な威力を持つがほぼ全て敵性技術の塊である——を考慮した日本の新たなドクトリン——通常戦力の拡充——を作成、これを推し進めた。

この引き抜きは五摂家の圧力あってのものであり、また白銀が御剣

の名を冠する様に取り計らったのも將軍、煌武院悠陽であった。

そして彼ら207Bは正式に帝國軍及び近衛軍衛士として任官する事となる。

近衛となった武は異質であった。

その超絶的な機動に周囲と連携が取りきれず、また機体も限界以上に振り回す為宛がわれた撃震は直ぐに使えなくなった。

ただその一方叩き出すキルスコアは帝国内、いや世界的にもトップクラスであり前線に立って日が浅い新兵とは思えぬ荒武者振りであった。

国連がその力を失い、帝國軍が横浜基地を接收して半年、そこで遂に彼に武御雷が与えられる。近衛の機体は色で家の格が示される。勿論格の高い家の機体には高度なチューニングが施される。そして彼に与えられた色は赤。

…五摂家に連なる青の次に高性能な機体であった。

当時異例のスピードで大尉にまで昇った彼と二機連携をとるのは、かつて恋人の冥夜の警護を務めた月詠 真那『少佐』。度重なる上官のKIAに伴い繰り上げ式に佐官となった彼女の色は同じく赤。決して弱くはなく、寧ろ近衛においても強い部類に入る彼女をもつてようやく武との連携が成り立つようになったのだ。

しかしまるで砂が水を吸うように戦地に在ってなお彼は彼女の機動を学び、血肉とし更なる高みへと昇っていく。

戦う度強さを際限なく伸ばし続ける衛士…それが武だった。

しかし単騎は単騎でありランチェスターの法則はそうそう覆らない。

彼が闘い続ける中一人、また一人と倒れ…戦友である元207所属の者も逝った。

そんな中彼を突き動かすのがいつか生きて冥夜と会う。自分の武功で少しでも仲間を助ける。ただその思いだけだった。

だが現実是非常でありバビロン作戦から3年の春の戦闘で遂に月詠も多数のBETAを道連れに自爆、彼は一人となる。

後方でも本州内部までハイヴの地下茎を伸ばしたBETAの奇襲により人員は壊滅。遂に研究員であった香月女史にまで白銀——この時点で既に中佐となっていた——の率いる部隊へのCP将校として配属が言い渡される。

そうして官民間わず形振り構わぬ抵抗を続ける日本であったが、遂に米国本土へのBETA着陸侵攻が開始された事から支援が大幅に落ち込むこととなる。

防衛ラインは一つ、また一つと落ち横浜もまた再度敵の手に落ちた。

先日、横浜が落ちた時の香月女史は凄惨たる有り様だった。

「私は何も救えなかった。結局貴女をまた地獄に落とす事しか出来なかった…」

安い合成アルコールに溺れ、そう譫言のように虚ろに繰り返す。クリスマスの日有这样以上に：今まで数多くの犠牲を払っても泰然としていた彼女とは思えない荒れ様だった。

そんな彼女を、白銀はただ血涙を流し抱きしめることしかできなかった。

そして戦場は遂に帝都城に及ぶ。

城内は仙台への避難が間に合わなかった民で溢れかえっており、帝都に残っていた五摂家を始め武家は総出。將軍もまた自ら前線に立ち背水の陣の様相を呈していた。

そして2006年10月22日。

奇しくも武がこの世界に來た日に帝都防衛戦は始まった。

06..45、BETA群、横浜ハイヴから東進を開始。

遂に地獄の門が開く。

時速120kmで帝都を目指し突き進む突撃級数は2万に及んでいた。それに続く要撃級17000強。更に光線属種は8000に及び巨大な要塞級も5000を超える。小型種は計測不能：まさに悪夢のようなレギオンであった。

07・18、BETA群幸区第1防衛線に接近。予め敷設したS1地雷にて突撃級を始めとする2000近くのBETAを葬るも、総数からすればそれでもなお雀の涙という数である。

怒涛の勢いをもって地雷原に突撃するBETAに対し杉並区浜田山、久我山に展開していた帝国軍本土防衛軍帝都防衛第5機甲師団による長距離砲撃を敢行。

数千発ものAL弾を発射し該当戦域に重金属雲を展開させ、同時に多数のBETAを大地に帰した。

同時刻東京湾に帝国海軍連合艦隊が展開を完了、さらに側面より砲撃を開始する。

しかし大和級の火炮をもってしても未だBETAの進撃は止まず。調布基地の帝都防衛第6機甲師団が当戦域にて奮戦するも全滅——この場合戦力の3割を喪失したこと一の損害により後退する。

08・03、第1防衛線を突破したBETA群と帝国軍本土守備隊が大田区第2防衛線にて戦闘開始。

先手を打つのは帝国軍。BETA群に対し側面にあたる旧玉川IC付近に展開していたMLRSを主とする2個機甲大隊から、AL弾の支援砲撃が開始され光線種の迎撃により重金属雲が発生。そして3個連隊規模——324機——の戦術機甲師団と数万規模のBETAの死闘が幕を開ける。

08…15、数万発もの弾薬を用いて圧倒的数の差に善戦するも、拮抗状態がやっとな戦線に帝都防衛第7師団及び近衛軍第16近衛大隊…五撰家である斑鳩家率いる精鋭が到着。この大隊に御剣 武中佐もまた1中隊を率いる隊長として参戦した。

当時の武の異名は、蒼の羅刹…出撃の度余りにも大量の青いBETAの返り血を浴び深紅の機体が蒼く染まる事からの異名であった。

本戦域に於いても武は圧倒的であった。時の撰家をして曰わく単騎にて1個連隊に値する剛の者とも帝都の最後の護り刀とも。

だが彼の奮戦虚しく味方はまた一人、また一人と矢弾尽き刀折れ倒れる。

拡大し続ける被害と地を均し進撃を続けるBETA。

10…20遂にHQは前線の後退…撤退を決定。

最終決戦の舞台は品川最終防衛線。

この先には民間人で溢れかえった帝都しかないのだ。

「こちらCP（CP将校…香月 夕呼）よりヘイムダル01（中隊

長…御剣 武）！木更津観測基地が地中を移動する微弱な震源を感じッ！地中侵攻よ！警戒して！」

「やはり…この程度じゃないかッ！ヘイムダル01より第2中隊各機！BETAの地中侵攻が予想される。必ず2機連携を執れ！周囲警戒を怠るな！」

武が激を飛ばす。大破は1機中・小破2機、流石に地獄を生き抜いた精鋭である彼の中隊は高い練度をもって損耗を抑えていた。戦場は混沌としており、幸い『大挙して』押し寄せるのではなく『逐次投入』で攻めてきているBETAだったが遂に恐怖の地中侵攻が開始されたのだ。

予想数は2万。馬鹿でもわかる十分な驚異だ。

「ツチ…ヘイムダル01よりCP！新馬場付近に支援砲撃、出来ますか！？」

「こちらCP、杉並区の機甲師団の補給が完了。該当区域に支援砲撃を開始する。…観測射発射まで10：5、4、3、2、1、発射。着弾まで20…効力を確認！効力射に移行！」

戦域に降り注ぐ雨は、鉄。

曳光弾が描く光のアーチはどこか幻想的であり、その先は青く彩られる。

光線属種に迎撃された対レーザー弾頭（ALM）はその場にレーザーを減衰させる重金属雲を形成し爆ぜる。

幾千もの星が地をうがち、蒼き血河を大地に作り上げていく。

「ヘイムダル01よりヘイムダルズ各機！重金属雲濃度が目標値に

達した！狩りの時間だ、楔アローヘッド・ツィ式型で行くぞ！」

武を先頭に三角の楔の陣をとり敵陣に踊り込む彼自ら率いる精鋭部隊。並居る敵を掻き分けるかのように殲滅し、呐喊する彼らは正しく陣形の名の通り楔となってその進攻を押しとどめた。

弾丸雨飛の間にも 二つなき身を惜しまずに
進む我が身は野嵐に 吹かれて消ゆる白露の
墓なき最期遂ぐるとも 忠義の為に死ぬる身の
死して甲斐あるものならば 死ぬるも更に怨なし
我と思はん人たちは 一步もあとへ引くなかれ
敵の亡ぶるそれ迄は 進めや進め諸共に
玉散る剣抜き連れて 死ぬる覚悟で進むべし

歌に残る抜刀隊の如き荒武者ぶり、戦果はかの紅蓮大将率いる部隊に匹敵するほどだった。

が、しかし。

「こちらヘイムダル04！駆動系が保ちません…中佐！貴方の下で戦えた事、誇りとさせて頂きます！」

「くッ…ヘイムダル01よりヘイムダル04。向こうで良い酒用意してろ…大儀であった！」

バストアップで表示された衛士…ヘイムダル04は武に敬礼すると敵陣に呐喊。そしてS-11 SD (Self Destroy)

ion) — System: 自決装置を起動させ、この世を去った。

——俺に力があれば：

途絶え無き援軍で攻め立てるBETAを狩る武に去来するのは力への渴望。だがそれは正しくもあり間違っていた。

この世界で武は十分な『力』を持っていた。だが単騎は単騎。戦争とは『数』の勝負なのである。

勿論、戦い続ける中で彼はそれに気付き教導や部隊指揮の仕方を必死に学んだ。

だが、それでも足りない。

それが、『一士官』である彼の限界であった。

「！つく、補給ができない……！！」

最前線にて戦い続ける武の愛機も、限界が近かった。弾薬の補給はできる、だがフレームの修理をする時間がない。それは刻一刻と継続戦能力を奪っていった。

「まだだ！まだ戦えるだろう！？」

歯を食いしばり、体に掛る急激なGに耐え迫りくる要撃級の前腕を飛び越えることで避け、その落下を利用して縦に切り裂く。

他の衛士からすれば正気の沙汰とは思えぬ機動も、武にとっては普通となっていた。

そして惨劇は止まず。

「こちらC Pよりヘイムダル01…武、帝都直下に地下侵攻を確認したわ。」

武の思考が硬直した。

帝都直下への地下侵攻、それが意味する事は…

「…夕呼先生、それは…」

「まあ、あんたの予想通りよ…間もなく帝都は落ちる。複数同時並行の大規模浸透攻撃だなんて、ね。これが本命だろうから軍団規模、5万と言わないでしょうね…」

既に覚悟を決めたか、感慨なく喋る夕呼。

「……先生、今まで…有り難う御座いました！」

「はん…それはまりにも言う詞でしょ？あたしはあんたをこの地獄に呼び寄せたようなものよ。怨まれこそすれ感謝なんてね…」

「それでも、夕呼先生は夕呼先生です。先生が居なければ、そもそも俺はB E T Aに食われるか飢えて死ぬかしてたでしょうから」

「そうかしら？…まあ、あんたホント駄目な子だったからねえ…まりももあっちで喜んでいましょうよ。教え子があの紅蓮大将を越えて帝国最強の名を冠する程に強くなったんだから」

そう語る香月　夕呼は懐かしげに微笑みかけていた。間もなく地獄が噴き出すであろう場所にいて尚。

「それじゃ、あたしは此処までだわ：あとは地獄で眺めさせてもらうわよ、武」

「はい：じきに俺も行きます。お世話になりました！」

その通信を最後にC Pとの連絡は途絶えた。

それを確認した武は涙を拭い、厳とした声で部下に通達する。

「ヘイムダル01より中隊各機。帝都陥落を確認した：お前等は煌武院殿下と斑鳩殿下の直衛に参れ。俺は此处で時間を稼ぐ」

そう告げると彼は補給コンテナから新たに突撃砲2丁、長刀2振り
を補給するとただ一人万の敵に相對するように立つ。

「中佐！無茶です！死ぬ気ですか！」

「我々は貴方の下で死ぬと決めた身、貴方を置いて逃げる訳に行けませぬ！何卒ご再考を！」

回線からは部下から命令撤回を求める通信がひっきりなしに入る。
御剣という名の武家でもない武の：『白銀　武』の人柄に心酔し、
隊伍を崩さず着いてきた愛すべき友達。

だが武は既に引く事が出来ない状況だった。

「馬鹿者が！今、煌武院殿下が倒れば帝国は瓦解し仙台もまた落ちる！…推進剤も足りん、俺以外時間を稼げる人間がいるか？…俺が貴様等に伝えられる事は全て伝えた！殿下を…頼むぞ！これは上官命令だ！いいな！！」

武が一度も言わなかった『上官としての強権』、それを持ち出してまで生き残れ、殿下を仙台へお連れしろと厳命する武に言い返せる者はいなかった。

静まり返る回線。武は覚悟を新たにし仁王立ちしていた武御雷を唸喊させる。

「…中佐…後は任せて下さい！」

「必ずや中佐の敵、討たせていただきます！彼岸の桜の下で、またお会いしましょう！！」

——馬鹿者どもが、後は頼んだぞ…

「さて、クソ虫共」

2丁の突撃砲から奏でられる旋律は数多の敵を死へ誘い。

「散々俺の大事なモノを奪った代償」

弾倉が空になった突撃砲を捨て、手に持つは長大で鋭利なる刀。

「しっかり払って貰うぜえ！！！！！！！！」

そこにいたのは、修羅。

唯一人二振りの刃を以て万を葬る者。

突撃級の突進を半身にして受け流し、長刀を滑らしてその四肢を断裂させる。

要撃級の上空より迫り脳天をかち割り、そのまま前宙を決めながら衝角を避け要塞級の顔に袈裟切りを見舞う。

光線級のレーザーすらも翻弄し、血煙りの中只一人舞い踊る。

それは、戦場と言う場所に置いてなお美しき舞であった。

しかしその刃も、100を超えたところに欠け始め、200を切った頃に遂に根元から折れた。

だが武の心は折れない。ナイフシースから短刀を引きぬくと飛びかかる戦車級を一刀のもと断ち切り、更に敵陣へと突貫する。

小太刀二刀、舞い踊りて遂に300を切る。されど消耗甚だしく、これ以上の戦闘は最早不可能。

無理やり大人に、英雄になるしかなかった彼は機体中央の自決装置を作動させ、眩い閃光と数多のBETAを道連れにこの世界を去った。

prologue..” Raven” of white wing (後書き)

f r o mから若干の改変があります。

これが序章、次話からはことは違うマブラヴ世界をお送りします。

あと、行間を若干増やしてみました。以前の方がいいという方がいましたらご一報ください。

感想や御意見等お待ちしております。

1st Stage::The anomaly visitor (前書き)

マブラヴ編第1話です。

1st Stage: The anomaly visitor

1st Stage: The anomaly visitor

日本帝国陸軍白稜基地。

現在、後方として位置するその基地はいつもの様な安穩とした空気が漂っていた。

最高峰の仕事は後方からの援護。

敵なんて来るわけがない。

そもそもここまで敵が来るようでは日本も終わりじゃないか。

そんな風潮があったということは否めない。なぜなら首都『京都』は健在し、九州の防御も確固たるものである。

それに未だ朝鮮半島も戦禍に巻き込まれておらず、中国国内での防衛線が主だったためである。

必然、77式戦術歩行戦闘機 (TSF-TYPE 77/F-4J) 撃震もその改造機たる82式戦術歩行戦闘機 (TSF-TYPE 82/F-4J改) 瑞鶴も、最新の89式戦術歩行戦闘機 (TSF-TYPE 89/F-15J) 陽炎もそんな大量に配備されているわけではない。

いや、配備する必要がなかった。配備すべきは九州であり、佐渡島であるのだから。

そんな世界の事など対岸の火事を視るかのような白稜基地であったが、俄かに慌ただしくなる。

「第2種戦闘配備？聞いてないぞ！」

「どこの馬鹿だよ、まったく：あ！花札片付けんな！あとでまたやるんだからよ！」

「えー、もう花札はいいでしょう？トランプやりましょうよーブラックジャックとかー」

そんな感じにのろのろと動きだす衛士や整備兵たち。その様子からは緊張感のかけらも感じ取れなかった。

一方の管制室。

「んで、なんだよそのアンノウンって」

「いやな、鷹取山に出たんだよよくわからん反応が1機」

「アホくさ、所属不明？どっかの企業の試験機じゃねえの？」

此方もまったく緊張感がない。それは当然『襲撃』の可能性など0に等しかったからだ。それにBETAという人類の不倶戴天の敵がいる以上国家間の直接的戦争行為などできる筈がない。

いや、その前に極東に於いて確固たる軍事力を持つ帝国に対し喧嘩を売る馬鹿がいるものか。

「アーテストス、その機体、所属と目的は？」

「此方は機密任務中の為その質問に答える事は出来ない。香月副司令と話がしたい」

あ？何を言っただこの馬鹿は。そう管制官は心の中で毒づいた。もしこれが米国の機体だとすると外交問題になりかねない。挑発のつもりかもしれないがそうそう乗っかる訳にもいくまいと、ゴホンと態とらしく咳をついた。

「貴官の真意を図りかねる。こちらの副司令は香月という名前ではない」

するとアンノウンはしばしの沈黙の後、「すまないが其方は国連軍横浜基地か？」と聞き返してきた。

「…此方は帝国軍白稜基地。国連軍横浜基地ではないしそのような基地は存在しない」

まあ、国連の要請で大陸への派遣の為此こを使う時もあるからそう勘違いする馬鹿もいるのかもしれないな、と相手には聞こえないよう管制官は失笑した。それにしても国連軍横浜基地か、確かに横須賀と言い横浜の街は異国情緒にあふれてはいるがまさかそう来るとは夢にも思わなんだ。彼は知らず知らずのうちにその手を額に当てていたが、周りにそれをとがめる人物はいない。

「何？帝国軍白稜基地だと？…すまないが『今』は何日だ？」

なんだこの馬鹿は。時差ぼけでもしてんのか？もしこれがエージェントだとするならアングル・サムも相当馬鹿だなとため息をついて

管制官はその質問に律義に応える事にする。

「今日は10月22日。ついでに言うときリストが生まれて1992年だ。Are you O.K? (頭大丈夫か?)」

その通信を聞いていた同僚はついに笑い出してしまった。

いったい何処の馬鹿だ。第2種戦闘配備を敷いたのも馬鹿らしく思えてくる。管制官は黙つとけとハンドサインを送るものの腹を押さえて必死に笑いを押し殺している同僚を見てげんなりとしたため息をついた。まったく、ろくなもんじゃない。

「…すまないが其方の基地司令と話がしたい」

「いや、あんた大丈夫か? 所属不明な上日付も分からんような奴に会わせるわけにいかないだろう。ちょっと取り調べさせてもらうぞ」

管制官は「やっべ、地が出た」と一瞬焦ったが、まあこんなのには敬意を払うのも馬鹿らしい。とつとと会社の試験場に戻るなりお国に戻るなりしてほしいが…まあ、捕まえてからだ。そう思い出撃命令の用意をし始めた。

しかしそんな管制官の思いは次の言葉と、アンノウンが取った行動に度肝を抜かされることとなる。

「そうか、なら力づくで会わせてもらう」

時速700km/h。当時の戦術機からは最速クラスのスピードを瞬時に叩きだし、高速で迫るその機体に基地は色を失い慌てて戦闘準備を始めた。

攻撃ヘリ部隊の配備、なけなしの戦術機の出撃、横須賀など近隣区域の基地への応援要請：それらを済ませる間に刻一刻と時間は過ぎ、そしてアンノウンも高速で接近していた。

なんでこんな所に着やがるんだ畜生！そう管制官も、衛士も毒づいていた。

白稜基地に勤務する衛士、士官で初の実戦となる者も少なくない。先任たちはそういう浮足立つひよっこを宥めるのに奔走し、また自身も久々の実戦に心なしか震えていた。

そして僅か1分少々の後、その漆黒の機体は白稜基地上空に姿を現した。

その機体は戦術機の様で、かなり歪な機体であった。

機体が腰だめに抱えている長大なライフル、頭部や肩、胸部にある複数のカメラらしき赤紫のレンズ、細くしなやかであり、括れた腰と直線と曲線を織り交ぜた独特なフォルム。

そして何より目を引くのが背中 of 巨大なフライトユニットだった。

既存の戦術機のような意匠はどこにも存在しない。それにその機体のサイズも13mという極めて小型なサイズである。

「なんだあのチビは？」

「悪趣味なデザインだなーつか不気味じゃねあの目」

「つかコレの所為で俺らの貴重な休憩時間が…」

衛士たちの反応はいたってこのようなものだった。デザインこそどこか不気味さを感じさせるがその小柄な体軀から誰もそれが脅威とは思えなかった。

彼らの乗る戦術機は18mを超える大きなものだ。

それに対し13m程度のアンノウンはまるで子供の様なサイズ。長刀で軽く小突けば壊れるだろうとだれもがそう思っていた。

「あーそのアンノウン、大人しく投降しろ。貴様は包囲されている」

中隊長として、一機の陽炎が勧告をする。当時では新型に位置する機体であり、当然のっているパイロットもそれなりのエリートである。

例に漏れず、この勧告にやる気のかけらも見えない。茶番だと呆れかえっているからだ。

その中には折角の恋人との甘いひと時を邪魔された事へ対する彼の個人的な怒りも含まれていたようだが。

ソレに対する黒いアンノウンの男は青筋を額に浮かびあがらせていた。

「…これで包囲だど？これだけでか？」

確かに包囲はされている。そう、機体の頭数だけでは。ちゃんと対角線上を外して待機しているのは評価できるがのったりのったりと自分が来てから2分かけてやっとできた包囲網なのだ。

正直言って興醒めもいいところである。さらにその機体を確認した管制室が一部の機体に下がるよう命令し、実質『彼ら』の眼前に居る戦術機は8機しかない。残りの4機は後方でじっとこちらを見据えているだけだ

それは基地側の、明らかなる侮りだった。小兵一つにそんな手間など掛けられないという上の判断もあった。何より彼ら自身面倒だった。

「ふー：いや、ここまでだらけているとは。ちょっと灸を据えてやるか。セレ、サポートを頼む」

「了解しました。しろが：いえ、『フォグシャドウ』」

フォグシャドウと呼ばれた男はこめかみに手を当て嘆息した後、その感情のない目で眼前の敵を睨みつけた。

セレと呼ばれた少女はやる気になった彼のサポートをするべくコンソールを起動させる。複座機とは本来一人が操縦を担当し、一人が攻撃・情報管制を担当するのだがこの機体は違う。

前に座る黒い短髪に銀髪混じりの少年が操縦、攻撃両方を担当し、後方の白い長髪の少女が情報管制を担当していた。

アンノウンはすつとライフルの銃口を戦術機に向けた。

それを見てとった陽炎にのる中隊長は「馬鹿な真似はよせ、この戦力差で勝てると思ってるのか？」と警告し銃を構える。他の戦術機も同様に彼らに向けて各々の武器を構えた。

一触即発。如何に小柄軽量な機体と言えどももっているモノは銃の姿をした砲。装甲に関しては決して厚いと言えない戦術機であるためまったく身動きが取れない。

だが基地側の戦術機にとってそれは奴も同じと言う事に囚われていた。

否、そのあまりの先入観に囚われざるを得なかった。

「撃つな、撃つなよ…この人数差だ。無駄な弾薬は使いたくねえしな」

「落ちつけ…こっちは12の戦術機。負ける筈がないんだ。待っていりゃそのうち降伏するだろ…」

先任達が初めて『実包を込めたと思われるモノ』を向けられている新任達を落ち着かせる。

だが、その目の前にある凶器という恐怖はそう簡単に払しょくされるものではなかった。

そのまま10分、沈黙の中ついに基地側の新兵が焦れに焦れてトリガーを引いた事で事態は加速する。

その弾丸は機体ではなく、足元を狙ったものだった。威嚇射撃。それだけだ。当てるつもりなど微塵もない撃ち方。

だがそれは命令された事柄ではない。あまりに長くの緊張により生じた気の緩みが招いたものだった。

ホバリングを続けていた…いや、浮遊していたアンノウンはライフルを抱えたままずっと距離を離れた。それを見た陽炎の衛士が遂に叫ぶ。

「つく、逃がすな！こうなった以上撃墜しても構わん！撃て！」

後方の機体が隊列に加わり、遂に12機の戦術機がその口火を切った。

搭載されていた36mmが、120mmの砲弾がその小柄な体躯へと殺到する。だが：

「な！？ぜ、全部避けただと！？」

「ちい、すばしっこい！近接だ！近接戦へ持ち込め！」

迫りくる無数の弾丸をアンノウンはゆらり、ゆらりと柳の葉が揺れるような機動で避け続ける。

ここで少々戦術機の数について解説、考察を挟む。

戦術機の最高速度は700km/hを超えるがこれは巡行速度：燃費などを考慮し最も移動に適した状態での速度である。燃費などを無視してアフターバーナーを使えばまだ上の速度は出るかもしれないが戦闘行動で体勢を変え、敵機と交戦する状況下に居て常時最高速度を維持することは不可能だ。それを考慮していくと実際の戦闘時最高速度は300km/hから400km/hほどである（最高速度は空力的に音速を超えられない、また原作劇中でも300km/h弱の描写が多い）。

また加速についてだが6Gを超えた段階で視野が狭くなり景色が白黒になってくるグレイアウトが発生する。もうこの段階で失神（G-LOC）の可能性が浮かんではいるのだが7Gは操縦桿を握る手の

毛細血管が切れて行くのが実感でき、8 Gは目を開けるだけでやつの状態になる。

人間が耐えられる限界が9 Gでありこれを超えるとブラックアウト、目の前が真っ暗になり身体に致命的な障害が発生するレベルである。耐Gスーツが完全に作動するのは2 Gから。

因みにマイナスの方がかなり危険でありマイナス3 G以上が数秒続けば失神、更に目から血を噴き出すレッドアウトが発生する。スプラッタにも程がある状況になるだろう。

余談になるが上記の『限界』を瞬間的にでも超えたパイロットには漏れなく精密検査が待っているのが普通である。理由は言わずもがな冗談抜きで生死にかかわるから。

戦術機にかかる負荷は上記及び機体性能からマイナス2 G（酷い頭痛に見舞われるレベル）から8 G（機体が出来る限界）にかけてとなるが、超時間8 Gもの負荷がかかる機動なんてすれば中の衛士は失神してしまうので戦闘機動中の負荷はおおよそ5〜6 Gほどが平均的な負荷であろう。

とすると噴射跳躍による想定速度への加速はおおよそ2秒に満たないレベルであり、減速には2.7秒以上を要する。

アンノウンの動き自体は決して異常に速いものではない。戦術機としては高速な時速400 km/h前後を維持したまま滞空し、短い噴射でゆらりゆらりと揺れるだけ。

ただそれだけなのに当たらない。

「どうなってやがる!？」

「落ちつけ!動き自体はそう速いものではない!しっかり狙えば当たるはずだ!」

彼らの認識は当たっているようで当たっていなかった。落ち着いて見ていれば、アンノウンの機動の法則性と異常さに気付く者がいたのかもしれない。だが、この場に置いてそれに気づける人間は皆無だった。

「単なる自機狙い…やれやれ、軸を合わせていない攻撃なんかが当たる訳ないだろう?」

「ついでに言うところでは当たったところで何ともありませんが…」

コックピットの中でその男女はため息交じりにその光景を他人事のように見ていた。

彼らにとってAH (Anti Human、対人) 戦は非常に慣れたものである。

特に超が付くエース達と死闘を繰り広げた彼らにとって、その『見せかけだけの殺意』が込められた砲弾なぞ片手間で避けれるものだった。

本人もこんな下らない雑魚に当たる気なんてさらさらないという風な様子だったが。

「仕掛けてきますか?」

「そろそろな…まあ、奴さんもこっち向けて動き出したし、な」

彼らはそう言うことや呆れたような視線を中隊長へと向けた。もしその様子が見えるのなら仕掛けが遅いと嘆息しているのが見て取れるだろう。

避け続ける彼らに焦れ、中隊が撃震の持つ装甲を盾に傘壺型で突撃してくる。

その名の通り突撃に適した矢印のような陣形だ。指揮官は一気に接近してしとめる算段だろう。まあ、さっさと仕掛ければよいものとアンノウンは呆れていたが。

「まあ、軽く捻って挨拶としようか」

アンノウンが言ったその軽い一言と同時に…その黒筒から、紫電の光が迸った。

「レーザー…兵器…だと…!?!」

「や、奴は光線級をあ兵器の中に入れてるのか!?!」

「どういことだ!あのレーザー、BETAのアレとは色が違うぞ!」

動揺する衛士。だがそれも無理はない。

そもそも正史においてこの10年近く後によく『大型兵器』の主砲として登場するソレとほぼ同一の存在が目の前にあるのだから。

撃った本人も動揺していた。

「…なあせれ、これの出力ってカラサワ並みなのか?」

「いえ、出力で言えばせいぜいMWG-XCW/PKに毛が生えた程度なんですけど…ちょっと出力下げましようか?」

彼としてもこんな予定ではなかった。事実そのレーザーライフルは『ごく一般的な』レーザーライフルを若干強化した程度の威力しか

ない筈なのだ。

せいぜいこのレーザーで関節部にダメージを与え転倒させるだけで済まそうかなー、なんて思っていたのだが。

狙った機体は膝から下が消滅していた。それはもう跡形もなく。

無残に転がる同僚の機体の上半身を見た衛士たちは驚愕のあまり完全に足を止めてしまった。それは無論極めて致命的な事なのだが、撃った本人が驚いて手を休めていた為奇跡的に二射目が飛ぶことはなかった。

撃震の装甲は旧式でありながら最も堅牢。故に最前列に配置していた。

だが、あのような文字通り一撃必殺の攻撃なんて食らえばいかに装甲があろうとおしまいなのだ。

吹き飛ばされ方からすると中の衛士は気絶しているがそれ以外はほとんど無事だろう。多少怪我はあるかもしれないが致命傷とまではいかない筈だ。

だが、余りに非常識すぎている。

その異常な光景を見たものが狂乱するのは、自明の理だった。

「うおおおおおおおおお！！！！撃て！！！！撃ちまくれ！！！！あいつにアレを撃たせるな！！！！」

「死にたくなかったら撃て！！クソ、レーザー兵器だと！？冗談じ

やねえぞ!!」

「やってられっか!俺は速く家に帰りたいんだ!!!」

傘壱型から防御・包囲戦向きの鶴翼参陣^{ウィングスリー}へと即座に移行し一層激しさを増す弾幕。さすがにこれでは近づくことなんて不可能だろう。ただ、それでもアンノウンにはその状態でも脚部を狙って吹き飛ばす事は可能だった。下手な鉄砲なんとやらだが彼らにそれは通用しない。

と言うよりその彼は30機もの敵機に囲まれた揚句、それら全てを殲滅したと思ったら自分より性能のいい敵機が2機も出てくるなんて言う地獄を生き抜いているのだからその程度がどうという事はない。因みに先の地獄は勿論補給なんてないし、整備する時間もなし。

そして彼はトリガーから指を離した。撃つまでもない。そういう判断である。

そんなことは対面している陽炎の衛士達にとって知った事ではないし知る由もない。目の前の文字通り『化け物』である黒鳥を射落とさんとばかりに数千発の弾丸を惜しみなく使いまくる。

今の国会議員や財務省の人間が見たら卒倒ものの光景だ。さぞかし目の下を黒くした人間が会見を開く事になるだろう

無論、弾は無限ではない。ゲームのようにオートで補充されるわけでもない。

弾丸が少なくなり始め、遂に一向に当たらない弾幕に業を煮やした隊長機が鶴翼の翼に当たる4機の陽炎を敵機のサイドへ向かわせる。

挟撃。弾幕で足を止めた敵のサイドからの強襲。一機は撃たれるかもしれないが、あのレーザー砲は一つだけだ。残りの3機で仕留められる。彼らはそういう算段だった。実際にはあのレーザー砲は1門だけではないのだがそれは割愛する。

まあ、その筈だったのだが。

「切りこめえ！！至近距離ならばあのレーザーは撃てない筈だ！」

一機の撃震が勇猛果敢に攻めかかる。支援射撃もついている為足さえ止まれば一太刀に切り伏せれるという確信があった。

ふわふわと掴みどころのない機動をするアンノウンの急加速で接近し、左手のシールドを（意味がないかもしれないと分かっている）構え、右肩の長刀に手をかける。教本通りの突撃だった。

勢いよく突撃する撃震の長刀を固定していたロッキングボルトの炸薬が起爆し、リップが左右へと開放されその手に74式近接戦闘長刀がしっかりと握られる。

直後、火薬式ノックカーが作動し、勢いを乗せて全身全霊の袈裟切りを見舞おうとした：

ところで、その長刀と右腕が綺麗に溶断された。

「甘いな、30点」

スツと半身の体勢で切り抜けるアンノウンの左腕にとりつけられたモジュールが変形し、現れていたのは紫電の剣。

即ちレーザーブレード。

「な、冗談、だろ…!？」

返す刀で、3連。その剣閃に耐えられるものは皆無。

一機は盾で押しつぶそうとしたが、軽くないなされ下肢を切断された。

もう一機は近づくまいと銃を構えたが、その先に在るべき敵の姿は見えなかった。

その直後、ムーンサルトのような移動を描き背後に回ったアンノウに武装を断ち切れリタイヤ。

最後の一機は見事なタイミングで袈裟切りを仕掛けてきたが、ノックカーを利用する関係上袈裟切りと読まれており振り向きざまに切り上げられ地面に転がった。

舞うかのようにその小柄な体躯を華麗に操るその絶技。それは敵であることすら忘れて、賞賛したくなるほどの達人の技であった。

もちろん、その声をあげる者はいない。絶命こそしていないものの、陽炎を含む戦術機4機を瞬く間に撃滅したその機体に恐れを抱いていたからだ。

なんなんだ、こいつは。

悪鬼か、羅刹か。少なくとも普通の人間だと言う事はないだろう。

あり得ない。たった一合交える事も許さずに打ち倒すなど。

煌めく複眼に恐怖した。その繰り出す紫電の光に戦慄した。

そして気付く…自分達には、こいつは倒せない存在だと。

「…此方白稜基地、司令の井口だ」

突如オープン回線に熟練の兵の^{つわもの}声が響く。

「！お初にお目にかかります。これ以降はオープンではなく秘匿回線を利用したいのですが、宜しいですか？」

「うむ、と言いたところだが此方の秘匿回線の周波数を貴殿らは知っているのか？」

その言葉に『SOUND ONLY』と表示された指令用の秘匿回線のモニターから声が返ってきた。

「ええ、もう大体『分かりました』から」

「…いつの間に」

戦闘と平行して暗号を解読し、此方の命令を盗聴していた事になる。耳がいいと言うのははっきり言ってしまえば此方の内緒話など薄いふすまの向こうで話しているだけにすぎないと言う事か。

「いえ、つい先ほどですよ。ちょっとばかりこの機体は耳がいいもので」

悪びれもなく話す若い男性の声に井口は眉をひそめた。18くらいだろうか。まだ新任連中とそう変わらない年である。

だというのに、なんだこの落ち着き様は。まるで同じ司令と話しているかのようなプレッシャーさえ感じられる。この男は一体…何者なのだろうか？

「回りくどい話は止そうか、当基地にいかなる要件かお聞きしたいところだが？」

「ええ、簡単に言うとそのちらの協力に参りました…尤も、日付をかなり間違えてしまったようですけどね」

あはは、と苦笑するような声が聞こえてくる。

ああ、なるほどこちらの増援としてきたのか。新しく配備される機体、この白稜基地でのテストなのだろうな。そのため撃震1機と陽炎4機を中破させたと。

んな訳あるか！

「ふむ、こちらの戦術機を5機も損壊させた挙句基地内に勤務する兵士諸君の度肝を抜いてその心をへし折る事を救援と称するのだろうか？最近の若者言葉にはついていけなくてね」

「ああ、確かに最近見る言葉の乱れは酷いものです。自分が言うのもなんですけどね」

あっぱはと言葉だけ笑いあう二人。もちろんお互い顔は見えてい

ないが井口の額には青筋が浮かび、周りの人間が引くほど威圧感を放っていた。

井口の内心は怒り狂っている。それを声に出す事は無いが、老練さを身につけてきた今であってもそれを表情に出さないようにすることは不可能だった。

「とまあ、冗談はさておき本気の話です。というより此方を保護していただきたい」

「ほう、此方に刃を向けた人間を保護と？少々虫が良すぎるのではないのかね名無しの権兵衛君？」

その答えに若い男は含みのある声で言った。

「ええ、だから手土産を差し上げますよ」

「レーザー兵器に関する資料をね」

それからまた、基地は喧騒に包まれることとなる。救援要請は抜き打ち訓練上の手違いとして即座に撤回、基地司令が直々に各所へ謝罪した。

また基地内に勤務する者には彼から直々に「絶対に手を出すな！いいな、絶対に、だ」との厳命を下され、万全を期すためほぼ無人のハンガーが用意された。

そしてそこに黒鳥が舞い降りる。緩やかに降下し、セメントの大

地に翼を広げ降り立つ姿はさながら天使のようである。色とデザインが悪魔にしか見えないのが残念であるが。

無論、遠巻きにその様子を眺めるモノたちもいる。周囲への警戒に当たる先ほどの戦術機中隊の衛士たちだ。

ある者の表情は暗く、ある者は恨めしそうに、そしてある者は羨ましそうにその様子を眺めていた。

自らの無力を嘲笑うような機動。

圧倒的な火力。

卓越した戦闘センス。

どれをとってもかの衛士と機体に勝てる要素がない。そして何より初のレーザー兵器搭載機というだけあり、その正体について様々な憶測が飛び交うのは自然な事だろう。

曰く、米国最新のBETA利用レーザー実証兵器と情報秘匿の為KIA（戦死）扱いになっていた伝説のエース。

曰く、日本帝国の暗部に存在する隠密、そのトップである伝説のNINJAと彼専用に帝国が用意した機体。

曰く、某国で進められたスーパージェットソルジャー計画で、9番目に生まれたスーパージェット。ゼロゼロナンバーを持つ最後のスーパージェットSESO09とその愛機。

荒唐無稽なものから後に本物となることまで様々なうわさが飛び交った。だがその真実にたどり着いたものはいない。

そしてその彼は、非武装のMPに囲まれた基地司令が見守る中、その『後部ハッチ』を開け、すらりとしたその体躯と引き締まり歴戦の衛士を思わせる：それでいて微かに幼さの残る顔を晒し出した。またその顔には鬼も裸足で逃げ出すような冷徹さどこか人懐っこいような優しさが同居しているような印象を受ける。

青年を見た井口司令は一目で気付く。

その銀髪が度重なる戦闘のストレスで染まったものだ。

彼はそれほどの戦場を潜り抜けてきた強者、トップエースである。その光すらも飲みこむような漆黒の瞳は、いかなる地獄を目にしたのだろうか。

そして彼から放たれるのは負のカリスマとも言える底知れぬ威圧感だった。

司令は彼を『松永久秀、あるいは信長』と例えた。

後ろの女性MPは『謎の超絶イケメン』と例えた。

後ろの男性MPは『100%後にも先にも男の敵』と例えた。

その彼がずっと手をコックピットに差し出し、手を引かれて出てきた女性に幾人かのMPから感嘆の声が上がる。

締まるところは締まり、出ているところは出ている完璧なボディライン。

雪のように白く、美しい肌と大きなリボンで纏められた艶やかな銀髪。まるで紅玉のような色の瞳がそれらを更に引き立たせる。触覚のように跳ねた一房の髪も素晴らしいアクセントになっていた。妖艶であり、憂いを秘めた美貌は儚げで美しいとしか言いようがない。

基地司令は『楊貴妃か妲己の類』と。
女性達からして『理想の体現』と。
年頃の男達をして『今夜のオカズ筆頭』と思わせるほどだった。

なにかMP（男性）を見る目が蔑むようなものになった気がするが
それがまたイイ！

「丁寧な出迎えに感謝しますよ、井口司令。てっきり銃口を向けられるものと思いましたからね」

「そんな事をすればどうなるか火を見るより明らかだからね。余計なリスクは負いたくないのだ…名前を聞いても？」

そこで青年はふむ、と顎に手をやり考えるしぐさの後に話し始めた。

「俺の名前は『フォグシャドウ』と呼んでください。ああ年は18
でいいです。誕生日は…そうですね、今日ってことでお願いします」
「な、それはどう見ても偽名だろう！？本当の名前は何なんだ！！」

取ってつけたような名前に後ろのMPが激昂するが、それを井口は
視線と手で制した。

「部下の非礼を許していただきたい。だがその…フォグシャドウと
いう名前はいささか無理がある。別の名前は無いのかね？」
「そうですか…ならばこう呼んでください」

「霧 武影、と」

あとがき

九球熾天使もいいけど番外ナンバーも思い出してあげて下さい。

井口に新たな称号『レ〇ル並みの苦労人』が付きました。

効果・胃薬及び頭痛薬の消費速度二倍、出世および某作戦立案率上昇。

1st Stage: The anomaly visitor (後書き)

それねーよWWWな考察かもしれませんが色々調べて至った結論です：こうじゃないのか？という方がいましたら感想で指摘して頂けますとありがたいです。

なお、瞬間に12Gなどの負荷を受けた場合背骨が折れる例もあるそうです。また長期的に高Gにさらされると骨格にダメージが生じ日常生活に支障をきたす例も。戦術機も最高速なら900は行くかもしれません。かなり無茶しないと駄目でしょうが。

2nd Stage: Illegal Contact and Legal

2nd Stage: Illegal Contact and Legal Connection

霧 武影。そう青年は名乗った。当然偽名である…むしろ Fog Shadow を和訳しただけな気もしなくもない。

あまりに適当と思える名前だが、彼は『Fog Shadow』という言葉に強いこだわりを持っていた。

そして、武の一字は自らの名前を捨て去りきれないが為。そう彼は胸の中で自嘲した。

「ま、まあそれならまだいいだろう。して、其方の女性は…？」

「セレ・クロワールと申します。こちらこそ不要な戦闘をしてしまった非礼をお詫びします」

そう言って白雪の様な髪の美女はすっと頭を下げた。見ているこっちも清々しいほど美しい礼だ。

まるで深窓の令嬢のようなそのたおやかな様に息をのむ者もいる。

先ほどの青年より此方の女性はやりやすそうだ、と井口は微かに思ったのだが…

「まさかあれほど簡単に片が付いてしまうなんて予想外でしたから」

訂正しよう。こいつも毒蛇だった。

「それで、貴殿らの所属と目的を改めて聞きたいのだが？」

基地司令の応接室に通される彼らであったが、その行動を束縛する類のものは身につけていない。

予めこちらを捕縛するような真似を見せればあの機体が勝手に暴れ出してあたり一面を火の海にする、とかるゝ脅したからだ。

そう、感情の見えない目で口元だけ笑いながら冗談のように。

「所属はなし。目的は先の通りです」

「右に同じ、です。私には目的に技術関連の勉強がしたいというのもつきますが」

「いや、それは無いだろう。あれほどの機体を作れる国家はそれこそアメリカでも不可能だ。一体どういうことかね？」

井口のその言葉は真に迫っていた。素人目から見てもあのような戦術級レーザーというものは非常に取り扱いが難しく、まして物理的破壊能力をあそこまで持たせるとなると困難を極めるであろうことは想像に難くない。あれは短時間の照射で光線級のレーザー以上の破壊力を示したのだ。そのような代物がいまの技術力で開発できる筈がない。

「…まあ、それは香月博士に聞けばわかると思いますよ」

「その香月博士が分からないからこう尋ねているんだがね…？」

あっけらかんと言う武影に井口はこめかみを押さえる。どうも先ほどから調子を狂わされっぱなしである。矛先を変えようにこっちは

こつちで…

「で、ではセレくん。あの機体についてなんだが…」

「レーザー技術の開示は取引材料として認めますが、あの機体の事を喋る理由がありません」

「いや、君達には所属するところがないのだろうか？帝国における庇護の謝礼として教えていただけると助かるのだが…」

「前払いする商談ではないでしょう？それにレーザー技術だけでも引く手数多なのです。彼が帝国に、というから帝国を交渉相手として選んだのであって、私としては交渉の席を選ぶつもりはありませんよ」

そう言われると反論が辛い。レーザー技術だけでも帝国としては喉から手が出るほどに、それこそ万難を排してでも手に入りたい技術なのだ。

同様に世界各国も、である。それを自らの交渉失敗で取り逃がしたとなると余りにその責は重い。

「いや、すまない。失言であつた、許していただきたい。ではその香月博士なる人物について教えてはくれないだろうか？」

「それは俺が説明しますよ。香月博士の本名は香月夕呼、年は今年で…18歳ですね。大学はたしか帝大だったとは思いますが…」

それを聞いた井口は顔を上げぼんと手を打った。

「む？それはあの天才として帝大の研究室に招聘されたという香月女史かね？彼女の事は新聞に載っていたと思うが…」

そう言っただけの机に仕舞っていた新聞記事のスクラップ帳を取り出した。厚みも中々であり彼が仕事の傍ら時事問題にもしっかりと目を配っていたことをうかがわせる。

「えーたしか5月かそこらだったと思うが…む、これだ」

そこに載っていたのは若々しく、それでいてミステリアスな魅力を振りまく紫色の長髪的女性、香月夕呼18歳の姿があった。

繰り返す。香月夕呼18歳。

武影はその写真をじっと見ていた。

成程、確かに夕呼先生だ。

そこには嘗てのような毒々しさも退廃感もない、やる気に満ち溢れつつもだが背徳的な香りのする彼女の姿があった。それは余りに若く瑞々しい肌がまた何ともいえぬ艶やかさを更に引き出して要するに…

「…惚れて「いや！？なんでもありませんよ！決して！！彼女なら俺達がここに来た理由が分かると思えますから！」…そうか、確認を取ってみよう」

ここにきて漸く一本取る事が出来た井口であった。ちなみに武影は横の笑顔が眩しい女性にグリッと足を踏みねじられていた。

さて、井口にとってここまで来たのはいいが正直提示された技術情報の機密レベルの高さを察するに正直これ以上彼らとの交渉は手に負えないレベルとなる。

ここは一計を案じた方が身のためか…そう思っていた矢先に。

「武影、これ以上は恐らく基地司令という立場では判断できない事象が多くなると思います。ここは彼に政府高官との接触を依頼すべきではないでしょうか」

「ああ、確かにそれが妥当だろうな…井口司令、何度もお願ひして申し訳ありませんが交渉の場を用意していただきたいのです」

助かった、とこの時は思った。レーザー技術と、謎だらけの機体。そして全く思考が読めない凄腕の二人組。井口の脳も胃も限界だった。確かに政府高官との交渉の場を作るなんて言うのは大事も大事だ。だがしかしこの二人の相手が続けるよりは相当ましだろう。それに自らの基地司令という役職のお陰である程度なら顔が利くのだから。

「交渉相手は御剣家当主、御剣雷電殿でお願いします」

やっぱり口くちなななかった、と井口は安堵した自分に後悔し

た。

井口司令に白銀語で言う所の「これ以上はマジ勘弁して下さい」という泣きを入れられ、彼ら二人には衣食住の為のスペースと衣服、身分が与えられた。

明らかに軍人に近い匂いのする武影には大尉待遇の民間軍事顧問という飾りが。

比較的一般人に近いセレには中尉待遇の軍事顧問補佐という肩書が与えられた。

もつともこれらは両者がトラブルに巻き込まれ会ないための保険であり、周りの者に頼むから必要以上の接触はしないでくれと言う井口のささやかな願いが込められていた。

当然その二人にとって井口の胃の問題など気にすることではないのだが。

さて、居住スペースに衣服、更に肩書きと幾ばくかの金（井口のポケットマネーである。この為に基地の金を出すくらいならと涙を吞んで出した）を手に入れた一行は最初に食堂：PXへと向かった。そう、ここなら懐かしのあの味が食べられると思ったからだ。

「はいよ！ 見ない顔だねえ新入りかい？」

「…ええ、民間の者ですが少しの間厄介になります」

事の真相を知っている者が聞いたら本当に厄介だよこん畜生！と言っているだろう。

だが京塚のおば…訂正しよう、お姉ちゃんはそれを知る由もない。

その容姿を見た武影の心境は以下の一文で表わされる。

——どうしてこれがあんなった！？

そこに居たのは御目麗しき20代の超絶美人。髪は調理師らしく後ろに束ねられており、胸は割烹着からはち切れんばかりに実り最早彩峰クラス。括れた腰が官能的なボディライン、気が強く快活そうな笑みはそこの男なら即死クラスの威力がある。それでいて肌は健康的な白さを保ちシミそばかすの類是一片たりともその肌を汚していない。

有り得ない。どうしてこんな明眸皓齒の美人がPXの、横浜基地最強の肝っ玉母ちゃんになったのか理解できない！！

だがネームプレート、その喋り方、目元の面影から間違いないその人物が『京塚志津江』である事が証明されていた。いや、証明されてしまっていた。

時と現実是非常である。それを武影は今日ほど痛感した事はなかった。

「そうかい、そっちの可愛らしい嬢ちゃんも？…ふーむ」

そう言ってやおら京塚のお姉ちゃんに武影の背中を叩く。新入りへの洗礼のようなものだ。そして武影は当然の如くその事を知っていたが特に身構えもしなかった。

「む！あんた：すごいね、本当に民間人かい？」

「ええ、今のところは、が付きますけど」

あくまで微笑を絶やさない武影の背は、鋼の様に締まっていた。

「：きつとまたそんな遠くないうちにまた会う様な気がするよ。さあ、これはサービスだよ！しっかり食べてきな！」

しばし自分の手の感触に呆然とする京塚のお姉ちゃんであったがすぐにいつもの調子に戻り、武影の鯖味噌定食の鯖味噌漬を一つおまけでつけた。武影としては予想外のオマケにホクホク顔である。

続くセレであったがお姉ちゃんからは「間違いなくいい嫁さんになるね！」と太鼓判を押されて少々顔を赤くしていた。乙女が頬を赤らめると言うのはそれはG弾級の可愛らしさを周囲に振りまくと言う事だ。当然それを見ていた男性士官達も鼻の下が伸び、下世話な話がこそこそと始まる。

美しさは罪と言ったが成程名言である。あるカップルは目移りした男に女がその腕を思いつき抓り上げ、男性士官の塊へは女性士官が思いつき汚いものを見るような視線を向けていた。後に彼らが計画していた基地内合コンが失敗するのは最早この時に決定づけられたようなものである。

そのような事はいざ知らず、パクパクと昔の癖で早食いする武と落ちついて行儀よく食べるセレの前に招かれざる来客が現れる。

「ちょっといいかい？」

そこに来たのは複数の衛士。若く、エネルギーを持て余しているような連中だった。

「なあ、お前ら見たところ軍属でもなさそうだがどうしてこんなときここに来てんだ？」

「さっきまでここには第二種、いや第一種戦闘配備が命令されていたんだぜ？もしかしてあの『鴉』の事知ってんのか？」

ニヤニヤと笑う者や、こういう時に現れた謎の民間人に好奇の目を向ける者、或いは猜疑的な視線を向ける者たちがいた。

さっさと飯を食べた武影は口元を拭うと事も無げに言い放った。

「ああ、あの無様な戦いしていた連中か？たった一機に翻弄されて何やってんだか、これじゃ帝国での商売も危ないかな」

「てめえ！！いくら民間人だからって言っている事と悪いことくれえ分からねえのかよ！！？」

「人うんらかしおいて只で済むと思ってねーだろな？お？」

懐かしい神奈川弁が漏れている奴もいるが別に気にする必要はない。もともと挑発する気満々な奴らだ。さっきの出撃でたまった鬱憤もあるのだろうが、それは此方も同じこと。

「いいぜ、その性根叩き直してやる。表に出ろ」

「鴉、ですか。あの機体は鴉ではないんですけどね」

一人残されたセレはため息をつくと言京塚のおばちゃんに担架の準備をするよう言付け、さっさと2人の食器を片づけた。

「いい覚悟じゃん、民間人の割にはいいガタイしてるじゃねえか」

「んで、どう俺らの性根を叩き直してくれるッてんだ？謎の民間人さんよお」

下卑た笑いを浮かべる若い衛士6名。あの中隊の若手連中だろう。

ある者はまったく何もできないまま終わったその思いをぶちまけるため。

ある者はただただ恐怖するしかなかった自分への苛立ちを他に当てるため。

ある者は単に先ほどの挑発で血が上っていたため。

それぞれ腹に一物抱えて基地の裏手に来ていた。それは勿論武影もだ。

「御託はいい、さっさと来い」

「！そっちがそのつもりならやってやんよお！！」

激昂した一人が殴りかかる。だが相手は民間人だと思っているからであろうか。大ぶりのテレフォンパンチだった。それがまた武影の癪に障った。

すっと半身にし、殴りかかるその拳を掴みそのまま投げ飛ばす。更に地面に叩きつけた直後鳩尾に一撃を食らわし、完全に失神させる。ソレを見た何人かはすっと昇っていた血が下がるのを感じた。明らかに軍の格闘術を修めた者の動きである。格闘に自信のある者は特にその足運びを見て血の気が更に引いた。

格闘技に置いて最も重視されるもの。それは腕力でも脚力でもない。体捌きと足運びである。

正しい体重移動は殴り、蹴る力を増大させさらに相手の打撃に対し適切な対処を取ることができる。間合いの取り方もそうだ。例えば養神館合気道の祖、塩田剛三氏の演武を見ればわかると思うが上半身はまだ目で追えるほどの速度であるが足運びが尋常ではない。なお、若干ゆっくりに見える手の動きも人体の要所要所をきっちり抑えた正確無比で無駄のないモノになっている。

それは人体を知り尽くした武道家こそ、目先の筋力だけではなく体捌きといった技巧が卓越しているという証左に他ならない。

そして武影のその体捌きと足運びは見ている者を驚愕させるに値するレベルであったのだ。

「どうした？来いよ。民間人程度に何をビビってるんだ？」

武影は僅かに怒りをにじませ詰め寄った。あの白稜に務める衛士が、軍人がなんたる様かと怒っていた。

彼にとって白稜とは掛替えのない思い出のある土地である。それがこんな軍人の風上におけんような者どもが闊歩している事が非常に許せなかった。

別に博打を打つのが悪いわけじゃない。煙草を吸い酒を飲むのが悪いわけじゃない。

出撃すべき時にまでその空気をダラダラと垂れ流す愚物さが許せなかった。

これは只ものでは無い、民間人の皮を被った軍人だ：そう誰もが思い、構えを変えた。

軍での格闘術と言うのは自衛・無力化を主眼に据えている。もちろんソレは全ての武術に置いて当然のことであるがスポーツにある『容赦』というものは廃されているのだ。

即ち、先ほどの様な無力化・気絶させるまでが勝負なのである。

「来ないか、なら此方から行くぞ」

すつと半身のまま近づく武影。無手であり構えているもののその体は自然体である。

武術に置いて一連の全ての行動は円で示す事が出来る。即ち蹴りや手刀といった攻撃は円の動きで示され、突きなどの点で攻める技は円周上の1点として扱う事が出来る。

二つの球体があるでしょう。まっすぐ転がってくる球体には横回転することです。その力はいなせる。突きはその一点を始点に回転させることで同じく無効化できる。斜めなども同様だ。

後の先とはこういった『懸』りに対し『待』ち構え迎撃し先となる、ということである。懸中待、待中懸というのは攻めの中に守りがあり、守りの中に攻めがあるという教えの解釈の一つだ。剣道や武術の有段者で手が止まった状況というのはこの読み合いをしている。

無論、攻め方もある。要は待をさせなければいい。待が成立するのは絶妙なタイミングのみ。ならばその絶妙なタイミングと言うのを取らせなければよい、つまりはフェイントなどで崩すのである。

初手の神速の打ち込みの後、次々と連撃を繰り出す武影。決して大ぶりの技を使っているわけではない。只ひたすらフェイントを織り交ぜながら掌打を放っているだけである。だがそのシンプルな攻撃であっても、流れる水の如く途切れない攻めである故に防御一辺倒になってしまふのだ。そしてそこに崩しが入る。

顔面への掌打を防ぐべく払おうとしたその時、その手がクンツと曲がり払おうとする手を掴む。そしてそのまま体を滑り込ませ、空いた手で関節を完全に極め…

「ッうわ！」

投げ飛ばす。無論、受身を取るとするが投げ飛ばした先に居たのは…

「な!？」

「ぐうっ!？」

割って入ろうとしたもう一人の衛士だった。勢いが僅かであるが付

いていたため、まともに食らいそのまま倒れる。そこへすかさず武影の追撃が入りこれで3人がダウンした。

余りの強さに呆然とする若手衛士。そう、彼はA H戦のエキスパート中のエキスパート。徒手空拳に置いても日常的に命を狙われる環境下にあった彼にとってソレを習熟するというのは必須事項であったのだ。

その後は一方的だった。

仮にも軍事教練を受けている身、さすがに少しはできるのだろうと思っていたが余りの弱さに彼としては落胆を禁じえない。これでは嘗ての同僚達：いまは僅か9歳くらいじゃないだろうか、彼女達に比べると余りに弱い：弱すぎる。これではあの中で最も格闘が苦手なたまレベルではないか！

なお、彼らの名誉の為に言っておくが武影は彼女らのレベルが一般的衛士とは比較にならないレベルだったという事を付け加えておく。つまり『たまレベル』ですら衛士にとっては一般的なレベルであり要求するハードルが異常に高いのだ。

と、この遣る瀬無い気持ちをどうしてくれようとしていたとき、向こうから担架が運ばれてきた。その数7つ。

はて、セレの事だから6つあれば十分と判断しただろうが：と思っていた矢先に噂の人物がツカツカと足早に近寄って来た。

「ああセレ、なんで7つも用意させたんだ？6つで十分だっただろう？」

その言葉に白の女神は小さくため息をつくときゅ、と拳を握りしめた。

その色白い手が更に白くなるほどに。

「初っ端からいらん問題おこすなっつってんでしょおおおがああああああ！！！！」

「とっ……………つきいいいいいいいいいいいいいいいいいい！！？」

彼女が教わっていた『ドリルミルキーパンチ・ヴァイス』。それは武影をお約束の如く7人目の担架送りとした。

なお、京塚志津江嬢が週1の臨時で来ていた事を知った武影は号泣した。当分あの糞まじい合成食品を食う事になるからである。一方のセレはさっさと外出許可を取り京塚食堂の位置を確認していた。

「…で、営倉送り、と」

「…」

井口はどうしたものかな、と頭を抱えた。胃薬と頭痛薬が今日一日

でどれくらい減ったのだろうか、あまり考えたくもなかった。

今回の一見、セレは関係していないので井口と直接話をしているが武影の方は電話回線を引っ張っての話し合いである。MPからは「こんな喧嘩を喜んで買うような人物野放しにしておけない」と基地司令に泣きが入りMPの監視付きの下電話をしているのだ。

「申し訳ございません、うちの馬鹿がこのような真似を…」

「い、いえ、どうやら新任達が喧嘩を吹っ掛けてきたと聞いておりますので責はこちらに…」

「まあ、それなら少々要望があるのですが」

…嵌められたよね、これ日本人の美德に付け込むやり方だねと井口は心の中で号泣していた。もちろん表面上はダンディで渋くてかっこいいおっちゃんである。

「少々日を早めていただけますか？此方としてもこの馬鹿をあまりここに置いておくのは危ないと思うので」

「な、なあ俺の立場って何？」

「邪魔」

「ひどい!？」

まあ、そう言う事ならいいだろう。こっちとしても早くこのお二方にはお引き取り願いたい。

「あ、俺からもいいでしょうか、井口司令」
「む？何かね？」

と思ったら問題児の方からも要望があるようだった。営倉に入っているのは要望も何もないんだが：因みに特例で出すというのはセレ嬢の方から「頭冷やすためにも暫くブチ込んでください」と許しが出ているので却下できる。

だが、その要望と言うのは喜ばしいような事だが彼の斜め上を行くものだった。

次の日、複数の正規兵が汗を流し走っていた。その装備は分隊支援火器のダミー。

さらに普通に走るのではなく当然のように数kgもの銃を抱えて（提げて、ではない。抱えてである）走るポート走だ。

「どうした！その程度か！！訓練兵の方がまだ体力があるぞ！！声出せ声！！！！」

先頭を走るのは同じく完全装備の武影。更に手足にバラストまで付けており普通なら歩くだけでも相当な疲労を溜めこむものである。だがそんな武影だが、いかにも気持ちのいい汗かいてますっと言わんばかりに爽やかである。後ろの衛士たちはグロッキー気味であるが、彼ら自ら言い出した事なので意地でも着いていこうとしている。

たしかにそれはグロッキーになりかけの集団である。だが皆その目は死んでいない。否、武影が微妙に速度調整して死なないようにし

ているのだ。

先の武影が出した要望、それは営倉に同じく入れられた新任衛士からの要望でもあったのだ。

「俺の技を学びたい？」

「はい！先ほどの徒手空拳の技の冴え、何処かの流派において名のある方とお見受けしました！是非ともその技を御教授して頂きたい！」

武影は困った。確かに自分の技は無現鬼道流の初歩に更に幾度となく行われた『死合い』での実戦経験と『向こう』での暗殺術や武術などを元に作り上げてきたものだ。

だが教えるには少々憚られるほど出来上がる迄の過程もそしてその成果も血なまぐさい。

「こればかりは…」

「是非とも、宜しく願います！先生！！」

…さて幾ら外道に身を簞していた事もあるとは言え、ここまで言われちゃうと生来の人の良さが出てしまうのが彼である。そこまで言うのなら、と自分の技がどのようなものであるか基地司令に伝え、それを基地司令が先任の衛士たちに説明し、彼らが生き延びる為の術ならば、是非ということで承諾されたのだ。

なお、これにより全員晴れて営倉から出る事となった。

そこからは普通の訓練では教わらない事柄の勉強と血のにじむよう

な模擬戦である。要するに、対BETA戦ではなく、AH戦を主眼に据えた戦略や戦術の数々、悪逆非道と言われようと生き残り勝つための術を少しずつ武は新任達に教えていくこととなる。

例えば、AH戦だとゲリラ戦法に対する対処や人質を取られた場合の速やかな奪還方法、ネゴシエーションによる情報の引き出し方やその整理、活用法。また数少ない地形物やゴミなどから敵の兵装の想定、足跡から見る装備や性別、状態の判別法である。

そして彼が徹底して仕込んだのは近接戦、特に白兵戦の時間である。帝国軍の衛士は剣術を基礎として学んではいるが実際の戦場ではあらゆる状況に即応しなければならない。

乱戦時、というよりも戦闘中に於いて白兵戦の時間というのは危険が余りに大きいものだ。なぜなら目の前の敵に集中しなければその敵にやられ、時間をかけ過ぎれば他の敵からの援護で自分が死ぬ。ならばどうするか？

答えは一つ。最短で白兵戦を終わらせることである。

武影は徹底して30秒という時間内に白兵戦に於いて引き分け（この場合は両者負けとする）、勝ちの何れかの結果を出すよう厳しく指導した。ナイフを使った格闘術では相手に先出しさせその隙を狙う為の技術、そして先手を打つ場合の速やかな殺し方を仕込んでいった。そして攻撃方法も決して大ぶりのモノではなく、隙の短く出の早い攻撃を徹底するようにした。大ぶりでなくとも要所を攻撃すれば無力化できるからである。

これは衛士の技能としてはどうかという声もあったが、BETA戦に於いても目の前だけに集中しては横からの一撃で即死である。状況的には乱戦時の要撃級などの対処につながり、速やかな対処は周囲の安全確認の時間を増やし結果的に生存率の向上へとつながって行く。

甘さが抜け切れねえか：やっぱ柄じゃねえのかなーと思いつつ、それでも彼は久々の教導という行為を楽しく感じていた。

一方の井口。今日も伝手を頼りに御剣家にコンタクトを取ろうと奔走していた。

御剣という家は武家の大家である。また近衛に於いて主流武術である無現鬼道流の師範を務める武芸者を多く輩出しており、またその財閥としての資金力や人望も極めて大きく、高いものだ。一説には將軍家即ち五摂家とも深い縁があるとされている。

だが後方の基地故に仕事自体は少ない為、そういう根回しの時間はたっぷりあった。勿論レーザーに関する情報は水際で止めている。もし表に出て某国のエージェントやらが破壊工作なんてして行ったらたまったもんじゃないしあの機体に何かあればあの二人が何をしでかすかわからないのだ。

ただ人の口に戸は立てられないもので、次第に『白稜基地には何かがある』という噂から始まり、

『白稜基地には米国の特殊部隊が駐留している』

『白稜基地は今の政治体制に疑問を抱き、決起の準備をしている』

『白稜基地には太古の昔封印された鴉天狗が眠っている』

『白稜基地司令の井口はその鴉天狗の霊を鎮めるため無現鬼道流に伝わる皆琉神威を探している』

などと言う根も葉もないものもあればかなりニアミスしている噂も飛び交い始めていった。

そして自分を探しているという噂を聞き、またそれらしい会談の要請がそれとなくあった御剣雷電は思案していた。

噂の一つの決起を画策しているなんて言う無茶苦茶にして荒唐無稽なものも耳に入れていたが、こうも噂が広まるということはあそこには何かがあるということに違いない。

そう思い立った雷電はその髪にしつかりワックスをかけて固め、あ
る所へ電話をかけた。

そして物語は動き始める。イレギュラーを巻き込みながら。

2nd Stage: Illegal Contact and Legal

あとがき

武影に新たな称号『ハートマン』が付きました。

効果・訓練生及び新任の死亡フラグ減少。

対人戦の技術は対人の戦争でのみ発展していきます。それらの積み重ねが今日の近代戦なのです。対BETAばかりだったらそりゃ人間との戦いの為の知識なんて薄れるわな、という思いもありまして…その点武影は徹底したAH戦（非正規戦）を数百年にわたり続けてきた世界から学んでおります。

@光線級単体だとしょぼいのでライフルの威力を上げました。もうひとつのレーザーが光線級と同等になります。重光線級は…あれでしょう、やっぱり。

3rd Stage: R. E. D. Invitation

3rd Stage: R. E. D. Invitation

さて、前回のひと騒動から2カ月。新任達とも信頼関係を築き上げ、凄腕の民間人が逗留していると噂になっていた武影達であるが、ついにその日がやってきた。

「さて、諸君らのお陰で話が基地の衛士たちの練度が良くなったと評判だ。先の訓練、基地司令としてお礼申し上げます」

すつと頭を下げる井口司令。さすがの武影もこの真摯な対応には少々驚かされた。何分好き勝手やっていたような気がしなくもないからだ。

武影逗留中には色々な事があった。というよりやらかした。

彼は元々トラブルメイカーである。その性質は『向こう』に置いても如何無く発揮された。実に腹立たしい事に、であるが。

飲み屋での乱闘は数知れず。ロマンスじみた事になり更に昼ドラ的展開に発展して幾星霜。同時に彼は多くの涙を流し、呑んできたことも否めない。

友と慕った人間との別離、そして敵としての再開。結婚寸前だった同業者を殺したこともある。

最も非道な事といえは無差別の大量虐殺であろうか。それと同時に

多くの人命を救った英雄でもある。

多くの人に好かれ、恨まれ、奪い、与えてきた。

それが武影という男の半生である。

そんな彼が、ここ二ヶ月行ったこと。それは基地の新任衛士に自らが半生で得た生きる為の技を教え、その業を背負う意味を教え諭す事だった。幸い後方と言う位置故に多忙と言うわけでもなく、無理なく新任達はその教練に参加することができた。

その内容が、世の中は善悪織り成して構成されていると分かっている彼らであっても生理的忌避感を覚えるほどの苛烈なものであったことは、今では周知の事実であり、その薫陶を短いながらも受けた衛士達が戦士として一皮むけたのは言うまでもないだろうか。

彼にとって2カ月とは長くもあり短い期間であった。今こそ歴戦の雄としての風格ある彼でさえ『最初』は二ヶ月間地獄を見たのだ。そして彼は当時最底辺の人間だった。だがその二ヶ月で彼は変貌していった。

弱者から強者へ。護られる者から護る者へと。

そしてその後は、世界で最も多くの人命を奪い、与える者へと変貌した。

自分の技はあまり褒められたモノじゃない、だけどこの技がBET Aという人類種の敵と対峙した際、また己が身を守るための有用な手段となればと言う事で教えてきた。

1週間は基礎トレーニングと復習の座学に明け暮れた。

2週目からは模擬戦を織り交ぜ座学では更なる戦術の拡充を図った。

3週目からは武影と教え子の一对一の懸り稽古、戦略面からみる戦術の正しい運用方法を教えた。

それ以降は人の悪意が為した非道なる戦術やその対応策、そして窮地に立たされた際の解決策を提示した。

余りに血生臭く現実的で応用性の高いその教えは瞬く間に新任達の話題となり、いつしか講義の場には先任衛士の姿も見受けられるようになった。無論、これは井口も武影も想定していないことであったのだが、井口は増え続ける受講者の為訓練スペースの貸出までしてくれたのだ。

そんな武影であるが肩書きは民間人である。当然周囲の人間はあまりに豊富なその衛士としての知識から訳ありで退役している人間かと思いこんでおり、階級で呼ぶわけにもいかずいつしか彼は『霧影先生』と呼ばれるようになった。奇しくもそれは『向こう』において彼がある人物に尊称として使った呼び方と同じであった。

そして5週目にして問題が発生する。

「霧影先生！先生はその…退役なさった衛士ではないのですか？」

「…それについては答えられない。君達がそう思うのも仕方ないだろうとは思うけど、ね」

「丹波少尉、止めておけ…彼にも言えん事情があるのだ。察しろ」

そう、さすがに皆気付いていたのだ。彼が只の人間ではない事を。その場は上官である中尉により収められたが、いつしか彼の戦術機動を見たいと思う衛士が増え始めていた。

「いいんじゃないでしょうか。シミュレータに搭乗しても」

「セレ！？いや、それは難しくないか？それだと前の事が…」

苦悩する武影にセレ・クロワールはさも当然のようにその技を見せてやれと言ったのだ。

武影としては絶対に拒否すると思いこんでいたが故に少々肩透かしである。

「別にいいんですよ。いや、むしろその方が好都合です」

「好都合、と言うと…？」

「現在それとなく噂として情報を流していますが、御剣家を引っ掛けるにはまだ若干弱いのです。井口司令のコネを使ってもこのままでは相当香月女史と接触するには時間がかかるでしょう。ですから更なる噂を流す頃合いかと」

謎の民間人にして凄腕の衛士らしき人物。成程城内省の人間も訝しく思うに足る情報だろう。いや、既に城内省は動いているだろうが。

「それに、あなたとしてはこの世界の人間、若者に死んでほしくないのでしょうか？ 私としても人類と言う種が途絶えるのは唾棄すべきことです。ただ、やはりこの世界も共通の敵が居たところで人類は団結しないという事が変わらないのは残念なことですが……」

彼女は知っている。人は種として共通の敵が存在しても真の意味で互いに手を取り合うことは無い事を。その裏で権益を求め策謀することを。そして彼もまたその事は嫌と言うほど身を持って味わっていた。

「まあ、兎に角俺はあいつ等に戦術機動を指南してもいいって事だな？」

「ええ、存分にどうぞ。報酬は頂いていますので心配なく」

「か、金取ってんのかよ!？」

セレは深くため息をついた。その表情は何言っただこの馬鹿は、と呆れかえっている。

「貴方は此方に来てから甘くなりすぎています。忘れたのですか？ あの世界でその甘さが命取りとなった事を」

その言葉に武影は眉を顰めた。『甘い』。それは彼の美点でもあり弱点である。事実背中を撃たれたことも少なくない。でも、それで

も武影は最後の一線としてその甘えを捨ててきたことはできなかった。故に、彼女が今こうしているのだが。

「確かに貴方の甘さは美德です。ですが……この人々と余り深い間柄に在るべきではありません。この先如何なる謀略渦巻く世界に飛び込むのか分からないのですから」

「……すまない、と言う事は井口司令が外部講師として招聘した、と表向きはそうなっているんだな？」

「そういうことです。だから気にせず教えてきてください。貴方はそういう人だと嫌というほど知っていますから」

シミュレータールームでは誰もがモニターに釘つけとなった。圧倒的な技術と戦闘センス。そして確かな知識に裏打ちされた合理的な戦術と機動。どれをとっても第一線級のエースがそこに居た。

勝負は最初から1対6で行われた。彼はそれほどまでに新任にとって手ごわい敵だろうと認識されていたのだ。

彼の機体は瑞鶴。撃震の改良機であり信頼性に置いて高い評価を得ている名機である。対する新任は陽炎……当時の帝国に置いて最新の名を冠する機体である。それは武影にとって圧倒的不利な条件であるが同時に幾度となく乗り越えた事であった。

場所は市街地。それは幾ら凄腕とは言え遮蔽物も何もないところではどうしようもないという認識の元、決定された。武影は遮蔽物も

何もない荒野を想定していたのだが。

幾分かの肩透かしを食らった武影であるが氣を取り直し瑞鶴を軽く動かす。

第一印象は『硬い』。第二印象は『重い』であった。依然として戦術機のOSは旧態然としたものであり彼が好む三次元戦闘には適さないものだ。そして跳躍ユニットの性能もお世辞にも良好とはいえない：そう、あくまで跳躍であり飛ぶことはできないからだ。加速性能にしても推進剤の量にしても不満は多い。

だがそれはそれでやり様はあると彼は薄く嗤った。そのまま武影は機体に慣れる為、と言って戦場をぐるりと回っていく。その間CPと陽炎のスペックなどについて軽く会話をしつつ、普通の戦術機動からちよつとした三次元機動を用いた後、上空から戦場となる市街地を俯瞰して開始位置についた。

CPの女性が開始前にルールを告げる。至って普通のAH戦。補給なし、支援なし、ECMと言ったレーダー妨害機構もなし。条件は数と機体性能の差以外はイーヴンである。

新任達はこれならば勝てるのではないかと淡い期待を抱いていた。相手は生身で此方を圧倒した人物であり、今までの教えからは確かな戦術眼と操縦技術を持っている事がひしひしと伝わってきた。だが、この数でならんとかなるのではないか：そう思っていた。

そう思っていたのだ。

開始のシグナルと共に武はFCSをマニュアルに変更、銃口の向きを正面のみに固定した。敵機ロックオンの処理で機体の動きに遅延が出るのを避けるためである。そしてそれは同時にこの後の機動で『無駄』になる未来位置予測をさせない為でもあった。

戦術機の戦闘速度は速くて300km/h後半くらいである。巡行というただ移動するだけの条件下で600km/h以上を出せるのであって、急加速・減速を繰り返す戦闘状態ではそれくらいが関の山と言うのが普通なのだ。車と戦術機は急に止まれないのである。

武影としても、あの機体で行ったような機動は戦術機のスペックでは苦しいと分かっていた。だから戦闘開始後即応性を少しでも上げ、そして一気に後退し6機の敵機に囲まれるという状態から脱出した。

彼にとって戦闘とは『相手は補足できず、此方が一方的に攻撃することであり、『補足される条件下においても、相手の攻撃が有効ではない状態』を維持するのが彼の戦闘である。

至ってシンプル、だが現実には厳しい。それは後方危険円錐域ヴァルネラブルコーンを取り続ける、またはロックされていてもFCSが処理できない機動を取るという事なのだから。

しかし彼はFCSの特性を知っていた。その未来位置予測で計算上起こる欠陥もだ。つまりは…

「当たらない！なんだあの動きは！！」

「アレが霧影先生の動き…あれはまるであの…！？」

その機動は上下左右前後に微妙に機体位置をずらしながらふわふわと浮かび、ノーロックで正確に打ち込む異様なものだった。それが武影の行った機動だった。そして誰も気づかない。

複雑な8の字を描き、自分が攻撃するときのみ機動の軸を狙う相手に合わせて変更していたという事を。

射撃に於いて、次の三つがその命中精度を左右する。

敵機の軌道（敵がどの方向に移動しているか）。
FCSの補正を受け、自機から発射される弾道（いわゆる射線）。
自機と敵機的位置関係（敵機の軌道に対して、自機の射線が交差する角度が決まる）。

例えば、互いに並行移動している状態での射撃（交差角約90度）はFCSの偏差補正が適切でなければ弾丸は後逸してしまい、逆に互いに前後移動している状態（交差角約0度）ではFCSの偏差が不足でも十分命中する。

彼の場合、自分が攻めれる場合のみ交差角を命中できるギリギリまで狭め、相手が立ち直った時点で回避できる程に広める…この軸合わせと外しの作業を延々と繰り返していたのだ。

なお、詳細を詰めると風向き、自転によるコリオリの力や炸薬量と反応率、空気の湿度などといった要因も複雑に絡んでくるが割愛す

る。

「効いていないのか!？」

「CPどういう事だ!アレは…あれは当たっていないのか!？」

「当たってはいます!ですが…どれも致命傷、機体の機動を損ねるレベルの被弾ではありません!」

確かに弾は当たっている。だが致命傷にはならない。掠っているだけなのだから。そして相手には致命傷となりうる部位へ狙いをつけて機体を動かす。傍から見れば恐ろしく不気味な機動である。

そしてその立ち回りも凄まじいものであった。2機に襲われれば敵機と敵機の間点、即ち敵の射線が同士撃ちする可能性のあるところに最速で移動し、IFFによる誤射防止装置を無理やり作動させる。それにより生じた隙に正確に撃ち落としていった。また必ず援護射撃が入らないよう敵の射線上に敵を誘導し、数の有利を機能させなくする。

接近戦に持ち込もうとすれば距離をあけられ、遠距離戦にしようと思えば何時の間にか懷まで潜り込んでくる。意図した事を先読みしたような捕えがたい機動を取っていた。

かといって囲もうとすれば急速に離れ、仕切り直しを強いて確実に端から一機ずつ葬る。そして追いつめる時は必ず障害物のある方へと誘い込み、その機動を殺して首を取る。至ってシンプル、シンプルすぎてコメントのしようがないほど徹底した戦術だった。

またノーロックオンと言うのも恐怖である。ロックオンによる警告が発生しないのだ。普通ならFCSの補佐のない下手な鉄砲など当たる事もないだろう。だが武影のそれは『狙い澄ました』ノーロックオンであり、FCSはただ機体正面に弾が集まるよう調整しているだけなのだから。

「化け物…」

誰かがそう呟いた。それがだれかは分からない。ただその化け物は化け物らしく静かに嗤っていた。

装甲の表面が所々剥げて入るものの、武の瑞鶴は驚くほど内部損傷が少なかった。そして陽炎6機は胸部：即ちコックピットを集中的に狙われており、全機致命的損傷と判断されていた。

「さて、今回の教訓はなんだと思う？」

武は複数回の演習を行い、その全てで完膚なきまでに新任をたたきつぶした。悔しさで涙を流す事を許さないほどその戦い方は苛烈だった。

「先生の機動が余りに異常だったから、でしょうか？」

「違うな、他には？」

連携が悪かった、狙いが悪かった。味方を犠牲にしても有効打を

入れに行くべきだった等々の答えが出たがそのすべてに武影は首を振った。

「簡単なことだ。孫子の形篇と謀攻篇を読み直してこい」

武影が答えとしたのはその一言だけである。だがその一言が全ての答えでもあった。

孫子、それは今日でもビジネスマンや政治家、軍人が好んで読む中国の兵法書である。他にも軍事関連書物としてはクラウゼヴィッツの戦争論や宮本武蔵の五輪之書などが著名ではあるが、古代より連綿と続くこの書が今なお軍学の基礎とされるのは、人の考える事が今なおその本質において変わっていない為だ。

形編。その序文には次の一節がある。

先ず勝つ可からざるを為して、以って敵の勝つ可きを待つ。

即ち此方が攻められても守り切れる状態を作り上げ、その後に関手が崩れる時を待つという事である。

この場合武影は事前に地形を確認し、入念にその機動が取れる地形を探していた。そして狩り場は地表の障害物、つまり突っかかりやすい所を選んだ。

そして戦闘開始後すぐさま6機から狙われる位置から速やかに退いた。スペックが劣っている以上当然である。

その後は必ず敵機が攻めあぐねる状況下にもっていき、その上で徹底的に各個撃破している。

また謀攻篇ではこれも有名な一節がその中に在る。

彼を知り己を知れば、百戦危うからず。

武影は戦う前に瑞鶴の性能を確かめ、その上で陽炎のスペックについて尋ねていた。更に言えば地形を入念にチェックしどのような状況にすれば勝てるかをシミュレートしていた。それは戦う上での礼義として、また武影が必ず戦場に赴く前に行っていたことである。

そう言った勝てる為の努力と言う者を、彼ら新任衛士は数を頼りにして怠っていたのである。

衛士達はその答えを知って膝をついた。それは武影が真っ先に教えたことである。

死力を尽くして任務にあたれ。

その最も大事な教えを、目先の戦術に囚われて忘れていたのである。

そんな事があり、武影の評価は鰻登りであった。そして誰も彼もが、彼がああ黒い『鴉』の衛士であると悟った。だが本人が答えられないと言う以上それに対し声を大にして言うことは憚られた。無論、それは新任達もだ。

むしろ、あれほど反則的に強い衛士から教えを受けられるというところで感激する者が出た位である。それは武影が一切死傷者をあの戦闘で出さなかったことにも起因するのだが。

衛士の質も段違いによくなり、他の基地でも白稜の話は噂になるほどとなった。

先々月の意味不明な出撃命令の後、急激にその練度を高めた基地。それは突発的な非常事態対策の訓練で、その不甲斐ない様子を見た司令が喝を入れ鍛え直したのではないかという憶測も流れた。その後それに乗っかるように他の司令も突発的な訓練を実施しその練度を上げようと試みるところもあったという。

前任衛士もまた武影との手合わせを望む者も少なくなかった。そしてその全てに武影は相対しそして勝った。衛士の質は留まることなく上がっていく。一部の士官はその教えを裏マニユアルの一つとして書き残していたほどだ。

後の話となるが白稜に鞍馬の天狗が降り立ったという噂も出た。だとすれば武影はこの世に甦った鬼一法眼とでも称するべきところであらうか。

そういう噂も漏れ出し、とうとう2カ月の月日を以って会談の日取りが決定したわけである。

「件の御剣中将の一件であるが、漸く先方とのコンタクトが取れた」

「もう少しかかるかと思ったのですが流石ですね、井口司令」

セレの賞賛に仮にも司令だぞ？と眉を顰める井口。そして態とらしく咳払いをすると話し始めた。

「そして、御剣中将が此方にいらっしゃる日取りについてだが…」

「今日、この時、と言う事ですね」

その言葉に井口は凍りついた。武影がごく自然になんの気負いもなく、ただ当然であるかのように言ったその一言。表情は相変わらぬ掴みどころのない微笑を湛えている。そう、すべてお見通しだと言わんばかりに。

「ふ、ふはははははは！！面白い！面白いな小僧！！」

豪快な笑い声と共にドアが勢いよく開けられ、老齡の偉丈夫がづか

づかと執務室に入って来た。

白髪は一部左右に分けられており、頭頂の髪は天を突くかのように固められ、その筋肉は鋼の如くしてその相貌は鬼の類のような強者の色を強く見せつけていた。顎髭は白く長く、その造形はかのラ○デ○ーンを彷彿させる髪型だった。きつと美声で敵を倒せるのだろう。

「お会いできて光栄です。御剣家当主、御剣雷電中将閣下」

「ふむ、いかにもワシが御剣家当主、雷電である。貴様らが、戦略級レーザー技術を持つと言う者達か？」

どっかりと武影達の対面に座った大男はじつと武影の瞳を覗き込んだ。武影は微笑を崩さずそれに答える。そしてまたセレも静かに書類の用意をしていた。

「その通りでございます、閣下。我々はこの場に『商談』をしに参りました」

武影はその表情を崩すことなく、その暗く深い闇を湛えた眼で見つめ返した。

「ふむ、しかし戦略級レーザー技術、そのような大事を何故御剣と言う家だけに対し、商談を持ちかけたのか？」

訝しげに雷電はその眉を顰め問い質した。それもその筈、そのような大事は城内省にコンタクトを取り、しかる後にもっと上の階級の人物、例えば現將軍家である九條家などにコンタクトを取るのが適切ではないだろうか。そう彼は思っていたのである。

だと言うのに何故態々御剣という家を指定したのか、それも城内省

ではなくこの井口司令のコネを利用して接触してきたのか。それが解せなかった。

そう、当然あの事が世に知られている筈がないと思っていたが故にだ。

「閣下、今日は新月だそうですね」

「何を言っている貴様、質問に答えよ」

あくまで表情を崩さず、それでいてしっかりと聞こえる芯の通った声で話す武影。それは確かに好青年が話しているかのように見えるだろう。そう、傍目からすれば。

「今夜は晴天ですが冥く、星のよく見える夜空になるそうですよ？」

「…貴様の言うことの意味が分からぬ。何が言いたいのだ貴様は！」

はぐらかす武影に雷電は眦を吊り上げ語気を強めた。話している事は全く関係ないことである。だが、その言葉が御剣の、いや五摂家の秘事を知っているかのように非常に恐ろしかった。しかしここでボロを出しては中将の名折れだ。雷電はきつと武影を睨みつけ次の言葉を待った。

そして次の言葉で雷電の思考は完全に硬直した。

「お孫さんは元気でいらっしゃいますか？もう御誕生日をお迎えになられたのでしたから御歳は9歳、でしょうか？」

御剣雷電、その長い生涯に於いて最大の不覚であった。この男は、いや、この武影と言う者は御剣の、ひいては摂家である煌武院の最大にして禁忌である秘事を知っているのだと分かった。いや、分かっただけで済んだ。

雷電は一気に血の気が引いて行くのが分かった。この男には如何なるはぐらかしも通用しないだろう。そもそもレーザー技術に関する情報というのもこの事で当家を脅すための方便のようにすら思えてきた。

「…井口司令、すまないが席をはずしては頂けないだろうか」

「は？ いえ、私は「井口司令」…は、畏まりました」

井口に厳とした声で退出を言い渡す中将。その目は燎原の火の如く怒りで燃えていた。

井口が退出した後、雷電はその業火を口火とし言葉を吐いた。

「…貴様ッ！なぜ、何故その事を知っている！！！」

「落ち着いてください、雷電中将閣下、我々は『商談』に来ているのです。争うつもりはありませんよ」

怒気を強める雷電に優しく柔らかな声色で応えるセレ。明らかに雷電は余裕を失っていた。いや、失って当然である。それは国家の屋台骨を揺るがしかねない重大な、超が付くほど重大な機密事項なのだから。

「ご安心を、レーザー技術に関しては嘘ではありませんよ。此方を

ご覧ください」

そう言ってセレはその白魚のような指で紙資料を示した。そこに書いてあるのは戦略レーザー兵器（Tactical Laser System）の概略とその基礎理論である。

資料を引っ手繰り、目を通す雷電の表情が次第に怒りから驚愕の色に染まり、そして最後の一文を読んだ瞬間その表情が恐怖の色に変わった。

「貴様らは…貴様らはいったい何者だというのだ。これは…これは、現実なのか…!？」

「現実ですよ。御剣閣下。なんなら今すぐ、お見せしましょうか？」

青ざめた表情で武影とセレを見る雷電。それはまるでこの世のものじゃない別の何かを見るかのようにだった。

その条文の最後に書かれていた一文、それは

『当方ハ戦術機級ノ該当兵器ヲ所有シ、マタ之ハ戦闘証明済デアル』

3rd Stage: R. E. D. Invitation (後書き)

あとがき

御剣のじっちゃん登場。

キャラあつてるかなあ。

4th Stage: Nobles and Sages

4th Stage: Nobles and Sages

つくづく読めぬ男だ、と雷電はその心中で目の前を歩く青年を評していた。

先に井口司令から『世に甦った信長』と聞き構えていたがその通りだった。

読めぬその意図、そしてまるで全てを見通しているかのような眼力。そして帝国の秘中の秘を知るその手腕：最早人の皮を被った怪物である。

加えてその容姿たるや表向きこそ美丈夫である上にその引き締まった体つき、柔らかな顔つきから好青年と思い込みがちだ。

しかし話によると凄腕の衛士でもあり、生身の近接格闘や射撃においても右に出る者なしと言う豪傑。天は二物を与えたとはこのことを指すのかもしれない、この日ノ本にこれ程の麒麟児が居たこと自体が驚きでもあるが：

さらに横のセレ・クロワールという美女も厄介きわまりない。大和撫子の代名詞と言えるような腰の低さにおしとやかさ。

更にその美貌は18と言う年齢に似合った清涼な一陣の風の如き快い気風を持ちながら時に傾国の如き色香と妖艶さを見せる。

化生の類が二匹も居るとは聞いてないぞ、井口司令…！

そう思っている内に彼らはハンガー前に辿り着く。そこは現在事故により立入禁止、という立て札がされている場所であった。おあつらえ向きなペンキで書きなぐった字が何とも味わい深い胡散臭さを醸し出していた。

「失礼だが、この看板は…」

「私を書きました。我ながら素晴らしいチープさが醸し出せたと思っております。秘匿の為の看板なので腕によりをかけて書かせていただきます」

…大丈夫なのだろうか。この子たちは。

「元々空きスペースを利用していたような場所です。基地そのものの運航にさしたる影響は出ていないと思いますが」

「…成程、な。確かにこの機体の大きさであれば納得がいく」
その機体は極めて小柄な機体である。全高13m、全幅14m。リアユニットを外せば全幅はさらに3mほど小さくなるだろう。

「この機体の名は？」

「製造に関する情報は機密事項ですのでお教えできません。我々はIBISとこの機体と呼んでいます」

セレが冷静に説明する。因みに機体の名を明かすのは今回初めてのことであり、井口司令にもその事は明かしていない。

だが、IBISコウノトリというのは少々無理があるのではないかと内心苦笑していた。

機体を見た雷電はその『鴉』の噂に納得せざるを得なかった。漆黒のカラーリングと妖しく煌めくカメラやセンサー類。そして後部の巨大なフライトユニットを合わせればそれは鴉のような印象を受ける。

そして何より、その恐怖心をあおるような無機質な顔は既存の戦術機とは趣を異とするものだった。

「随分とのっぺりとした面構えだな」

「まあ、機能美を求めた結果ですから」

それはあのBETAの様な怪物を謳った伝奇小説にあるクトゥルフ神話を模しているかのような、そのような不気味さを持っていた。

「して、その機体の戦闘データ：見せてもらえるのだろうか」

「井口司令が極秘として私達に管理を託しているデータがあります。と言いましても私どもとの交戦データでございますが」

その言葉に雷電は眼を剥いた。実戦証明済みと言ったがまさかその実戦証明とはこの基地の貴重な人命・備品を消費し立証したものはなかるうかと思ったのだ。そしてそれは半分当たっていた。

「ご安心を、将兵に死傷者は出ていませんから…では、此方へどうぞ」

両者間に緊張が走ったかのように思えたが、セレはあくまで穏やかな声色を崩すことなく事実を告げる。確かに備品の故障などの報告はあったが殉職したと言う報告は一つもなく、また彼らに接する兵士の証言からも恨み辛みと言った事は聞こえてこなかったのだ。

そして雷電はその13mの小柄な巨体下に設置された簡易モニターの前に辿り着く。セレは速やかに準備を行い、これから行われるであろう初のTLSに関するプレゼンテーションの試写会をする準備

を始めていた。

「…一つ聞きたい。ここまで御剣を巻き込み、更にはこのような商談を持ちかけた理由…それは何故か」

「そうですね…それを答える前に、私からも質問してもよろしいでしょうか」

「む？構わん。言ってみよ」

未だその応対する声の堅い雷電へ、武影はその柔かくも芯の通った声で話し始めた。

「閣下は喜劇王、という人物を御存じで？」

「無論知っておる。喜劇王チャップリンと言えばBETAとの戦いで荒んだ人心の良き癒し手となった人物であるからな」

チャップリン。その人物は広がるBETAとの戦火の中、喜劇を通じて人々に明るさを与えて言った。無論それに対し戦時中で斯様なことは不謹慎だと声を上げる者もいたことは否めない。だがそれをもって余りあるほど彼の喜劇は人々の心に暖かい光を、笑いを灯し続けた。だがその喜劇の中には人として哲学的感傷を感じる題材もある。

「人を一人殺せば殺人者、千人殺せば英雄と彼は言いました…では、幾千の人を殺し、然る後に幾万の人間を救った人間はなんでしょうか？」

「ソレは兵士。自らが守るべき全の為に仇為す千を討つ者なり。戦時とはそういうものだ」

さも当然のように言いきる雷電に今度は武影が咂然とする。少々困らせようとした意図が見事に外れてしまった。そしてその余りにも厳とし、確固たる自信を以って断言する雷電を羨ましいと感じた。

「其は己が為の刃に非ず。ただ牙無き者の為たれ…」

「よく知っておるな。衛士の格言でありワシの座右の銘だがそれも調べておったのか」

「いえ、自分はその衛士と言う在り方からかけ離れた生き方をしていましたもので…」
微かにその言葉に自嘲の色が残されていた事を雷電は見逃すはずがなかった。

国破れて山河あり、か。皮肉な者よ。誰よりも衛士たる身に在りながら衛士であることを認められぬ。余りに拙い生き様だ。

そう雷電は思い、嘆息した。彼の身に何があったかは知らないが、恐らくその衛士たる牙の矛先を誤ったが故に今、こうして表舞台に立てなくなっているのであろうと。

ソレは正しくもあり、それでいて外れていた。

「先ほどの質問の答えですが…夢、ですよ」

「ふむ、夢とな？」

「ええ、とても大事な、有り得たかもしれない選択肢を選ぶ夢です」

「随分とまた、答えになっているようでそうでない答えだな」

「少なくとも、帝国に対して害となるつもりはありませんよ。今回の商談如何の問題もありますけどね」

「ふむ、ならばエスコートは懇切丁寧にせねばならんな。生娘の御手をとるように」

それから武影と雷電はいくつか他愛のない話をした。もう既にかの秘事は知られていると分かり開き直ったのか、雷電からはいつもの「冥夜タァアァン！！！」が零れてしまうなどそう悪くない雰囲気、プレゼンテーションの準備は進められた。

モニターに映し出されたのはIBISと、それを取り囲むように展開する陽炎。あの白稜基地襲撃事件の時の映像だった。

「この機体は飛んで：いや、浮遊と言った方がいいか。このような推進剤の使い方なぞすればものの数分で行動不能になるぞ？」

そう雷電は鼻白んだ。だがセレのこの戦域に到着するまで飛行を続けていましたと聞いたとたんひっくり返った。だとすれば今の戦術機からは考えられないほどの飛行時間をこの期待は成し遂げている事になる。

小柄なその機体を持つライフルから放たれる一条の紫電の光。それは雷電の目をむき驚愕させるには十分なものだった。

そして驚かされたのはそれだけではない。第三者視点という立場だからこそ気付くモノがあった。

「この機体：常に一定速度を維持しているな。どういうことだ、切

り返しの際に在るべき減速が殆ど存在しないだど?! 貴様ら、合成映像ではなからうな!」

「ご安心を。この映像は白稜基地側が録画したものであり、それに対し一切細工はしておりませんから」

余りのその非現実的な機動に声を荒げる雷電であったが、説明を聞く限りそれは真実であった。尤もそれが信じ切れるものであるかどうかは別としてだが。

「:あと、今回の商談はレーザーに関する事のみです。当機に関する質問にはお答えできません」

「分かっておる、いや、しかしこれは:」

この機動ができれば、戦術機と言う存在は一変する。回避機動による減速がないと言うのは、それは常に高速戦を展開できると言う事なのだから。無論、仕掛けはある筈である。常時300km/hを超える速度で減速なしの切り返しなぞしていたら中の人間は10Gを越す負荷でブラックアウトしてしまうだろう。

そして、映像は次の場面に切り替わる。陽炎4機がレーザーブレードで殺陣のように切り伏せられるシーンだ。

「こ、光線剣だど!?!」

一定の長さを維持するレーザーブレード。それは原理としてはその距離を超えた場合急速に減衰しレーザーの刃と言うものが消滅するからであるのだが、理論は理論、現実は現実。普通ならこうも極端なレーザーなどそう簡単に生み出せるものではない。

「この技術も、商品の一つかね?」

「むしろオプションです。『これくらい』はできないと」

あっけらかんと言い放つセレに雷電はあいた口がふさがらない。ど

うもこの二人には自らの持つ常識と言うものは一切役立たないようだ。

こめかみを押さえつつ、今ある目の前の情報の有効性を計算する。間違いなくこの情報は帝国に利を齎す。新時代の戦術機開発に於いても帝国がアメリカの後塵を拝することなくむしろ全世界の先頭を立つことになるだろう。

「…商談についてだが、御剣家としてはこれらの技術を全て買い取りたい。幾らかね？」

そこで、悪魔が笑っていた。

「いや、しかし御剣家も剛毅ですね。まさか全てこちらの言い値で買ってくれるとは思いませんでした」

「…セレ、なんで俺まで巻き込んだんだ…」

二人のアクマはそう言いながら苦笑していた。白髪美女の方はもう満面の笑みで愉快そうにしているが青年の方はやや引いていた。この笑顔の裏にはきつと恐ろしい地獄絵図が渦巻いているのであろう。神算鬼謀とは言ったものだがこうも手玉に取ってしまうと相手が気の毒になる。

そしてまた、なぜか自分も彼女の策に巻き込まれていた事に。

御剣家との、詰めの交渉…それはセレ・クロワールが文面を読むことから始まった。

「では此方の要求は以下の通りです。

一つ、御剣家はセレ・クロワール並びに霧 武影（以降、甲と称する）の衣食住全てに於いて甲の求める額の援助、及び土地の供与をすること。

一つ、御剣家は甲の後援となり、重工業及び電子技術、民間軍事事業等を取り扱う株式会社（以降、乙）を設立させること。この取締役にはセレ・クロワールを起用し、その株式の6割を常に甲が所有し、2割を御剣家が所有すること。残りの2割は国内企業にのみ公開する事。

一つ、乙に対し御剣家は日本帝国銀行が発行する日本円にて400億円の出資をする事。これは内部資金として取り扱う。

一つ、甲及び乙に対し不必要な干渉は御剣家が責任もってその全てを排除すること。ただし、公式なものについてはこの限りではない。

一つ、御剣家はレーザー技術に関し甲並びに乙の承認を得ずに之を公開することを禁ず。

一つ、甲、乙に対し御剣家はその身元を保証すること。これは日本帝国における戸籍の保証である。

一つ、甲が所有する機動兵器IBISについて御剣家はその全てを秘匿すること。また、メンテナンスは最重要機密事項として甲の監督の下でのみ行われるものとする。

上記の事柄に対し御剣家に不義があつたと甲が判断した場合、甲は御剣家に対し敵対行動を取ります。よろしいですね？」

「…レーザー技術の開示を禁ずる、というのは？」

「簡単な事です。まだ余所に知られるには拙い情報ですので御剣家と確固たる信頼がおける企業間でのみこの情報を開示するようにしていただきたいのです」

成程理にかなっている。確かに下手に技術漏えいが発生して米国に知れ渡られるのは拙い。自分の手の下で管理するのが最善だろう。

「それと出資額に関してだがその程度でいいのかね？」

400億円。確かに普通なら目玉が飛び出す金額だが軍需産業企業とはその程度の資本は持っている。そう考えればさして普通の数字だった。それに莫大な金とは言え用意のしようは在るのだ。そう、例えば将軍家のつながりなど。

「ええ、本格的な稼働はもうすこし先を見越していますから。後個人的な『お願い』ですが此方の大学の方にも興味があります。そちらの方への編入もお願いしたいのですが」

雷電は首をかしげた。これ程の能力を有するならば今さら大学に行く必要もあるまい。それに不必要な干渉を拒むのなら、干渉だらけの大学にわざわざ通おうとする意図がつかめない。

「知的好奇心からのお願いです。あと帝都大学以外の大学は行く気がありませんから」

「むう…帝大となれば帝国随一の研究機関だ。それを非合法に編入すると言うのは…」

「？誰が非合法にとおっしゃいました？」

「何？」

そこでセレはにっこりと天使の様に微笑んで言葉を続けた。それはもう忌々しいくらいに可愛い笑みだった。

「編入試験を受けさせて頂ければ結構です」

と。

「それがなんで俺も受けることになってんだ!？」
車内にて武影はげんなりとした表情で相方と喋っていた。商談がまとまり、一時的に御剣邸に引越す事になったのだ。それは井口の胃への配慮もあるがこれ以上問題が大事になる事を防ぐためでもあった。

「諦めてください、武影。これは必然ですよ?それとも香月夕呼に会いたくないとでも?」
ぐ、と武影は黙り込んだ。確かに香月夕呼18歳とは一度直に会っておきたい、だけどその為に帝大への受験勉強を突貫ですることになると言うのは…

「あれ?セレはいいのか?」

「この程度の問題は片手間でできます。それより貴方の方に付いたほうが今後の為になりますので」

因みに武影も天才とまではいかないが元々頭の回転は速い。だてに名門進学校に突貫の受験勉強で受かっているわけではないのだ。更に戦闘で身に付いたものであり、向こうで勉強させられた専門的な物理学や弾道学も知っている為計算という分野では凡人を遥かに凌ぐ。

どちらにせよスパルタ式の受験勉強が始まる事は確定している事だった。

そして当然これには裏がある。彼も承知をしていたのだが最終学歴として帝大卒というキャリアを押さえておきたいのだ。無論、人材の青田刈りという非常にリアルな問題もある。

そんな彼らの思惑は露知らず、彼らを乗せた車は御剣邸へと向かって行った。

雷電は自室にて、ただ筆を前に瞑目していた。

あの摩訶不思議な二人組から分かれて後、一言も喋らず自室に籠ったのだ。当然、屋敷にいる家臣や孫娘は硬い表情のままの当主に不安を抱いたが、その身を弁え疑問を口にすることは無かった。

「如何したものかな…」

確かにレーザーの技術に関する理論や開発に関する技術情報は手に入れた。たしかに見る限りそれは間違っていないように思えるしそんなに悪い買い物ではなかっただろう。だがしかし。

「メガワット級の出力が必要だと…現段階の戦術機の主機では到底賄い切れるものではないぞ、いや、原子力空母のようなものでなければ、之は…」

余りにその必要とする出力の大きさ、そして鍛造技術に於いてもその出力に耐えられるものが存在しない。たしかに製造はできるだろう、現にその機体が存在するのだから。だがそれを自分たちで開発するとなるとここまで難易度が高いとは思わなかった。

だが中には活用法が見えている技術もある。レーザー技術には冷却に関する基礎理論も付属していた。これがなければ当然使えないから、という意図だっただろうが現在極秘裏に開発の協議が進められる電磁投射砲への応用が期待できるだろう。まあ、現状すぐの開発は無理でも今使えるカードが増えたことは喜ばしい。

しかしこうなるとつくづく資金をねん出してでもあの機体の理論を買い取るべきであった。特に装甲材とジェネレータに関するものを。

ふと棚に安置されている茶器を眺める。一つ250万円、学術的価

値も高くオークションに出せばそれ以上で売れるだろう。同様の品は御剣家の蔵にもあり、それを全て売れば彼らの樹を引くに足る金額を得るかもしれない。だが彼女らは興味を引いても首を縦に振ることは無いだろう。それこそ一国の予算をつぎ込んでも、だ。

あの技術に対する金額的評価など、到底つけられるものではないからだ。

「雷電殿、失礼致す」

「む、来たか紅蓮。久しいな」

そこにやってきたのは頑健な肉体を誇示する剛の者がそこにいた。側頭部にある分かれた髪は曲線を描きながら天を示し、ある未確認飛行物体付きの巨人を偲ばせる。きっと紅い胸毛から高熱のビームを発射できるに違いない。

「して、今回のその妖しい輩、というのは一体どういう者たちでしたかな」

「うむ、正直化生の類だとワシは思った。もう2度と直接的なかわりは持ちたくないな」

「それは無理でしょう。屋敷に招いたのですからな」

そこで雷電は頭を抱えた。そう、はっきり言って彼の心の中は一つ。

どうしてこうなった…

雷電が紅蓮に愚痴っている頃、道場では一人の男と少女が対峙していた。

男の名は霧 武影。嘗て大虐殺をおこない、世界を救った血塗られた英雄にして豪傑。

少女の名は御剣 冥夜。かの煌武院 悠陽の双子の妹にして、その出生から忌子として御剣の娘となった貴人である。

「そなたは…そなたは、何故この御剣の家に來たのか！」

「それに答えるわけにはいきませんよ、冥夜様。俺としてはさっさと夕飯にありつきたいんですけど」

あくまでも穏やかに堪える武影に、冥夜はその目を疑心に染めて問いかける。

彼女にとって御剣とは家族。当然、彼女は双子の姉の事を知っているがソレを話す事は重く禁じられている。まあ、その事は目の前の男も承知しているのだが…閑話休題。

自分を養い、育ててくれた御剣家に恩義を感じ、一人の武士たる御剣冥夜として生きることを誓った彼女にとって、目の前に居る輩は不信感を煽るような存在だった。

「そなたがこの家に來る時、当主様の…御爺様の御顔が優れなかった！あの優しい御爺様がだ！！そなた、なにか知っているであろう！言え！御爺様に何があった！！」

怒気を強め木刀を構える冥夜に、武影はやれやれとアメリカ式のオーバーリアクションをしながら嘆息した。

これは想定範囲内の出来事である。冥夜がそういう性格なのは重々承知していたし、まあ今の自分が…血の匂いを薄らと漂わせる人間がいれば不安に思っても仕方がないだろう。恩師に言わせればまだ

まだ未熟と斬って捨てられそうなものだが。それと幾ら余計な問題を省くためとはいえ冥夜に対し様付けをするのはどうも気が乗らないのだが、まあ仕方ない。

まあ、彼女の10歳の顔と言うのは初めて見るモノであり、歳並みに可愛らしいものであったのだが：ロリだと？天使のような彼女と拝顔の栄に浴してないからそのような事を言えるのだ。

そして横に目を向けると、そこには構えこそしていないものの木刀を手に持ち、此方を油断なく見つめる緑髪の若々しい女性：月詠真那。あのころとは違いまだ十代という事もあり、瑞々しく大人になりかけのその顔は実に可愛らしいものだ。笑顔なんて見せられたらそこの男なんて一発だろう。しかし成程、確かに護衛兼指南役その肩書に相応しい風格をしている：だが、殺気を完全に収めきれない様ではまだまだ青い、と評する所だ。

その刺々しい視線を意にも介さず武影は柔和なその笑みを崩さなかった。否、一般的に刺々しいとは言え彼にとってはその程度空気にすらならないものなのだから気にする方がおかしかった。

「だから言っているでしょう？俺は雷電殿に招かれただけです。当座の間だけですよ、ここに居るのは」

「そうではない！！私が知りたいのは何の目的があって御爺様と接触したかだ！！」

あくまで此方の言を聞いても引き下がらない冥夜にどうしたものかな、と武影は嘆息する。正直言おう。あの世界で殺し殺されの関係を続けた武影にとってちよっと殺気を当てて怖がらせるのはしごく容易いものである。

だがそれが雷電の耳に入ると面倒だし後々の関係を考えるに嫌われ過ぎるのも問題だ。とはいえ先の約定があるから別にいいんではな

ああ、そう言えば2回目の時もこんな感じで月詠さんと三馬鹿に詰め寄られたんだっけ：そう思うと自然に口元が綻びそうになる。無論、失礼にならない程度の微笑に抑えてはいるが。

「さて、と。冥夜様。悪いですが質問には答えられません。それとそろそろ食事を取りたいので、どいてくれますね？」

冥夜は一瞬背筋が凍りついた。元々武芸をしている身なら武影の実力がどれ程のものかおおよその見当はつく。そう、自分では勝てないと言っくらしいは。

そして、覗いてしまったのである。深淵の一端を。

「う、うわあああああああ……！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「やばい、当てすぎたか？」

111

武影の誤算は二つ。

冥夜が怖がるラインと錯乱するラインを踏み間違えた事。

冥夜が既に十分恐怖していた状態だった事に気付かなかったこと。

この二つだった。

打ち掛かる剣勢は錯乱しているとは言え技が揺らぐことは無い。まあ、簡潔に言えば殺しに来る太刀筋と言えよう。

だが所詮木刀、そして10になったばかりの少女の細腕。武影にとって打ち落とすにたやすいものだった。苦笑しながらバテるのを待つか、と面を打ち込んできたところを体をずらして右手を掴み、そのまま背に回り軽く押してやる：これだけで振りかぶった勢いがそのまま残り、見事に床を転がる事になる。

まあこうやって転がせば疲れてそのうちまともな打ち込みも出来なくなるだろう、別に殴ったりしてるわけじゃないから傷にも無らんだろうし、と武影は思っていた。

が、そこに予想通りというべきか、一太刀武の喉元へと鋭い突きが飛んできた。

「っふ！」

半身にて薄皮一枚でそれを避け、刀身の鎬を木刀で弾く。それにより切っ先はあらぬ方向へと飛び、その隙に当て身を入れようとしたのだが瞬時に距離を離され、空を切る。

「月詠さん、あなたからも彼女を止めて欲しいんですが…」

「先ほどの目：あなたは、人を斬りすぎています。そのような輩がこの御剣の家にとどまらせる訳にはいきません！この身命を賭してもあなたを御剣の家から排除します！」

予想の範囲であったが、喉仏を狙い澄ました一撃だった。無論、木

刀といえど当たればタダでは済まないし最悪死ぬだろう。いや、あの勢いであれば死んでいたか。

しかしそれも武影にとっては些細なことである。ドアを開けたら目の前にアサルトライフルを構えた男が突っ立っていたり街角を歩いていたらいきなり後ろから銃弾が飛んできたりといったトラブルにはもう嫌というほど遭っている。寝物語をしているときにナイフを首に突き付けられるなんて事もあったくらいだ。

だからそんな殺気丸出しの一撃なんて避けるのも容易い。

それが剣術に於いて若くして名を馳せる月詠 真那であつてもだ。

「まあ、俺としては月詠さんと喧嘩したくはなかったんですけどねえ」

「な！？これを喧嘩だと…貴様！無礼るな！！」

流石は稽古を積みゆくゆくは近衛でも名を馳せるであろう女傑、その太刀筋は怒りを身に灯しながらも流麗であり、途切れることは無い。

面、袈裟、胴、切り上げ、次から次へ淀みなく放たれる剣撃。剣勢も先ほどの冥夜のように未熟なものではなく、しっかりと修練を積んだ成人に近い人間の強く芯のある一撃だ。

だが、まだ温い。悪鬼羅刹を斬ろうと懸るも、未だ刃をその身に突き立てること能わず。

「…強がるのは結構、その前に手の震えを何とかするべきでは？」
流石に片手では受け止めるのはしんどいので両手で受ける。小太刀ならば片手の方が取りまわしやすいのだが太刀では少々片手は重い。無理にリスクを背負うのも彼の流儀に反する事だった。

面を打つべく刃を振り上げたところでそのはばき（刀身とつばの間

にある金属）にあたる部位を切っ先で叩き抑える。人間、関節が伸びきると力が全く入らないのだ。

「きさ、ま……!!」

「躰が強張っています。それでは切れませんよ。骨まで断つのならもつと足、体重のかけ方に気をつけるべきですね」

そのまま刀を滑らし、組み打ちに移行する。といっても横に重心をずらして肩を押してやるだけ。それでも転がすには十分。

「…冥夜様も、早く御着替えなさった方がよろしいかと。道着のまま夕餉をとる訳にはいかないでしょう？」

まあ、ただそれだけの理由で着替えを勧めた訳じゃないがプライドを粉々にしてしまうだろうから止めておこう。水溜りは見えない程度だろうし。

「人間は錯乱すると袈裟切りと逆袈裟ばかり振ります。あの状態でちゃんと技を組み立てて攻め懸られたのは見事です。今後の修練も一層励んでいただきますよう、それでは御免」

とりあえずフォローだけして木刀をそのまま壁に立てかけ、道場に一礼して去る。一応の礼儀というものだ。とりあえず月詠さんが現段階でどれくらいできるかを確認出来ただけでも良しとするべきだろうか…そんな所だった。

「勝て、ない…化け物め、一体…一体あれはなんだと言うのだ…!」
月詠は転がされた後、立ち上がって再び飛び掛かろうとしていたがその意思を目線だけで制された。冷徹な、単純な殺意のみをぶつける視線。それはこれまで精神鍛錬を受け続けた彼女であっても背中

からの気持ち悪い汗を止められなくなる程の恐怖を見せ付けた。

ソレと同時に今までの技は彼の者が持つ力量の一端に過ぎなかった事を悟る。本当に自分を再起不能にするのであればあの木刀で一撃入ればそれだけで当分目を覚ます事は無いだろう。それだけのことをせず、優しく手で押し転がしただけ。

情けをかけられた。その事が更に彼女の自尊心を、プライドを見事に切り刻んでいた。

「月詠、無事…か？」

冥夜は震える声で彼女に呼びかけた。冥夜もその事をそれとなく感づいていた。いや、あの殺気に当てられ否が応にも思い知らされたと言っているだろう。正直、不意打ちや騙し討ちといった武家の流儀に反する外道を以って当たったとしても軽くあしらわれるのが関の山といった所だろう。それほど武影という壁は大きかった。

「わ、私は無事です、冥夜様。そのような些事より御身に御怪我はありませんか？」

「何ともない。あの者、私を投げる時に優しく受身が取れるように投げおった。今の私ではあの者の足元にも及ばん…」

手を握る冥夜の指は悔しさで白くにじみ、その瞳からは、一条の雫が流れていた。

今までの武技の全てをぶつけても、一太刀たりともあの者を捉える事は出来ぬだろう。そしてまた如何なる策をもあの者は見破ってしまうだろう。最後のあの一言がそれを如実に物語っている。

それは月詠もまた同じであった。今までの己が研鑽の全てを以つてもあの薄らと血煙の薫るあの男には到底抗えまい。今のところ表面上は御剣に害を及ぼさないと言っているが、どうなるか全くわから

ない。

「…月詠よ、もしあの者が御爺様に…御剣に仇為すのであれば、私は例え敵わぬと分かっているもあの者を排する。その時は力を貸してくれるか？」

「…滅相もないお言葉です、冥夜様。その折には必ず馳せ参じます」
そう、その時が来ぬ事を祈りつつ。

「所で冥夜様、御着替えの方は…」
「…すまぬ、部屋に用意してくれ」

4th Stage: Nobles and Sages (後書き)

セレに新たな称号『質素儉約?』が付きました。
効果・弾薬消費率減、電気水道代減。

ここでの彼はフラグが立てられない体質です。フラグ反転?な感じかと。あくまでもてるのは主人公であり、イレギュラーな彼には適用されません。

1st Mission::TACIT CLEANER —relishes

1st Mission::TACIT CLEANER —relishes—

「はじめまして、だな。レイヴン試験を受ける雛鳥諸君。私が今回の試験官を担当する者だ。まあ、名乗ってもどうせすぐに別れる身だ。試験官と呼べ」

試験官を名乗る初老の男が演壇に立つ。と言ってもこの場には一組の男女：受験者しかない。他の連中は前の試験で脱落した。彼にとってはさほど苦痛でもないテストだったが、彼らにとっては難問だったのだろう。ただ引き金を引くだけのテストであったのに。

「ミッションの内容を説明しよう。依頼主はミラージュ。現在旧都市区放置区域セクション513において所属不明の武装勢力が潜伏しているとの情報があった。諸君にはこれの殲滅に当たってもらう」

スクリーンに表示される三次元マップデータ、そして表示される敵の機体：対装甲機銃を装備したガードメカが12機、小型ロケット砲を2基搭載している機動兵器：逆関節型MT『ランスポーター』マッスルトレーサーが8機、まあ弱小と言える戦力だ。

「諸君らは異なる2つのゲートよりこの敵部隊を挟撃、殲滅してもらう。残党に生き残られ、依頼主に迷惑をかけるわけにはいかん。確実に関係者の息の根を止めろ」

受験者の男は静かに心中で呟く。

——分かってる。いつものサーチアンドデストロイ、見つけ次第皆殺しにしまえ：そういう事だろう？

「なお、本試験ではグローバル・コーテックスよりACが供与される。諸君らが合格した場合の搭乗機となるものだ、壊し過ぎるなよ。更にこの任務の報酬額から弾薬費・修理費が差し引かれるのだから」

——ああ、分かっている。『いつもどおり』だ。そういう事だろう？

「今回のミッションが成功した後、君達はレイヴンとして正式にアーリーナに登録される」

——ああ、そうだ。このミッションが終われば、今までの仕事から手を引けるんだ：そう、もう『自分の手』で刺して切って撃って締めて捻じ切る事もなくていいんだ。そういう事だろう？

「脱落した場合、諸君の生死は保証しかねる。では、新たな雛鳥の奮闘を祈る。全受験者、機体に搭乗せよ！」

——ああ、いつもどおりだ。テロリストとして、官憲の犬として殺しまくったあの日々と何も変わらない。そう言う事だ。

そして男は立ち上がり首の骨を軽く鳴らす。退屈な意味のないブリーフィングに辟易していたからだ。そして今から始まる試験も退屈なパーティーにすぎなかった。

「：あら、どこかで見た事がある顔だと思えば『アマルガム』かい？」

横に座っていたもう一人の受験者が、煙草に火をつけながら下卑た笑いを浮かべる。随分でかい脂肪の塊をさげており顔は中の上、といった所か。さて、何処で名前が知られたのやら：男はなんの感動もない視線を向け、先を促す事にした。

「だとしたら、どうする？」

そう澄ました顔で応えると女はその顔を歪ませ、愉快そうに言葉を続けた。

「つぶ、ククク：あーはははははは！！こりゃ傑作だわ！あのマッドマーダーがレイヴン試験とはね！試験中に不慮の事故なんて起きないようにねえ？」

——ああ、ニタニタと笑うこの女は自分を殺す気なのだろう。まあいい、そっちがその気ならこっちもそうするだけだ。

「ああ、不幸な事故が起きない事を祈ってるよ」

挑発的に見下し、そして輸送機へと向かう。

——着いてすぐドンパチするわけじゃねえ。パーティーはスプマンテ（食前酒）を呑んでからが本番さ。

——だからせいぜい楽しませてくれよ？洒落たパーティーにはダンスの相手が必須だからな。

そう彼はその端正な顔を喜悦に歪めた。そこに最高の衛士として戦った面影は、ない。

――log――

E・D・以前

地下積層都市レイヤード建造。

「大破壊」発生。

管理者によるレイヤード統治開始・地下生活順応のためレイヤード歴を開始

1年、1日の長さを幾度も変更し人類の地下生活順応化を完了。

E・D・0000

管理者により地上一部環境が居住可能レベルまで回復したことを確認。地上回帰に向け公転周期基準の時間に戻し同年を地球歴（E・

D・）0000とする。

E・D・0153

有力企業ミラージュ及びクレストにより多目的機動兵器MT試作機が開発。
マッスルトレーサー

E・D・0156

実用レベルMT開発

E・D・0166

「コア構想」を採用した次世代MT開発開始。以後同機種はAアーCマードと・コア呼ばれるようになる。

E・D・0172

レイヤード内の一部で環境制御システム故障。多数の市民が犠牲となりクレストも大打撃を被る。

E・D・0186

管理者が隠蔽していた地上の環境回復に関する情報が一般に流出。これを受け地上回帰を目指す非合法組織「ユニオン」が結成され、管理者とユニオンの武力衝突が始まる。

E・D・0187

管理者暴走。無差別化した攻撃により多数の市民が血に染まる。

そして同年、ACを駆る傭兵『レイヴン』により、管理者『D・O・V・E』が破壊され、人類は再び太陽を目にする事となる…

—l o g e n d—

「ふん、今回は血の気が多いか…まあいい、弱者はいらん。所詮受かったとしても啄み殺されるだけだからな」

試験官はそう呟くとモニターから目を離し、今回の任務に当たる二人の受験者の履歴書に目を通した。

No・010・スパイレイア

女性ながらに傭兵としてそれなりの任務成功率を持つ。

管理者からの解放後のE・D・188より行われたブリゲートプロジェクト（地上開発計画）の第9回探索に第16歩兵師団・第58歩兵大隊所属として従軍。華々しい活躍こそなかったものの安定し

た戦果を収めている。

また、それ以降はフリーの傭兵として活動、その腕は十分レイヴンとして使えるものと評価し今回の試験への参加を認められた。

No. 13・アマルガム

過去数度にわたる企業間抗争の戦火の真ただ中に居ながら『偶然』生き残る。

以降、企業間抗争や反体制勢力、武装勢力の蜂起に参加。MTを乗りこなし非常に高い戦果を収めたが、当初は味方誤射や目標の『清掃』における拒否反応を示すなど一見使い物にならない様子だった。現在は精神的に『安定』している模様。独立傭兵として高い評価を得ているが、同時に『味方殺し』の異名も持つ。

その履歴書は、戦闘能力やその戦果のみが正しく、出自や年齢などと言ったあるべきものが載っておらず、またその名も偽名いやコードネームのみが書かれていた。果たしてそれを履歴書と呼んでいいものか判断に困るが、それは必要最低限の情報であり必要十分な情報だった。

ここは壺毒。毒虫同士が争い、そして真の強者のみが生き残る世界。そして最後に笑うのは壺の持ち主のみ。

今回の賭けはどちらが多く撃墜するかではなくどちらが生き残るかに変更しないとな、と試験官は笑いながら管制機へと向かった。

セクション513。それは旧都市区、即ちレイヤード内において居住が認められない『かつて人が住んでいた区域』である。実際にはその区域において地盤変動を装い全住民の虐殺が行われたのだが、それを知る者は企業連のトップのごく少数と一握りのレイヴンだけである。

以降、そのブロックは今回のような非合法武装集団などが潜伏する土地となった。故にこう言った間引き作業が行われるのだ。

セクション513は簡単に言うとビル街である。天井のある街、と言うべきだろうか。無論、道は維持工事がされていない為ひび割れ、モノレールなどの高架橋も落ちている。そして何より所々に目立つ弾痕の跡が、ここがそういった場所であると認識させる。

ACとは何か？それは実用燃料電池を搭載し10m弱という小柄な体躯に対し数十万kW級、即ち原発並みの出力を保持する遊撃性能に優れた汎用機動兵器である。

そしてその特徴は原型になったMTから更なる汎用性を持たせるべく考案された『コア構想』による『各部パーツの組み替え』（アセンブリ）の自由度にある。

乗り手の欲する性能、例えば機動力や防御力、また扱う兵器により多種多様な組み換えを可能とするACは極めて高い汎用性と遊撃性を擁する。また、ACにはその膨大な出力から一般のMTにはない特殊な技術が用いられていた。

例えば『防御スクリーン』。装甲の上に不可視・再構成可能な第二の装甲を発生させることで極めて高い防御力を実現し、継戦能力を

飛躍的に増大させる技術。

また更にその電力を爆発的に消費し停止状態から瞬時に500km/h以上の超加速を得る『オーバード・ブースト』（OB）などの新技術を惜しみなく搭載している。

また通常のブースターに於いても推進剤を必要としない非化学ロケットエンジン、即ち純電力推進技術を擁し、また慣性・重力緩和機構の搭載から極めて高い三次元戦闘能力を有する。

これらにより、地上最強の兵器はMBT（主力戦車）から装甲と機動力の両立、トップアタック能力、汎用性を持つACへと変わって行ったのだ。

当然個人の手に於いてこの兵器が運用されることを重く見た管理者は『グローバル・コーテックス』即ちAC管理機構を設立。

後にこれは民営化、即ち独立され全ての勢力に対し中立を保持し、所属するAC乗り……つまりレイヴンに対しその能力に応じ分け隔てなく依頼を仲介する存在として今日に至る。

無論、企業もACを保持しており、また現在では武装勢力が単独でACを運用するケース、すなわちグローバル・コーテックスに未登録のレイヴンが多数存在する。

そして個人、即ち独立傭兵としてACに乗る為の最短のコースがこのレイヴン試験である。

「こちらアマルガム、作戦領域に到達した。ミッションを開始する」

「こちらスパイレイア、作戦領域に到達。ミッションを開始する」

ゲートが開かれ、彼らの目の前に荒涼とした街並みが広がって行く。同時に二方向からの挟撃作戦。試験にはもってこいの敵の数だ。A Cの敵ではない。

最も基本的な機体構成である最旧式：現在彼らの扱う純クレスト製中量級A Cは一般的な逆関節M T、ランスポーターの5倍以上の耐久性を持つ。

火力に於いても、最も弾代の安いライフルを使用しているが10発くらい当てればM Tはそのお喋りな口を閉じるし肩部に搭載した単発式小型ミサイルを2発ほどプレゼントすればもうおねむの時間となる。レーザーブレードで優しく撫でてやればぽっくり昇天するだろう、ソレはもう真っ赤になって溶けるほどに。

——まあ、どちらにせよ死ぬ事には変わらないさ、死に方は此方で勝手に決めてやる。感謝しろよ？

そうアマルガムと名乗る男はコックピットの中で一人微笑んだ。

「て、敵襲！！！！A Cだ！！」

「な！？クソ、M Tを出せ！急げ！！」

突然の招かれざる来客に武装勢力は蜂の巣をつついたかのような騒ぎになった。パイロットにM Tへの搭乗を急がせ、歩兵は対装甲ロケットランチャーを担ぎ配置につく。例えその攻撃が蚊に刺された程度の損害しか与えられずとも。

果たして抵抗してその結果死ぬのか、何もせず一瞬のうちに死ねる

方が幸運だったかは分からない。ただ彼らにとって目の前の脅威は：紛れもない悪夢であり現実だった。

「出せる機体は全部だ！！敵は2機、旧型だからと言って抜かるなよ、相手はACだ！付近に救援要請を出しておけ！救援までに耐えきればこちらの勝利だ！！」

「Sir, Yes Sir!!」

彼らは烏合の衆ではなく一つの軍隊として機能していた。それゆえに一時狼狽したとはいえマニュアル通りに部隊を展開する。そしてそれは前述のブリーフィング通りの戦力であった。確かにそれだけならばロクな抵抗も出来まい。

だがそこにブリーフィングでは伝えられなかった戦力が加わればどうなるか。

レイヴン試験という名の戦争はまだ始まったばかりである。

「ガードメカ8、MT5：こっちの方が面倒だな。さっさと終わらせるか：」

アマルガムはそう言うのとOBを起動させる。ジェネレータの容量・出力が低い旧型では通常のブーストを吹かすだけでもかなり制約がある。その少ないコンデンサ容量を彼はここで一気に使うことに決めたのだ。

瞬時に600km/hまで跳ね上がる速度。だがそのGは彼にとって心地よい程度にしか感じられない：そう、慣性制御が機能してい

る為だ。特にOB中及びOB後の僅かな時間は機体の損傷を防ぐため極めて強く作動する。それにより通常では考えられない機動をすることが可能である。

「OBカット、スライドジャンプっ！」

距離を詰めた後、機体を僅かに上昇させ空中でOBをカットし着地硬直をキャンセル。さらに慣性制御が残っている内に横へと飛び運動エネルギーのベクトルを変更、機体を文字通り滑らせる。更にそのまま脚部モーターの瞬発力を最大にして空へと跳躍。傍から見ればほぼ減速なしの直角機動の連発であり、文字通り気持ち悪いほどの三次元機動だった。

そしてそのまま補足が追いつかない敵にトップアタックを仕掛ける。眼下に見えるのはMT3とガードメカ4、残りはまだ距離が離れている為除外する。

57mm弾を放つライフルを撃ち下ろしながら悠々と旋回し、反撃がままならない状態の敵機を次々と爆散させる。空から振り下ろされる曳光弾は実に美しく見えるだろうがまあ死にゆく者には風情を感じる暇など有るまい。これで眼下の敵はMT2とガードメカ2。

空中に躍り出て10秒、この間にもコンデンサ内の電力は勢い良く減って行く。というのも旧式は地上戦主体、このような三次元機動には本来であればついていけないのだ。

横目で残量を確認したアマルガムは舌打ちをすると地上へと舞い戻った。その際着地点にいたMTにその自重を乗せたレーザーブレードの一閃で真っ二つにしたのだが――まあ、予定通りだ。弾代が浮いてよしと彼は目を細めた。

「ッヒ：ば、化け物め！！」

残りのMT1とガードメカ2機が40m小型ライフルと120mm無誘導小型ロケット砲で応戦してくる。ロケット弾は当たれば痛いが無誘導弾だ。そうそう当たるものでもない。

「チャージングに気を付けてってな」

コンデンサ内の容量がレッドゾーンに突入しているのを確認したアマルガムは回避運動のため一秒ほどの僅かな噴射跳躍を繰り返し、電力の回復を優先させる。僅かな、と言ってもそれだけで200km/h以上の速度が出るのだ。僅かな噴射であるがこの戦力に対し十分回避に必要な速度は出る。

更にこの機動は小刻みな上下運動を織り交ぜた左右回避運動である。FCSの移動位置予測を混乱させる効果も高い。

そのまま鼻歌交じりに57mmをばら撒く。ブースタもなく地べたを這いずり回るだけのガードメカやランスポーターにこれを回避する方法は無い。穴だらけになり爆散していく中ランスポーターは割と粘っていた。まあ、機体の前にガードメカが存在していたという理由もあるのだが装甲も若干ながら厚く、幸い生き残っていたのだ。

「降りればいいのにな、まあどの道殺すけど」

そう鼻白むと地上ブーストで素早く接近、ランスポーターの主兵装である連装式小型ロケット弾を掠めるように避け肉薄し、そのコックピットに真っ赤なレーザーブレードを突き立てた。

——ザックリいったな…これでよし。

血煙すら立てる事を許さないその残虐な殺し方は以前の彼なら唾棄する行為だっただろう。

だが、その確かな感触に口元を歪めた彼はすぐさま次の獲物を刈り取るべく行動に移る。

「まだアペリティーヴォを呑んだだけさ…アンティパストはこれからだ。そうだろう？楽しませてくれよ」

——ジェネレータは好調、コンデンサ内の容量もMAX。さて、もう一仕掛けと行きますか…

そして黒鳥は再び赤い羽根を羽ばたかせる。青年の喜悦と共に。

「クソ！どうなってやがる！！旧式にしちゃ動きが良すぎるぞ！！」

「なんだ…なんだってんだ！！」

彼らは少々油断していたのかもしれない。二機とは言え両方最旧式、つまりこれはレイヴン試験…素人がここにきているという可能性が高かった。

そしてその見立ては正しかった。実質、スパイレイアの方はアマルガムに比べればまだひよっこの動きだったためガードメカとランスポーターだけでまだ持ちこたえている。

最悪だったのは、そのアマルガムが最強の素人だったという事だ。

瞬く間に4機のガードメカと3機のランスポーターを血祭りにあげ

た彼は次なる獲物を襲うべく再度OBを起動させていた。その機体には殆ど被弾による損傷は見られず：ほぼ全快状態であった。

彼らは舌打ちし、各々社の上層部を呪いつつできうる限りの抵抗をするべく動いていた。

たった二機のうちの一機、それも性能で言えばACの中でも最底辺のソレが、最大の壁として立ちふさがっている。

もし自分達に高性能なMT：例えばブースタ付き格闘型MTのロングセラー『カynos／EO2』や防衛戦用の高火力MT『ファイヤーベルグ』、或いは近接戦用の高防御力MT『ギボン MS-HA』といった機体があればまだましだっただろう。上手くいけば撃破まで持って行けた可能性もある。

だが、現実はそうはいかなかった。彼らの戦力は性能で格段に劣るガードメカとランスポーターのみ。ランスポーターの120mmロケットを40発くらい叩きこめば落ちるかもしれないがまず無理だろう。あの動きをする相手に停止状態に近いMTのロケットが当たる可能性は低い。

だが、それでも彼らには戦い勝つ事しか道は残されていないのだ。目の前の怪物がもつその嘴で啄み殺される前に。

青年にとって戦いとは生きる上で必須の事であった。

かつては世界最高の衛士としてその名を馳せた彼は、最底辺からのスタートを余儀なくされた。

最初は戦う事を拒否していた。だが彼が持つ生き残るための技術と言えば、戦うことしか残されていなかった。

身寄りのない子供を利用した少年兵、女子供を盾とする武装勢力と

いったモノに加担する事もあれば無抵抗の民間人を虐殺し、その事実を全て抹消する企業の尖兵として戦うこともあった。

彼は慟哭した。なぜ俺だけがこのような地獄にいないかならない。なぜこんな非道を是とする戦いをしなければならない。そう彼は自らの境遇を呪い、終わりのない戦乱を嘆き戦いに明け暮れていった。

戦闘行為に於いて、殺傷時の距離とストレスは反比例の関係にある。これは二次曲線で示す事が出来るものだ。爆発物などを用い遠距離で殺傷したときが最もストレスが少なく、自らの手で刺し、締め、殴り殺す事が最もストレスを感じるのだ。

最初のうちは歩兵だった。直に小銃を手にし、敵を打ち、そして銃剣で敵に止めを刺した感触は今なお彼の記憶の中で鮮明に焼きついている。

そうしている内、夢に見るようになったのはこの仕事を始めていつごろだろうか。血まみれの顔をした女子供が痛い痛いと言きながら手を伸ばし、それから逃れるべく片っ端から殺し：それでもまだ泣き声が止む事は無い。

泣き声は怨嗟の声に、怨嗟の声は殺意に。次第に増しゆく狂気の中、彼は引き金を引き続ける。生きる為に。

まだ昔は同僚の顔を思い出す事も出来た。それもいつしか薄れていき、声も、その姿さえも思い出す事は出来なくなった。今ではソレを思い出す事が恐ろしい。きっと自分は彼女らにとって敵としか映らないだろうから。

いつしか夢を見る事は無くなった。代わりに夢というモノが無くなった。暗黒の中、ただ寝首を掻こうと忍びよる敵を滅ぼすべく神経は研ぎ澄まされていく。

そして、次第に彼は狂っていった。血と硝煙の世界が彼の全てになり、後は報酬で嗜好に走る事が生きがいとなった。そうして狂っていく彼は次第に衛士としての誇りを失っていった。

その身は己が欲の為の妖刀。力を以って万物を滅す悪党になり果てていった。

そして彼は一つの結論に行きつく。これは命をベットするゲームである。任務の内容を完璧に遂行すればそれに応じた報酬が得られるゲームであると。

そして彼は戦いに吞まれた。戦いに酔いしれた。そして更なる血と硝煙を求めてレイヴンの道を選んだ。そう、より多くの金を得る為に。

「イイイイイイハアアアアアア！！！！！！！」

凶鳥は叫びながら不幸を振りまく。

ソノ狂ッタ思イヲブチマケナガラ。

「こちらアマルガム。残敵の殲滅を完了した」

「御苦労だアマルガム。ではスパイレイアの所に向かってくれたまえ。向こうにまだ食べ残しがあるそうだ。報酬は上乘せする。『敵

を殲滅』せよ」

「…了解」

試験官は『敵を殲滅』とだけ言った。それは即ち彼女は用済みという事に他ならない。

ぐちゃり、と死体を踏みつけつつアマルガムは機体をその方角へと向ける。砲火の音が激しさを増しているという事はプリモ・ピアットが到着したという事だろう。存分に平らげさせてもらおうじゃないか。

「今夜はトマトソースだな。子羊のフィレもいい、もちろんレアで」

普通の神経ならば真っ先に除外するそれを楽しみにしながら彼は新たな戦地へと向かう。

彼が過ぎ去った後、そこには濃厚な血の匂いと死体が焼ける硫黄の匂いが立ち込めていた。

彼にとって食事とは、最大の愉しみである。

それは過去の合成食品という栄養価だけを重視した（製造側はそれなりに気を使っていたのだが）それは彼にとって地獄であった。唯一の救いは彼がホームとした基地の味が他の基地を遥かに凌ぐ美味しさを保っていた事だったのだが、それも長くは続かなかった。

そんな彼がこの世界での喜びとしたのが食事である。軍用レーションにしてもその味は天然ものを使い、嘗ての微妙に似ているけれども違う変な味と比べるまでもない。

そして彼が報酬を、嗜好を食事というものに向けるのは当然の帰結だったかもしれない。

「た、助かったよ。このまま死ぬのかと思って冷や冷やしたぞ」

「敵の増援は？」

ボロボロになったACから狼狽した女の通信が入る。最初の威勢は何処へやら、まるで彼にすぎるような声色だった。よくよく見ると最初のガードメカやランスポーターは普通に対処できたらしい。

問題はその後の増援、ということだろうか。砲弾によってできた弾痕ではなくなにか爆薬で吹き飛ばしたようなその痕を見て推測していく。

「あ、ああ。敵の主力はギボン、それに後詰めでファイヤーベルグが複数いた」

——ビンゴ、推察どおり敵さんは閉所に適合した戦力を送りつけてきたわけだ。まあソレ相手に健闘した、という所か？その割には周囲の残骸が少ないが。

「あと、どうもあいつら只の武装勢力じゃねえ」

ソレを聞いたアマルガムはひどく滑稽そうに笑った。こいつは、この阿婆擦れはそんな事にすら気付かなかったのかと。

そう、すでに彼は気付いていた。これは単なる武装勢力鎮圧作戦ではない。不慮の事故を装った作戦なのだと。

「いい事を教えてやるよ、こいつらはキサラギのセクション管理部
隊。そしてこれはミラージュによる進攻の一端にすぎない」

「な！？あ、あんたソレをどうして」

「もうひとつだ：お前の名前が持つ花言葉、知っているか？」

その言葉に疑問の声を上げようとした彼女だったが、終ぞその答え
が彼女の口から出る事は無かった。

「無駄、だ。シモツケ（スパイレイア）らしく野に咲けばよかった
ものを」

一条の光の後、花は手折れた。

そう、彼が言う通り野に咲く野草ならば果てる事もなかっただろう。
だが、彼女は選んでしまったのだ。弱き者は淘汰され、ただ強者の
みがその生血を啜る地獄を。

「…さて、御馳走じゃないか：ダンスの相手が期待外れだったんだ。
貴様らは楽しませてくれ」

後に残されたのは、コックピットブロックを綺麗に削がれたスクラ
ップ同然のACが一つと、真っ赤な血だまり、申し訳程度に残され
たチーズのような色の脳漿だけだった。

1st Mission: TACIT CLEANER — relishes

過去編1。オルタのように逃げる事も出来なかった彼が狂っていく過程が過去編になります。別人になつてゐる気もしなくもない。

？＜壊れ過ぎてゐる：修正が（ry

5th Stage..IBIS

5th Stage..IBIS

単に失うのが怖くて、走り抜けてきた。

積み上げるのは大変だ。信頼、財、愛、友情。それらを構築するには莫大な時間と労力がある。

だがそれを壊すのは一瞬だ。ただ一つ、裏切ればいい。それで全部が終わる。

裏切られる人生だった。そう男は振り返る。

最初の人生で得た恋人とは世界という壁に別離せざるを得なくなり、二度目の人生は全ての努力を嘲笑うかのように大事な人たちはその大きくもない手から零れて行った。

どんなにかき集めても、どれだけ必死に守ろうとしても、それらは零れて行った。

——今も覚えてるさ。あいつはヤキソバが好きでな、よくこっそりヤキソバパン作ってやって餌付けしてたもんさ。そのあと同期の奴と一緒にからかいに行くんだよ、すぐ怒るから面白いんだぜ？ただ上官に見つかりゃバかったな。訓練メニューをありがたい事に最凶仕様に変えてくれるからな。勿論ひいひい言いながらこなすんだけどさ、部下も巻き込んでな。

ああ、あいつが死んだのは3度目のリヨンハイヴ間引き作戦だったか、あいつは佐渡島の間引きの時だ。あいつは鉄原ハイヴ攻略で死んだ。あいつは第二次九州撤退戦で。あいつは横浜防衛戦で。

今も思い出せるその死に顔。要撃級に潰されて下半身が消えた同期、要塞級の溶解液で顔の半分がドロドロになって死んだ相棒。ベイルアウトした後闘士級に首をもがれた部下。戦車級に生きたまま齧られ死んだ上司――

ろくでもない人生だった。そう男は振り返る。

死なせたくないから誰よりも訓練を積んだ。失いたくないからあらゆる手を尽くして生き残る手段を考えた。ずっと一緒に居たいからその力を示し続けた。

それが、全部無駄だと分かっても続けた。もう、失うモノは無くなっても、後ろには守るべき人たちがいるのだから。

それもいつの日か崩れ出した。英雄とされる一方、英雄ならなぜ救えなかったと怨恨の声を上げる遺族も多かった。それでも戦った。

――そして、あの日、俺の力は尽き果てた後の事を部下に託し、文字通りの特攻だ。死して屍拾う者なし……まあ、骸の一片すら残らなかっただろうよ、あの爆発ではな。――

男は一人酒を飲む。対面に座るのは亡霊か、はたまた彼を恨む怨霊か。ただ対面に盃を置き、そこに酒を注ぐ。そして自らの盃に酒を足し、一息に煽り、ただ思う。

三度目は間違いなく地獄だった。

二度目はまだ温情があったと思える。三度目は最初から悪意しかない世界だった。

街を歩けば銃で撃たれ、道を外れればナイフが目の前を斬る世界、そこは正しく無法の世だった。尤も、その地域が格別そういう人種のたまり場だったからとも言える。

そして男には戦う以外の生きる術がなかった。だから刃向かう奴は殺した。そうするしかなかったのだから。

いつしか男は傭兵となっていた。それはいつごろかは分からない。ただ誰かの紹介でその職業になったのは間違いないのだが。

戦場に、歩兵として立つのは初めてだった。人が人と殺し合う戦場。そこは二度目の世界とは違う悪意の溢れた地獄だった。

泣き叫ぶ声が聞こえる。撃たれた、衛生兵と呼ぶ声がある。腕を失くした男がふらふらと立ち上がり彷徨い、敵の狙撃兵に頭を打ち抜かれ絶命する。

機関銃の音というモノは不思議なもので、その軽快な音を聞いているとふらりと体を起こしてしまうものだ。無論、そうなればもれなく穴あきチーズになる。見たくもない脳漿の色と相まって当分乳製品は受け付けなくなるおまけ付きでだ。

そんな戦場を渡り歩くうち様々な体験があった。優しくしてくれる上官、仲間。意気揚々と飲み屋を貸し切り飲む事もあった。いつしか背中を預け合い相棒と呼び合うような奴もいた。

それらが全て打算の上での行動と知った時は発狂した。

孤立した時にそのよくしてくれた隊長は言った。

「俺らが生き残る為に囧になってくれ」と。

怪我をして動けなくなった時、その飲み屋に行った仲間はどう言っ
た。

「足手まといになるから、ここで敵を引きつけてくれ」

相棒として共に戦ったやつは俺に銃を突きつけてこう言った。

「悪いな、あっちの方が報酬がいいんだ」

皆殺した。ナイフで、拳銃で、小銃で。ありとあらゆる手を使って俺を裏切った奴は皆殺してきた。虜囚となった時は、裏切った奴が同じ牢に運び込まれてきたときに自らの手で撲殺した。

怒りがその身を焼きつくすまで。言葉通り、男の復讐は烈火の如く燃え盛る憤怒によって成された。

ああ、それ以外でも酷いのはある。女がすり寄ってきた事がある。身寄りもない、家族も居ない孤独な女だった。

荒んだ俺はその女を求めた。自分と同じような境遇の女に慰めを求めた。

金もモノも貢いだ。彼女が生活が楽になったと言ってくれる事が嬉しかった。そう、それが俺がしてきた事の贖罪になっていたのだから。

思えばどん底から這い上がって絶頂に居たのはあの頃からだろう。あの子の為と思えば吐き気のする仕事もやりこなせた。流石に何人もの人間の喉笛を搔っ切る仕事はきつかったが報酬も素晴らしくよかった。まあ死に目に何度も遭う羽目になったが、それでも充実していただろう。

そんなある夜、彼女の膣で、俺は彼女に刺された。

全ては金の為だった。たった数グラムの薬の為だった。

無論、そのナイフを奪い息の根を止めた。流れ出る血を抑えながらその筋の病院に駆け込み一命を取り留めたがあの時本当に死を覚悟した。精神的な意味でも、だ。

だが神様というモノは存外死にたがる人間程生かすらしい。虫の息になりながらも命を繋ぎとめた俺はタガが外れたかのように戦乱の中に身を置き続ける事を決意した。

さて、ここまで話せば…その後の人生がロクでもないものだと思うだろう。

まあ、事実ロクでもない。その後は陣営をとつかえひつかえ殺し合いの日々だ。殺しに来るやつには相応の報いを以って対処し、始末してきた。

そんな日々の転機が、A C…アーマードコアとの出会いだった。

男は酒を注ぐ。他でもない誰かの為に。

数時間前：

「食事の用意ができました、武影様」

「ああ、ありがとうございます。今行きます」

御剣家の使用人に連れられ、夕餉をとるべく座敷へと移動する。屋敷自体の広さも大きなものであり当然此方も相応の広さがある。その広さは24畳、ちょっとした宴会場とも言える広さだ。

そこにある膳は六つ。この広さにこの6つの膳が寄り添うように集められているのはなんとも言えんのだが。

二つは武影とセレ、残りが雷電、冥夜だろう。月詠が同じ席に着く筈がないと思うが、残りの二つは？

「おお、待たせたようだな、セレ君、武影君」

「お気になさらず、雷電閣下。俺達も今しがた来たところですのぞきつぱらんに挨拶した雷電に一礼する。自分達は商談で自らの地位を確保したとはいえその庇護者の御剣家に盾突く真似をし過ぎると非常に後々に響く。それに今後は御剣を巻き込んだ政府筋・財閥

との交渉が控えているのだ。味方の構築は完全にしなくてはならない。

とはいえ雷電は別に気を悪くした様子ではないがやはり冥夜の顔色が優れない。少々脅しが効きすぎてしまったのだろうか。

「冥夜様、御加減はいかがですか？」

「！ッ大丈夫だ、別に何ともない。気遣い感謝する」

びくり、と体を震わせ恐れを振り切るように淡々とした様子で応える冥夜。これは相当効いていたらしい。

まあ、実際に精神修練をしていたとはいえ十の少女が見るには刺激が強すぎたか。隣を見るとセレが頬を膨らませて此方を見ている。ああ、余計なことするなと言いたいのだろう。だがまあ、その不可抗力というモノがありまして：

「…む、何があったかは知らんが冥夜タンに何かするのであれば…分かるな？」

こっちはシャレにならんから。いや、脇差の鯉口切らないでほんとマジで怖いから。そこらの衛士とかなら無傷で鎮圧できるだろうが無現鬼道流皆伝の太刀はシャレにならん。

因みに…剣道倍三段という言葉がある。これは槍の使い手に剣で対応するならばその使い手の三倍の強さがなくては無理という言葉だ。簡単に言うとその間合いの長さというのは強さに直結する。

その点、小太刀というのは極めて…極めて、技量を要する武器なのである。懐に潜ればと簡単に言うが実際は極めて難しい。

例えば、槍の刺突を捌くのも極めて難しいのだ。簡単に言うとなんか突き出した直後引く。即ち力を逃がしても即座に体勢を立て直してくるのだ。強引に体をねじ込むと石突での強烈な一撃が待っている。また、槍の穂先を落とすのも難しい。というのも持ち手の部分までは鉄芯が仕込まれているからであり、穂先を落とすのなら持ち手の間にある僅かな隙間を狙うしかない。まず無理だ。

話が逸れた。小太刀はその性質上『見切り』を最低限必須の技術とする。早過ぎれば読まれて叩き斬られ、遅すぎても力が逃しきれず頭蓋をかち割られる事になる。

また、短く片手持ちのため力を逃がすのも難しい。両手の強烈な一撃は防御したとしてもその峰や鰐が頭蓋にめり込んで死にいたるケースもある。示現流の初太刀はこう言った防御しても死ぬ一撃の一つである。

さて、両手でもって防御仕切れないのだから片手では言わずもがな。よって見切りの上で適切に力を受け流さねばならない。失敗すれば即ち死である。故に、小太刀の使い手は総じて目がいい。そして読みが鋭いのだ。さて、そんな使い手に斬りかかれた場合、無手で防ぐ手は厳しい。手練れの攻めとは受けられないように攻める事だからだ。

「雷電閣下、あの、心臓に悪いのでソレは引っ込めて頂けますか？直接彼女に手傷を負わせるような真似はしていませ」「なあああにいいい！？貴様ッ！冥夜タンに手を上げただとおお！！」「ちょ、うわ、あぶねえ！？」

逆手六箇。逆手に持った短刀で神速の乱れ切りを放つ居合技。

その速さたるや柳の葉が地に着くまでに16に分かれたという、正

しく達人の妙技。

その使い道として、親馬鹿（爺馬鹿）の為に使うとは如何に？

「あー：御爺様、その、私が悪いのです、霧殿はむしろ氣遣っていたいたというべきか」

「む？ そうなのか武影よ」

「そうです！ そうですから刀を納めて下さい！！ マジで死にますから！」

横でセレが頭を抱えている。冥夜もどこか呆れたような面持ちだ。とはいっても当事者としてはマジで怖いんだからな目の前を銀閃が走るなんて戦闘状況下でも滅多に遭わないぞおい。

「まあ、と、兎に角ですね。俺からは特に何もしてませんよ。そちらから何かしてこない限りは、ですが」

冥夜の視線が痛い。まだ幼さが残る顔を不機嫌そうにしてこっちをじっと睨みつけているが：痛可愛いな畜生。あー子供ってこんな可愛らしい存在なのか：そういうえば霞も今この年なら：！？

さて、アレ以上のロリ霞だと？

ざっと概算して：幼稚園かッ！？ もし、もしそうなら言葉足らずでぺたぺた歩くまさに理想のロリ幼女：！！ これは、計画を早めねばって痛い痛い痛いさっきから足を抓らないでくれセレエエ！？

「ん、コホン。私の方からも馬鹿な真似しないように重々言いつけておきますから」

「そ、そうか。まあセレ君なら問題あるまい。しかし、ふむ…」

「お、御爺様、ソレより食事にしませぬか？冷めてしまつては折角の夕餉も味気なくなります故」

「そうであつたな、ではその前に武影君、セレ君に紹介したい者が居る…入れ」

そう言つて雷電は手鼓を打つ。この残された2膳はその人達の為のものであるとは推測できる、だが果たしてこの状況下で俺達と合わせる人物とはいったい何者なのであろうか。

推測できる人物…帝国情報省外務二課 課長、鎧衣 左近。世界を飛び回る貿易会社の課長と嘯く二度目の世界では何度も世話になつた帝国暗部、軍事に於いて最重要と言える諜報を司る部署のトップにして魔女の取引相手。だがこの9年前の世界に於いて頭角を現しているかと言えば否だろう。彼の人物がこの舞台に出るには些か早過ぎるのだ。

内閣総理大臣、榊 是親。光州作戦の悲劇においては、外には国内の政情安定を盾に国連と取引し、内には土下座して彩峰中将に日本の未来を説いたという人物。人となりに関して言えば二度目の世界で勲章を授与される際にちらりと見かけたただけだったが…光州作戦は1998年、恐らくその前に総理就任したと思われるが1992

現在1期目の内閣総理大臣として就任している。就任は1990年頃か。

珠瀬 玄丞斎、国連事務次官にして外交畑生え抜きの交渉力を持つネゴシエーター。現段階であれば外務省に務めていてもおかしくない。事務次官という役職から大使クラスだろうが：これは候補から外すべきだろう。

彩峰 萩閣、帝国陸軍中將にして光州作戦の悲劇を生みだした人物とされている。部下からの人望が厚く、近衛時代では中將の事を今でも偲ぶ古兵が少なくなかった。そこから考えれば現段階で信頼がおけそうな人物でもある。

：まあ、こうみると過去の同僚と言うモノが如何に血縁的にぶっ飛んでるか分からなくもない。というか名前出した人物これ全員血縁者じゃね？と武影は頭を抱えた。

「失礼します、御剣殿」

「失礼致す、雷電殿」

「うむ、よく着てくれた。武影、此方が帝国陸軍准将、彩峰 萩閣殿と帝国斯衛軍少将、紅蓮 醍三朗殿だ。なに、そう身構えるでない。信を置くに足る人物だ。わしが保証する」

入って来た内の一人は彼の予想に有った人物、彩峰 萩閣その人だった。顔を見るのは初めてであったが成程義に篤いと言われるだけの気風があり、また目元は何処となく彼女を思い出させる。まあ、親子なのだから当然と言えばそうなのだが。それにしても若い。こ

の年で准将とは相当なエリートであることは間違いないだろう。

そしてもう一人は二度目の最後にて世話になった人物、紅蓮 醍三朗。昔会った時は大将という位であったが現在は少将。壮年にしてなお武人然とした風格と筋骨隆々にして豪胆さがにじみ出る相貌は正しく帝国近衛の鑑だろう。

「お初にお目にかかります、彩峰准将、紅蓮少将。霧 武影と申します、此方はセレ・クロワール、私のパートナーです。お二方にはこの度ご足労頂きまして誠にありがとうございます」

「初になるな。話は雷電殿から聞いておる、武影とやら。これから長い付き合いになるのだ。慣れぬ言葉は使わずともよい」

「そうだ、霧君。若くしてあれだけの啖呵が切れる人物と聞いて楽しみにしていたんだ。砕けて構わないよ」

「は、そう言う事なら俺も素で話させていただきますよ？お二人がここに来たのは…」

それを尋ねようとしたところを雷電に制される。それから先は向こうで説明する、という事だろう。

「此度二人がここに来たのはセレ、武影お主らの処遇に関しての事だ。順を追って説明いたそう。二人の戸籍に関してだがこれは御剣家の人脈を使い城内省のデータベース内に国外に居た邦人の難民という形で入れ込んだ。後ろ盾の為に御剣の養子、という事にしたがこれは目を瞑っていただきたい。名前はそのまま構わぬからな」

やや冷めた焼き魚を食べつつ雷電はつらつらと口上を述べる。御剣の養子、というのは驚きであったが摂家の遠縁となれば手出しはし

にくい。ベストではないがベターな判断だっただろう。

「それと商談にあった資金に関して。これが紅蓮殿、彩峰殿の力を借りる事となる。現段階で御剣の家が単独で400億という数字を用意するのは不可能だ。よってここは陸軍、近衛、將軍家の力を借りる事とする」

「政治の方は無理だった、という事ですか」

「まったく、痛い事をさらりと言ってくれる。左の人間が煩くてな、それに『白の家』や『最初の犠牲者』の手もある。実に忌々しいが国庫からそうそう抜きとれるものではないのだ」

成程、海の方こうとの確執は今に始まった事ではないが現段階においてもそれなりに悪いらしい。昔は政治なんてとんと分からなかったが鬼謀策略渦巻く中に居れば自然と鼻が利くようになる。当然、帝国も一枚岩でないことくらいは察せられるものだ。

「今回帝国陸軍技術廠より予算20兆円のうち300億円、近衛軍開発部より予算10兆円のうち100億円を用意した。無論、これは非公式なものであり帳簿には開発コストとして計上される…まあ、強ち間違っではないがな。御剣からの出費はお主らの全面的な生活面への支援だ。衣食住全てに於いて満足したものを提供する」

「分かりました。で、簡単に言うとそのお二人は雷電殿に巻き込まれたという事で間違いなさそうですね」

「まあ、その通りだよ霧君。技術廠の連中を宥めるのは本当大変だったからね」

「そちらにはあの巖谷殿も居られますからな。苦心なさったでしよう」

貴重な開発コストを削る、というのは当然現場からの反感は極めて大きいものとなる。只でさえ少ない開発費なのだ。びた一文無駄に出来る筈がない。

まあ、恐らくレーザー技術に纏わる一部の情報を流す事で了承をとったのだろう。それならば数100億という金も動かすに値する：開発の時間を一気に削れるからだ。

兵器開発に於いて多大なコストを占めるのが人件費とトライアルに使う費用である。兵器とは、製品とはトライ&エラーを繰り返す事で作られる。当然エラーが多ければ多いほど損失が増えるのは間違いない。ソレにより開発に掛かる時間も経費も加速度的に上昇していくのだから。

「して、お主らの作る会社の棚卸先がこの帝国陸軍と近衛軍、という事になる。創業は再来年頃になるだろうがその間に人材を探すようにな」

「ああ、此方に回す人材も残しておいてくれたまえよ？そうでないと君の所ばかり肥えて行くからね」

「近衛には骨のある人間が欲しいのだ。そこも見繕ってくるよう頼むぞ」

此方の意図を明確に見抜くところは流石としか言いようがない。ま

あ3人が3人言ってる事は刈り過ぎるな、という事で間違いなさそうだ。

「ええ、善処しますよ。セレ、後は技術的な話もあるしそっちから話してくれないか？」

「分かりました、これからは私の方からも説明させていただきます
…あ、お茶ありがとうございます」

箸を休め、茶を啜りセレが話は始める。内容はレーザー技術の公開時期と帝大への編入に伴う香月夕呼：第4計画への参画。そしてこれから興す企業についての話だった。

ふと、話を聞きつつ吸い物を啜ると横でじっとしている冥夜が目に入った。大人の話についていけない筈だろうがじっと黙って聞いているのは子供ながらに迷惑をかけまいとしているのだろう。普通ならば席を外すものだが生まれがあれだ。この手の話も聞いておくべきだと雷電が判断したのであろう。

「…てんぷら、いるかい？」

「結構です、霧様。私の事より御爺様方との話の方が重要ではありませんか？」

「いやあ、俺からの話も大体終わったからね。まあさっきのお詫びだと思ってくれ」

こっちを見てむすつとするのは先ほどの一件がまだ尾を引いている

からだろう。月詠さんの視線も厳しく客人の前という事で抑えてはいるがこの場に二人つきりならば詰め寄って来たのかもしれない。

「先ほどの私が礼を失した故の事。そう気になさらないでくださいませぬか？」

「む、なら謝罪としてこのエビ天を食べてもらおうか。ほら、そっちが悪いんだろ？」

ケケケ、と人の悪い笑みが零れるのは食卓という場故か。政治的意味合いもある席だが彼としてはまた彼女と共に夕餉の席につくということが嬉しかった。そう、例えもう傍に居る権利を失っていると自覚してなお。

「…わかりました、ならば私が頂きます」

「あ」「え」

そう言って箸を出したのは月詠さんだった。ずっと俺のエビ天を取りパクパクと何食わぬ顔でエビを食う月詠 真那嬢。恐らく俺の事をセクハラだとかそういう風に取りって食べたのだろうがエビ天というか天ぷらにはまだ一切箸をつけていない。

「…」

「ごちそうさまでした。あの時礼を失したのは私も同じです、霧殿。故に私が食べても何ら不都合ありませんよね？」

武影としては不都合満載だった。この夕餉は武影のほかにも二人の

客人が来ると言う事で用意した者。当然料理も超一流、天然物の高級品が扱われている。一般的な懷石メニューではあるがその味たるや高級料亭もかくやというものである。当然、子供が好きそうなエビ天などの天ぷらも極めて美味に仕上がっている。天つゆと大根おろし、抹茶塩をしっかりと用意しているあたり気合の入れようも見て取れる。

そして武影がてんぷらに手を出さなかった理由、それは冥夜がエビ天を实においしそうに食べていたからに他ならない。元々話の為に食事のペースは抑えていた事もあり手を付けているのは向付と白米、吸い物に煮物くらいである。その偶々が重なりエビ天をあげようかと思ったのだが…

武影は見逃さなかった。冥夜が見せた一瞬の悲しみを。恐らく自尊心と欲求が闘ぎ合っていたのだろう。敵からの施しは受けたくない、だが目の前にはおいしいエビ天…確かに辛い。武影にとっては死活問題となる位重いのだ。それを月詠さんは事もあるうか何食わぬ顔でそれをつかってしまった。主の心境を察せず何が従者かと彼は小一時間詰めたかったがそれは叶わぬモノ。

なぜなら横には青筋を立てた女神が待機していたのだから。

「ええ、まあそう言う事でして私は学業に専念しますが、彼の方は任務と兼任という形にさせていただきます」

「任務、というより派遣従業員じゃないのかこれ？ たしかにこれか

ら作る会社としてはこういう運用になると思うけどさ…」

「なに、部下を数人回す。頑張ってくれたまえよ白稜の烏天狗殿？」

彩峰准将の言葉に眉を動かしてしまったがまあ秘匿にも限度がある。それにブラフだろう、セレは秘匿に関して言えば一流なのだから。

ソレは兎も角、後の折檻を想像して冷や汗を流しながらもツツコミを入れるのはもはや当然といったものだろう。AコースかBコースか、それが問題だがどちらにせよ結果は変わらないのであきらめざるを得ないのだ。

「ええ、やるだけやらさせて頂きますよ、彩峰准将。契約書と辞令は後ほど受領いたします」

「貴官であれば暗礁に乗り上げかけたこの計画も進展する事だろう。期待しているよ」

感づいたらしく苦笑している一同に、ざっくばらんとした略式の敬礼で応え、宴は終わった。

そして今に至る。月見酒にはいい夜空だ。朔月でなければ、だが。

今後を思うと問題は山積みである。編入試験然り、それと並行して行われるトライアル参加然り。仕事は嫌というほど山積みだが仕方あるまい。そういう契約であり、そう選択したのだから。

そして、これから彼女達の縁者との顔合わせは増えるだろう。御剣、彩峰、榊、鎧衣、珠瀬。どれも日ノ本きつての名家であり重役となる家だ。当然、ロリッ子もとい彼女達の少女時代と接する事も増えるだろう。

だが、自分は果して彼女達と肩を並べるに値するのだろうか？

彼女達はなぜ強かったのか？迷いながらも誇りを胸に灯し、『衛士』として完成された姿へ駆けあがって行ったからこそ彼女達は強かった。だが、今ここにいる時分は『衛士』ではない。

自分はもう『傭兵』という存在なのだから。

静かな晩酌、ただ窓辺に一人。

5th Stage..IBIS (後書き)

冥夜に称号『背伸び』がつきました。

効果・パニック率減少、萌要素増大。

ここまでほのぼのだったよ！さーバトル書いていこうか！と思っ
ます。誤字脱字等ございましたら気軽にというかビシビシ指摘して
頂けるとありがたいです。

修正報告。榊 是親を現在1期目の内閣総理大臣という事にしまし
た。現在の日本国憲法だと任期の限界が4年なのでそれに当てはめ
て就任時期を90年に設定、総選挙がなければ1994で2期目突
入、という事になります。1998光州作戦直後は解散総選挙の可
能性が濃厚ですし…ん、三期連続になるのかこの人？

6th Stage::Glare Project (前書き)

彼の設定違うよ！って事があれば教えて下さい、割と切実なお願いです。

6th Stage: Glare Project

6th Stage: Glare Project

「ふー…冷えるな、流石に1月の群馬、風も強けりや日があっても体感温度は下がる一方だ」

そう武影は呟くとコートの襟をすぼめた。赤城おろしは今日も絶好調、もう一つの上州名物がないだけマシではあるが幾ら若干気温があらうとこの風は堪えるものだ。

送迎の為用意された乗用車から降り、目の前にある建物を眺める。

群馬県太田市。某頭文字の漫画のモデルとしておなじみの榛名山を望むこの街は北関東随一の工業都市でありある企業城下町としても有名だ。

富嶽重工…

F-4J/TSF-Type77撃震、F-4J改/TSF-Type82瑞鶴、F-15J/TSF-Type89陽炎といった戦術機生産に於いて帝国のリーディングカンパニーであるその会社の最大の生産工場をこの太田市は抱えているのだ。北関東平野に作られた本工場の広さは312,313?、更に矢島や太田北など複数の工場を持ちこれらを統合した群馬製作所の規模は国内随一である。また社内演習場なども含めると先の数字を大幅に超す立地面積を誇るのだ。

そしてここにはある計画による生産ラインが別途用意されている。
それが今回の武影の任務なのだが：

と、そこへ建物を眺める武影に若い男の声が掛けられた。

「お待ちしておりました、霧武影技官ですね？担当の藤原俊也です。
案内しますので私についてきて下さい」

年は22、といったところか。まだ若いがどこか落ち着いた様子で
澄ました顔をしているという印象を受ける。体軀は引き締まっ
ているが整備兵とは違う筋肉の付き方だった。

「ああ、此方こそ頼む」

すつと右手を出してみるとやや逡巡した後握り返してきた。その手
の堅さ、タコの付き方が分かれれば彼がなんであるのか確信するのは
容易だった。

「成程、あなたが開発衛士、という事ですか。態々出迎えいただき
ありがとうございます」

「よく分かりましたね、そう言う貴方は：到底技官には見えないの
ですが」

お互いにやりと笑いあう。最初にこの人物を当ててくるあたり技術
廠の人間は中々期待できそうだと武影は内心呟いた。

「それでは改めて。帝国技術廠第壱開発局開発担当衛士の藤原少尉
です」

「如月セキュリティサービスの霧武影です。此方では大尉待遇の技
官として出向しました」

セキュリティサービス、という名に藤原は眉を顰めたがそれは致し方ないだろう。なにせセキュリティはセキュリティでも国防というセキュリティを取り扱う会社、即ち民間軍事企業なのだから。

先の一件で資金を得た後、手始めに民間軍事会社：つまり武影を主とする戦術機・衛士の部隊を派遣する会社を立ち上げた。と言っても暫くは人材発掘、事務所設立などでほぼダミー会社状態なのだが。そして武影の最初の仕事がこの開発局出向なのである。

「！失礼しました、霧技官」

「いや、階級はそんな気にしなくてもいい。待遇とはいえ外部技官だからそんな身構えられても困るさ」

砕けた様子で接するように促し、不詳ながら認めた藤原の後に続く。

工場、とはいえ事業所ビルのエントランスは各企業の重役、軍部の高官や将軍の表敬訪問などといった事もある為しっかりと清掃され、タイルは白亜の輝きを保っている。装飾品も最低限ながら計算づくの配置がなされ理系ならではの質素さと美しさを見せている。

そのエントランスからエレベーターに乗り、ビルの上階にその部屋はあった。

第一開発局会議室、そこには一人の男が彼の到着を今か今かと待ちかまえていた。

「巖谷少佐、霧技官をお連れしました」

「うむ、御苦労だった」

目につくのは顔面に大きな傷痕のある軍人然とした人物。体軀はがっしりとしていて胸板は厚く、角ばった顔立ちの壮年の男性。1986年北海道の矢臼別で伝説を作り上げた巖谷榮二がそこにいた。

「本日一〇〇〇より此方に出向しました霧武影技官です。辞令はここに」

「…うむ、確認した。ようこそ開発局へ」

近衛にいたところのような敬礼の後、命令書を渡す武影に巖谷は目を細めた。それもその筈武影は『近衛にいない人物だから』だ。だが彼は現に近衛の敬礼を完璧にして見せた…民間人だというのに、だ。

「ふむ、民間軍事企業か…そのようなモノに高い免除金を払って就かなくとも良いのではないかね？」

巖谷の指摘も尤ものである。もし昔近衛の訓練校にいたのであるのならそのまま近衛となれば将来も安泰であっただろう。それを蹴って民間という福利厚生を受けにくく捨て駒とされがちな傭兵という道を選ぶのか。巖谷としては彼がなんらかの問題を起こして近衛にいられなくなったか、近衛という場所が性に会わなかったのか…後者であるならば帝国軍という別の勤務先もあるのだが。

「プライベートに関しては黙秘させていただきますよ、巖谷少佐。それより私としては速く『新人交流会』の方に行きたいのですが？」表情を崩さない武影の返答に巖谷はほう、と小さく息を漏らすと獰猛な笑みを浮かべた。

「ふ、そうか。なら盛大に歓迎するでしょう。希望はあるかね？」
「CASE・47（対戦術機テロリスト戦）を。僚機なしでもかまいませんよ」

その言葉に脇で控えていた藤原が目を見開く。武影の不遜な物言いに驚きを隠せなかったのであろう。それは巖谷も同じことだった。

「エレメントではなく単騎同士、という事かね？」

「いえ、対多数でどうぞ。歓迎ならばそれ位が妥当でしょう？」

当然のように言い切る武影に巖谷は遂に豪放に笑いだした。それもその筈衛士であるならば僚機、即ちエレメントを組むという重大さは身に沁みて感じ、忘れる筈がないからだ。

「蛮勇が得るものもあるが…まあいいだろう。ならば遠慮せず行くぞ？ 機体は？」

「瑞鶴でお願いします」

その意趣は火を見るより明らかだった。藤原の方はあまりの武影の暴言じみた話に最早茫然としている。巖谷もまた面白いとばかりに血を滾らせているようだった。

「いいだろう、試験場の許可はもうとってある。機体は2番格納庫だ。強化装備は確かもう運び込んでいるんだったな？ ロッカーに用意してあるはずだ」

「了解しました。それでは失礼します」

敬礼の後踵を返し退出する武影を見送った巖谷は首の骨をこきり、と鳴らすと実に楽しげにつぶやいた。

「いいだろう、歓迎しよう。盛大にな」

CASE…47…それは戦術機を使うテロリストとの戦闘を意識した汎用対人類戦闘訓練メニュー。一般的な対人訓練訓練メニューであるそれを単騎対多数という無茶するのはこの試験場では初めて

の事である：武影にとっては何度もこなしたメニューではあるのだが。

だが食いあきたコースも今日は少し趣が異なる。なんせ相手はあの『生ける伝説』巖谷榮二の率いる小隊だからだ。こればかりは武影本人としても最善を尽くす必要がある。

「あー：こりゃあれだな、ミラージュ本社防衛戦か、空挺部隊護衛の時くらい気張らないとダメかもしれないねえなあ」

ロッカーに向かいながらそう言うものの口元からは笑みがこぼれ、その表情も嬉々としている。なんせ自分と同等クラスの猛将と戦えるのだ。これで昂ぶらない方がどうかしている。

ロッカーに入り、自分の衛士強化服を手慣れた手つきで身にまとう。歓迎会、と言ったが顔合わせがこれが初になる。これが終わった後、彼らと直接面と向かって挨拶するつもりだ。つまりこれは前菜にほかならない。

だが、その前菜はいつもの前菜とはわけが違う。メインディッシュ並みの豪勢なモノが用意されているのだ。

「せいぜい食当なりに気をつけねえとなつと」
手を握り、開くを繰り返し強化装備が完全にフィットした事を確認するとハンガーへと向かう。

そこで待っていたのは白亜に染められた瑞鶴：そう、巖谷榮二が愛機として使っていたあの瑞鶴がそこにあった。

流石にこれには少々武影も驚きを禁じ得ない。確かに瑞鶴を、と言

ったがまさか巖谷当人の愛機が出てくるとは思わなかったのだ。

「成程、奴さんも本気かなこりゃ。ケケケ、期待に応えねーといけねえなあ」

瞳は爛々と輝き、口元がつり上がる。それは彼の『レイヴン』としての枷が一つ外れた事を意味していた。

目録を持ってきた整備兵に笑顔で敬礼すると何故か渡した後慌てて戻って行ってしまった。何故彼が小走りで目録を受け取らず帰ってしまったのか武影には甚だ疑問なのだが行ってしまったモノは仕方ない。とりあえず全ての項目を確認した後、おいても大丈夫そうな椅子にそれを置き、瑞鶴へと乗り込む。

「うん、手入れも完璧、状態は最高、か…ってことは巖谷少佐はアレで来るのか？」

そう思うと胸が熱くなる。恐らく向こうはそのつもりだろう。そして今回は下馬評通りの結果にするつもりだ。間違いなく武影の鼻っ柱を叩き折るつもりで来るだろう。

「そうだ、そうじゃねえと面白くねえ…久々のフルコースだ。しっかり味合わせせてもらう」

武装は昔と同じ突撃前衛（Storm Vanguardストームヴァンガード）。87式突撃砲一門、74式近接戦闘長刀二振り、65式近接戦闘短刀二振り、そして現在最新の92式多目的追加装甲…大型のシールドを一帖装備している。だが今回のメニューからすると一般的に選択としては間違っているだろう。衛士の彼なら強襲掃討或いは強襲前衛を選んでいた。だが今の彼は渡り鳥。実用性よりここはロマンを選んだ。気分の問題である。そう、彼にとって状況というのは作り出すものなのだ。

と、そこへ武の網膜に一人の女性の姿が映し出される。鳶色の瞳とマリンブルーの髪が印象的な女性だ。年の瀬は20、といった所だろう。担当のCPだと武影はあたりをつけた。

「霧技官、CPを担当する中島知代中尉です。今回訓練中のCPによる支援はありませんがコールサインはグレアムです。宜しくお願いします」

「ああ、宜しく頼む中島中尉。あと俺のコールサインは…そうだな、フリーアエで頼む」

「な…了解しました、ではコールサインはフリーアエ01とさせていただきます」

「OK：そうだ、地形データ見せてくれるか？出る前に頭に叩き込んでおきたい」

「了解しました、出撃まで10分ほどですが…送ります、どうぞ」
そこで一旦通信は切られた。武影はじっくりと地形データを見、戦術をシミュレートさせていく。敵機数は小隊規模と考えて4機だろう。今まで同時に相手にした数としては少ない部類になるが相手が相手なのだ。本腰を据えて行かないと簡単に落とされる。

用意された試験場は市街地、戦術機が隠せるレベルのビルが並び立つ複雑な地形だ。無論、幅は広いものの回避機動に制限が出るエリアも少なくない。それらを考慮したうえで、的確に敵機を誘導し、ありとあらゆる戦術に対処しなくてはならないのだ。

「此方グレアムよりフリーアエ01、発進許可が出ました、どうぞ」
シミュレートが終わり、戦術のイメージが大体できた所で出撃の間と相成った。無論、やる以上負けは許されない。深呼吸し、その瞳を、耳を研ぎ澄ませる。ヘッドセットから息を呑む声がしたのだから今の彼にとって必要な情報以外は入ってこない。それは反射の様

なものだった。

「了解、フリアエ01、霧武影…瑞鶴出る!!」

吉兆の名を持つ鶴は、神話に於いて苦しみを永劫与え続ける凶鳥の名を冠し飛び立った。

「巖谷少佐、どうやら敵のコールサインはフリアエだそうです」

「ふふ、中々ロマンチストじゃない。熱心なところはさしずめアレクト、といったところかしら？」

「いや、メガイラの方だけありゃ。まあどちらにせよ伝説の焼き直しなんてさせるつもりはねえけどな」

部下の声に巖谷はくっくと笑った。真面目な男一人におっとりしたのと男勝りな女二人、部下はこの三人で隊長が自分。なかなかバランスの取れているフライト（小隊）だ。まあ、既に嫁さんがいる身としては怖いモノがあるがまずそういう関係になる筈がない。年が離れ過ぎていて好意というより憧れに代わるからだ。

「中々洒落た名前で挑んできてくれるのだ、ありがたく思え。それに実際奴は出来る側の人間だ。相手が単騎とはいえ絶対に油断はするな。エレメントを必ず維持、藤原は俺の二番機、四番機日野は三番機の二宮につけ。確実に仕留めるぞ」

その言葉に部下の藤原俊也少尉、日野人吉中尉、二宮愛少尉は了解と気合の入った声で返答した。

「此方グレアママよりグレアズ、発進許可が出ました、どうぞ」

「よし、では行くとするか：グレア01、陽炎出るぞ！」

隊長機、巖谷榮二少佐。コールサインはグレア01。機体はF-15J／TSF-Type89陽炎、武影と同じく武装は突撃前衛。

「グレア02、出ます」

二番機、藤原俊也少尉。コールサインはグレア02。機体は同じく陽炎、強襲掃討（Gun Sweeperガン・スイーパー）：87式突撃砲4門と65式近接戦闘短刀二振り。

「グレア03、出るわ」

三番機副隊長、日野人吉中尉。コールサインはグレア03。機体は陽炎、突撃前衛。

「グレア04、出るぜ！」

4番機、二宮愛少尉。コールサインはグレア04、機体は陽炎。

新人が伝説を超えられるか：1対4、彼が打ち立てた伝説を遥かに凌ぐ難易度のこの対戦、果たしてどこまで持つか：それが巖谷の正直な思いだった。

そして彼は心のどこかで不遜な態度だった彼をいい意味で裏切ってくれる事を期待していた。

三十六計というモノがある。逃げるにしかずの言葉で有名なものがそれはあの三十六計とは別という意見もある三十六計だ。

勝戦計、敵戦計、攻戦計、混戦計、併戦計、敗戦計の六つをテーマにそれぞれ六つの計略を付けている兵法だ。

先に述べたものから順に圧倒的有利、有利、拮抗、不利、同盟間の主権争い、圧倒的不利の状況を想定しており、その三十六計の中には赤壁の戦いで？統が献じた連環計もある。尤も、此方はただ船を

鎖でつながぐという意味ではないしその策はこの計の中の一つである。

「グレアズ、配置についたな？」

「此方グレア02、問題ありません」

「此方グレア03、準備完了致しました」

「此方グレア04！問題なしだぜ！」

4機の陽炎が演習場に降り立ち、配置につく。流石に最初から位置がばれているのは面白くないので遭遇戦とし両者ともに出撃位置は伏せている。

「索敵は巖に、先に見つけ出せ。そうでない場合はプランBでいく。二宮、今回は見つけるまで辛抱しろよ？そのためのソレだからな」
「了解：でも二機掛りだぜ？索敵能力ならこっちの方が上だしまあ簡単に言くと、舐めすぎてるだろあの敵」

「あら、愛ちゃんあっち（強襲掃討）の方が良かったかしら？でも作戦は作戦よ。我慢なさい」

「あー：二人とも、無駄口はそこまでにした方がいいですよ。間もなく開始です」

藤原が止めに入った事により、チークタイムはこれにて終了。あとはCPからの開始の号令を待つだけだ。

負ける筈がない。そうなのだ。キルレシオでも性能でも圧倒的有利、だが巖谷の胸中から一抹の不安が拭い去られる事はなかった。あの会話の時の淡々とした様子と今回の機体選択やコールサイン、どうもテンションの上下が激しいように見受けられる。そして一つの仮

説が浮かび上がる。まさか正規ではなく傭兵という道を選んだ理由は…

「此方グレアママ、カウントダウンを開始します」

巖谷は頭を振った。もしそうだとしても今の自分達が為すべき事は只一つ。

「5：4：3：2：1：」

そう、只一つ。

「戦闘開始」

敵の殲滅。それだけだ。

「グレア01からグレアズ各機、兵器使用自由。見つけ次第36mを存分に撃ちこめ。一気に仕掛けるぞ：04、接敵後アレの使用タイミングは任せる」

「グレア03了解。索敵しつつ前進します」

「グレア04了解、03に続くぜ：任せて下さい巖谷少佐！」

エレメントを組んでいる以上索敵能力：いや、接敵後の対応に於いては此方に分がある。問題は各個釣られて撃破される事だけ。そこをしっかりと押さえれば単騎の瑞鶴は的にすぎない。

そもそも性能差に於いて第1世代：いや、第1.5世代機と第2世代機ではその機動性能に於いて雲泥の差がある。それは設計思想の

違いからくるものでもあり、技術の差でもある。

なぜなら第1世代は装甲を重視し、第2世代では機動性を重視しているからだ。それは対BETA戦に於いて生半可な装甲は一切意味を持たない故の設計思想の転換でもあった。

故に、この勝負は武影の圧倒的不利に間違いはなかった。故に最初の策は恐らく奇襲だろう。

そしてその接敵までにかかる時間は、余りにも短過ぎた。

「ツチィ!! グレア01、エンゲージディフェンシヴ（接敵後手）!! まさか予めここに来る事を予想して一直線に来たとも言えるのか!？」

「グレア02エンゲージディフェンシヴ! スモーク（煙幕弾）で敵機の位置が確認できません! しかしどうやって…先読みしていたとしても!？」

開始からわずか数分での接敵。それは武影が予めグレア小隊が…いや、それらの中の分隊がどこに来るのか想定して動いていたからに他ならなかった。しかも最短距離を突っ切って。

巖谷としては予想外も甚だしい。なぜなら索敵能力に於いても瑞鶴は陽炎に劣る機体だ。故に、単純に隠れているのであれば先に見つけ出すのは此方であっただろう。だがそれを武影は化け物じみた勘と戦術眼で予測していたのだ。

「どこだ…何処にいる! グレア02! 急いでスモークから抜けろ!」

巖谷は焦りつつも僚機に後退を促す。瞬時にこのままでは危険だと本能が訴えたのだ。予想外ではあったがまずはこの奇襲で受ける被

害を最小限にし、視界を確保してこちらがイニシアティブを取るべきだという妥当な判断だった。

だが、彼の行動はその指示を予測していた。そう、まったくもって人外である事を見せ付けるが如く。

「どうしたグレア02！ 応答せ：「グ、グレア02胸部に致命的損傷、大破」何！？ まさかもうやられたと言うのか！？」

マーカーからグレアの信号が消えていた。そしてCPからの撃墜判定報告：煙幕の中確実にその位置を把握しているなど冗談にしては性質が悪すぎた。

だが現実是非情。グレア2の胸元にある追加装甲のリアクティブアーマーによる打撃痕、それはその性質の悪い冗談が現実であると言う事を明確にしていた。

「グレア04よりグレア01！ エンゲージオフエンシヴ（接敵先手）：FOX1！！ 01は前進してスモークから抜けて下さい！！ 奴はこちらにまっすぐ向かっているんだぜ！」

状況を重く見た04が本来なら先手として使う筈のそれを躊躇いなく使用した。それは奇襲とはいえ余りに…そう、余りに02を落とすまでの手際が良過ぎていたからである。

04の武装は制圧支援（Blust Guardブラスト・ガード）：87式突撃砲一門、65式近接戦闘短刀二振り、92式多目的追加装甲一帖。そして最新の装備：肩部に搭載された92式多目的自立誘導弾システム：16基のVLS（Vertical launch system垂直発射機構）とアクティブ・フェイズド・アレイ・レーダー各2基を装備している。そしてミサイルカバーがスライドし開放され、搭載されたIR（赤外線誘導）ミサイル

のロケットモーターが点火。コンテナ内部をその噴射炎で燃やしつつ上昇、迫りくるフリアエ01に向けて姿勢制御フィンが作動し殺到する…！

距離は適正、ロックオンも完了、普通ならば避けられない代物だ。そして彼女…二宮愛はこれの試験運用に携わっていた弾幕中毒者であり、巖谷もその射撃センスには一目置いている衛士だった。故に巖谷も何も言わず全速で噴射跳躍し、スモークから抜け出す。

だが、そこで後方から命中の瞬間を見ていた彼女達はとんでもないものを目にする。

瑞鶴が一瞬腰を屈めたかと思うと横に向かい噴射跳躍…だがこれだけでは迫りくる32発ものミサイルを避けることは不可能だ。そしてこれら32発のうち1発でも命中すれば装甲に秀でた瑞鶴とはいえただでは済まない。

そして戦術機には致命的な欠陥がある。そう、次の行動までにラグが発生する事だ。例えば噴射跳躍をした場合、着地シークエンス、姿勢制御シークエンスなどの動作が入る為隙が生まれる。そこに間違はなくIRミサイルは寸分たがわず命中するだろう。

だが、その予想は大きく外れる事になる。それはまさに達人技によって為された。

「な、着地硬直0!?!? な、なんでだ!?!? なんであんな機動が出来るんだ!?!?」

「冗談、でしょ…愛ちゃんのアレが外れるなんて…」

ビルの側面に張り付いたフリアエ01は猫のようにしなやかな動作

で前方へ慣性を移動させ、更にその側面を蹴り飛ばす事で一気に機体の機動方向を転換した。そのタイミングは一寸遅ければ命中し、早ければミサイルの追尾が間に合ってしまう：そんな絶妙なタイミングだった。そしてその行動に全てラグは無かった。

「グレア03、04！ばさっとするな！敵は待ってはくれないぞ！」

「りよ、了解！グレア03、FOX3！！04、平面機動挟撃で仕掛けるわよ！」

「グレア04FOX3！了解：畜生！やってやるぜ！！」

巖谷の喝が入る。スモークを抜け後方を確認した彼もその機動を見ていたのだ。そしてそれは彼にとって：そう、彼にとってあのフリーアE01がどういうレベルの衛士なのかを一瞬で判断させるに足る動きだった。

爆炎を背に迫るフリーアE01、ソレは03、04にとってまごうことなき凶鳥だった。

「速い！？これが瑞鶴の動きだとも言うの！？」

「なら：なら私達はなんだっていうんだよおお！！！」

平面機動挟撃、フラットシザース。単騎相手に仕掛ける最善策の一つとして一般的なそれは噴射滑走、噴射地表面滑走の二次元機動を行い挟撃の十字砲火による複数の火線で仕留める動きだ。

無論、実行には息のあったエレメント以上の機体による機動、タイミングなどが必須である。そして彼女達03と04の息も完璧に近いものだった。それは日ごろの巖谷による厳しい指導の賜物である。

36mmの雨がフリーアエ01に迫ろうとした時、フリーアエ01はまたしても常軌を逸する行動に出た。

「つ、追加装甲を投げてきたですって!？」

03に向かい追加装甲を投げた：いや、それだけでは勢いが足りない為更に蹴り飛ばし加速させ突っ込ませたのだ。更にソレは瑞鶴の速度を落とさせ、次の機動を容易にする為の行動でもあった。

当然03は自らの盾でそれを防ぐ。出鱈目な機動をするとは思っていたが行動も出鱈目である。ノーロックで盾をパージして投げ飛ばし：もとい蹴り飛ばすなんて馬鹿げている。

だがその馬鹿げた動きによって出来た投擲兵器はしっかりと03の火線を遮り、03に防御を強いていた。

もう一方の04の火線を遮るモノはない。だがさっきの一連の動きでフリーアエ01は完全に予測と異なる方向へ移動し、36mmは空を切り裂いて行った。

だが彼女も動揺はしたがすぐさま機体の方向を転換させ、フリーアエ01のいる方へと機体を旋回させ再びロックオンする。しかしそれも先ほどと同じビルの側面を使った無茶苦茶な三次元機動でかく乱される事となった。

そして何とか自らも跳躍し食らいつこうとした刹那、彼女の目に飛び込んできたものは：

「た、短刀!?!うわあ!?!」

「グレア04、頭部損傷小破」

確かに投擲故にそこまで威力はない：だがそれが頭部センサー類な

どの脆い個所であれば話は別である。無論、これらの動作は戦術機には搭載されていないものである。それが意味する事はつまり：

「操作の細分化か、しかもあのような動きを仕込むとは：近衛のトップといえどもあそこまでは真似できんぞ！？」

巖谷の推測通りだった。フリーエ01即ち武影が行っていたのは極限までの操作の細分化である。それは即ち常人では考えられないほどの入力を繰り返す事で一切無駄のないモーションを可能とする近衛最高峰の技能だった。無論、投擲などという馬鹿げた動作をするのは彼くらいであるが。

そして飛来する追加装甲をやり過ぎたグレア03に120mmが迫っていたと言うのは、最早彼のシナリオ通りと言えよう。

「グレア03、胸部に致命的損傷：大破」

胸部を鮮やかにポイント弾で彩られた陽炎が膝を突く。彼女らの予測よりあまりにも展開が早過ぎていた。そして彼女達はそれについていけなかった：油断しないよう心がけていたが、どこかに綻びがあったと言うのは言い訳臭い事になるだろうか。

「く、メインカメラがやられた位：で、え？」

衝撃から立ち直り再度突撃砲をを構えようとしたグレア04だったが構えられない。否、構える為の突撃砲と、腕がその時点で消えていた。そして次の瞬間衝撃と共に彼女の景色が反転した。

長刀による袈裟切りで腕部を斬り落とし、返す刀と噴射跳躍による勢いで上半身を切り上げる：佐々木小次郎で有名な燕返しに似たその動きで陽炎は転倒、胸部に致命的損傷判定を受け撃墜された。

「ふ、ふははつ、ふはははははは!!」

それを助けようとし機体を走らせていた巖谷は足を止め、笑い出してしまった。下馬評なんてクソ喰らえ、大穴中の大穴だ。そして彼の予想を超えるその技量……紛れもなく武影とはトップクラスのエースだろうと彼に確信させていた。そう、自分すら上回るほどだと。長刀を捨て、撃破した二宮の陽炎が持っていた突撃砲を奪った武影は仁王立ちする巖谷の陽炎にその銃口ではなく機体に向け睨みつける。

「やるじゃないか、武影君。まさかこれほどまでとは思っていないか
つたよ」

「…まあ、歓迎会ですから。本気で行かせてもらいますよ、当然ね」
オーブン回線を繋ぎ、巖谷と武影は言葉を交わす。お互い口元が綻
んではいるが目元はぎらついている。一方は手練れとの対戦による
凶喜で。一方は古参の兵としてのプライドで。

「：確かに見事な戦術だった。だがその機動：機体に欠ける負担も君に掛かる負荷も大きなものだ。違うかね？」

「巖谷少佐にはお見通しですか。まあ、その通りですよ。あとでオ―バーホール（分解整備）確定…整備兵から相当手厚い歓迎されま―すね」

そう、無茶苦茶な機動にはそれなりの負荷が必要なのだ。当然先ほどの側面着地からの機動なんて本来第二世代クラス以上の能力がなければ負荷はレッドゾーン突入確定……いや、第二世代機でも耐えられるかどうか。さらに文字通り魅せつけた投擲も腕部マニピュレーターに深刻な損傷を引き起こしていた。いわば攻撃を受けずとも満身創痍……荷馬を用いて赤兎の如き無茶をしたのである。

「まあ、お互い言葉を交わすのはもう充分でしょう……行きますよ、

少佐殿」

「ああ、来たまえ：巖谷榮二、お相手任る」

噴射跳躍をしながら仕掛けたのは武影。機体が限界にきているのは先の通りであり一刻も早く決着をつける必要があった。

それに対し巖谷もまた突撃する。武影の放つ36mmを追加装甲でしっかり防ぎ、織り交ぜてくる120mmを的確に回避するのはさすが生ける伝説、といった所だろう。

だが武影もさる者、それを見越したうえで三次元機動による火線の複雑化によりその鉄壁を切り崩さんとしていた。それは巖谷から見れば光線級のいる空に於いて上昇などという危険極まりない：衛士がするべきではない機動だと思わせながらも圧倒される代物だった。

そして噴射跳躍の着地先を狙い澄ました武影の120mmが巖谷に迫るが、彼はそれを武影と同じくラグなしの回避機動で避けて見せた。そう、武影がやって見せた回避機動は帝国が誇る『近衛』の技術の一つ：それが『伝説』巖谷榮二に出来ない道理はない。

その技に舌を巻く武影だったがうかうかしてられない。すぐさま敵をそういう相手だと理解し、慎重に策を張る。

武影の次なる手は先ほどと同じく煙幕弾。一見すれば機動力の差を視界の悪さで埋めてしまおうと言う策であった。

だがそれは巖谷もお見通し。同じ手には引っかからんと素早く後退し、武影のいるであろう位置に向け36mmを放ちつつ後退する。

そしてその行動により武影の連環計はここに完成された。

「ロックオン警報だと！馬鹿な、何処から…しまった！？」

巖谷は視界を上に向ける、そしてそこには陽光を背に、此方へ向けて突撃砲を構える瑞鶴の姿があった。

「もらったあああああ！！！！！！！！！！」

咆哮、そして打ち下ろされる36mmのペイント弾。まさに武影の計略どおりに事が進んだ結果だった。

そもそも武影の瑞鶴において一連の行動で著しい負担があったのは左腕と脚部である。まず初撃のリアクティブアーマーによる打撃、そして更に追加装甲と短刀を投げつける行為、そして着地シークエンスをスムーズに行う為と蹴り飛ばしで掛けた脚部モーターへの負担…それらに対し右腕、突撃砲と長刀しか使っていないそれにあまり負担はなかった。

先ほどの煙幕は最初の初撃…急速接近による白兵戦への移行をちらつかせる為のブラフ。元々初撃のあれはこの為にあった布石と言ってもいいものだった。

そして武影の策略通り巖谷機は後退、その煙幕へと視線を向けていた。更に自分は上昇した上しっかり太陽を背にする…完璧だった。

だが、完璧であってもそれを覆す存在は存在する。武影と同じく。

「ぬおおおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

跳躍ユニットの出力を全開にし、脚部モーターを使い全力で跳躍する陽炎。当然、ここまでは読めていた……だが、それがまさか自分に向かい突撃するというのは予想外だった。

「っちい!! 盾が邪魔で……!!」

素早く36mmから120mmに切り替え、盾を撃ち抜く武影、だがりアクティブアーマーの火薬に引火して起こった煙の中に陽炎はいない。

首筋が粟立つ。そう、これはまずい……武影の勘がそう告げていた。

巖谷の狙いを悟った武影は機体を回転させ、使い物にならない左腕を盾に下方へと突撃砲を向ける。

そこには純白の陽炎が長刀を手に、まさに彼の喉元を断ち切らんとしていた。

激突……それでもつれ合い、地上に落下する両者。無論、高さはそれほどなかったとはいえ墜落である。危険極まりないが幸い両衛士ともに怪我はなかった。

「グレア01、頭部並びに左腕部損傷、中破。フリーアエ01、左腕部損傷、胸部に致命的損傷、大破。状況終了です……」

終わったことで安堵したのか、CPからは小さなため息が漏れた。今までにないレベルの決戦。それはモニタリングしていたCPだけではなく、撃墜判定をだされ戦術機の中からその様子を見ていたグ

レア小隊の面々にとって衝撃的なものだった。

彼らの戦いは新たな伝説として刻まれる。

そして新たな戦術機の参考データとして、耀光計画に多大な影響を与える事となった。

6th Stage: Glare Project (後書き)

TEより巖谷榮二登場。階級は後に中佐となる事を考えて少佐としました。

過去編の為オリジナル設定が入っています。グレア小隊とか。因みに名前に関してですが藤原^{フジワラ} 俊也^{トシヤ}は送迎最速理論のモデルとなった作品から、中島^{ナカジマ} 知代^{トモヨ}は富嶽のモデル関連から、日野^{ヒノ} 人吉^{ヒトヨシ}と二宮^{ニノミヤ}^{アイ} 愛^{アイ}はある航空史上の人物からとっています。

ご感想、誤字脱字の指摘等お待ちしております。

誤字多過ぎるorz

修正できたんだよな…出来たのか?…出来たんだろう?
そして微修正しました。

7th Stage: Indications

7th Stage: Indications

時同じくして富嶽重工本社ビル。その一室に二人の男女が向かい合って座っていた。

一人は富嶽重工社長、河合 勲。連綿と続く富嶽の舵を取る7代目である。齡70を過ぎて尚その眼光は厳しく、白髪が目立つ頭であるがその相貌からは老いというより老練さがにじみ出ている。

そして勲は手元の資料から目を離し、静かにその乾いた唇を開く。

「成程、素晴らしい技術ですな。ミス・クロワール：ですが些か腑に落ちませんな、なぜこの富嶽を選ばれたのかが」

「簡単なことです。私たちがこの帝国に居を構える上で富嶽の協力関係を結ぶことにメリットこそあれデメリットは見当たりませんもの」

勲は内心毒づいた。

その筈がない、当然富嶽と手を組むということは確かにメリットが大きい。だがそれと同様デメリットも多く存在する。それにこれほどの技術があるのなら米国ノースロックやマクダエルなどはるかに競争力の高い企業と手を組めたはずである。それをなぜ、世界的に見れば主流とは言えない富嶽を選んだのか。その裏にあるものは何かと勲は眉間の皺を一層深まらせた。

「ああ、そう怖い顔をなさらないでください。資料はすでに目を通されたのでしょうか？ でしたら話は早いはずです…耀光計画、その進

展のためにこれは必要なことだと」

「ふん、Operation By Light（オペレーション・バイ・ライト、OBL。衛士の操縦動作や思考統計を光信号に変換し光ファイバーケーブルによって戦術機のコンピュータに伝達、機体を統合制御するシステムの事）の開発は現段階において実戦に耐えうる、と見込んでいたが：これを見るとまだTSF-X二号機に搭載されたモノでは性能不足、と鼻で笑われるだろうな」

勲は目の前の女が概念実証実験機、つまりTSF-Xのことをすでに知っているかと理解していた。そうでなければこの手元の資料に現段階での問題点を解決する技術の一覧と理論がピンポイントで載っているはずがないのだから。

「それだけではありませんわ。各部アクチュエーターの改良、CPUの改良などTSF-Xには未解決の問題が山積み：それはあなたが一番わかっていらっしゃるでしょう？」

「その通りだ。元々第二世代を飛ばして駆け足で来た計画、技術不足は否めんよ：そう、それ故に」

「機体の拡張性を廃してまで、第三世代と認められる性能を有したとでも？」

その言葉に勲は出かかった言葉を飲み込まざるを得なくなった。そう、現段階のTSF-X：再来年には納期が迫っているそれは拡張性を廃し、第三世代として認められるような性能を持たせたギリギリの機体なのだ。むろん、それが戦術機として：兵器として正しいかと問われれば否である。このような機体は拡張：つまりさらなる改良を施すことで機種としての耐用年数を引き延ばすものだからだ。

それを廃するということはこのTSF-Xが戦場に立ち続ける年数は長いものではないと嫌でも分かってしまう。

しかし、そうしなければ各省各国の圧力により国産戦術機の夢は潰え、それこそ米国のイーグル…数年後には旧式となるだろうそれを使い続けなくてはなくなるのだ。そしてまた最新の機体を米国から高い金を払って輸入する…そうなればコストが高騰するのは言うまでもない。

「…金ヶ崎でいいんだな？」

勲はふう、とため息をすると静かに問うた。それは決定事項であり、その再度確認のための問いであった。胸中には言い難いやるせなさがあったが、この『商談』により得る利益を鑑みれば自分の独断で捻じ曲げることはできない。

「ええ、契約書はどちらに？」

勲は黙ってA4サイズの封筒を取り出した。そしてその中身の書類を取り出し、ガラステーブルに置く。その書面には金ヶ崎にある工場建設予定地を提供するという文面と代表取締役社長 河合 勲のサインがすでに書かれていた。

それを受け取ったセレは契約書と控えの両方にサインし、控えを返した後それを自ら持ってきた封筒に丁寧に入れ、革製のビジネスバッグの中に丁寧に仕舞い込んだ。

「ミス・クロワール、一つだけこちらからの要求がある」

「なんでしょうか、河合社長」

「今回の工場の建設計画ですでに当社と契約をした企業がある。こ

の契約の発注先を貴社に変更し、貴社の工場開発に使ってほしい。厚かましい願いであるというのは分かっている。だが我々にも面子というものがあるのだ。それを分かっていただきたい」

「…対価は？」

「盛岡に手をまわしておく。またこちらの製品を優先的にそちらへと融通するように通達しておく…不足かね？」

「結構です、河合社長。そちらの契約書のほうはまた後日、ということでお願ひします…次からはよい『ビジネス』ができることを期待していますわ」

そう言ってセレは立ち上がり、勲の秘書に連れられて退室した。

「…食えん女だ」

勲は忌々しげに呟く。そう、今回は単に契約書にサインするだけの話だったのだ。すでに取締役会でこの交渉を受けることは決定されており…あとはどれだけ向こうを譲歩させられるか、というのが焦点であった。特に、工場建設を発注していた企業への面子と圧力もありこれだけはなんとしても認めさせる必要があった。

さらに言えば、だ。今回の売却劇で来年度の新規雇用者数の見直しもせざるを得ない。元々成人男性の多数が軍役に就かざるを得ない状況である。このような民間企業に就けるのはそれなりに能力のある人間でなくてはならない…面倒なことだ。更にふるいにかける必要が出てきた。

現段階での富嶽のプラン、それは金ヶ崎新工場に戦術機生産の拠点を建設することであったのだがそれは断念せざるを得ない。これにより当面のプランは旧来の工場や事業所の拡張、といったところに

なるだろう。だが、その500億相当の土地というハード面の成長と引き換えに技術：ソフト面では飛躍的な、いやまさに進化といふべき成長が見込めるのは事実。だからこそ、笑えない。

あの女が、如月という新興企業がこれにより得ていくであろう『競争力』が。

勲は乾ききった唇を潤そうと机の上に置いてある冷めたコーヒーを飲む。天然ものだというのにそれは酷く苦かった。

「失礼します、社長」

「む、君か。ミス・クロワールは？」

お帰りになられました、と秘書は短く答えた。窓を見ると本社ビルから離れていく黒塗りのリムジンが見える。おそらくあれにあの赤目の魔女が乗っているのだろう。

リムジンを使う理由は簡単だ。商談においては車内で各種情報のチェック、社交界に赴く際は身なりを整える、更に車内での密談。そのような事柄においてリムジンという広い車内スペースは実用的だからである。あの長いホイールベースの裏にはそういった理由があるのだ。

おそらく彼女は今車内でそろばんを弾いているであろう。今回我々に売却した技術の価値、そしてこれから小出しに売り込むであろう『この場で明かさなかった技術』：それらの天秤を修正するために。

「彼女が置いて行った彼は？」

「はい、現在耀光小隊との模擬戦を行っているそうです」

「目を離すなよ。あの女は危険だ…奴に社内の情報を抜き取られることのないようにな」

「それに至っては万全です。現在あの事業所では耀光計画に関わるデータ…各戦術機の設計データ、TSF-Xの開発データなど経営に関するデータ以外のものしか置いておりません。収支など他部署の情報を閲覧するにはIDカード、パスと生体認証が必要となります。万が一にも情報を抜き取られることはないでしょう」

だといいがな、と今日何度目になるか分からないため息をつく。『信頼の証』として置いて行った男…あの魔女が耀光小隊に1…4で勝てるとはつきりと豪語したほどの腕は、はたして虚飾か真実か。どちらにせよあれが信頼の証、とまで言うほどの男だ。仮に1…4で勝てなくともそれなりに使える男なのは言うまでもない。ならば、耀光計画のために一働きしてもらっただけの事。

「それと…社長、ミス・クロワールが最後にそれとなく呟いたことがございますが」

「何だね？君が眉根を顰めるとは何か意味があるのかも？」

「我々はパイの分割を望んでいる。『あの二人』だけだと胃もたれするだろう、もっと多くの人が食すべきなのだ…と、仰っていました」

その言葉に勲はコーヒーカップを手を持ったまま固まってしまった。そしてそれを静かに机に戻すとくつくと笑い出した。

「そうか、あの魔女め…狙いはそういうことか、食えん。実に食え

ん女だ」

ひとしきり笑った後、勲は緊急取締役会の再度招集を秘書に命じた。そう、彼女の狙いがそれであるのなら：現状に胡坐をかいている場合ではないのだ。

「光菱、河崎に先んじる最大のチャンスだ。これを生かさぬ手はあるまい：奴の思惑、乗ってやろうではないか」

久々に、戦争が始まる。そう勲の勘は訴えていた。血と鉄の戦争ではなく、知と謀略の経済戦争が。

リムジン車内でセレ・クロワールは車窓から外を眺めていた。防弾ガラス、そしてスモークを張った窓からはグレーがかかった景色しか見えない。だが現状、彼女にはそれ以外にすることはなかった。

彼女が本格的に動いたのは御剣との契約：いや、日本帝国との契約が終わってすぐのことだった。

それまでにそれと無く白稜の整備兵や衛士に戦術機の状態やその機体性能、運用などについて色々と質問し、自らも戦術機を動かし整備マニュアルなどからその技術レベルを探っていた。その勉強熱心ぶり彼女の棚に古今東西、国内外を問わず多くの分厚い戦術機運用・整備マニュアルや軍略書が置かれていたことから察しはつくだろう。

そしてそれにより彼女が特に危機感を抱いたもの。それはレーザーなどの光学兵器：新規技術開発の低迷である。

確かに自立の難しい人型兵器を発展させてきただけの技術力はある。だがしかし、これでは更なるステップ：技術革新は来ない。

たとえばA Cより優れているといえる強化服、そして管制ユニットは確かにすばらしい。網膜投射によるシームレスなモードセレクト・ロックオンなどの高いH U Dとしての性能を有しているのは事実。だがしかしそれを機体に伝達し、処理するC P Uがお粗末なのである。フィードバックシステムのようなきわめて複雑なシステムを搭載している割にC P U、正しくは並列処理理論の構築がおろそかである。このような負荷の集中は正直誉められない。まあ、量子コンピュータが存在しない以上開発が頭打ちになるのは仕方がないのかもしれないが：

そう、問題といえばこれも問題だ。B E T Aは高性能な電子計算機、つまりコンピュータを優先的に攻撃するという特性だ。これを考えると下手に量子コンピュータを作ってしまった場合そこがB E T Aの最優先攻撃拠点になりかねないという問題がある。こうなると量子コンピュータで旧来のモノとは比較にならない：というより月とスポン並みの差がある高速演算を利用した開発は当面不可能だ。まあ、当面できないだけであり当然やる予定でありそのプランはあるのだが。

更に工業力から政局を見るとやはり人類共通の敵B E T Aが存在したところで各国のいがみ合いは収まるところを知らない。狂信的な宗教家に扇動されたテロ組織や難民保護を謳い国家に牙を剥く本末転倒な者も数多く存在する。

この帝国もまた、議会、将軍、皇帝という三つの権力が並立している状態であり有事の際に迅速な対応ができるかどうかと考えると不安が残る。外交面でも米国との関係硬化、統一中華戦線との連携の鈍さという正直言っただうしたものかと頭を抱えなくなるほどだ。

兎にも角にも軍事・興行面ではACまでとはいかず高級MTクラスの防御能力、新機軸のCPUやOSといった基礎システム開発、そしてレーザー兵器やプラズマ兵器といった光学・化学兵器の開発が急務になりそうである。特に後者に至ってはこの先の戦術機開発に不可欠なものであり、光学技術開発を利用すれば他の技術も並行して底上げが期待される。前者は：32mmという名の小石数個で落ちるような装甲では話にならない。

政局でいえば内部の外国資本への対抗策の構築、各国との連絡強化：というより資本による交渉力の強化が優先される。内憂外患もある程度は山吹色のお菓子で黙らせられるのだ。特に他国企業とのある程度の情報連絡・通商網は欲しい。だが左手で握手して右手に拳銃をもつ程度の仲でちょうどよいのでそこまで手を入れる気はない。

とりあえず今回の商談で特許の一つ二つを売り飛ばして事業をするうえでそれなりの土地を確保できた。

無論、金ヶ崎を選んだ理由はある。それは至極単純なものであり盛岡、と聞いてピンと来るなら説明は不要だろう：さて、1998に間に合うかどうかは今のところ微妙としか言いようがない。残りの資本・これからの開発で不要な技術の売却で工場建設・販売ルート of 確保（棚卸先としては帝国軍、近衛は敷居が高いとして富嶽が現在のところ最有力候補だが）・リクルートといった準備をするのだが：

まったく、人の身でなければ早々にできそうなものだが愚痴を呟いてどうにかできる問題でもない。胸中で呟き彼女は静かに目を閉じた。

「確かに同じ敵と同じ手法で戦い続ければ思考が停まるのも無理はありません……これもあの子の願い、か」

その独り言は快適で静かなエアコンの音にかき消されるほど小さいものだった。目を窓から離し、手元の資料に目を走らせる。

資料の表題はProject A・R・K.

その第一段階が今まさに始まろうとしていた。

所変わって富嶽演習場。

「……化け物だな……だが、なんと言うか……」

「とんでもない子が来たものね……ふふ」

「……」

三者三様、ハンガーで一人の男が機体から降りるのを待つ衛士たちがいた。

感心してはいるが、どこか呆れたような感じも混じっているような様子なのが藤原少尉。

愉快そうに微笑んでいるようで目が笑っていないのが日野中尉。ただ魂が抜けたかのように茫然としているのが二宮少尉。

「まさか、出られなくなるとはな…」

その後ろで、瑞鶴の管制ブロック取り外し作業をどこか遠い目で見ているのが巖谷少佐だった。

時を少しさかのぼる。

模擬戦、それは巖谷達耀光小隊の辛勝で幕を閉じた。

武影の圧倒的戦闘能力に皆驚愕し、人外という感想を抱いたのは言うまでもないが…その後が問題だったのだ。

「見事だ。霧大尉。これほどの腕は近衛でも居まい…いや、世界で並ぶほどのものが居るかどうか分からぬほどだ」

「誉めすぎですよ、巖谷少佐。自分はいいつの持てる力を引き出しただけに過ぎません」

「謙遜も程々にしておけ。その機体で陽炎を落とすこと自体異常なのだ」

通信越しに巖谷は愉快そうに笑った。まさか瑞鶴でこのような機動を見せる兵と巡り合えるとは思っていなかったのだ。初対面の大言壮語が嘘偽りではないことに驚き、そしてこれほどの人材と巡り合えたことの両方に笑ったのだ。

「まあ、降りてからでもいいと思っていたが…この場で挨拶を済ませるとしよう、藤原、日野、二宮。中島はもう挨拶は済ませているだろうが…こやつが新しく耀光小隊に配属…というより出向してき

た霧武影技官、ここでの待遇は大尉となる」

そういつて巖谷はチャンネルをオープンに、全員にそれぞれのバストアップ映像が見れるようにした。二宮の反応が少々遅れたが皆自然と敬礼をしているのはこれまでの指導で体が覚えているからであろう。

「霧武影技官です、よろしく願います」

至極真面目な顔で…というより帝国の面々だからゆるい態度ではまづいだろうなといった様子で敬礼する。普通の帝国兵ならばその裏にある意図には気付かないだろうが巖谷にはなんとなくそれが伝わっていた。

「うむ、中島は先に挨拶を済ませている筈だが…小隊の面々のみ紹介しようそれでは一人ずつ紹介しよう、グレア02、藤原少尉だ」

「グレア02、藤原俊也少尉です。ポジションは強襲掃討、改めてよろしく願います。霧大尉」

いつもの澄ました様子は今なお健在。だが武影を見る目にどこか人外というかこの世のものではないものを見るかのような印象を受け取れるのは仕方ない事なのだろう、と巖谷は判断した。

「んでグレア03、日野中尉」

「グレア03、日野人吉中尉です。ポジションは強襲前衛…よろしく願いますわ、霧技官」

網膜投影のウィンドウに映されたさりとした黒髪、いわゆる姫カットの糸目の女性が柔らかに微笑む。まあ、先ほどの藤原少尉よりはリラックスしているようだ…というより順応が早い、といったところだろうか。

「そして最後に…おい、しっかりせんか二宮！」

「あ!?!は、はい!?!グレア04二宮愛少尉です!?!ポジションは

ブラスト・ガード、よろしくだぜ…ってうわいけね!!」

「…二宮、後で話がある。後で私のオフィスに来るように」

ウェーブのかかった金髪の頭を押さえて挙動不審になる二宮。やれやれ、いつもの癖が出たかと苦笑しそうになるがここは締める場所。故に軽く手でこめかみを揉み解し、気を整えてから出頭命令（という名の説教通達）をしておく。くりくりとした小動物のような目が涙目になって許しを乞おうとしているがそれは流す。

「つくく…なかなか個性的な方々ですね、以後よろしくお願いします」

元よりだいぶ軽い、というか規律やその手の事にゆるい印象を受けていたがこの場においても武影は二宮を咎めず、ただ笑いを押し殺しているかの様子だった。巖谷としてみればまあこのような事でピリピリするタイプではない、むしろフランクであり帝国のそれとは違う空気を持っているとはっきり分かったので少々安心したのだが…

「二宮は帰国子女なのでな、少々日本語がおかしいところもあるが腕はさつき見たとおり、だ」

「ええ、的確な兵装の選択、対象との適切な距離を保つ射撃センス。確かに見事でしたよ。あのミサイルもタイミング、射角ともに普通なら落とされても可笑しくないものでした。いやああの時はホント肝が冷えました」

その完璧を旧式で避けるかこの化け物め、と言いたくもなったがそこは喉の奥に押し込めて胸襟を正す。

「改めて、ようこそ耀光計画、そして帝国陸軍国防省技術廠開発局耀光試験小隊へ。歓迎するよ、霧大尉」

「は、今後ともよろしくお願いします。巖谷少佐、中島中尉、日野

中尉、藤原少尉、二宮少尉」

時は現在に戻り、機体をハンガー収め降りようとしたその時に問題が発生したのだ。

「なに？瑞鶴の管制ブロックフレームが歪んでいるだど？」

「ええ、油圧ロックは外れているんですけどどうも歪んだせいで脱出できないようでした：管制ブロックを丸々取り出さないとダメみたいですね」

そう、先ほど縫れ合いながら落下した衝撃でフレームに歪みが生じていたらしい。瑞鶴があの時下になっていたからその分衝撃も多かったのだろうと巖谷は納得した。

「それで、他に異常がみられる部位は？」

「いえ、今のところ目に見えているのはそのロックだけです。他は正常なので通信・機体の制御も出来るようです。ただメインフレームもスタボロなようで：担当していた整備兵は啞然としていましたよ。全フレームに漏れなくダメージが発生していてまるで24時間体制の間引きに参加したような壊れ方だと」

「：む？ちょっと待て、無茶な機動をすればそういう壊れ方はしないだろう」

巖谷の指摘、それは正鵠を得ていた。機体に短時間無茶をさせた場合全フレームに満遍なくダメージが生じるのではなく、関節部といったピンポイントに負荷がかかっている筈なのだ。所が武影の操った瑞鶴は関節部もだが機体の内装全体にダメージが見られるという。

「いやあ、自分もびっくりしたんですけど：詳しくはオーバーホール（分解整備）しないと分かりませんが普通の壊れ方じゃないです。まるで機体のスペック全てを引き出して壊れたかのような感じですよ。それでもまだ動けるギリギリのラインで踏みとどまっている感じですかね」

「：成程、それで今のところ管制ブロックの取り外し作業は？」

整備兵は後ろを振り向く。そこでは複数の整備兵がまるで戦車級のように瑞鶴に群がり分解作業を始めていた。

「：霧大尉。中は問題ないのかね？」

「あ、巖谷少佐。いえ、まったく問題ないですよ。いやあむしろ快適すぎるくらいですが少佐の愛機というべきか：問題があるといえば外の空気を吸えないことくらいですね」

武影ののんびりとした声が外部スピーカーから響く。どうもあれだけの激戦の後だというのにもうクールダウンしてリラックスしているようだ。耳を澄ませば少佐の瑞鶴に乘るだけじゃなく壊すだなんて、などという呟きも聞こえてくるのだが深く考えないように巖谷はため息をついた。

「はあ：貴官にできることが無いとは言え：いや、いい。取りあえずこちらは先に解散しておく。後でデブリーフィングを行うので管制ユニットの取り外し終了後速やかに作戦室に来るように。以上だ」
「了解です巖谷少佐」

通達を終えて三者三様に瑞鶴を眺める部下に目をやる。どうやらあの瑞鶴を初めて乗った上に壊すというとんでもない新人に呆れというかなんとも表現しがたい感情を抱いているようだった。

「まったく：小隊各員！デブリーフィングを始めるぞ。作戦室に1

130集合だ。昼飯はそれが終わった後でとる」

「！了解」

後ろで手を組んでいた巖谷の声に気付いた藤原達は敬礼し、駆け足で作戦室へと向かっていった。

それにしても、と瑞鶴に再度目をやる。

「まったく、なんてやつだ…凄腕に加え人たらしとはな」

そこには整備兵とあたかも旧来の友人のようにマイク越しで和やかに会話する武影が居た。

「しかしどうしてこう、ロックだけが狙ったかのように…いや、まさかな」

7th Stage..Indications (後書き)

亀投稿となりました：遅くなって申し訳ない。いきなりレーザーで無双ヒヤッハは無理です。なのでまず金ヶ崎に拠点を作ることになりました。なんで金ヶ崎かは：まあ、BETAの攻めてくる範囲などを考慮するとベターかな、とW

現在までのオリジナル人物について（前書き）

現段階で判明している情報＋αです。伏線になる一部情報は伏せて
ます。

現在までのオリジナル人物について

Name…霧キリ武影タケカゲ

Age…18?

Gender…男性

Hair…黒髪ショート、銀髪メッシュ

Eye color…黒色

Looks…目つきは柔らかいが戦闘中は鴉のように凶悪な相貌に代わる。体はやや筋肉質でありがっしりしている。

Personality…基本的に温厚、ただし戦闘中は苛烈。

Likes…調理も食べるのも大好きな食通。基本的に食べ物ならなんでも。

Dislikes…???

Antecedents…AC3SL世界を経験しIBIS、セレ・クロワールとともにマブラヴ世界に帰還した武。その世界での彼の最後は…?

レイヴンとしての師はAC3SL最強の『人間』。

精神面で鋼の如き強さをもつ。肉体の強さもまた普通とは違うようだが?

原作の武と同様甘さがあるが必要な際の非情さ、冷酷さは持ち合わせている。

如月グループ傘下如月セキュリティサービス（PMC・民間軍事企業）の統括責任者。また如月グループ第2位の株主である。

耀光小隊に技官（大尉待遇）として出向、開発衛士として不知火の開発に携わる。

War potential…耀光小隊を格下の機体で同時に相手してなお互角というオーバースペック。特徴として機体の最大性能を完全に発揮する操縦能力、機略縦横と言わんばかりの戦術構築能力が挙げられる。生身においても無限鬼道流を我流であるが扱える

ため強い。

P o s i t i o n…どのポジションでも最高の適正を持つが引き受けるのは突撃前衛・強襲前衛が多め。

P e r s o n a l C o l o r…黒

E m b l e m…???

A r c a n a…死神

キリトリ

N a m e…セレ・クロワール

A g e…18?

G e n d e r…女性

H a i r…白髪ロング。鑑と酷似しているがリボンで髪を束ねていない

E y e c o l o r…赤目

L o o k s…鑑：が色白く、艶やかになった感じ。

P e r s o n a l i t y…冷静沈着。

L i k e s…節制

D i s l i k e s…浪費。人類の敵足りうる存在。

A n t e c e d e n t s…AC3SLラストボス、もう一つの管理者にしてその統括意識プログラム『IBIS』がマブラヴ世界に渡った存在。鑑純夏に酷似した肉体で人間として転移した。

アルビノと思われるが紫外線の影響はない。

頭のまわりは早く香月と双壁をなす。

如月グループ総帥（株主第一位）にして天才科学者として君臨する。War p o t e n t i a l…機体の操縦能力でいえば伊隅みちると同クラス。ただし実際に出撃することはまずない。純粋な人間としての体なので身体能力は紳レベル。

P o s i t i o n…迎撃後衛

P e r s o n a l C o l o r…黒

Emblem…ホルスの眼
Arcana…節制

キリトリ

Name…フジワラ藤原 トシヤ俊也

Age…22

Gender…男性

Hair…刈りあげた焦げ茶の短髪。

Eye color…にび色

Looks…長頭、澄ました印象を受けるやや細い目。長身ですらりと引き締まっている。

Personality…冷静沈着。怒る時は静かにその怒りを示すタイプ。

Likes…機動性の高い機体。豆腐

Dislikes…鈍重な機体。納豆

Antecedents…一文字鷹嘴の従弟。

1988年帝国陸軍に入隊。1990年耀光計画開発小隊『耀光小隊』に配属。階級は少尉。

War potential…ヴァルキリーズ平均よりやや上クラス。総合的に優れた衛士。

Position…突撃前衛・強襲前衛

Personal Color…ダークグレー（帝国陸軍）

Emblem…日の丸（帝国陸軍）

Arcana…正義

キリトリ

Name…ヒノ日野 ヒトヨシ人吉

Age…23

Gender…女性

Hair…姫カットの黒い長髪

Eye color…糸目のため見にくいが褐色

Looks…細身の長身、糸目で顔は細い。胸は普通。

Personality…おっとり、だけど怖い。

Likes…肉と旅行

Dislikes…プライベートな時に無遠慮な人。一部除く。

Antecedents…日野家の長女。

1986帝国近衛軍に入隊。1989耀光小队に副隊長として配属。
階級は中尉。

二宮の面倒をよく見ている。

War potential…たまには及ばないとはいえ宗像を凌ぐ狙撃の腕を持つ。遠距離戦に優れる。

Position…迎撃後衛・砲撃支援

Personal Color…白（近衛）

Emblem…日の丸（近衛）

Arcana…月

キリトリ

Name…二宮 愛^{ニフミヤ アイ}

Age…17

Gender…女性

Hair…ウェーブがかった金髪ロング

Eye color…藍色

Looks…小柄。巨乳。目がくりくりしている童顔。

Personality…明るく快活。天然ドジっ子。

Likes…砲撃機。豚骨ラーメン。コーラ

Dislikes…くさや

Antecedents…米国育ちのハーフな帰国子女。

1991年帝国近衛軍に入隊、同年補充要員として耀光計画に配属。
階級は少尉

日野を姉と慕っている。

War potential…砲戦において類稀なセンスをもつ。
狙撃に関してはやや二宮に劣るものの米国育ちというハンディキャ
ップをもつともせず近衛に入隊したほどの腕前をもつ…が、いかん
せんドジなため周りからはあれでドジが治れば、とよく溜息をつか
れる。整備兵からも愛ちゃんと可愛がられることが多い。

Position…制圧支援・打撃支援

Personal Color…黒（近衛）

Emblem…日の丸（近衛）

Arcana…戦車

キリトリ

Name…中島^{ナカジマ}知代^{トモヨ}

Age…20

Gender…女性

Hair…マリンブルーのシニヨン

Eye color…鳶色

Looks…ややふくよかで丸みを帯びた女性らしい体つき。バス
トはやや大きめ。安産型

Personality…優しく、理知的。

Likes…可愛いもの。クッキー。

Dislikes…脂ぎった料理。

Antecedents…中島家の長女。。

1990帝国陸軍に入隊、同年に耀光小隊に配属。階級は中尉。
周囲も認めており有能なCP将校、グレアムムとして信頼されてい
る。

War potential…CP将校の腕は涼宮と同じレベル。

P o s i t i o n .. C P
P e r s o n a l C o l o r .. なし
E m b l e m .. 日の丸
A r c a n a .. 隠者

キリトリ

原作主要キャラへのアルカナ当てはめ
白銀武.. 愚者
鑑純夏.. 永劫
御剣冥夜.. 剛毅
榊千鶴.. 刑死者
彩峰慧.. 塔
珠瀬壬姫.. 恋愛
鎧衣美琴.. 運命の輪
香月夕呼.. 魔術師
本編プレイしてこんな感じかな、と当てはめていったかんじです…

現在までのオリジナル人物について（後書き）

原作キャラにどれを割り振るか悩みましたがこうしました。感想と
いうよりご意見お待ちしております。次の話は今週中にできると思
いますのでお待ちを。

8th Stage: Horse play again

8th Stage: Horse play again

空調が快適な密室の中で、白いメッシュがかかった黒髪の青年は煙草を吸っていた。

贅沢な嗜好品ではあるが、その中でも安物の合成紙煙草はあまりいい味はしない。だが青年はその懐かしい煙を肺に入れ、静かに吐き出していた。

これを吸い始めたのは…表向きは貿易会社、実際は情報局に勤めていたある親父さんからもらったのがきっかけだった。

ああ、いつぞやの基地での一件だったか。

「…やあシロガネタケル。こんな所で何をしているんだい？」

「…鎧衣課長、別にオレが何をしていようと関係ないと思いますけど」

帝国軍に返還された横浜…否、白稜基地で武は屋上から廃墟となった横浜の街並みを眺めていた。

時刻は午前6時、日もようやく上がり始め普通ならもっと早い時間に点呼があり、食事を取りにPXへ向かわなければならぬのだが今日は休暇を申し渡されており、時間的余裕があった。昨日の戦闘の疲れと興奮もあり、日々の習慣で目が覚め手持無沙汰となった彼が屋上に向かったのはそのためだ。そして今、手すりに手をかけ朝やけを眺めていたのだ。

音もなく、気配もなくいきなり背後に姿を見せるのはこの鎧衣左近のよくやる手だった。会話のイニシアチヴをいきなり現れる、という動揺からまくしたて一氣に握る…それがこの人のよく使う会話術だった。

「なに、桜が綺麗なんだな。久々に見てみようと思ったのだよ。知っているかね？古くから桜の木の下には死体があるというがあれは」
「西行桜、それを基にした梶井氏の小説…でしたっけ。らしくないですね。去年もした話ですよそれ」

む、と男は言葉を詰まらせた。西行桜：西行法師が末期は花の、桜の下で眠りたいという歌で有名な桜だがそれを元にホラーに仕立てたのが梶井氏の作品だった。去年はちょうど今年ごろ、香月博士と話しているときにそのネタを持ちだしていた。

「ははは、シロガネタケル。なら西行桜と言って指すものは弘川寺の桜以外にもある。それを知っているかね？」

「知るわけないでしょう…文学を読む時間があればマニュアルを読め、指南書を読めっていうくらい忙しかったんですよ？それに入院している隊員達の分まで報告書出さなきゃいけないし」

そう、武はつい先日佐渡島の間引き作戦を終え帰還していた。もはや単独での佐渡島奪還はほぼ不可能であり、そのため国連が推進するG弾を用いた戦略を採用せざるを得なくなったために行われた帝国主導では最後の間引き作戦である。そしてその際、鎧衣美琴、彩峰慧の二名が負傷し、帝都病院に搬送されていた。彼らの代わりに報告書を出すのも部隊長たる武の役目だった。

「西行桜の別名は枝垂れ桜もしくは糸桜。これはなぜかというと京都には西行が植えた、西行がそれを見て歌を詠んだという桜があったんだな」

「それなら全て西行桜、ともいえるんじゃないんですか？日本じゃ桜といえば山桜、ソメイヨシノ、枝垂れ桜が殆どでしょう」

その桜も今はだいぶ減ってしまったが、と武は言いかけたがそれが彼の口から出ることはなかった。所詮言ったところでまたのらりくらりと関係ない話に持っていられるだけである。そしてそうやって本題から話を逸らし続け、キレるギリギリのラインで本題を引っ張り出すのがいつものことだからだ。

そして気になったのである。帝国情報部の重鎮ともいえる彼がなぜ今この基地にいるのかが疑問に思えたからだ。

白稜は、国連軍横浜基地は嘗ての規模を失い、帝国の一基地として機能していた。反応炉こそ研究のためとして維持されているが、配備されている戦術機や兵力はオルタネイティブ4が継続していたころに比べはるかに劣っているのは言うまでもない。

それだけ、帝国がこの基地に配備する戦力がなかったのだ。

そんなやや閑散とした基地になぜこの男がわざわざ、しかも桜の話題なんて出すのか：それが疑問だった。

「枝垂れ桜の枝が垂れるのは上を向くための復元力がないからだそうだ。天高く伸びようとしても枝がその自重を支えきれないがために下へと垂れる」

「へー、そうなんですか：ってオレが聞きたいのはそうじゃなくて」「西行は、桜を愛していたそうだ。娘を廊下から蹴飛ばしてまで出家してその生涯でいくつもの桜を詠んだ歌を残した」

武は喉元まで出かかった怒りの言葉を飲み込んだ。いまの鎧衣課長の顔は：いつものように笑顔でのらりくらりと追及をかわすあの顔ではなかったからだ。

「なあ、シロガネタケル。西行はなぜ桜を好きだったんだろうな。桜を手放した娘と見立てていたのだろうか。かつての友人たちや妻とと思っていたのだろうか」

鎧衣左近の視線の先には白稜の咲かない桜：英霊たちが眠る場所があった。不自然な会話の内容から察するに、それは、すなわち。

「：美琴がね、逝ったよ。君のところにも正式にその報告が来るはずだ」

「！そん、な：美琴が！？嘘、だろ：冗談はやめてくださいよ、鎧衣課長」

「私がそこまで性質の悪い冗談を言うとても？」

だが、帰ってくる返事はそれが嘘ではないことを示していた。だが武にはそれが信じられなかった。彼女とついこの前話をしたばかりだった。そう、病院での通話越しにまた帝都でみんなと買い物に行こうとはしゃいでいた彼女が、そんなはず：

「すでに限界だったらしい。佐渡島の傷が：ね」

「そんな：でもあいつは昨日あんなに楽しそうに、退院したら買い物に行こう、たまや委員長と一緒に退院する彩峰を連れてみんなで遊びに行こうって：そう言っていたんですよ！！元氣そうにいつもの調子で笑いながら：！！」

「：深夜に急変したらしい。医者が言ってたよ：あんな笑顔で話せるのが不思議なくらいだったと、な」

左近はただ表情を変えず淡々と告げていた。視点は咲かない桜に固定されたまま、ただそう話していた。

「…それで、だ。シロガネタケル。君に娘からの預かりものがある」
「遺書…ですか？オレに？」

「そうだ。私宛のものは読んだ。ここに来たのは君にそれを見せるためだ」

鎧衣左近が懷から出したのは白い封筒だった。そこには震える手を必死に動かして書いたであろう白銀武様への文字があった。

彼女が最後に残してくれた言葉。武はそれをどうしても読まなければならぬと感じていた。小隊長としても、207Bの白銀武としてでもなく、ただ一人の白銀武として。

内容は、あいづらしいものだった。そう、本当にあいづらしいほんの少しの言葉。

好きだったよ。今までありがとう、タケル。

最後の力を尽くして書いたのであろうそのたった数文字を見た武は膝をついてしまった。どうして、今頃になって…そういう思いもあった。冥夜と契りを交わし、そして旅立つ彼女を見送って…それから、鎧衣がそんな話を、そんなそぶりを見せたことは一度だってなかった。ただ笑って武や彩峰達前衛組の背中を守り抜いたムードメーカーの制圧支援。それが鎧衣美琴だった。

そして彼女が…最初の、207BのKIAだった。

「何…で、なんで、今頃になって…こんな…こん、な…」
歪んだ文字に滴が垂れる。武にはそれを止める術がなかった。そしてただ黙して桜を眺める父親にも。

ただ屋上には一人の男の慟哭と、ただそれを黙って聞き届ける父親がいた。

「…武君、吸うかね？」

武が落ち着いてきたところに、鎧衣左近は武に一本の煙草を差し出した。安物の合成紙煙草、味はさしていいものではないと同じ基地の連中からは聞いている品だった。

武はそれを黙って手に取り、啣えようとする…だがライターがない。と、そこへ火が差しだされた。

「…ありがとうございます」

紫煙を吸いこみ、吐き出す…武の初めての煙草の味は、同僚の言葉通りあまりいいものでもなかった。だが、心地よい沈黙の中で吸う煙草は不思議と武の心を落ち着かせていた。

「…まあ、小さい夢だったんだよ。あの娘の婿とこうやって煙草を吸うというのは、ね」

紫煙を吐き、苦笑いする鎧衣の顔は武が初めて見せる顔だった。

「どうかね？ 味の方は」

「…まずいっすよ、よく吸えますねこんなもん」

「はっはっは、正直で何よりだ武君。まあ、人生幸せでいたいなら正直でいなさいという格言もある、英国のだから」

そう言って鎧衣左近はつかつかと歩み寄り、「これは本来なら息子のような娘に渡すはずだったんだが、息子に預けるとしよう。お守りだ。持って行きなさい」そう言って胸ポケットに何かを押し込んで去っていった。

その時の品は、後々の戦闘で自分の身代りになって碎け散ってしまいうもう手元にはない。だが、あの時の鎧衣左近の顔を忘れることはなかった。

父親の、息子に対する顔だった。

それ以来、吸い続けてきているかと武影は一人目を閉じ黙考していた。

安くて不味い煙草の味も、あの時の痛み…自分が守るものの重さを思い出すのには十分なものなのだから。

「霧技官、そろそろ管制ユニット前面部の装甲を取り外すんでハーネスをきっちり締めていてください」

「了解、いつでもどうぞ」

本来、ベイルアウト不能時は内部の強化外骨格でたたき壊して外に出るのだが今回はしっかりとスタップも設備も整った環境だ。そんな乱暴に壊す必要はない。若い女性整備兵の声に答えた武はしっかりとハーネスを確認し、ゆったりと構えていた。

わずかな振動とともに溶断された前部装甲が取り外され、視界が開

ける。空調の利いた快適な室内の空気は一気に消え、肌寒い風が容赦なく武影の体と煙草に吹き付けてきた。

「あ！何煙草吸っているんですかー、危険ですからやめてください。それにその機体巖谷少佐のなんですよ！」

「停止中だったんだ、そう堅い事言わないでくださいよ…っ」と

むすっと膨れる整備兵をなだめ、携帯灰皿に吸い殻を入れた武影はゆっくりとタラップに降り立った。

ふと、誰かからの視線を感じる。横に目を向けるとそこには厳つい整備班長：オイルで汚れ、古臭い丸メガネをした壮年の人物だ。おそらくはこの瑞鶴の整備を任されているのだろう。

「…坊主、お前さんさっきのアレ、分かっててやったのか？」

「…ただ、第1・5世代機：それと第2世代機との壁をはっきりしたかったから。それだけです」

その答えに整備班長はふう、とため息をつくとまっすぐ武影に目を合わせた。それに込められていたのは瑞鶴を壊した武影への怒りでもその機体を持って陽炎を退けたことへの称賛でもなかった。

「やはり、第3世代の壁は厚いか」

「ええ、94年に間に合わせられはしてもその先が問題になるでしょう」

その言葉に整備班長は眉を顰める。武影が伝えたかったことはすでに伝わっているようだった。

「坊主なら、どうする？」

「各部装甲の軽量化、管制ユニットもCPUを交換しないと反応にラグが出ます。手の電磁伸縮炭素帯も強度を向上させないと射撃時

の照準のブレが大きくなるでしょうね。特に120mmの精度が問題です」

「やはり、か：36mmは？」

「概ね36mmの掃射には耐えています。ただ手腕のフレームの方が射撃中の柔軟な動きに対応できませんね。あらぬ方向に曲がらないだけましですけど」

整備班長はむう、と唸ると胸ポケットから手帳を取り出し、すらすらと何かを書き上げていく。そして一枚のメモ紙を破り、武影にそれを渡した。

「話はすでに『上』から聞いておる。わしらではなんともできんのが癪だが：頼んだぞ、如月の」

「了解です：それでは」

そのメモ紙を受け取った武影は敬礼を返すと作戦室に向かった。整備兵から簡略の報告書を受け取ることも忘れない。

鎧衣左近は娘を支えきれなかったことを西行の桜に例えたのだろう。俺は、支えきる。そのための耀光計画介入なのだ。

：咲かせて見せる。満開の大桜を。

武はそう呟くとブリーフィングルームへと歩みを進めた。

その頃のブリーフィングルームでは戦闘ログの確認、各機の連携の確認が行われていた。

「ふむ：藤原。最初の機動をどう見る？」

「完璧に読まれていた、と言うべきでしょう。真っ先に落とされた自分が言うのもなんですけどログを見る限り索敵圏に入るまで全力で駆けています。そしてリーダーに捕捉される危険性が上昇した段階で地形追隨飛行（NOE、Contour-Flight, Nap-of-the-Earth。Contour-Flightの場合はほぼ一定の対気速度で、障害物や地面に沿うように高度を変化させNap-of-the-Earthの場合は高度、速度両方ともに変更する）に切り替えています。僅かに減速はしてますけどかなりの高速で：普通なら障害物に頭を突っ込んでいてもおかしくないですよ」

「その上での煙幕弾、ね。もし散開が遅れていたら私たちも纏めて落とされていた可能性は低くはないでしょう：あそこまで予測していたのであれば」

「それだけでも巖谷少佐にしかけた最後のアレの為の布石だったんだから恐ろしいと思うんだぜ：少佐もあの状態で落とすってすごいと思うけど」

戦術面での見直しはすでに終わっていた。今回単騎にやられたということは彼らのプライドを容赦なく抉っていたが冷静さを取り戻すくらいの時間はあの一連の騒ぎで出来ていた。

「：しかし、こう見てみると異常ですよ。本当にあれ少佐の瑞鶴だったんでしょうか」

「間違いなく少佐の、ですわねえ：ただこれのログを見る限り、理論値の最大を発揮し続けているなんて常識じゃ考えられませんけど」

そう眉をしかめながら疑問を呈する中島中尉に日野中尉がやんわりと答える。しかし中島中尉の眉間の皺が解けることはなく、代わりに周囲からはどうしようかというため息が聞こえてきた。

「どう考えても異常だぜ？あの時の92式を避けたときの機動：各フレームに満遍なく衝撃を分散してなおかつ前方に全力噴射なんてどう考えても出来ないと思うんだぜ…」

「二宮、まあ言いたいことも分かるがこれが事実だ：とは言えあんな繊細な操作をここまで高速でするなど常人では不可能だろうが」

「しかし少佐、データとしては今後の開発において重要なものになります…：現行機でこれを一般の衛士にも可能にするにはかなり厳しいのでは？俺も正直ここまで出来るとは思えません」

各フレームに衝撃を分散する、という受け身のような技法は一般の衛士も可能となれば非常に有効な技術だ。一か所に集中して動きが取れなくなるより分散して機動性能は落ちるが動ける方がはるかにましだからである。

「TSF-Xに是が非でも導入したいとは思うんだが…藤原の言うとおりでこの処理計算を果たして機体が出来るかどうかが問題だな」武影がやって見せたのは『武影だから出来る』技法にすぎない。人間が機械の上を往く、というのは別におかしい話でもないのだ。世界最高品質の部品が熟練の職人の手でしか作れないように、戦術機を動かす上で人間という『ハードウェア』がその性能を左右するウエイトは大きい。

それを他の衛士、可能であれば新兵にも可能にするというのが兵器開発の目的である。

事実武影がやって見せた着地からの全力噴射跳躍は極めて難しい計算から求められた動きである。それを感覚で行っているのであろうが…

「しかし瑞鶴でここまで：というよりあれが瑞鶴の限界だろうな。データを見る限りそうとしか思えん」

「少佐：」

この結果が瑞鶴という第1・5世代機の限界である、というのは皆が感じていた。それは当然である。あれと同じこと、もしくはそれ以上をできる衛士が存在する可能性は限りなく0に近いと感じていたからだ。

「まあ、現行の瑞鶴という話だ。これからの改良によってはまだアレ以上の性能を引き出せるやもしれん。そのためにも第3世代機の開発は急務なのだ：いまだ撃震で戦う前線の者たちのためにもな」

米国マクダエル製造のF-4ファントムは現在も各国で細部の調整を繰り返し、日本帝国では77式戦術歩行戦術機撃震として、ソビエトでは改良機MiG-21バラライカとして、統一中華戦線ではJ-8殲撃8型としてなど広く運用されている名機である。だが現在米国では退役が進み、他国においても旧式という認識は変わることはない。そしてそれら旧式に頼らざるを得ないのが技術力のない各国の現状であり：それらを打開するためにも第3世代機開発による新規技術の実戦証明、そして現行機の改良が不可欠なのだ。

とは言え帝国国内の第1・5世代機代表格ともいえる近衛の瑞鶴の限界を見せられた彼らの心中は重い。これだけ出来るのであれば十分、と思うのかもしれないが逆を言えばこれ以上の事は出来ないということなのだ。

と、そこで日野中尉がはっとしたように声をあげた。

「TSF-Xの開発進捗はたしか8割って言っていましたわね：もしかして霧技官が来たのは？」

「…その8割を4割まで減らし、更に高性能化を進める、ということだ」

巖谷の発言に皆が絶句した。後2年…というより量産が始まろうとしている今になっての仕様変更である。これに驚くなどというのが無理であろう。

「どうしてですか！！TSF-Xは確かに未完成な部分が僅かに残るとはいえ第3世代機として各国に喧伝できる性能を持った機体であるのは明らかです！先行試験量産も始まる直前なんですよ！！それを今になって…！？」

「確かに藤原少尉の言うとおりですわ。これ以上の高性能化は並行して進められている飛鳥計画のTSF-X2の性能を凌駕することになります。それにコストも比例して要求範囲内に収まるとはとても思えませんわ」

彼らの指摘は尤もである。帝国軍主導で進められている耀光計画とは別に近衛主導で進められている飛鳥計画…後にType-00を生み出すその計画の要求性能は耀光計画に課せられたものよりも重い。だが8割にまで進んだ開発進捗を4割に落としてまで高性能化をするとなるともはや飛鳥計画で開発されている機体となんら変わりなくなってしまうのだ。

当然、近衛と帝国軍のハイロウミックスの観点から言えば大問題である。そうなれば飛鳥計画の要求性能も比例して跳ね上げざるを得ない。そう、もはや第4世代と言えるレベルにまで。

「…飛鳥計画もおそらく同様に要求性能の見直し、進捗率の変更が行われるだろう。そしてそれは認めるに足る技術が提供されたからだ…分かるな？」

「：霧技官の言っていた『如月』ですか」

藤原の答えに巖谷は頷いた。このタイミングでの技官：開発衛士の参入というのは非常に不自然である。そして彼のもつ軍部に関係ない一個人としての圧倒的な操縦センスを鑑みるに：おそらくは彼の所属する『如月』が現状を打破する画期的な技術を富嶽に提供したのであろう。

「：TSF-Xは？」

「もはや別物、というレベルにまで性能が向上するだろうとの話だ。設計案では諦めていた拡張性も確保できる見通しが立ったらしい：外観の変更は殆どなしとのことだったがな」

それには巖谷以外の：この場でそのことを初めて聞かされた面々が啞然としていた。それはそうだろう、国内技術ではこれが限界とまで言われたTSF-Xが現実的に改良されるというのだから。

「まあ、概念実証機の改良についてはまた正式な発表がある：すでに富嶽の試作ラインは稼働体制に入ったそうだしな。新しいTSF-Xを動かす日も近い：それまでに我々も腕を磨かなければならん。あの新人にばかりいいかっこをされるのも腹に据えかねるだろう？」
「そういうと巖谷はにやりと笑った。お前らも付いてくるだろう？」
「そう目が言っている。そしてそれに対する返答はただ一つだった。」

結局武影がブリーフィングルームに到着したのはおおそデブリーフィングが纏まってからだだった。それに対し何名かは遅いと不満を漏らしたが巖谷は特に咎めはしなかった。しっかりその手に報告書が握られていたからである。事情を察した彼は不満を言う部下をなだめ、改めて武影を迎え入れた。

「では、解散とする：霧技官に社内を案内してやってくれ、中島中尉。他のものは：まあ、あれだけの醜態を見せてしまったんだ。午後は覚悟しておけ」

青ざめる各隊員をしり目に、冷や汗を流しながら中島中尉と武影は連れだって退室していった。藤原達小隊各員がその後の食事を軽いものにしたのは言うまでもない。そして、つい巖谷少佐の誘いに乗ってしまった事を僅かに後悔していた。

「えーと、こちらが富嶽に用意された隊舎になります。霧技官のお部屋は6号室になりますね」

「武影、でいいですよ中島中尉。同じ釜の飯を食べることになるとはいえ外部社員です。貴女が公務以外でそこまで礼に気を配らなくてもいいでしょう」

一応、軍人なので公務、というのはあながち間違いではない。国家（公）に属する軍に務めているのだから：というのは些か暴論になってしまうような気もしなくはない。

とまあ頭の中で突っ込みながら武影は昔のようなさわやかな顔で気を楽にするよう中島中尉に話しかけた。

「いえ、ですがその：霧技官は大尉待遇と聞いております。外部から招聘された方にも礼節を払うのは帝国軍人としても当然のことであり…」

そういう中島中尉は帝国軍という理由だけではなく別の意味でこちらに対し堅い態度をしているように武影は感じていた。

頭の中にある人事のリストを開く。政界、財界にある『中島』の名

を持つ者の中から特に富嶽に関係する人物を洗い出し…一つの『中島家』に突き当たった。

「…あなたの兄上の命令で来たわけではありませんよ」

「!どうして、それを…」

「それを話す事こそ野暮な話です。別にあなたが…公人としての中島知代中尉がどうであろうと今は関係ないでしょう。すくなくとも、今は休憩時間なのですからね。それより飯です、PXに案内していただけますか? 中島中尉」

あっけらかんとした態度で言う武影の態度に目を細める中島だったが、軽く溜息をつくと言を先導しPXへと歩き始めた。

「まったく…いえ、そういうのであれば案内しますよ…兄が関わっていない、というの?」

「真実です。俺はあなたの兄と直接の面識はありませんから」
その言葉に肩を震わせた中島であったが小さくついてきてください、と言うと再び歩き始める。

やれやれ、腹芸は得意ではないんだけどね…そう武影は苦笑していた。

そして耀光小隊の面々についてあれこれ聞きながら、PXに到着する。どこの基地でも言えることだが、流石に昼のこの時間帯の賑わいぶりは凄まじいものがある。言ってみればこれもまた戦争なのかもしれない。

「…中島中尉、このPXのお勧めってありますか?」

「え? 霧技か…ひゃう!？」

中島が見たもの。それは獲物を見つけた猛獣のように爛々と輝く武影の横顔であった。そして小さく聞こえる腹の虫は……まあ、雰囲気台無しだが誰がのものは一目瞭然だった。

「あ、あの、特にそれといったものは」

「昨日からあの爺さんのせいで書類を貫徹で書き上げていてね、食事もゼリー状の栄養補助食品しか食べれていないんだ……すまない、それで今日のお勧めは？」

「……サバ味噌定食です」

「よっしゃああああああ！！！！」

猛然とダッシュし、子供のような笑顔で列に並ぶ武影に中島は茫然としてしまった。

あれが巖谷少佐……耀光小隊と互角に戦ったエース？

通信越しに『恐怖』を味あわせたあの衛士？

ありえない。と。

なんせ目の前にいるのは食事を楽しみにわくわくしている、という表現が最も正しいと言えるような人物だ。到底さっきまでの腹黒い会話をしていた青年だとは到底思えない。

「いや、サバ味噌定食って大好物で。あーよかったー朝飯抜いてまで頑張ったかいがありましたよ」

「え、いや、その…はあ、さいですか」

もしかして気遣ってくれているのか、という思いも浮かんだがそれは違うと勘が訴えていた。だってどう見ても目の前のは給食を楽しみにしている小学生のような目をしているんだもの。これが気遣いからの演技だとしたらアカデミー賞が取れるだろう。

中島はついついくすつと笑みを零してしまった。別に咎める人物はいないし笑われた人物も咎めるそぶりは見せない。まじめに考えるのがバカバカしくなるくらいだった。

「それで、この料理の腕は？」

「うーん、普通だとは思いますが？ まあ私自身帝国に入隊して国内ではここ以外のPXで食べた事はあまりないんですけど…」

武影がふむふむ、と唸っているうちに順番が来たようだ。迷いなくサバ味噌定食を注文した武影に続いて中島は焼き魚定食を注文する。

「いやーよかったよかった…中島中尉は国内では、と言っていましたけど国外での任務経験は？」

「ええ、中華戦線の方の作戦に参加した事があります。帝国の実験部隊、としての参加でしたけど」

適当なテーブルを見つけ、席に座る。武影は足早に水をとりに行き、中島の分も運んできた。

「へえ、中島中尉は中華の方に…PX，どうでした？ あそこは大抵北京、四川、広東、上海派で別れるんですけど…どちらの基地でした？」

「えと…成都の方に」

「そこだと四川派ですね。カシュガルの押さえに？」

「ええ、そんなところです。中華の支援下で行われた作戦でしたけ

ど」

ふむふむ、と言ったところで食事を始める。武影はガツガツ、といった感じで中島は行儀よく食べていた。まあ、注文した量が違うのもあるのでペースが違っていても落ち着いて食べられるものだ。

「あそこは辛かったでしょーもろに四川派のところですからね。沿岸部なら広東派とか口当たりの優しいものがあるんですけど、そっちの方がよかったんじゃないんですか？」

「そこまで贅沢は言ってもらえませんが、まあ、たしかに辛すぎて小隊の皆さんと厨房にお願いしに行ったこともありますけど……」

「いや、でも対応してくれるからまだいいんですよあそこは。英国とか最悪ですよ？調整しようがないんですから」

そう言って武影は笑う。釣られて中島も笑いだす。たしかに辛さの調整は出来てもまずさの調整は出来ないのだ。

「霧技官は海外の方にも？」

「禁則事項、ってやつで。少しは秘密があった方がカッコいいですから」

にやり、と悪戯っぽく笑う武影に中島はまたまたそんな事を言っていると突っ込みを入れる。どうやら食事のときはすこぶる機嫌が良くなる人なのだろう、と中島は思った。

「まあ、国内も面白いんですよ。八尾の方は知ってます？あそここのタコ焼きはいいですよ、合成の割においしいんです」

大阪の八尾はかつて航空基地があった場所で、現在は京都を守護する戦術機の配備拠点にもなっている。規模はあまり大きいものでもなく、海外出兵が今のところ主な戦闘任務である帝国は大きな港湾施設を持つ呉などに力を入れているのが実情だ。

「へえ、そうなんですか。大阪の方は行った事ないんでよくわから

ないんですけど…本場ですからきつとおいしいんでしょうね」

「いやあ、通販で取り寄せた冷凍タコ焼きでしたから自分も知りませんが」

ぶは、と中島の口から水が噴き出した。少々気管に入ったらしくせき込んでしまう、まさか水を飲んでいるときにネタを振られるとは思わなかったのだ。

「き、霧技官。水を飲んでいるときにそういうのはやめてください！不意打ちにもほどがありますよ！！」

「い、いやごめん。悪かった。大丈夫か？」

あわててハンカチを渡し、テーブル越しに背中をたたく武影。その様子は周囲から何やってんだかと呆れ半面面白半分で見える目が多かった。

「もう…霧技官、そういう冗談はTPOをわきまえて発言してくださいね」

「ああ、すまない。反省している。この通りだ」

頭を下げる武影に中島は悪戯っぽく笑うと武影がいまだ手をつけてないサバ味噌をさつと自分の皿に移す。武影が明らかにシヨックを受けているが彼女はそれを見たらうえで「お返しです」と笑っていた。

赤城に吹いた六甲おろし。それは彼女のわだかまりをいくらか吹き飛ばしてくれたようだった。

8th Stage: Horse play again (後書き)

まじめキャラの口調はどうしてもかぶりやすい。しゃべり方で不自然なく個性を出す事のなんとむずかしいことか…
誤字報告、感想などお待ちしております。

9th Stage: Money Game

9th Stage: Money Game

セレ・クロワールは帝都新宿にあるモノリスビルの一室にて無数の書類を決裁していた。

御剣の息のかかった物件であるがそれは仕方ない。まあ、新宿の一等地にあるこのビルが持つ複数のフロアを占有できたのは大きい。彼女が立ちあげる企業は二つの大きな部門を抱える事になるのだから。

会社を立ち上げる、と簡単に言うがそのプロセスというものは非常に煩雑であり普通は司法書士、行政書士の手を借りて行う。無論、独力でもできるが非常に煩雑なため協力者がいる事が望ましい。

それに彼女が立ちあげた会社も通常の株式会社とは違う。かといって所有と経営が一致している合同会社とも違う：株式譲渡制限会社である。

それはすなわち全ての株式の譲渡について取締役会などの承認を必要とする旨を定款：社団法人または財団法人の目的・組織・活動・構成員・業務執行などについての基本規則、また、それを記した書面・記録：で定めた株式会社である。

なお、一般的に言う東京株式市場などに上場している会社を公開会社と言う。また上記のような株式譲渡制限会社を非公開会社ともいう。

これは簡単に言うと一般的な株式市場に上場しない、信頼のおける人物・法人間でのみ取引可能な株式で成り立つ会社だ。

よって：この場合セレ・クロワールと霧武影、御剣家、そして彼らが認める僅かな法人・個人がその株主足り得るのだ。

無論、業務拡張に伴い新規株主を求める場合や株式を譲渡する場合も取締役会で承認が得られなければ認められず、株式を手に入れてもその株主が好ましくない人物であれば承認しないことも可能である。

合同会社と混同されがちだが、合同会社は取締役会などの監視機関を必要としないのに対し株式譲渡制限会社は最低でも株主総会と1名の取締役という機関は絶対に必要となる。

セレの狙いとは帝国の内憂外患が立ち入ることが出来ないようにすること。そしてその為に株式譲渡制限会社は非常に優秀な駒だった。

そう：万が一自分が、武影が動けずとも御剣家、それに連なる名士が動ける体制だからである。合同会社に比べれば硬質的ともいえる体制だが、現状の帝国を鑑みるに柔軟性よりも硬質的な安定を求めるのは妥当な判断だった。

とは言え、その会社設立定款の草稿を用意するだけでも骨が折れる。ざっと基礎的な部分だけでも37条もの条文が最低限必要であり、裏を搔かれないようにするためには更に多くの条文を加える必要がある。

しかしながらこういう法律関係には滅法強いのがセレだ。
なんせ彼女は過去に今回立ち上げる企業とは比較にもならない：ま

さしく『国家の柱』というべき企業を複数立ち上げさせ、更には同時進行で『国家経営』を成し遂げているのだ。

その国家は不幸な事故により滅亡してしまったがそれ以降も世界を相手取って商売をした経営センスと交渉能力がある：しかもこの場合は相手と直接顔を合わせずに、という難題もクリアした上でだから恐ろしい。

六法全書を片手に定款の草稿を書き上げていく速度は異常ともいえ

た。

しかし必要なのはそれだけではない。株式会社設立登記申請書、本店所在地決定書、就任承諾書、調査報告書、財産引継報告書、払込があった事を証明する書面、資本金証明書、別紙：これだけの書類が必要である。

財産引継報告書は金銭以外の財産：それこそなんでもいいのだが例えば不動産や特許権などを会社の現物出資とする際に必要なもので純粹に金銭のみの出資であれば不要だ。

無論、セレはすでに特許を幾つか申請、確保し現物出資としている。IBISもこれに入るのだが少々裏技を用いた。

そうしてあの御剣家の会談から僅か数日で会社という体裁を確立させたそのセレの手腕は、御剣家を纏める雷電をも驚嘆させるに十分な働きだった。

そして現在、彼女の手元には新規取引の為の大量の決裁書類、リクルートの為の雇用準備の書類などが山のごとく積まれている。

「…ふう、さすがに疲れましたね。お茶をいただけますか？」

現在の秘書は帝国陸軍から紹介してもらった人物だ。当然、その首輪は『セレのモノではない』。簡単にいえば帝国側からの監視役、と言ったところだろう。そしてセレはそれを承知の上で彼女を秘書として使っていた。

秘書は手慣れた手つきで紅茶を入れ、セレに差し出した。空気を十分含ませ、じっくりと蒸らし、香りの引きたった上手い淹れ方だ。茶菓子は帝都老舗のカステラである。

香りを楽しみ、味を楽しむ。リラクゼーション効果とカフェインによる眠気覚ましは休憩のための飲料としても、商談の際に出す茶としても申し分ない。

「この後の予定はどうなっていますか？」

「はい、本日1500から県環境政策課との協議会、1700から県消防本部を交えての意見交換会、その後1900に料亭『水郷』にて県有力者との会食の予定となっております。また本日の会食には猪名川会の津野田氏、住義会の濠氏、また帝国銀行の三枝乃氏もお見えになられるとのことですよ」

「そう、猪名川と住義は予想通りだけど帝銀（帝国銀行）も来るなら少々手間取るかもしれませんね…武影の方は？」

「はい、霧武影様は無事耀光小隊との模擬戦を終了した模様です。小隊各員の撃破後、巖谷少佐との一騎討ちに敗北し万事予定通りとの事です…」

「いえ、貴女が疑問に思うのも当然かもしれませんが予定通りです…流石はSランク、といったところですね。彼からの報告は他にありますか？」

「はい、眠ったネズミがいるのでしばらく様子を見るとの事です」
「…そう、ありがとう」

秘書は報告の間中眉をしかめていた。それも当然ではある：最初はいきなり上司からお前首な、この会社の秘書に行け、と言われて来たようなものだったせいもあった。今のしかめっ面はセレが会う相手の事で憤慨しているのだ。

「：そんなに私が会う方々が不満ですか？」

「社長、お言葉ですが猪名川会、住義会はともに指定暴力団、しかもこの臨席者の中には右翼団体の幹部の名前もあります：なぜですか？」

「そうですね：簡単な話をしましょう。街とはなんですか？」

「街：ですか？多数の人間が集まり、それらに必要なものを供給しそしてより高度な活動を行うための場：でしょうか」

「そうですね、一般論としても正しい答えだと思います。では『街』に必要なものは？」

「住人、法と秩序、経済の基盤たる物流、そして土地：でしょうか？」

セレは小さく溜息をつくと紅茶を一口啜った。

「：抜けています。娯楽が必要です。かのユウエナリスが例えたように民衆とは日々の糧と見世物があれば事足りるものです：経済的・精神的観点からすればそれに『日々の仕事』というものが入りますね。法と秩序はもちろん必要ですが、人間ガス抜きをしなければ勤労意欲と言うものは一定の水準を維持できません。そういった意味で、今回の工場建設には彼らも一枚かませるという事です：無論、法の支えきれない部位を担ってもらおうという意味もありますけどね」

「しかしこれは…これでは談合ではないのですか！」

「いいえ、だから会食なのです：私たちと彼らにはそれ以上の関連性はないという事ですよ」

なぜ暴力団という組織がこれまで隆盛を保ってきたのか。それはこれら事業の闇の部分が大きく関係している。

彼らが不審な動きをすれば警察がたちどころにそれを鎮圧する：という話はない。

まず『何かが起きてから』警察と言う者は動くのだ。例えばその事業に対し反対する勢力が行動を起こす事を知っていても、彼らが実際に行動に移し被害が発生しない限りそれを止める術はない。被害が発生しても証拠がないと言って動かない事も多い。

街宣などの行為もそういったものが発生しないと止める術はない。しかも『個人・法人をひどく誹謗中傷するもの』であり更に『裁判所による命令』がなくては警察も止めることはない。言ってみれば裁判所の命令が出るまでの間言いたい放題できるというものだ。

無論、そうなれば事業にかかわる人間の勤労意欲は減退、周りの住民からの印象も悪くなる。

特に工場など騒音が発生し一般市民に迷惑をかける類のモノならなお印象は悪くなる。

それ故に、密約じみた暴力団との契約が存在し、対抗勢力のそういった動きを彼らが押さえるのだ：非合法的な手段を用いて。

またそれだけではなく繁華街の闇：例えば風俗店などから上がる莫大な税収。これが彼らの存在を黙認させている一因である。

「まだここに来て日が浅いでしょうから知らないのだとは思いますが：今後の為にも覚えておいて下さい。それで、警備部の人員は？」

「…人数は規定規模に達しました。現在厚木の方で帝国軍の訓練に

参加しております。詳細はこちらに」

平然と暴力の行使を暗に示すセレの言葉に秘書は背筋に冷たいものが走るのを感じた。

それはこれからどっぷりと浸かることになる経営の闇を垣間見た瞬間だった。

秘書はその内心を表に出ないように抑えつつ手元の資料をセレに渡す。その資料には国内外の退役軍人、また現役から引き抜いた元軍人の名前が列挙されていた。同時に新規雇用の警備員という名の兵士もそのリストの3割を占めている。

その中には素行不良といった問題から懲罰部隊（軍内で問題を起こした人間が配属される部隊。大隊規模で扱われることが多く、基本的に殿や囀など死亡確率の高い場所に配属される）経験者も含まれており、一癖も二癖もあるはみ出し者：腕があるだけに扱いにくい連中も集めているといってもいい。

普通の退役軍人は教官職や社内警備部に、問題ありの軍人は前線への派遣や非合法対策部への配属、新人は訓練後それぞれ必要な部署に配属、といった塩梅である。

これらの人員から『使える』人材を更に絞っていき、最終的には武影・セレの直属部隊を本社業務とは別に作るのが狙いだ。

現在のリストでは300人規模。これらの兵隊を運営していくのがセレの腕の見せどころであり、武影の出番は耀光計画終了後になる。

そして如月の中核を担うことになる重工業部門の社員数は1000人規模を想定。

工場の規模は大きめであるが稼働予定が本工場一つだけであり、大きな部品の組み立てはロボットを利用するので大量の人員は必要と

しない。

また大規模に戦術機を生産するなら人員の拡張が必要だが、部品生産で実績を積むことが先決なのでまだ急ぐ必要はない。

本社の規模は200名、総務部（総務・人事・経理）、営業部（営業・管理・企画）警備部（保安・戦略・訓練）、技術部（開発・資材・環境）にそれぞれ割り当てる。

これだけの大規模な起業である。普通なら人員の確保は問題が山積みだが『軍部のお墨付き』『半官半民』『最先端技術開発』といった謳い文句を利用しており宣伝に抜かりはない。

世間からは天下り先だと揶揄されるだろうが、実績を上げていればそのような言葉などやかみにしかならない。それに元々軍事産業とは政府と深く結び付いている。

かの国の官僚が企業の先兵であるように。

「本社の人員は？」

「現在富嶽や光菱、河崎、遠田、国内各県の大学から引き抜きを行っております：技術者は此方からというよりこぞって参加を希望しているような印象がありました」

「でしょうね。アレをチラつかせれば食いつくでしょう：技術屋なら、ね。経理関連の人材は？」

「現在目標の半数ほど契約しました。ですが新卒予定も多くまだ人員は不足しております」

「そう、本格稼働は再来年度を予定しているから4月は忙しくなりますね：特に本社人員は早急に必要です。警備部門は来年度には市場参入するからそれまでに体裁を整える必要があります：それじゃ、続きをしましょうか」

そう言って資料を返し、書類の山に向き合うセレ。彼女の紅い瞳が捉えているのは書類の山だけではない。

わずか2年で企業として確固とした地盤を持つべく5年、10年先と現在を同時に見ているのだ。

午後5時。県環境課との協議を終え、消防局を交えての意見交換会は消防本部局長の物々しい言葉から始まった。

「セレ社長、今回の買収劇は一体どういう魂胆なのか話してもらおうじゃないか」

「どういう魂胆か、と申されましても立つ工場が富嶽のものから私どものものになる、という事です」

「そういうことではない！確かに富嶽の計画同様戦術機関連部品であるという事はこの計画書を見れば分かる！」

息を荒げる局長だがそれも無理はない。彼は現在まで金ヶ崎に『富嶽の工場』が立つという事で計画を後押ししてきた人間である。それがいきなり富嶽に代わり『新興の企業の工場』が立つというのだ。それまでに富嶽から流されてきた資金…もつとも、直接的なものではないそれを勘定に入れると納得が出来ないのだ。

計画を後押しする、というのは当然反対する人間もいる。それに恨みを買った数も多い。それをこんな手柄を掠めるような方法をとられてはたまらないのは当然である。そして同時に資金を塗り取ろうとする意趣もあった。

「ええ、局長がお気になさるのも分かります。金ヶ崎に新築予定の消防署やそれに伴う予算の変更…そういえば消防車も新しく富嶽か

ら入る予定でしたね。公共事業へも少なからず影響が出る事は承知しております。現在建築が進められている県道路公団のマンション、アパートについても」

「ならばどうしてこのような買収に踏み切ったのかね。君たちも企業の端くれであるなら官との繋がりがいかに大事か分かっている筈だ。二年、三年も協議すれば金ヶ崎にもいい土地があるはず。どうしてそこまで急ぐ必要があるのかね」

大規模な工場建設、というものは莫大な資金が動く事業である。まず工場周辺にその従業員が住むための住宅が必要となり、そこに上下水道や電線などを敷くための工事も必要である。

そういった行政とのすり合わせも必要不可欠であるため、こういった工場建設には息の長い交渉が必要なのだ。

「単に時間がないからですよ、局長。こちらをご覧ください」

そう言ってセレは会議室の照明を暗くし、プロジェクターを起動させた。スクリーンに映し出されるのは一枚のスライド：『就労年齢層の増減について』という題のスライドだった。

「現在帝国では徴兵制度が執られ、経済活動に就労する学生が減っている事は周知の事実であると思います、こちらをご覧ください」
そう言って映し出されるのは1973年：カシユガルに忌々しいBETAの落着ユニットが落ちてからの帝国の動員数と民間就労者の増減のグラフであった。それには一時右肩上がりとなり、その後下降、横ばいとなった動員数と一定して右肩下がりそのままである民間就労者数が示されていた。

「ご存知のように、現在人類はBRTAという外敵に対し苦戦を強いられています。1986年に中国が統一中華戦線となり、そして

この日本帝国においても帝国本土防衛軍が組織されたのは記憶に新しい事だと思います：1990年、BETAの驚異的な東進が始まり今年度には敦煌も落ちるという予測が立てられるほどに、この東アジア戦線も危険な状態であるというのはご理解いただけるでしょう」

そして画面に表示される荒地：かつては美しい緑の生い茂っていたユーラシア大陸内陸部の様子が映し出される。そして次に廃墟となった成都などの都市：それは会議場にいる人々の表情を暗くさせるには十分な代物だった。

「このように人類が苦戦を強いられる中で同時にBETAにより失われつつあるものがあります：経済活動の根本たる資源と物流です」次に映し出されたスライドには大きく貿易額の推移が乗っていた。米国が大きく輸出による黒字をたたきだしているのに対し、戦地となくなってしまった国の惨状は火を見るより明らかなものだった。

「帝国もすでに隣国が危険である以上、安全とは言い切れません。事実EU：というより英国は海を渡ったBETAによる進攻を経験しているのですから。当然、我が国にも戦果が及ぶ危険性は十分：いえ、確実でしょう」

「しかし、だ。それとこれがどう関係あるのかね？」

局長の言葉にセレはこほん、と小さく咳払いすると話を続けた。

「先ほども申し上げました通り国土がBETAとの戦場になった場合、非常に多くの将兵や民間人：経済活動に励むべき就労年齢層が失われることとなります。そうなった場合税収は落ち込む事は自明

の理です。政府、役所といったものの運営は市民からの税收で成り立っていますので皆さんにとってあまりいい話ではないでしょう。だから人員の確保を急ぐ。まあこれはその理由の一つに過ぎません」

その言葉に消防局長はこめかみに皺を寄せた。理解はできる、だがこの工場建設でそれがどうにかできるのかといわんばかりの様子であった。それに対し県の環境課は能面のような無表情のままである。

そしてスライドが次のものに変わり、そこにはセレが持つ幾つかの特許関連情報とそれによる収益予測が書かれていた。

「さて、わが社は現在戦術企画部門において画期的ともいえる特許を複数所持しております。今回の工場ではこの技術を利用した戦術機の各パーツの製造、また当パーツを利用した戦術機の部隊による民間軍事企業としての活動も視野に入れております。性能的には正規軍のそれよりも高性能な兵器を運用できると自負しております：しがらみがありませんからね。過酷な条件下においても生存率は向上するでしょう。また、こちらの工場に訓練施設も構える予定です：ので警備部：軍事関連の部門ですが警備部とさせていただきます：はこの岩手に居を構える予定です。当然、税收はこの岩手に入ることとなります」

局長の眉がぴくりと動いた。

「軍人とは税收を元に活動しているものです。ですが民間軍事会社というものは一種の公共事業：この場合国が発注機関となり民間に資金を回すものになります。全国から集められた税收を。そしてそ

れらには当然のごとく課税がなされ：弾薬などといった物資にも課税されます。また輸送に伴う運送料など課税は多くなるばかりです」そこでセレは態とらしく溜息をついた。県職員の口元は堅いままだが目が笑っている。

「当然、軍人崩れのような社員もいることは認めましょう。治安も一部悪くなりかねませんね。そう言えば風俗業に関する課税は幾らほどでしたか…」

もうここまで来ると局長からも笑いが零れだしてきた。あくどい。悪辣。まさにその言葉が似合う手口だった。

「必要悪、大いに結構。では立地協定の確認に入りましょうか」そして顔に満面の笑みを浮かべた環境課課長のその一言から出来レースが始まる。

午後六時。出てきた県の高官や各部署長は苦々しい顔：マスメディア、そして民衆に対する表向きのアピールとしてのそれを見せながらマイクを突き出す記者にノーコメントを連呼していた。彼らの内心は語るまでもないだろう。

そして午後七時。古風な和食料亭にいかにもな黒スーツや紫シャツ

の厳めしい強面の人物や胸に金バッジの輝く老人が次々と来店していった。その中にはお忍びであると見える人物の影も含まれていた。

「猪名川会会長の津野田です、こちらが北関東地区統括長の巽：今後の相談は彼にお任せすると思いますので、その顔見せに」

「住義会会長、濠ですわ。よろしゅう：こいつが執行部の渉外委員長の河東で。猪名川会さんとこと同じく顔見せですんで」

光の见えないどす黒い目をした壮年の男達が挨拶をする。両者とも今後の交渉役となる男を連れてきているがどう見ても堅気には见えない。

「帝国銀行、金融市場局市場企画課課長の川村です、どうぞよろしく」

そう言つて挨拶したのは堅気であるはずの帝国銀行の課長である。だがこの課長、堅気にあるのかかわらずその眼光の鋭さや底の见えなさや先述の二人に勝るとも劣らない。肉親すら切つて捨てるほど過酷な金融に携わる鬼がいた。

「関東市政塾塾長の藤堂です、どうぞよろしく」
最後に入ってきたのは前述の三人とも違うタイプの老人である。だがやはり堅気の纏うそれとは空気が違う。

「如月総合商社社長のセレです。以後良しなに」
最後に挨拶した赤目の麗人にほう、と声が漏れた。だが外見の若さに似合わず丁寧な所作やその雰囲気は老練されたものを感じさせる。

なお、如月総合商社というのが如月コングロマリットの正式名称であり、武影が率いる事になるセキュリティサービスはその一部門：警備部の別称となる。

「いや、新興企業の社長と聞いていましたがこんな若い方だとは思いませんでした」

「まったく、ええもん見させてもらいましたわ。それに単なる向う見ずとも違うようで」

口元からは笑みがこぼれているがその眼は暗く、常に相手を量るような目つきである。誰も油断せず、表面上だけは親しげな会話だった。

「それで、うちら呼んだという事はどういふことか説明していただけるんでしょうなあ」

「ええ、金ヶ崎ですが一部区画に赤線を引きましたので」

その言葉に極道二名の目つきが変わる。シノギを確実に確保できる場所を提供する、と言っているのだ。

国外から増える難民、そしてそれにより生じる外国系マフィアとの確執は語るまでもない。そして彼らが形成する外国人街はシヨバ代が取りにくいものであり非常に忌々しい存在だった。

「：嬢ちゃん、からかうのも大概にな、赤線がそんな簡単に引けると思うてんのか」

言葉を荒げたのは紫シャツ：住義会会長だ。

「引けたから、引けたと言ったのですよ。そしてご両名をお呼び立てした理由はもうお分かりですね？」

「ワシらにそこへ入れ、という訳か：それだけやないやろ？」

「ええ、簡単に言うとそのでのめ事の鎮圧も含みます：組同士の抗争に関しては、此方の警備部門を動かしますのですそのつもりで」

その言葉に黒スーツの男が笑いだした。猪名川会の津野田だ。

「セレさん、何か勘違いしてませんか？抗争ってのは起こるべくし

て起きるものですよ。今回あなたは私のところ住義さんを巻き込んだ。二つ同じ稼業の人間が同じ場所に集まるって言うんです。渡世の人間がどう動くか分からない筈がないでしょう？」

「ええ、だから二人にしたんです」

「ええ根性しとるやないの。そんなに血い見るのが好きか？」

紫シャツが愉快そうに笑う。どす黒い目が鈍い光を放っていた。

そう凄む二人にセレはその氷のような微笑を持って応えた。

「ええ、少なくともこの刺身よりは」

部屋の空気が一気に冷え込む。怜悯な刃同士がにらみ合っている。だがこの空気であっても動揺する人間はいない。そんな人間ならその役職にとどまることはできないからである

耐えられなさそうなセレの秘書は別室で待機させているのでこの空気がほころぶ事もない：まあ、今の彼女は周りに怖い御兄さんがいっぱいいるので別の意味で気が気でないだろう。

と、そこで携帯の鳴る音がした。マ○ケンサンバのアレである：その音源は黒スーツだった。

「失礼：どうした」

その後二言、三言話すと黒スーツは通話を切った。鉄面皮はそのままだが首筋に小さく汗が滴っていた。

「：セレさん、貴女は確かにその眼のように血の氣が多いようだ。必要なら別ですが無駄に血を流す趣味はありません：私は貴女用の

意した脚本通りに動く事にしよう」

付きの者がその発言の変わりように一瞬動揺するがすぐに冷静に見えるよう襟を正す。

周囲もその言葉の変わりように面喰っていたが、次に紫シャツにかかった電話とその応対を見てその意味を悟った。

「…まさか、事務所吹っ飛ばして潰すたあ思いませんでしたよ。華僑の連中泡食ってるそうで」

電話を切った紫シャツは苦笑いしながらそうセレに話しかけた。それに対しセレはにこにこ冷たい笑みで微笑むだけ。

そう、それが誰の仕業なのかはもはや誰が見ても分かっていた…そしてそれに証拠は一切残っていないだろうということも。

「帝銀の方といたしましては、貴社の製品は国内の流通のみにしていただきたい…外貨を下手に流入されても困るとの事でしたから。少なくとも帝銀は貴女が成功する、という見込みを立てています。裏切らないで下さいね」

態とらしい咳払いの後、帝国銀行の市場企画課課長からの言葉はそれだけであった。ここへの出席は協議というより、どちらかというどと立会人的な意味合いが強かったのだろう。だがそれだけの言葉でもその重さは洒落にならないほど重い…彼が日本帝国の金融界、財界の頂点に君臨する銀行の『市場対策』を担当する者であるがゆえに。

「関東市政塾としては、貴社が始めるという難民の雇用について些か懸念がありますが…」

「それについては技術を流出させぬよう厳格な情報統制を敷くつも

りです。上層部には日本国籍を持つ上、帝国と本社に対し忠誠ある人物しか就かせる予定はありません。それに関しては安心して下さい：アंकルサムの鼠掃除も並行して行っていますので」

厳しい顔つきのままだった関東市政塾塾長もそれならば、と溜飲を下げたようであった。国粹主義者としては柔らかい部類なのだろう。

そういった絶対に一般人に聞かせられない話をしながら舌鼓を打ち、彼らが料亭を出たのは午後九時であった。

猪名川、住義の両会長はその舎弟：今後の窓口となる彼らに厳に手を出す事のないよう命令し、屋敷へと戻っていった。確かに抗争し權益を独占するのも手ではある。だが如月という甘い柿の木を態々弱らせ渋くする必要はないという判断だった。

帝銀の川村課長はある貿易会社に連絡し、関東市政塾塾長は接触なき監視を部下に命令していた。

そして当のセレ達であるが。

「しっかりしてください、それでは先が思いやられます」

彼らが帰った後の別室、そこでは正座のまま固まった秘書がいた。

「社、社長。そうは言いましたもあの空気の中待ち続けるのは辛すぎます：というか社長は私より若いのになんでそんなに平然としているんですか：」

彼女にも料理：天然ものの高級和食が用意されていたが全く喉を通らなかった。

まあ、周りにやのつく怖いお兄さん方や軍人崩れの二の腕に刀傷痕があるような方々と一緒にいたのだ。無理もない。

セレがその事を不憫に思い、こっそり店の人に寿司折を渡すよう手をまわしていた事は秘密である。

9th Stage: Money Game (後書き)

どす黒い話でした。

赤線についてはWikiを見ていただければお分かりいただけると思います。

10th Stage..WORKS

10th Stage..WORKS

管理者が存在する世界を知る側からすれば、戦術機というものがないだけでオーバーテクノロジーかは嫌というほどわかるものだ。

普通なら出力不足するはずの主機出力を活かしきる内部フレーム、細かい動作を可能とする電磁伸縮炭素帯、航空力学的観点からすれば飛行に適さない人体に似た構造をそれとまでいかずとも長時間の跳躍——それも大型かつ大質量の戦術機を——可能とする噴射跳躍システム。そして莫大な負荷となる着地衝撃に耐えきる機体の柔軟性。

それらはかの世界で同じようなものが実現していたとはいえ、量子コンピュータという常軌を逸する演算性能を持つそれがあったからこそ可能となったものである。

量子コンピュータとは何か？それを考える前にここで使う量子の性質について触れるべきだろう。

なお、量子力学は常識が通用しないので注意されたい。

量子とは光子や電子と同様極めて細かい存在である。そしてその性質に『波動と粒子の二重性』というものがある。

波動とは何か。水面に石を放り投げて出来る波紋と同じものと考え

ていい。

粒子とは何か。実体のある球、そこらへんに転がっているボールと
考えてもいい。

では二重性とはどういうことか。互いに違う二つの性質を同時に持
つということである。

水面に二つの石を投げ入れたとしよう。そうすると波紋が二つでき、
それらが干渉しあって縞模様が出る。これを干渉縞という。

ここで大事なのは水面上に広がっていく波紋を数えることはできな
いことだ。

ではボールとボールをぶつけてみよう。お互い衝突したそれらは跳
ねかえったり、あるいは停止したりするだろうが重なり合って一つ
にはならない。

つまり量子は波動でもあり粒子でもある存在ということになる：常
識が通用しないのはもうこの存在定義の段階から始まっているのだ。

量子コンピュータはこの『数えられないはずのものが数えられる』
二重性の性質を利用している。

従来のコンピュータではデジタル信号、つまり『0と1』の電気信
号を利用して処理を行うが、量子コンピュータは重ね合わせの状態
の量子を使い『0がX%と1がY%』といった任意の数を入力し処
理を行う。処理の基礎からして違っているのだ。

例えば複数の処理を従来のコンピュータに行わせると一つの処理が

終わってから次の処理を順に行う。

ところが量子コンピュータは一度の処理でこの『重ね合わせの状態の量子』を入力し複数の処理を一つの入力で行えるのだ。

従来のコンピュータの基本情報量がビットであるのに対し量子コンピュータのそれは『量子ビット (qubit、quantum bit、キュービット)』と呼ばれている。

例えば n (自然数) キュービットの処理が可能であるなら、それは従来の 2 の n 乗回の処理を同時に行えるということである： n の数値が大きくなれば、どれだけ従来機の処理速度が速くなろうと追いつけるものではないというのは分かるだろう。

故にスーパーコンピュータでも計算に1千万年かかると言われている300桁の素因数分解を、数十秒で解いてしまうと言われるのだ。

更に恐ろしい事に量子コンピュータは従来機の最大のネックである放熱の心配がない。量子状態にある物質中の電流や磁場には発熱や摩擦といったエネルギーロスがないのだ。これにより小型化、集積化が容易となる。

そして、従来機では頭打ちになる集積度の限界による処理性能の限界といったものが存在しない。

：問題は、極めて不安定な量子状態を維持することであるが。

そんな代物を使って作ったものに従来のコンピュータが作ったものが太刀打ちできるかといえは：はつきり断言する。否である。装甲材や主機性能ともに大きく水をあけられているのは間違いない。その世界の既存のデジタル式のコンピュータも当然量子コンピュー

タがない世界のものより量産性、演算能力ともに桁が違うことになってくる。

もはや太刀打ちなど出来るはずもないほどの差がそこにはあるのだ。

だが、そう言ったものに頼らず二足歩行できる大型機械を、それも柔軟な動作が可能なそれを創り出したというのは機械には理解できない人間の底力だった。

1993年2月1日：日本帝国京都、帝国大学量子物理学研究室。

勢い良くやや古びたドアが開け放たれ、興奮した面持ちの女性が大股でその部屋の主へと詰め寄っていく。

髪は紫のロング、切れ長の瞳に燃え上がる意思の炎を灯して彼女はまくしたて始めた。

「霧山教授！この論文…どういことですか！！」

「どうしたもこうしたも、君と同じだよ。若き天才、という者かな。まさか量子重力理論の論文を出すとは思いもしなかったが」

「そうではなくって！どうしてこんな人材が帝国国内にいたのかという事です！！これほど能力があるならもっと話題に出ている筈、それが『まるで突然現れたか』のような騒ぎ！これが興奮せずにいられるとでも！？」

「まあまあ、落ち着きなさい香月君。確かにこれは君の言う因果律

量子論の証明に打ってつけなのは分かる。私だってこのような人材が市井に埋もれていたなんて考えられないからね」

「なら早く彼女を招聘すべきです！彼女の手を借りれば人格の数値化も並列処理コンピュータの理論検証もできます！…それだけじゃない。このままいけば量子脳の開発もいけるわ…うふふ、久々に因果律量子論について論議できるほどの能力があるのかも」

「おーい、香月君？こっちの世界に戻ってきなさい。彼女ならすでに編入の手続きは済ませてある。だが彼女も長期にわたりここにいる事はないじやろう」

その言葉にピクリと香月の肩が震えた。

「…何故でしょうか？人類の、いえ帝国の為でもあるこの研究以上になすべき事があるとでも？」

「おそらくはそうじやろうな。彼女自身会社を立ち上げその経営に大忙しらしいからのう。まあ、協力はするという事じゃ。焦らんとよ」

なんで会社なんて立ち上げるのか、と香月は苛立ちを隠さずその表情に示していた。

「研究室に入ればそれなりの資金が入ります。無論、それに応じた地位も手に入るし何より人類の敵であるBETAを地上から叩きだすための研究です。これを手伝わず会社経営？ツハン、ずいぶんと考える規模が小さいものね。大局的なモノの見方が出来るかと思えば目先の利益に囚われているのかしら？」

「まあそうは言うがのう香月君。彼女だってそれなりの苦労があるんじゃないろう。それに時間も極力とることじゃし、抑えて抑えて」

「抑える？冗談を言わないで欲しいですわね教授。こう見えても抑えているつもりですわ。それとも私にこの研究に対し不誠実な人間を担げとでもおっしゃるのかしら？」

口調にだんだんと地が出てきているのは霧山も気づいていた。彼女の夢なのだ。そこに半端な気持ちで踏みこまれたくないという気持ちも十分理解できた。

「そういう事を言っているんじゃない。確かに00ユニットの研究は急務じゃ。じゃからと言ってそれ以外の事柄が全て無価値であるということはない。そう言う事じゃ。まあ、それに、のう」

十分理解できたが、それ以上に彼女をなだめる理由があったのだ。

「ですから、私が言いたいのは…」

ああ、こりゃ無理かと霧山教授は香月夕呼の話を聞きつつ、流れに身を任せることにした。もうなんともなれという諦めでもある。

その後十分にわたり香月夕呼は自分の因果律量子論と00ユニットに掛ける思いの丈を話し続けた。それにはまだ会っていないセレに對し、早く手伝えだのこれほど能力があるならこんな苦労はしなかったのだといった愚痴も盛大に零していた。

そして彼女がその行動に満足して振り返った時…彼女の時間は止まる。

…その人物が笑顔で待機していたのだから。

1993年2月10日：アメリカ合衆国メリーランド州モントゴメリー郡南部、ベセスダ（Bethesda）

冷戦下の宇宙開発競争にて東側諸国に先んずるべく米欧が共同で進めてきた系外惑星探査計画：『ダイダロス計画』、その進捗を早めるために米国政府が大型MMU（Manned Maneuvering Unit）の開発計画を承認したのが戦術機開発史の始まりであるとされる。

それに求められた性能は大型資材の確保・運搬と組み立てといったものであり、戦闘に利用するという考えが当時の技術者にはなかった事だろう。だが、兵器開発は一見関係のない産業から発展していくものだ。そう、カメラのオートフォーカスが戦車の自動照準技術に変貌したように。

地球衛星軌道、ダイダロス計画の要である巨大無人探査機『イカロス？』開発宙域での建設作業を試験としながら特急で開発された大型MMU『LMMU-1』は1957年に完成。高い操縦性とあらゆる条件下において高い作業性を確保した画期的な機体となる。

そして1961年にイカロス？が完成、系外惑星へ向け発進。人類史上最大の外宇宙探査プロジェクトはこれにて一つの区切りを迎えることとなった。

だが、人類にこの偉業を讃える暇は与えられなかったのだ。

1958年の火星でのBETAとの初接触から9年、1967年の

サグロボスコ事件から第一次月面戦争：否、人類の生存を賭けたBETAとの戦争が始まったのだ。

慣れない無重力下での戦闘、『月その他の天体を含む宇宙空間の探查及び開発利用に於ける国家の活動を律する原則に関する条約』――通称『宇宙開発条約』――により重火器の運用が不可能な状況下での圧倒的物量との戦いなど前提となる問題も多かったがそれだけではない。

低重力・温度差・真空・レゴリス（磁性を持つ月の砂）問題などに対応した兵器開発は秘密裏に行われたとはいえ実戦証明もなく、基礎研究の段階であったのだ。無論、それらの研究により生み出された宇宙空間用兵器が実戦に投入されたわけだが当然のごとくトラブルが相次ぎ、ともに戦える状態ではなかった。

「月は地獄だ」

戦況の劣悪さはその一言に全てが集束されていた。物資も、人員も何もかもが足りなかったのだ。

そんな中戦術機開発史に欠かせない存在が生まれる。人類初のFP（Feedback Protector）兵器『ハーディマン』である。

装甲駆逐艦：宇宙用シャトルに大型装甲車が積載量の問題で搭載出来ない中、重火器の運用、効率的な三次元砲撃を可能とするハーディマンは劣勢を覆すとまではいかなかったものの多大な戦果を挙げたのだ。

これが後に大型MMUを低Gから1G環境下に対応させる新概念兵器開発計画：『NCAF-X計画』の推進剤となる。

大型MMUの戦闘転用：それは簡単そうに見えてその実極めて困難なものだった。

大型のBETAに対抗しうる火力とその重火器の運用・保持能力。近接戦闘をこなすだけの出力や恐竜的進化に伴う自重の軽量化。そしてハーディマンで実証された三次元機動を可能とする高機動性、その反動をさせるためのバランサー。

性能面だけではない。メンテナンス性においても部品の節約、劣悪な環境下での継戦能力、そして簡易メンテナンスでも過酷を極めるBETAとの長期戦可能な耐久性が必要なのだ。

既存の機械工学だけではどうしようもなかったのは言うまでもない。二足歩行：重心位置をスムーズに移動させるというのは並大抵の技術で出来ない。しかも戦術機が戦うのは平坦な試験場ではない。峡谷や砂漠、あるいは水上、水中といった極めて不安定な環境である。それらをサーボモーターと油圧機構のみで実現できたかというところであった。

だが、頓挫するかのように見えかけた計画に一条の光が思いもよらぬところから見えた。

義肢開発テクノロジーである。

以前より軍で進められていた戦傷者の為の義肢開発研究。それは第二次世界大戦後から急速な発展が見られ、バイオテクノロジーを用いた生体部品の開発、筋繊維の代わりとなるナノ繊維開発などが行われていた。

これを応用し、機械を大型化させ人体を模すのではなく、人体を模したものを大型化させるという発想から生まれたのが電磁伸縮炭素帯である。

これにより関節部から油圧計やサーボモーターを極力削減し、簡素な構造で人体より広い関節稼働領域を確保でいたのだ。

また、恩恵はそれだけにとどまらず金属部品を減らしたことによる機体重量の軽量化、メンテナンス性の確保にも成功した。

そして齎された技術はこれだけではない。

18mもの巨体を動かす上で従来の強化外骨格のような人間の動きをそのままトレースする手法ではどうしても誤差が生じてしまう。かといってコントロールスティック・ペダルのみでは駆動箇所が多い機体に細かい動作など不可能。

そこで搭載されたのが神経電流を検知し間接的な思考制御をおこなう方式だった。当時研究が進められていたBMI（Brain-Machine Interface）技術の応用であり、今日の衛士強化装備に連なる発明である。

これら様々な技術をつぎ込み、地上用の大型MMU『NCAF-X1』は二足歩行を実現し、戦術機へと発展していく。

この開発に携わったマクダエル社設計技師デヴィッド・マイヤーズ氏は「古代の塚より蘇った巨人が、次第に力を取り戻していくようだった」と語る。

人は無意識のうちにその姿を選んだのだろう。

化け物を倒すのが神話のヘラクレスであるように。

だからこそ人型という枠に拘ったのだろう。

まるでそれ以外の選択肢がないかのように。

「さて、諸君。これが我らのデヴィー・クロケットが入手してきたジャップ共の設計図だ」

スクリーンに映し出されるType-94の設計図に会議室に詰めていた男達が唸り声を上げる。ここにいる男たちは国内有数の技術者：いわゆる『天才』と称されるほどの人間たちである。そんな彼らを唸らせるような内容がそこにはあった。

「馬鹿な、装甲材の刷新：CNM？FRP（繊維強化プラスチック）：いや、BFRP（ボロン繊維強化プラスチック）か！？コストはどうするんだ！」

「それだけじゃないぞ、駆動系も変更されている。なんだこれは…

ACS? 油圧機構か? 前時代的なものをなぜいまさら:」

男達は困惑していた。そこに示された設計、仕様書では電磁伸縮炭素帯とすでに戦術機の技術としては前時代的な油圧・サーボモーター機構のようなものを組み合わせた関節が目につくかと思えば、高コスト・最新鋭のFRPのような装甲を搭載している。厳密にはFRPと違うようだが略語のみでは推察はできなかった。

「おいおい冗談だろ、パラジウム系燃料電池はうち(米国)でもまだ研究段階のものじゃねえのか!？」

驚くのはそれだけではない。戦術機において心臓部である蓄電池とマグネシウム合金型燃料電池は開発上尤も高性能ではなくてはならない部分である。

理屈は単純、継戦能力と出力に大きくかわる部位だからだ。今回のType-94に搭載されるのはマグネシウム型ではない。パラジウム系代替レアアースを利用した超高密度水素吸蔵合金型という得体の知れない燃料電池を搭載しているのだ。

なぜ燃料電池において合金、という言葉が出るのか。

意外にも燃料電池そのものの歴史は古い。それは19世紀、1801年にまでさかのぼる。

英国王立科学研究所の科学者、デービー卿(Sir Humphry Davy)が『ボルタの電池』を利用し、電気分解によりアルカリ元素:ナトリウムやカリウムなどの単離に成功したことが開発のきっかけとなる。

この電気分解の逆反応こそが燃料電池の原理だったのだ。

その発見から38年後の1839年、同じく英国のウィリアム・グロブ卿(Sir William Robert Grove)が硫酸に浸した2つの白金電極に水素と酸素を供給して電力を得る実験に成功、これが燃料電池の原型となる。

その後に最初の実用的水素吸蔵合金であるマグネシウム・ニッケル合金が米国で開発されることとなったのだ。

なぜ実用的、という言葉が付けたかという水素吸蔵合金中で、水素は結晶構造にならない規則的に配置される。

本棚に本を詰めるのと同じで乱雑に横倒しや斜めに入れるより規則正しく並べたほうが多くの本が入るのと同じように、気体という自由飛びまわる状態よりきわめて多くの水素を合金中に貯蔵できるのだ。

また水素の放出自体も比較的ゆっくりとしたものであり爆発事故などの危険性も少ない。そしてマグネシウムは7.6wt% (wt% ≡ 質量百分率。質量／全体の質量×100) もの水素を吸蔵できる金属であり、入手が楽なものなのだ。

現在の戦術機の燃料電池はこの米国で開発されたモノの直系であると言っていいだろう。

ではパラジウムは？

パラジウムはその体積に対し935倍もの水素を吸蔵可能であり、その吸蔵能力はマグネシウムと比べるまでもない。だがレアアースであるパラジウムは生産量が少なく、貴重な埋蔵地であるユーラシア大陸はBETAに蹂躪され、アフリカ圏からの輸入に頼るほかは

ない。それに希土類という名の通り埋蔵量もそう多くはなく、戦術機のような大型機への利用などは価格の問題もあり到底できない代物なのだ。

だが、日本帝国の黄色猿どもはそれを代替レアアース開発という裏技でやってのけたという。それがこの場にいる男達を驚かせていた。

そもそも帝国は敗戦国である。全面降伏とはいかずとも技術力・資金力ともに打撃をこうむっていたのは言うまでもない。それが米国を追い抜かすほどの技術を持つなどとは働き蟻と称される勤勉さをもってしても不可能なはずである。

「どういうことだ：あの国にそこまでの技術力があつたとしてもいいのか！？イーグルを輸入してやっと第三世代のノウハウを得た程度の連中だぞ！！それだというのに：認められるかこんなもの！！」

男の一人が鼻息荒く手元の資料を机に叩きつけた。双眸は怒りで血走り、青筋がいくつも浮かび上がっている。先駆者の、技術者としてのプライドを大きく傷つけられたのだ。このような不条理に怒るのも致し方ない事だろう。

「ボス、我々の研究機関またはその上部に裏切り者がいる可能性は？」

「それは私にも分からんさ。ただ言える事はこれらで提唱されている新技術が米国のそれより一部上回っている。そういうことだ」

その言葉に暗い室内は水を打ったかのような静けさに包まれた。認めたくない、だが仕様書としてここにある以上認めざるを得ない。

なぜならそれには『最終仕様書』と銘打たれていたのだから。

その最終仕様書でわかる事柄は以下の事だった。

- 1…装甲材を従来の耐熱耐弾複合装甲からC N Mという新炭素系複合装甲への転換による軽量化。
- 2…A C Sと呼ばれる駆動系技術の併用により、高い耐久性・弾性を保持し高G・衝撃負荷に対応
- 3…代替レアアースによるパラジウム（以下、疑似パラジウム）系燃料電池による出力・継戦能力向上。
- 4…コンデンサの大型化による主機出力限界の向上。
- 5…追加ラジエーターによる冷却性能の向上。

当然、新技術にもデメリットはあるらしくその一つがラジエーターの追加だ。本来ならば小型で済むはずの放熱機関が大型化しているのは主機の発熱量が想定より多くなった事の証左となる。

だがそのデメリットを取ってみても先の内容から得られるメリットが大きいのは嫌でも分かるというものだ。

それは室内に漂う異様な空気が物語っている。

それに彼らの心配事はこれだけではないのだ。

H I — M A E R F 計画というものがある。B E T A 由来物質であるG 元素を応用したムアコック・レヒテ理論に基づく抗重力機関、通称『M L 機関』を搭載し圧倒的火力と防御力を持つ『陸の戦艦』を建造する計画である。

この計画に参画したのはロックウィード、ノースアメリカナ、マクダエル・ドグラムの三社である。

難航を極めるかに思われていたG元素という未知の物質を応用した兵器開発は予測に反し順調に推移し、1979年にはML機関の臨界実験には成功、航空機動要塞『XG-70』の核となる抗重力機関技術が確立された。

だが、この巨体が空に浮かぶ事はなかった。

有人飛行の段階で12名のテストパイロット全員が跡形なく消滅：死亡する事故が発生。飛行の際にラザフォード場の多重干渉によりコックピットブロックに致命的な重力偏差が発生、それを抑えられるだけの処理能力が足りなかったのだ。

無人化も検討されていたが当時の技術では儘ならず、そのまま計画は中止となってしまった。

これで大赤字を被ったのが先の三者である。さらに言えば、ロックウィード社は1990年のATSF計画の開発競争に競り勝ったものの正式配備が遅れ、予算も削減されるという憂き目に遭い軍需産業としては世界第一位の座を保持しているもののその懐事情は些か寂しいものになっていた。

そう、この部屋に座る男たちこそそのロックウィード最精鋭の設計チーム：スカンク・ワークスなのだ。

「ボス：F-22Aの配備も遅れている。これにこんな機体が…俺たちのF-22Aに迫るだけの性能を持った機体が出来たらどうなる？最悪議会はF-22Aを切り捨てるだろうよ、帝国の高性能機低コスト機にやらせればいいってな」

そう、先の機体はコスト面でも若干の増額がされていたとはいえF-22Aより安価だった。無論、輸入するとなれば多少色を付けられるだろうがそれでもなお、である。

もしそうならば同程度の性能である現状、向こうが勝ちF-22Aは市場から淘汰されるだろう。黒い未亡人の時のような奇跡は起こり得ない。あれはたまたま米国ドクトリンとF-22Aの設計思想が一致したためのものだ。無論、そこには度重なるロビー活動の成果もあった…彼らにとってそれは屈辱的な事ではあるが。

ボスと呼ばれた初老の男はその眉間に深く皺をよせ、ただただ瞑目していた。それは先代のボスへの詫びでもあり、この現状への嘆きでもあった。

掘立小屋から始まったこのスキャン・ワークスを腐らせるには些か早すぎる。それに、我々はまだまだ世にその力を見せていない。まだ出来るはずなのだ。そういう思いが彼の中にはあった。そして、現状を打破しうる頭脳も持っていたはずだったのだ。だが、彼は技術屋であり、政治家ではない。政治的、予算的な問題は『政治屋』に任せるしかなかった。

「…これらの技術はどこからのものですか？富嶽単独のモノとは思

えない。かといって遠田技研や河崎、光菱とも違うでしょう。帝国内にこれだけの技術を考えつく人間が想像できない」

「…それに関しては情報がある」

ボスのその一言に室内の男達が一斉に振り向いた。これだけの技術を提示できる企業、もしくは人材。それを引き込む事が出来れば彼らにも十分チャンスはあるのだ。

「昨年設立した如月総合商社…その社長であり筆頭株主、それに技術者であり学生であるセレ・クロワール女史がこれらの特許を保持しているそうだ」

部屋の空気が凍りつく。学生？学生だということのか？これだけのものを提示できる人間が…

「ボス、それは…冗談ですよ？まさか、学生が高分子構造体の論文を単独で発表しているとしても？それにこれからすると…単結晶構造についての論文も出している筈ですよ、いや、あり得ないでしょうそれは」

「…見落としていた事だが特許申請は前年に行われ論文も発表されている。まあ文面のみだがな。これで気付けという方が無理な話だ」そして忌々しげに数枚の資料を出す。そこには各種特許に関する基礎理論が並べ立てられていた。だがそこにこの技術の全容を窺えるものはない。

だがそれは承知の上である。たとえ全容が分からなくともその一端だけでも知る事が出来れば既存の戦術機への応用が利く。さらに言

えばそこからそれとは違う派生の技術が生まれることだって十二分にあるのだ。

男達はその資料を目の皿のように読み、たらい回す。プライドが小娘ごときに負けてはならないと訴えていたのだ。

「…そういうえばボス、彼女をエスコートするようラングレーには？」
「すでに伝えてあるさ。だが思いのほかガードが堅いらしくてね…
特殊部隊全員が捕縛された上『運送料着払い』と札を付けられて帰されたそうさ。そのせいで訓練が厳しくなって毎日が地獄だとぼやいていたよ…そう簡単に帝国もこの女を渡す気はないらしい」

「では、どうするので？彼女の持つ技術力…これは米国に必要なものだと思いますが」

「どうするもこうするもあるまい…非公式がダメなら正規の手順を踏めばいいだけの事。幸い優秀な『大学』はわが国には多く存在する。企業との提携も無論それ以上に存在するのだから」

そう語るボスに部屋の誰もが唸った。そう、世界最強の軍事力を持ち世界の警察を自負するアメリカにとって正式な手段を用いればエスコートできない人間などそういないのだから。

そう思い誰もが若干の安堵をおぼえた。自らの属する政府の力を知っているがゆえに。

男達がミーティングを終え解散した後もただ一人残り続ける男がいた。

ボスと呼ばれていた男である。白くなったひげを触りつつ、ただじっとこれまでのモノとは別の論文を眺めていた。

量子重力理論。

セレ・クロワールが大学編入に先だって発表した論文である。一般相対性理論と量子力学の双方を統一する理論と期待されているが、研究が進まず未知の領域のままである部門だ。

これと同じく若き天才、香月夕呼が発表した因果律量子論。どちらも理論は説明されており正しいのはなんとなく理解できるがどう正しいのか理解できない代物だった。

なぜ極東にはこんな化け物が生まれるのだろうか。そう男は考えていた。かといって西側である米国にも天才は存在する。かのエドワード・ウィッテンやフェルミといった人材を輩出し、フォン・ブラウンやアインシュタインのような優秀な科学者を受け入れてきたのは紛れもない米国だ。だがどうして、この今に限って彼女らに匹敵する新たな人材に巡り合わないのだ。

儘ならない人材という問題に溜息をついた老人は資料をファイルに閉じ、会議室を出る。後には何も映さないスクリーンと真っ暗な空間が残っていた。

10th Stage: WORKS (後書き)

各略語に際してはあえてそれが何の略語であるか伏せています。

この不知火は内装重量若干増大&装甲超軽量化により結果的には軽量化されています。内装重量の増大はおもに弾性対策のためと高出力化の為です。跳躍ユニットのエンジンブロックについてはさすがに米国の方にまだ分があります。日本にはそのノウハウが不足していますから。

2011/04/11 本文修正

11th Stage: Silhouette of Mirage (前書き)

100,000アクセス、PV15,000突破。誠にありがとうございます。

これで今年の更新は最後となります。皆さんもよいお年を。

11th Stage: Silhouette of Mirage

11th Stage: Silhouette of Mirage

2月9日、日本帝国群馬県太田市、富嶽重工シミュレーション訓練室。

「愛ッ、日野！反応が遅れているぞ、ついて来れるのはトシだけかッ！？」

「そうはッいいまして、も！！」

「無理だ、ぜ！！こん、な、のおおお！！！！」

回線内に叱咤する声と絞り出すかのような悲痛な叫びが溢れていた。トシ、というのは霧技官が藤原少尉に付けた愛称である。

彼らの行っているのは模擬戦である。ただし、この前のような1－4ではない。1－3の戦いである。巖谷少佐は席をはずしておりこの訓練の担当は霧技官が行っていた。

機体は全員TSF－X六号試作機。無論ロールアウトがまだ終わっていないのでデータ上のそれである。

今までのTSF－Xとほぼ同じフォルムでありながらその性能は段違いであると言っている。跳躍ユニットの開発こそ上層部の判断で見送り――時間的な問題もあり、1994年という納期に間に合わせるのはこのTSF－X本体のみとし、跳躍ユニットの改良については別途予算計画を組み直し開発するという意向で固まった――と

なりFE-108-FHI-220のままであるが機動性は軽量化に伴い格段に向上している。

新規技術開発によって得られた新装甲材、CNM。正式名称カーボンナノメタル(Carbon Nanomaterials)：その正体は不純物を徹底的に廃した炭素系強化プラスチックである。分子配列まで気を配り精製されたその装甲は従来の装甲の三分の二ほどの重量でありながら強度、韌性、耐食性に優れまさしく鋼の名を持つにふさわしい炭素系装甲となった。

駆動系も一新されている。ACS：アクチュエータ複雑系(Actor Complexity System)は超塑性(薄く引き延ばしたりすることが可能である性質)鍛造が可能な強磁性形状記憶合金(磁力による任意方向への変形が可能な形状記憶合金)による小型アクチュエータと電磁伸縮炭素帯を組み合わせ一つの系として動作する制御システムだ。

形状記憶合金は電磁伸縮炭素帯と比べると重く、制御精度に劣るのが欠点であるが出力や耐久性に関してはその上をいくものだ。これを負荷の大きい部位に当てはめ、軽量化や精度を優先すべき個所は電磁伸縮炭素帯を組み合わせることにより運動性の向上と耐久性の向上を両立する事が出来た。無論、重量は嵩むが微々たるものだ。

そしてそれらを統括、制御する新機軸のOS、CPU、その情報を保存する大容量高分子メモリにより柔軟な動作が可能となる。これらを合わせてACSと呼ぶのだ。

重量が嵩むものの電磁伸縮炭素帯より大きな出力・保持能力をもつ形状記憶合金：そしてそれらを統括したACSは格闘戦における性能を大きく向上させた。例えば力任せに長刀で斬りつけたとしても

振り抜けるほどの出力があり、緊急時の跳躍においては通常の倍以上の加速度を得ることが理論上可能である。

改良点はメインフレームにもおよび、より高い弾性、強度を持つことになったTSF-X六号機はACSによる急な姿勢制御にも十二分に耐えられるほどの耐久性を持つ。無論、被弾時も従来機と比べ機動力の低下は少なくなるだろう。

CP将校である自分に、それを直に動かす事はまずないだろうが愛や人吉の嬉しそうな表情、そして俊也の輝く目を見ればそれがどれだけすごい機体なのかはよくわかる。

愛は最初に動かした時あまりの過敏性に盛大に転んだ。シミュレータ内だからよかったものの実機であれば大変な事になっただろう、それに手を貸して立ち上げさせようとした人吉は出力が強すぎて愛の機体を抱きかかえるようにして後ろに倒れこんでしまった。まともに歩けたのは意外にも藤原少尉と巖谷少佐の二人だけである：霧技官は歩くんじゃない楽しんで走り回っていたので割愛。というかあれは人外だからカウントしない方針である。

それからの彼らの表情は目に見えて良くなった。今まで問題のあった動作のラグが解消され、自分が無理な要求をしてもそれにしっかりと応える六号機に皆が感動した。

例えば長刀というものは斬り方をしっかりしなければ刃が肉に食い込み使い物にならなくなってしまう。よって帝国の衛士は高い技量を持って食い込ませずに流れ切るような動作を可能としているのだ。この六号機はそれこそ突撃級殺しのグレートソードを片手で振るえ

るほどの出力がある。それにその技量を組み合わせると：敵の装甲がバターになる。

面白いくらいに斬れるのだ。突撃級の外殻を正面から斬る、というのは無理であっても三枚に下ろせるほどの馬力がある。試しに近接兵器のみでBETAとのシミュレーション戦闘を行ってみるとその面白さにあの巖谷少佐が夢中になるほどだった。

機動性能の向上も素晴らしく、現状でそれを引き出しているのは俊也と巖谷少佐、霧技官くらいのものだろう。人吉や愛はまだその高すぎる出力に馴染めず従来の出力にセーブしている。

「ちつくしよおおお！！速すぎ：うわ！！」

「二宮機、背部に被弾、大破」

愛が落とされた。地面をさながら蛇が獲物に喰いつくような機動で接近、そこから一気に地面をけり上げ上昇、ムーンサルトのような機動を描いた霧技官の機体が一瞬で愛の真後ろを取り36mmの雨を降らせたのだ。

訓練開始から20分：持ちこたえた方だろう。それほどに霧技官の動きは尋常じゃなかった。

あの92式の大量のミサイルを回避して見せた時の機動を連発し、さながら獣の如く追い立てるその姿は鬼気迫るものがあった。圧倒的性能を持つTSFXだからこそ連続して可能な機動であるが：果たして常人にあれをやれと言ってできるものだろうか。

「愛ッ！つく、速い：照準が捉えきれないわ：これが六号機の力、という事ね：！！」

照準性能も向上している。ACSによる柔軟な動作が可能となった六号機は、その腕部の強度から射角がさらに広げられるようになった

ただ。簡単にいえば人間なら脱臼するような持ち方でも問題なく射撃ができる。しかも高い精度で、だ。それから生み出される弾幕を振り切るのはかなり厳しい事だと思うのだが、どうやらこの6号機はそれを可能とする機体らしい。

「あー：中島中尉、射撃のデータ上に回したいからデータチェック頼む。FCSの開発は別予算でもいいから取れるように、ね」

「了解しました霧技官：模擬戦終了まであと1800です」

「了解：ほらほらどうした？踏ん張れ！！トシッ、機動ばかりに注意が向いていて精度が甘くなっているぞ！レディは丁寧に扱え！！」

「ッ了解！霧技官：その背に迫いついて見せますよ！！」

ともあれ、3機が1機に追い立てられる、というのは異常である：TSF-Xの引き出しは深い。おそらくこの状況を作り上げている霧技官の余裕からもまだこの上があると云っていいだろう。

「六号機の機動性と柔軟性を活かせっ！この程度の機動ならついて来れるはずだ！どうした！！」

霧技官がビルの側面をけりつけ複雑怪奇な三次元機動を取る。これも今までCPをしていたが見た事のない機動だった。教本にはないその機動は一見奇をてらっただけかに見えるがその実はしっかり相手の後方危険円錐域を捉えるような動きとなっている。

緩急を織り交ぜた高速戦闘：これが、第三世代の戦いなのかと中島はこぶしを握りしめ、オペレートを続けた。

訓練後のシミュレータームには二つの屍が転がっていた。

「ツぷ：こ、これは初めて衛士適性試験受けた時よりひでえと思うんだ：ぜ：」

「同感、ですわ：これは：きつ：い：」

そう言ったところで女性陣二名は震える足で立ち上がり、フラフラ

とお手洗いに消えていった。心中察するばかりである。

「高Gには女性の方が強い筈ですけど…俊也、あなたという体してるの…」

「いや、まあ、なんというか…こう、しっくり来たんだ。この機体に」

「…俺はスルーか？中島中尉」

「いや、霧技官は人外ですから心配するだけ無駄かな、と」

「あ…確かにそれは…」

「酷くね？俺の扱い酷くねえか！？」

そういつて頭を抱える霧技官を見て、相変わらず訓練の時以外は面白い人だと思う。

それにしてもこの人の動きについて来れるのが俊也だけ、というのは驚きだった。俊也はそれまで平均的なスコアだったのだがこの機体に取り換えてからは巖谷少佐の次に高いスコアを出している。

「まあ、先入観とかの問題があるからだろうけど…それが一番なるはずの巖谷少佐は流石だと言いたいようがないな」

「確かに、霧技官の言うとおりですね…自分は従来の戦術機に触る時間が比較的短かったものですから。それに比べると巖谷少佐はベテラン。この機体の動きは従来機とはかけ離れているのに…」

「そこがセンス、というモノだろうな。さてと…お姫様達が戻ってきたら続き行くぞ。中島中尉、次はヴォールクデータだ」

たらし、と俊也の額から汗が流れる。間違いなく冷や汗である。

本当に、霧技官は訓練の時以外は面白い…そう、訓練の時以外は…

※※※

2月13日、日本帝国栃木県宇都宮市。

日光連山の終の地となるこの市は東部に大規模な内陸型工業団地を擁し、県内の工業製品数一位、年間商品販売数は北関東一位といった北関東で最大規模、また帝国全体として見ても有数の地域商工業都市として名を馳せている市である。

その歴史は古く、蝦夷地の平定のため豊城入彦命がこの開祖であるとされている。その後は宇都宮二荒山神社の門前町として、その神官として赴任してきた摂関家藤原北家道兼流・宇都宮氏の直轄地として栄えた。

二荒山神社は武徳を尊ばれており、源頼朝、徳川家康といった名だたる武将、名将が戦勝祈願し、奉納していったという歴史もある。戦史としてみれば戊辰戦争の主戦場となった地域でもあった。そして日露戦争からは軍備拡大のため第14師団司令部が設置されている。それには前述の武徳を尊ぶ二荒山神社の恩寵に肖ろうと言った側面があったのかもしれない。

そして現在では大規模な北宇都宮飛行場、演習場を有する宇都宮陸軍基地が居を構えている。そこに数人の衛士たちが降り立った。

「おおー…富嶽の試験場も広がったですけどこっちも相当広いんですね」

「なんだ？武影、こちらには来た事はなかったのか？」

感嘆の声を漏らす武影に巖谷が問いを投げかける。

宇都宮基地は前線向けの基地ではない。横浜にある白稜と同じく補給基地としての側面を持つ基地である。

また同基地は元々富嶽の飛行試験場であったことから戦術機開発においてのテストエリアとして利用されている場所だった。

それを武影が見て驚く、というのは不自然な事である。広大な試験場を有するこの基地には訓練の為に来る部隊もある。それなのに武影はまるで来た事がなかったのような言いぶりだったのだ。

「いえ、自分はずっと『前』に出っぱなしだったもので。後ろでゆっくり訓練する暇なんてありませんでしたから」

「む…そうだったか。済まないな武影。まあ今日は陽炎の搬入があるまでは待機だ。手続きの後はゆっくり羽根を伸ばすといい」

その言葉は偽りではなかった。彼の過去といえばAL4直属部隊から国連軍海外派遣部隊、帝国陸軍、近衛と所属する場所を転々としてきた人間である。しかも横浜以降の配属先は常に最前線であった。後方で訓練する暇はない。彼を支えていたのはその最前線で仲間の血によって得られた無数の戦訓だった。もともと、この世界においてはそれらの戦訓は『未来』のモノであるが。

「そーだぜ、若。若は会社の方でも走りっぱなしだったんだろ？ならここらで休憩した方がいいと思うんだぜ」

「そうですね。若も毎日俺たちの相手をしながら会社の書類作業しているのは知ってますよ。今日くらい休まれては？」

若、というのは武影に付けられた愛称である。その理由は簡単、如月セキュリティサービスの社長という座にある武影に二宮が「なら霧技官は若社長、若旦那ってヤツか？なら今度から霧技官の事は若って呼ぶ事にするんだぜ！」と言い出した事がきっかけだった。

それに日野が迎合し、更に中島と藤原も巻き込み、巖谷が悪乗りして武影の事は若と呼ぶようになってしまったのだ。まあ、使うのは

小隊の仲間内だけであり巖谷は普通に武影と呼んでいる。

「…別に俺は大丈夫なんだがなあ」

「…一日27時間働けますか?というのは日本でしか通用しない冗談ですわ、若。最近の仕事ぶりは根を詰め過ぎているようにも見えます…確かに試験六号機の性能は従来の機体とは比べ物にならないものであり、これが正式機として帝国軍全体に広まれば死の八分を超える者も増えるでしょう、その気持ちはわかりますわ。でもその前に一騎当千、万夫不倒の若に倒れられては元も子もありません事？」

その言葉に武影は困ったように頭を掻いた。彼としては別にここまでの日常は苦でもない普通のものだったのだ。

あの模擬戦以降、武影は彼ら耀光小隊のアグレッサー…仮想敵役を受け持つようになった。

仮想敵役として実力は申し分なく、この上なくいい敵ではあるが…苛烈さは凄まじいものだった。若、という愛称にはそういった訓練を用意する武影へのちよつとした意趣返しも含まれていた。なお、ある程度本気の彼についていけるのは巖谷だけである。

そんな彼の一日、それはこのようなモノである。

4時。起床ラッパの二時間前に起床。それから着替え、洗面などを済ませ会社の決裁書類を処理。

6時半、朝食。ちなみに基地内の誰よりも来るのも食べるのも早いと評判である。

6時40分。点呼の間までに各部署との折衝。主に開発上の技術的問題点などの聞き出しや実際にテストしてみての『個人的』感想を伝える。

8時。点呼の後に訓練開始。主に3-1のJIVESによる実機訓

練やシミュレーション訓練、ブリーフィングを繰り返して行う。なお、巖谷少佐は上層部の相手をしなくてはならない為訓練に常に参加しているわけではない。1は当然武影であるが地獄を見ているのは残りの3である。

12時。休憩、昼食。この時間が一番楽しみだというのは本人の談。先ほどの訓練での反省をしながら小隊の各員と食事。

13時。訓練再開。今朝の反省を元に上げつない訓練が続く。

17時。訓練終了。武影のみそのまま夕食に直行。残りの三名が来るのは30分ほど遅れて、となる。

17時15分。書類の決裁。

18時。風呂。

18時半。書類の決裁再開。

21時。夜間の個人的トレーニング。

23時。シャワーを浴びる。以降2時半まで書類仕事や今回の訓練での問題点の報告書作成、TSF-Xへの要望書作成などを済ませ就寝。

：はつきり言って常人なら倒れていてもおかしくないスケジュールである。日野が心配するのも無理はない事であろう。なお、消灯時間に関しては上層部に許可を得たとの事だがその話を聞いた彼らは目を丸くしていたとか。

「とは言ってもなあ、オフの日は街に遊びに行ったりしているぞ？南一番街とか」

そう言って武影は近所で一番大きな歓楽街の名前を挙げたが、その返答はかなりドン引きしたものだった。

「：そこに昼行く方がおかしいと思いますが。やのつく人の事務所に出入りしているとも聞いてますよ？」

その藤原の冷や汗混じりの突っ込みに武影はただ苦笑しはぐらかす

だけであつた。無論、誰もそこで何があつたのかは聞かない。聞いても応えることはないだろうし、上層部もそれを知って黙認しているのだからかなりヤバイ橋を渡っているのだけは分かるのだ。

「ん、まあ武影のオフの話は置いて即応態勢とはいえ訓練は休みだ。武影も書類仕事もゆっくりお茶を片手にすればいいだろう。各員、明日の『対外戦』に備え十分英気を養っておけ：以上だ」

巖谷の声に各員が敬礼し、その場は解散となった。

なぜ対外戦、他の部隊との模擬戦かという武影の実力に自信を無くしかけてきた為である。

間違ひなく強くなっている、だけどそれがどれだけのものが分からない。そのために組まれた模擬戦だった。なお、使用する機体は陽炎である。

一見TSF-Xのシミュレートばかりを行っているかのように思われがちだがしっかりと従来機の訓練も行っている。開発衛士にはより広い機体センスが必要なのだ。凝り固まる事は害悪にかなり得ない。柔軟に機体を選ばない腕とその機体特性をつかむ知性が必要とされるのだ。

「さて、それじゃ俺もまずは仕事を終わらせて：って、ん？」

解散後、武影が用意された隊舎の一室に戻りいざ書類を決裁しようと机の書類を持ちあげたときにそれはあつた。

壁から長い鼻をたらして除く独特の悪戯書き。その横には「休めよ？若」というワンフレーズが残されていた。

こういった手合いの事を好むのはアレしかないな、と武影はこめかみに手を当て揉み解すと消しゴムでそれを消す。宇都宮に持ってきたものに見られて困るモノがある訳ではないのだが、私室に無断で

入り込むのは少々許し難い。

この模擬戦が終わったら後でちょーっとばかりハードな：簡単に言うとか一対一という名の訓練をしようじゃないかと思う武影であった。

※※※

同日、日本帝国群馬県太田市、富嶽重工本工場、社員寮。

富嶽社員の朝は早い。まずは百均で買ってきた安っぽい目覚まし時計を乱暴に叩き、そのけたたましいアラームを無理やり黙らせる。ぼさぼさな頭を掻きむしりながらふらふらと洗面所へ。

昨晚の記憶：設計図と新規で届けられた新理論の論文を読みながら設計チームの面々との会議、それが終わった後は南一番会の飲み屋に直行、そして更に昼間の問題を肴にその続きを論議する。最後にガード下で飲み、タクシーに乗った後の記憶がない事まで思いだして気付けの一杯：キンキンに冷えた水を飲む。

うむ、いつも通りだ。問題ない。

顔を洗い、髭をそり、歯を磨く。髪の設定もそこそこに米を研いで炊飯ジャーにセット、そのまま味噌汁を作る。出来あがる頃には炊き立てが出来る算段だ。

そして味噌汁を作る合間に携帯のチェック。ビジネスマンの必需品であるその迷惑メールを削除、削除、大事なモノは上司からのメ

ールと妻からのメール…を確認したところで大きなため息が漏れる。

「…買い物、今度付き合ってやらなくちゃなあ…」

出費倍増確定。まあ最近の仕事が充実しすぎていた。配慮が欠けていたのも仕方がない…なんせここ最近では文字通り設計室と会議室に資料とともにすし詰めになって設計作業をしていたのだ。それこそ寝食を忘れチームが丸となって、だ。

守秘義務があるから話せないものだが、如何に自分が作っているものが素晴らしいのか自慢したい。だがした瞬間首が跳びかねない。割と文字どおりの意味で。

彼は総勢75名の富嶽最高の精鋭部隊…否、富嶽・河崎・光菱の誇る耀光計画設計チーム、AGFET(Advanced Generation Fighter Engineering Team…次世代戦術機設計チーム)の一員である。

年齢を問わず、熱意と能力のあるものだけが選ばれるこの開発プロジェクトチームにて中堅…齢30過ぎの技術屋だ。

耀光計画の道のりは決して平坦なモノではなかった。

第二世代戦術機を開発した事がない帝国にとって、基幹フレームの材質から装甲材、OBLの根幹をなす光ファイバ通信技術、そしてそれらを統括するメモリ・CPU・OS。情報も技術も不足し苦肉の策として第二世代最強と謳われるイーグルを輸入、ライセンス生産によるノウハウから得た技術を元に今後の発展を捨てて開発されて来たのだ。

それまでのTSF-Xは純国産、とは言い難いものだった。たしかにイーグルのブラックボックスであった部分…電子兵装やOBW、

その発展であるOBLなどは自己開発してきた。だが他の基礎技術に関しては他人のふんどしを借りて作ったようなものである。各部鋼材材質の解析を、昼夜を問わず行った新帝鐵の技師には申し訳ない話であるが、帝国のみの技術では不可能だっただろう。

それが今はどうだ。

メインフレームの鋼材はイーグルの機体解析で得たモノより遥かに高い弾性・延性に富んだ新型高張力鋼を採用：鉄を主とし、0.0001%単位で厳格に管理された元素成分、そして高度な冶金技術から焼き入れ、析出硬化されたそれは紛れもない新時代のフレーム材であった。

装甲材にしても、今までは電磁伸縮炭素帯にしか目を向けられていなかったナノカーボン技術の発展である。分子単位の配列から徹底した組織管理を施し、徹底して不純物を廃したそれはまさに鋼の特性を持つダイヤモンドだった。BFRPのようにタングステンといった希土類、希少金属類に頼らないそれはコスト面から見ても優秀な素材である。ただ問題があるとすれば、極めて高い加工精度を必要とするという事だろうか。だがそれに必要な技術投資も長期的なスパンから言えば安い出費である。

そして最も驚くべきは内装関連であるが：こればかりは門外漢な彼にとっては理解に幾ばかりかの時間を必要とした。

その代表格が有機物半導体メモリである。これはシリコン基板上に電圧をかけると分子の電気的狀態が変化する特殊な高分子化合物を付着させる事で、僅か数十マイクロメートル四方に数十万という記憶素子を詰め込むという半導体関連の技術にとって革新と言うにふさわしいものだった。

これにより従来の懸念であったパターンの複雑化や情報処理の高速

化、そして衛士強化装備のフィードバック能力の向上も期待されている。

ああ、そう言えばその管制ブロックも改造をしようとしていたがTSF-Xには導入されないらしい。耐Gジェルによる搭乗者への負担を軽減するシステムだったらいいが：これは河崎とこれらを提供したあの如月の共同開発らしい。全世界統一規格でありその特許を有するマーキン・ベルカー社しかない市場に切り込むとは剛毅な話だが：果たしてそちらには参加できるのだろうか、いや、できないだろう。自分はフレーム・装甲関連の設計を担当している。餅は餅屋というものだ。

内装といえばコンデンサも遠田関連と研究が進められているらしいが：

布団を畳み、シャツとスラックスに着替えながらそれらの事と妻の説得にかかる費用、今月の給与を考えているうちに味噌汁が出来上がる。ご飯とみそ汁、漬物にたくあん。これでもかといわんばかりの質素な朝食だ：無論、それぞれ合成食物である。

飯が乗ったお盆を折りたたみのちゃぶ台に運び新聞をチェック、TVのニュースから流れるコメンテーターの割とどうでもいいコメントをBGMに飯をかき込む。如月重工、本社工場建設に伴い人材急募：金ヶ崎の方面の求人話題だった。コメンテーターが当たり障りない、参考にもならない事をつらつらと並べ立てて次のニュースに移る。

：おかしい。そう彼は思った。いつもこのコメンターはべた褒めか、これでもかと貶して『遺憾の意』で締めるタイプだと思っていたのだが。

とは言え自分には関係ないと記憶の片隅に疑念を追いやり、両手を合わせて御馳走さまと言。

片づけながら今日の予定を考える。外回りの心配は消えたが内業の量が桁違いに増えた。今日も新規技術のカタログと論文片手に猛勉強が待っている。

だがそれを嫌とは思わない。それが技術屋なのだ。世界最新鋭を突っ走り最高の製品と信頼をその知と技で勝ち取るのが彼らの本文なのだ。それに必要な事を嫌がっていては富嶽最精鋭の名が廃る。

出社予定の時間まではまだ少々時間があるが、そのままネクタイを締め、クローゼットから背広を羽織り…かばんを片手にドアを開ける。

今日も雲ひとつない、透き通った青い冬の空。取りあえず妻には後で謝ろうと思いつつ、足取り軽く戦場へと向かう。

「よお、影行。どうした、ずいぶん早い出社だな」

「そう言うそちらこそ、まだ朝礼には2時間以上時間がありますよ、剛田部長」

「馬鹿言ってるじゃねえよ、やっと愛しの愛娘が出来上がるッてんだ。これに黙って寝てられると思うか？」

影行は愛娘、という言葉にまた溜息をついた。剛田には一人息子がいる。だが親子の仲はそれ程良いわけでもなく、彼は娘がほしかったとよく口にしていた。今回のTSF-Xにしたってこれが技術屋としての俺の娘だと言ってはばからないのは設計チーム全員が知っている事だ。

「はあ、息子さんがそんなに嫌いなんですか？」

「あのなあ、あの馬鹿、将来は軍に入隊するって言い出してるんだ

ぞ？衛士の消耗率はお前も知っているだろう：そんなところに行くんじゃないねえ、俺の後を継げと口酸っぱく言ってるんだがあの馬鹿は聞きもしねえ。まったく：」

その言葉に剛田は表情を暗くした。口では馬鹿と言っているが代えがたい子供なのだ。それが軍に行くっていうのだから気が気ではないだろう。なんだかんだいって子供を思うのは親心だった。

「それにしてもどうしたんですか？確かにあの子は熱血というか、まっすぐな子でしたが：」

「いや、それがな。どうも交通事故に遭いかけたところを軍人のような男に助けられたらしくてな：あの人は師匠だ！師匠のような軍人に俺はなる！！ってそればかりで：全く、名前も聞かずにいたっていうからこちらとしてはなあ：」

「へえ、どんな方だったのかは聞き出せたんですか？」

「聞き出せたも何も、お前を若くして髪に銀髪を混ぜた感じだと言ってたぞ。はあ：まったくどうしたものか」

髪はメッシュ混じりの銀髪。若いころの俺にソックリ：

まあ、人間似たような顔の人間は世界に必ずいるものだと思う、自販機から缶コーヒーを買う。無論、上司の分も忘れずに、だ。

「まあ、それっぽいのがいたら教えてくれ。こちらとしても恩人に派礼の一つもせにゃならん。サンキュ」

「ええ、此方でもそれらしい方を見かけたら訪ねておきますね」

そう言えば息子の顔も見えていないな：そう影行は思いながら、本社への道を剛田と歩く。旅の道連れの内容はもちろん詳細を伏せた機体設計の話だった。

※※※

2月14日、日本帝国栃木県、宇都宮基地。

武影は地平線から昇る朝日を拝みながら、ついに始まった不知火の……いや、TSF-Xの全面改修に思いを馳せていた。

不知火はそれなりに付き合いのある機体である。武御雷が持ち出せない、使えない状況下においては不知火が彼の愛機であり、その搭乗時間は優に4000時間を越える。それほどに慣れ親しんだ機体であった。

それが、今新たに生まれ変わろうとしている。そう思うと彼の口からは自然に笑みがこぼれていた。

「おや、こんな所にいらっしやったんですね。霧技官」

「眠気覚ましがてら朝日でも拝もうと思って、ですよ。日野中尉」
振り返るまでもない。そう思い彼は欄干に身を預けていた。

そこに長い黒髪を風に靡かせる日野が横に来る。お互い口を開かない……否、その必要がなかった。それほどに昇ってくる朝日は美しいものだった。耀光の名に相応しい、その光を見ながら日野はため息をついた。

「どうしました？ 日野中尉が溜息だなんて」

「いえ、その……霧技官は先日のお休み、東京の方に遊びに行かれたと

聞きまして」

「？ああ、誘うべきでしたか？すみません、そこまで気が回りませんでした」

「そう言う事ではありませんわ。道路に飛び出しそうになっていた子供を助けたとか」

「あー：そりゃ簡単です。後ろからずいぶん急いで走ってきているガキがいたんで、首根っこ捕まえて止めただけですよ」

「：ずいぶん荒っぽい助け方でしたのね」

「あはは：それは否定できないなあ」

苦笑しながらそれに応える。まあ、その後少々お説教をしたが：何故だろうか、あの子供の目がキラキラと輝いていたのが気になる。それにどこかで会ったような気がしてならないんだが：

「もう少しスマートにやるべきでしょう、首の骨が外れたらどうするんですか？」

相変わらずの糸目で困ったような表情をする日野。知り合いから誰が助けたのか心当たりはないかと言われ、その該当者が武影らしかったことから確認に来たらしい。

「そうは言っても：ま、単に目の前でガキが死ぬのを見たくなかったからそうしただけですし」

「：やはり若は冷たいのか温かいのかよくわからない人ですね」

「あー、それも否定できない、ですね。自分でも甘いとは思いますが」
「助けたければ助ければいいんです。若はそういう：優しくしようという所も無理やりぶっきらぼうにして抑え込んでいませんかしら？そう、まるで」

「はい、そこまで。それ以上はダメですよ日野中尉：それ以上はダメだ」

少し声のトーンを落とす。

「ま、人それぞれあるんですよ。…そう言えば愛のアレ、キルロイ参上を知っているとは思いませんでした」

雰囲気を変えようと武影は明るい声色でそう言った。あの後夜に開かれたブリーフィングの資料の片隅に小さくあの絵を書いておき、その上で二宮に「とりあえず、5機な」と耳元で囁いて上げたのだ。無論5機という意味は明日の模擬戦で5機落とせという意味である。出来なければ…ということだ。

その際に日野がこの絵を『キルロイ』と言ったのだ。それは欧米にあるこの落書き…キルロイ参上、の事である。

「ああ、アレですか。以前米国に旅行に行った際に教えてもらいましたの。向こうのジョークセンスはいまいち分かりませんでしたけど」

「ハハハ、まあ欧米圏と極東では文化も全く異なりますからね…そろそろ点呼の時間ですか」

「ええ、そう言う事でお迎えに来ました、という事ですわ」

「自分は今日の模擬戦に参加できませんが…存分に鬱憤を晴らしてください。じゃないとそれが俺に回ってきそうなんで」

「あら、そうは言いましたもこの程度で収まるとは思いませんわ。

今日はそう言えばキリスト教で言うヴァレンタインデー…親愛なる霧武影技官には贈り物をするべきですわよね？ふふふ」

肩をすくめる武影に日野は笑いながらそう言った。

この基地の衛士諸君、俺の身代りになってくれ。今日はヴァレンタイン、女性からの贈り物はうれしいだろ？まあ鉛玉の贈り物だが…そう思いながら武影は階段に向かう。日野もそれに従って行った。

これが耀光小隊による阿鼻叫喚の模擬戦、その前の一幕だった。

11th Stage: Silhouette of Mirage (後書き)

次回、宇都宮にチョコレート色の雨が降る…どう見てもオイルです
本当に (ry

カーボンナノメタルの元ネタはFROMソフトウェアの叢から、AC
SについてはAC4、ACfAから取っています。

AC3のメカ本がないのでAC初代とACfAのメカ本からアイデ
アを拝借しています。マブラヴのメカ本は必携ですよー…これが
ないと自分にKAIHATSUは無理です。

12th Stage: Valentine's Party

12th Stage: Valentine's Party

2月14日 09:00 宇都宮陸軍基地 第二演習場

「しかし603機甲部隊…宇都宮基地海外派兵大隊相手にこっちは小隊とはちよつときつすぎじゃないですか、霧技官？」

「そうですわ。いくら人外の相手をしていると言ってもこの数はちよつと…」

「そうだぜ。いくら若の変態機動を相手にしていてもこれとそれは違う気がするんだぜ？」

「お前ら…よほど俺に喧嘩売りたいんだな、そうなんだな？」

頭を押さえつつ口元が引きつる武影に言いたい放題の三人は、やれ鬼畜だのやれ無理だのなんだの言っている割には笑顔が零れていた。

彼らの中にあるその自信、それは『あれ以上の敵はいない』という安心感からだった。

そしてその基準となる衛士に追従できる人間が今2人いる…高速機動戦に開眼しつつある藤原と豊富な経験と飛び抜けたセンスを持つ巖谷の二人だ。

無論、日野も二宮もあの人外機動に攻撃を当てられるようになってる。そう思えばそれよりも機動力がない相手に外すことはない。

「ハハハ、まあ相手を甘く見るな。此方を心配してか新兵ぞろいの第三中隊を当ててくるといいうなめた真似をするほど錬度が高いのだ

ろう？十分堪能させてもらおうじゃないか」

「そうですね、少佐。でも数だけで押し切ろうという馬鹿がいましたらその鼻っ柱を複雑骨折させなくてはなりませんわ」

「むしろ顔面陥没じゃないか？」

「違いねーな。あ、とどめはアタシにさせて欲しいんだぜ」

「：一昔前のお前らに聞かせてやりたいセリフだなそりゃ。それと二宮、ズルは認めんぞ？」

今回の模擬戦に武影は参戦していない。あくまで耀光小隊の模擬戦だからだ。

そのため武影は中島と同じくCP用の指揮車からの観戦となる。

「うえ、若もホントごめんなさいって謝ってるんだからそろそろ許してほしいんだぜ」

「言葉より行動で示して欲しいなあ二宮クン？ん？」

「それくらいにしておけ：さて、確認を行うぞ」

性悪な笑みを浮かべる武影に文句を言う二宮だったがそろそろ開始時刻が迫ってきたという事もあり、巖谷の一言で空気が一変する。

「今回の模擬戦は帝国陸軍第603機甲部隊第一大隊との模擬戦だ。第一、第二、第三中隊とそれぞれ相手をする事になる。戦力差は1..3、しかも多少ブリーフィングの為の休憩、補給ありとはいえ連戦だ。各々ペース配分を間違えるなよ。本演習はJIVE Sを利用し、ほぼ実戦と変わらない状況下を想定して行う。CASE..47だ。大好物だろう？やることはシンプル。いつもあの馬鹿坊主にやられている事をそっくりあいつらにしてやればいいだけだ：各員、準備は良いか？」

「無論、いつでも行けますよ！」

グレア2、藤原俊也少尉、F-15J陽炎：突撃前衛。

「あらあら、愛ちゃんもやる気みたいだし競争になるのかしら？」
グレア3、日野人吉中尉、F-15J陽炎：砲撃支援。

「ちょ、日野姉えアタシの分も残してほしいんだぜ：ってあーもう、先に落とすしかないのかよ！！」

グレア4、二宮愛少尉、F-15J陽炎：打撃支援。

そしてグレア1、巖谷榮二少佐、F-15J陽炎：強襲前衛。

巖谷の問いかけに獰猛な笑みを浮かべ答える耀光小隊の面々。バス
トアップに表示されるその姿にははち切れんばかりの闘志と冷静さ
が奇妙にも同居しているように感じる。その面構えに満足した巖谷
は口元を一瞬だけほころばせると自らもまた戦士としての姿に戻っ
た。

「グレアママよりグレアズ各機。間もなく模擬戦の開始時刻です：
データリンク、チェック完了。カウントダウンを開始します：」

幾度となく訓練として戦ってきた市街地：たとえその細部は変わろ
うともやる事は変わらない。

「30……15……」

巖谷は静かに思う。

あの時、武影の挑発から始まったあの模擬戦：それと同じような事
をするとは思ってもいなかった。
普通ならどう考えても負ける組み合わせである。ランチェスターの

法則はその絶対数が大きくなればなるほど現実性を増していく…1
2機の中隊と4機の小隊、普通なら負けるのは明白なモノだ。

だが今の自分たちに旧態然とした機動しか知らない彼らに負ける要素が思いつかなかった。

戦術機の本来あるべきコンセプト…三次元戦闘、それを活かす術を知っているのと知らないのでは正しく雲泥の差があるものだ。

「10・9・8…」

既にシナリオは描き終わっている。機体の主機出力を静穏に設定、それぞれの仕込みを再度確認する。

「5・4・3…」

F-15J陽炎。名機として知られるF-15の系譜を受け継ぐその機体の主機FE100-FHI-200が唸りを上げる。操縦桿を握りしめる手に力が入る。

ふと気付くと巖谷は嗤っていた。そんな事はこれまでなかった。否、戦いの中に享楽を求めるという事はなかったはずだった。

だが彼は気付かぬうちに興奮していた。自らが彼らに理想とも言ふべき完成形である機動の一つを披露する事に。

指揮車の中島にはそんな彼らの様子が静穏モードのまま全力で駆けだすために前傾姿勢となっている彼らの姿は、さながら檻から飛びださんとする猛獣の如く見えた。

不思議と彼女にも彼らの闘争心、そして溢れんばかりの自信が伝わってきていた。聞かされていた自信喪失しないように、という話は嘘だったかのようにも思える。

そしてふと横を見ると、満足げな瞳でその様子を見つめる武影がいた。

「2・1・状況開始ッ」

そして、火蓋が切って落とされた。

09…08 第603機甲部隊第3中隊・キャンサー中隊

「キャンサー1よりキャンサーマム!!おい!?!どうなっている!」

中隊長であるキャンサー1の伊澤大尉は顔面を蒼白にさせながら網膜に映る戦況図に吠えた。

「こちらキャンサーマム!B分隊は殲滅、C分隊は1機を残し壊滅状態!!一度集結し仕切り直すべきかと進言します!!」

投影されたキャンサーマムを一瞥し、ええいと歯ぎしりしながら伊澤はフットペダルを踏み込んだ。馬鹿な、あり得ない。その言葉に彼の心境は集束されていた。すでにB分隊はその全ての機体が落とされ、C分隊ももはや戦闘能力はほとんど失われている。現時点で7機…半数以上の機体が既に落とされていた。

「た、助けてくれ!!!なんなんだこいつらは!!!」

「嘘だろ、おい!?!どうなってやがる!!!」

回線からは助けを呼ぶ部下の悲痛な叫びが溢れていた。たかが小隊、されど小隊と耳にタコができるほどに警戒を呼び掛けていた。相手

は伝説を擁する小隊、開発衛士の小隊といえど決して手を抜くなど。なのにこの様である。

いや…警戒は十分していたはずだ。あの巖谷榮二の名を知らぬ帝国衛士はいない。そしてその彼が率いる小隊とあれば当然精強なものであるとうと。

ダミービルの森の中から猊園が立ち上る。無論、JIVESの判定による映像だ…死人はいない。

その映像はリアルさを追求しているため実際の爆発とそんな色ない迫力を見せ付けているが、逆にそれがこの非現実な戦況をまるで映画のような感覚にさせてしまう。

そう、まるで全てがシナリオ通りで…この結集のための交代もまるで彼らの掌の上の出来事であるかのようで…

時間は遡る。

キャンサー中隊は定石通りサークル・ワン（円壺型）を組み万全の迎撃態勢を整えていた。

この規模である。すでに位置は知られているものと想定し即応性を最重視するため主機出力は戦闘状態に。音響・電波それぞれのセンサーもフルアクティブに設定…キツネ狩りの要領である。

ジワリ、ジワリとゆっくり前進する彼らは最大限の警戒を周囲に払っていた。

ダミービルの影、三叉路の影、狙撃位置となるビルの屋上…その全てに目を走らせ、振動センサーに耳を研ぎ澄ませる。

そして、唐突にソレは始まった。

「キャンサー06よりキャンサーズ各機！8時方向からチャフとスモーク！！？？クソ！見えない！！」

「キャンサー01よりキャンサーズ各機へ、このまま12時方向に離脱！！構えろ！来るぞ！！」

チャフというものは電波を乱反射するアルミニウムを蒸着させたプラスチックやグラスファイバーのフィルム、ワイヤーを空中に散布する事で探知を妨害する兵器である。

一時的にレーダーを無効化しミサイル等の兵器の目をごまかす兵器であるが局所的なものであり、そしてその時間もそんな長時間のものではない。

さらに言えば周波数をずらしてしまえば無効化できるものだ。だが、その僅かな時間が命取りになる事もある。今回の訓練ではチャフの傾向数を絞り、周波数は固定となっているため周波数変更による対応はできない。

「どこだ…どこから来る…！？」

「円陣を狭めろ！エレメントから目を離すなよ！！」

スモークが立ち込めている以上、無闇な発砲はできない。今できるのは素早くスモークから抜け出し、奇襲を仕掛けんとする敵機を捕捉、撃滅する事だった。

帝国におけるジェットエンジンのリーディングカンパニーである河

崎重工によってライセンス生産された陽炎の跳躍ユニットが唸りを上げ、NOE（匍匐飛行）へと移行する。

瞬時に300km/hを越える爆発的加速を生み出すロケット・ジェット複合式のエンジンはその特性である優れた瞬発力を大いに活かし、機体をわずか2秒でスモークから抜け出させた。

だが、その2秒という時間は彼らが奇襲を成功させるのに十分な時間だった。

「!? レーダーに反応ッ：!? 中央! 上だと!？」

円陣の中心付近にいたキャンサー9が振り向こうとした瞬間、その管制ユニットに真つ赤な化粧が施される。

続いて10も銃を構える暇もなく撃墜判定が表示された。わずか2秒の間に起きた出来事である。

その肩に輝くナンバーは02。高速機動戦に秀でた藤原少尉の三次元機動からの奇襲だった。

「ッちい!! 大胆なまねを! 十字砲火で落とせ!!」

キャンサー01のその指示は普通なら有効なものである。だが今の状況でその指示はミスだった。丁度円陣の中央：射角の交差角が180°となる点に向けて撃ったらどうなるか。

「わ!? 馬鹿止めろ!! 撃つな!!! 撃つんじゃない!!!」

「おい味方だ!!! クソ!!!! ブレイク（散開）!!!! ブレイク!!!!!!!」

同士討ちである。当然藤原も狙ってやったのであろう、素早く3機を仕留めると空中へと躍り出る事でそれらを回避し被害を拡大させ

ていた。

「何てやつだ！？エレメントを確認！！楔壺型に組み直して反撃を」
強襲前衛であるキャンサー04は上官の声にスモークから逃れようと跳躍ユニットを吹かそうとする…だが、反応がない。

ふとカメラを後ろに向けようすると…そこには鈍い鋼の輝きがあった。

「う、うわあああ！？こいつどこから！！？」

跳躍ユニットは背後からその接続を切られ…片腕で頭部から『管制ユニットにいる人間に当たらない程度に』短刀を刺された。カメラは死に、当然後ろを取られているため背部の長刀は使えるはずもなく…真後ろに感じる殺意と突然現れたその存在によって混乱に陥った04は、それを振りほどこうとがむしやりに動いてしまう。

「04！どうした！！おい！！！！04！！！！？？？クソ！04から距離を取れ！！巻き込まれるぞ！！」

04を盾に取ったその機体は04が乱射する突撃砲と自らの突撃砲で一方的な弾幕を張る。無論、退路を確保すべくその機体を引きずりながら、である。スモークもまだ残されておりIFFが機能し…彼らが04のIFFを切らない限り敵の弾幕は止む事を知らない。

「04は諦めろ！各機04のIFFを切れ！くそ、中心にいる敵機はいい！体勢を立て直す事を優先しろ！ダミービルを使い！！」

12機を中心に飛び込む敵の胆力、そして混乱に乗り背後を取る狡猾さに舌を巻きつつもキャンサー01は部隊の再編・陣の再構築をすぐさま指示した。それは海外で実戦を組む彼らの錬度を示す事だろう。だが、今回は相手が悪かった。

「こちら06！待ち伏せだ！！05は管制ユニットを短刀で刺し抜

かれて撃墜！07も狙撃された！！つく！！こっちももう持たない！！なんなんだこいつらの動きは！？？」

ビルの側面を足場とした複雑な三次元機動の前のキャンサー06は手も足も出せずにいた。否、銃口を振り回すばかりで一向に弾が当たらないのだ。

人間の目は横向きにある。これは横方向の動きに強いが縦方向の動きに弱い。そしてまた、無理やり上を向かざるを得なくなる状況は周囲への視界を狭めることとなる。

必然、三次元機動を仕掛けるグレア01、巖谷少佐はこれを見越して仕掛けていた。当たらない突撃砲を振り回し、無闇矢鱈に後退する先にあるモノは当然…

「！！？しま…」

ダミービルである。これで06が落ちた。

そして時は現在へと戻る。

「なんだ…一体なんだって言うんだ！！！畜生！！！！」

見えているのに見えない恐怖、というべきだろうか。そこにあるべきモノがなく、ないモノが存在する恐怖。

音速を超える速度で射出され、等しく破壊を与えるべき36mmと120mmの鉛玉…この場ではペイント弾のそれがまったく意味をなさない戦場。狙えば当たるはずなのに、当たらない矛盾。

それを成している機動は人型の機動というよりはむしろ…そう、むしろ猛禽や虎狼の如き動きだった。

人が人として動かすべきのそれが、獣の動きをする矛盾。だがそれは彼らの中の矛盾であり…この機動をよく知る人間はこう言うだろう。

『そもそも人間は飛べないのだから』と。

「グレア01よりグレアズ各機、敵勢力の分断に成功…撃墜は5か？」

「6だぜ、さっきアタシが撃ち落とし…もう一つ…と、これで7だぜ少佐。あーあと3機も落とさないといけないのかッよっと！」
二宮機が空中から兵装担架に詰まれた87式突撃砲より120mmを打ちおろす…弾種はHEAT-MP(High Explosive Anti-Tank Multi-Purpose、多目的対戦車榴弾)。

これは爆薬の持つエネルギーの7割がメタルジェット(おおよそ7／8km／sの金属噴流)にならず周囲へ拡散する事を利用し、メタルジェットの形成を阻害しない個所に鋼球、ワイヤー類を仕掛け爆発時に飛散するようにした溜弾兼用弾である。

単純な威力では通常のHEAT弾に比べ劣るが、その真価は近接信管による周囲への破壊効果にあった。120mmのその威力は軍用ヘリを落とすのに十分な破壊力を持つ。そう、直撃せずとも撃墜とまではいかずとも多少の損害と体勢を崩すほどのダメージを与えられるのだ。

そして解き放たれたH E A T—M P弾は敵の：キャンサー11の目の前に弾着、近接信管により作動し発生したその爆発と多数の破片により目と耳を潰し、更には少なくともダメージを機体全体に与えていた。その上で、狙い澄ましたかのように87式支援突撃砲から36mmの精密狙撃を決め、ビルの影へと着地した。その顔には興奮の色こそあれど疲労の色はいまだに見えない。

「はいはい、愛ちゃん頑張ってるけど間に合うかしら？ あっちでは藤原君がすごい張り切りようだし私も頑張っちゃおうかしら」

「な、ちょ、日野姉え殺生な事言わないで欲しいんだぜ!？」

そう言いながらも日野は使い物にならなくなった盾：首皮一枚で生き延びていた敵の陽炎の管制ブロックに刃を通し、速やかに後退する。S—11が搭載されてないからこそできる戦術だった。少なくともその戦術は『衛士』ではなく『テロリスト』のそれだと言える。冷笑を浮かべるその狐目には既に次の獲物が映し出されていた。

その向こうでは藤原が推進剤を大盤振る舞いとばかりに使い、敵の注意を惹きつけている。

縦横無尽に飛びまわり、ビルの影を利用した三次元機動はそうそう捉えきれるものでもない。多少の被弾こそあれど彼は最大の任務：陽動を完ぺきにこなしていた。

彼に気を取られれば足元がおろそかになり、巖谷や日野の餌食となる。逆に地上ばかりを気にしては上空から迫る二宮や藤原の弾幕に晒されることとなるのだ。

そうして判断力を奪い、分断させ食い荒らす：それが彼らの戦術だった。

戦場を彩る仮想の爆炎、そして現実では色取り取りの悪趣味な化粧がキャンサー中隊の各機に施されていく。

彼らの口調は軽く、目つきは厳しく。戦場の空気を支配しているのはどちらか：それは一目瞭然の事だった。

「ずいぶんと、いい仕上がりになっていますね」

「！？な、ど、どなたですか！？ここは関係者以外立ち入りは…」
中島がそこまで言った所で、指揮車に入ってきた女性は首元に掛けられたパスを示す：『License』の文字。それは彼女がこの場に入る資格があることを示すものだった。

「ああ、十分これなら9月に間に合うと思う」

「そう、ソレは重畳：これほどいい実戦証明の機会を逃すわけにはいきませんもの」

中島は首をかしげていた。『九月』『実戦証明』これらが意味するという事は9月に何らかの：帝国が参加する作戦がありそれに耀光小隊も参加する、ということくらいしか予想できなかった。

「まだ向こうからは正式な要請は来てないだろう？実際のところどうなんだ、あの作戦は」

「帝国では緊急予算の計上、向こうでも重慶に物資の搬送が始まっています。進捗から察するに9月で間違いないです」

ふむ、と霧技官はその優しげな瞳を思案気に伏せた。

「来年度の帝国の予算は：あー、これだと97は危ないか？」

「いえ、問題ないでしょう。此方から上げる税収が相当な金額になりますし関税で国庫を潤うことになります。多少の出兵程度で傾く事はまずあり得ません。貴方はそれより目の前の問題に集中すべきかと：センターの結果、ほぼ問題ないという事でしたし」

「そっちなよ：あー、なんで俺が帝大に…」

その言葉に中島は目を剥いた。いつの間に、いやそれより帝大とは冗談だろうと。

だが現実是非常、この怪人は激務の合間にセンター試験を受験していたのだ…あり得ない事だが、からくりがある以上彼にはそれが可能だった。

「セレの方は…聞くまでもないか。というよりもう招聘が来てたんだっけ」

「ええ、重量子理論の基礎論文を発表したところ一発で。試験では主席を取ってやろうかとも思ったんですけど無駄骨になりましたね」

その言葉に呆然とするが霧技官の「蹂り…もとい模擬戦は終わっていないですよ。オペレートはしっかりしてください、中島中尉」という声に我に返った。もう既に敵戦力は壊滅状態、二宮少尉の悲痛な叫び…どうやらノルマを達成できなかったことからの叫びであろうそれが響く通信回線に苦笑しつつオペレートを続行する。

後ろでは何やら不穏そうな話をしているが、今はそれを聞いてはならない。ここで話すという事は聞かれても問題ない内容だろうが、いまはオペレートが最優先だった。

そうしているうちに巖谷少佐が敵の上空から唐竹割りに斬り伏せ、全ての敵機に撃墜判定が出されて模擬戦は終了した。所要時間20分、自軍の損害は

巖谷榮二…頭部損傷軽微・右腕部損傷軽微・左脚部損傷軽微。

藤原俊也…頭部損傷・左腕部破損・右跳躍ユニット損傷・左兵装担架破損。中破判定。

日野人吉…左肩部損傷軽微・右腕部損傷軽微、左大腿部損傷軽微・右脚部損傷軽微。

二宮愛：右肩部損傷・左腕部全損・右脚部損傷軽微。中破判定。

…やはりどこかぶっ飛んだ戦績だった。藤原機と二宮機の損傷が多いのは派手な立ち回りが多かったせいだろう。その分敵機を盾に取るなどの悪辣な戦術をしていた日野機は全体的なダメージこそあれそこまで深い傷はなかった。

「此方グレアママよりグレアズ。お疲れ様です、グレア小队各機は機体洗浄、および休憩のため帰投願います。次の模擬戦は1000からの予定です」

「こちらグレア01、了解した。各機帰投後デブリーフィングを行う：おい二宮、そうしょげるな。まだあと2戦あるだろう」

「うう：グレア04了解：もっといけると思ったんだけどな」

「愛ちゃん、チャンスはまだあるんだから諦めちゃだめよ？でも次はそう簡単にはいかないわよねえ…」

「確かにそうですね。次は対策も練って来るでしょうし：またブリーフィングの時に」

そう言いながら彼らはハンガーへと帰投していく。

後の演習場に残されたのは半ば茫然としたキャンサー中隊の衛士たちだけであった。

同日、同基地内司令区画。

「ふむ、元々錬度の高い部隊と聞いていましたがこれほどまでとは…」

「いやいや、これでは富士教導隊でも厳しいでしょうな。いくら海

外派兵によって実戦経験を積んでいる603とはいえ…むう」

「しかしのう、確かに三次元機動の有用性は付きで実証されておる。だが地上においては光線属種が存在するんじゃないぞ。このような機動、前線では出来まい」

「確かに、そうですね。これはこの…C A S E…47だからこそ出来得る機動。前線では出来ないものですな」

老人達が目を細め、そのモニターに映し出された映像を見つめる。その襟元には准将、少将といったクラスの人物であるという証があった。

「だが、そのようなモノが存在しないという現段階においてこれ以上の最適解はないと思うが」

その年若い声に唸る声上がる。確かにその通りである。この『BETAがいない空間』であればそれを活かした機動こそが最適であるのだ。

「しかし、殿下。前線であの恐怖を味わった人間に今一度空を飛べ、というのはいささか酷な話ではございませぬか」

「ふむ、だが現に彼らはこうして空を飛んでいるぞ。彼らも大陸での派兵経験がある。訓練では当然光線属種を想定したものも行っているだろう。だが彼らは飛べる…実に興味深いと思わないか。諸君」年若き声はそう愉快そうに言った。若く、そして力に満ち溢れた声だった。

「近衛の者でも此処まで出来る人間はいない。それこそ紅蓮や御剣老くらいだろう…あの者はすでに一線を退いてしまったがな。いや、それにしてもこれほどとは…ふむ、余もこの者たちの話を聞いてみたくなった」

「な、殿下！今回はお忍びで御座いますぞ。そう人目に着かれるような事は…」

「よい、構わん。余が会いたいというのだ。多少話すことくらいどうとでもなろう…それとも、余にはそれ程の自由もないというのか？」

黒髪を短く切りそろえ、利発そうな面持ちの青年はそう楽しげに笑っていた。冷静を装ってはいるが、まるで未知なるものと遭遇したかのようにその眼は興奮の色に染まっていた。

「九條殿下…分かりました。この模擬戦の後となりますがよろしいでしょうか？」

「構わぬ。今回は余も訓練ということで此処へ来ているのだからな。汗を流した後で会うのもまた一興だろう…うむ、そう思うと余もじっとしてはいられんな。シミュレータを借りるぞ」

そういつてやおら席を立つと青年は戸口へと歩き始めてしまった。それを見た武官があわててドアを開け、先導する。

その者こそは九條良久。15にして九條家次期頭首である若き衛士だった。

12th Stage: Valentine's Party (後書き)

戦闘描写だけで1万字いかない：むう、難しいモノですね。冗長になるとグダッてしまうし短すぎると薄っぺらく：視点移動を入れてみましたけど読みにくいでしょうか。

2nd Mission..Insane Elephant

2nd Mission..Insane Elephant

人々が真実の空を得て13年。レイヤードを捨て地上に居を構える人類も増えだし、大陸中央部に位置する旧都市区より遙か北西に建設された新中央地区にはグローバルコーテクスの本拠が新たに建設、それに伴いアリーナも新設されていた。

地上開発は一部地域を望み順調に推移していた。そして各企業の支配権も順調に伸張している。レイヤードを擁する旧都市区は保守性の強いクレストが、南西部の環境整備地区はその技術をして変態と称されるキサラギがその影響力を強めている。そして旧都市区から北東には新興工業地区には世界最大の技術、資本、政治力を誇るミラージュ社が本社を移設。

管理者というペースメーカーが焼失した今、各社は各々にそれぞれの求める研究、開発を始めた。ミラージュは貪欲なまでの最先端技術開発と未開発地区の開発。クレストは正式な社名にもあるIndustrialの名の通り既存技術の洗練、そしてレイヤードでの影響力を強めていく。キサラギは先の二社が存在しない新規技術市場を狙い、その独創色を鮮やかにしていた。

武がこの生き地獄に来て3年。時代は変わりつつあった。すでに束縛する檻はなく、ただ開かれた世界と市場が存在する。そして人は貪欲にそれを欲していた。

その一方、民衆は自らの属する企業については一通りの見識を持っているものの井戸端は平穏な日々が続いていた。そこかしこで得ら

れた自由を謳歌し、新天地に思いを馳せ、それぞれがそれぞれの夢を追い求めていく、そんな『企業による平和』バックス・エコノミカの時代。

そしてそんな日常の中、レイヤードのとある的場に一人の少女が佇んでいた。的場とはその字の通りのある弓道の専用同乗の事だ。ここは地下である為か的までの距離が28m、的の直径が一尺二寸（36cm）の近的場である。

射の基本動作は射法八節という8つの節に分けられている。詳細な技術は流派や個人の考え、思想、体格によって異なるが基本となるものは変わらない。

最初に『足踏み』。これは『執り弓の姿勢』：弓を左手、矢を右手に持ち両拳は腰に、両足を揃えて立つ姿勢をとり、続いて『射位』に入り『足踏み』を行う。『射位』で右手方向を正面にして立ち、両足爪先を結ぶ線の延長に的の中心が来るように両脚を左右に踏み開く。両足底は外向きに約60度開き、両足爪先の間隔はおおよそ身長半分程度開くというのが一般的な足踏みである。彼女の踏み開き方は顔を的に向けたまま左足を的に向かい半歩踏み開き、一旦目線を足下に取り右足を外側に半歩踏み開く『二足開き』であった。彼女の流派は儀礼的側面の強い礼射系ではなく武射系は戦場での実利を重視して発展してきた射の系統、武射系に由来する射法であったためだ。

自然な動きで完璧なそれを行った彼女は次に『胴造り』にはいる。足踏みを基礎とし腰を据えひかがみ（ひざの裏側）を張る。丹田に息を下ろし、下半身を安定させた後によりやく矢を番える『弓構え』に入るのだ。

重心を安定させたまま彼女は両肘の内側をやや内に向け、肘に張りを持たせ自然な円相を創る。体の正面で弦を取り懸け左斜め前にや

や弓を押し開き手の内を整え構える。斜面の構えというものだ。そしてそのまま雑念の無い澄んだ瞳でその的に焦点を絞る。

そのまま『打ち起し』：弓矢を持った両拳を上を持ち上げる。それから弦を引き両拳を左右に引き下ろす『引分け』へと移行する。

そのまま引分けの途中弦の三分の一ほど引いた状態で彼女が制止した。だが一呼吸置くとまるで何事もなかったかのようにそのまま弓を引き絞る。その様はとても自然で：とてもなめらかで、違和感というモノが存在しなかった。彼女が弓を引き、そして、放つという行動すべてに。

静寂に包まれていた道場に小気味良い風を切る音がした。純白の羽を付けた矢が的へと一直線に飛び、その中心を穿つ。

まるで最初からそうなるべきであったかのような光景だった。初めから射った彼女の中には当たるイメージしか存在していない。遠的でも同様に中心を穿つ彼女にとってここでの修練は基本動作の確認という意味合いも強かった。だから彼女にとってこれは出来て当然のことである。そう、的の中心のみに矢を集めるという離れ業も、だ。

残心を解き自然体に戻るとその童のような顔を綻ばせた。その後ろでは厳しい目をしていた男がにこやかな表情に変っている。稀代の天才：そう言えるだけの才を彼女は持っていたのだ。そして弛まず続けた修練の成果がそこにはあった。

「ふう：どうかな？ パパ」

「うむうむ、たまの射も美しくなったなあ。パパもうれしいぞー」

父親はそう言って少女の頭を愛おしげに撫で、少女は父親の言葉に破顔しえへへと笑っていた。もう18も過ぎて20前だというのにその姿にはあどけなさや幼さが強く残っている。だがそれはけっして媚びているのではなく、愛おしいモノのそれだった。

「うむうむ：ママにも見せてやりたかったなあ、たまの射を：む、そろそろ時間か。名残惜しいが尊人君も待っているだろう、たまも準備をしてくなさい」

「うん、それじゃパパ！急いで着替えて来るね！」

そう言って彼女はピンクの髪を揺らしながら、とてとと小走りに更衣室へと走っていった。尊人というのはボーイフレンドの事だろう、親父と一緒にデートとはこれどんな報告会と言いたいものだが彼女の中ではそうでもないらしい。

「うむ：もう、このように会う日ももうあまりないだろうからなあ……」

そう言って男は感慨深げに娘の後姿を眺めていた。まるでもうこのような日々はそんなに長く続かないと言わんばかりに。

そう考えながら的から矢を外し、戻るうちに一人の女性：いや、童顔でそのようにみえるだけでれっきとした青年が道場に一礼し入ってきた。青髪のショートが目を引き明るそうな子だが、場所を弁えているのかやや緊張した面持ちである。

「む、尊人君か：もしや表で待っていたのかね？」

「はい、邪魔したらいけないなって思っ……あと、女の子を待たせるのもどうかと思いますし」

「ふむ、君のような子が娘の友人でうれしいよ：さて、あの子もそろそろ来るだろうから駐車場に向かうとしよう」

男達はそう言って道場を後にする。まるで時が止まったかのよう

な静寂に包まれたまま、静かに道場の扉が閉められた。

旧都市とは言うものの数百年に渡る発展をしてきた古都は今なお経済において重要なウェイトを持ち、またそこに居住する人口も最大規模に上る。もっともそこには戸籍の無い人間なども含まれるが、企業にとってみれば彼らはいわば掃溜めのごみ同然であり、基本的に使い捨ての駒として利用されている。

このレイヤードには基本4車線の基幹高速道路網が張り巡らされている。そのトンネルの高さは極めて高く20m近い高さを持っているのだが、これは管理者が存在した時代実働部隊や大型のトレーラー輸送に適応するためにそうなったものだ。現状、殆どの大型通路、道路網は最低でも16mクラスの高さを持っている。ダクトにしても緊急時の部隊展開の為に相応の高さを持っているほどだ。

その高速道を走る一台の車がかった。カラーはブルー、俗に言うセダンタイプの車でそれなりの値段がすると見受けられる。

「旧都市区、か：たしかに往年の賑わいは無くなってしまったなあ」「むー、パパはそう言うけど今の方が私はいいな、だって渋滞とか起きないんだもの、気楽でいいよ」

そうか、と白髪の男は車を運転しながら朗らかに笑った。果たして助手席に座るピンクの髪の童姿の女性と親子だと言って誰が信じるだろうか。きっと孫と祖父、と言うだろうが事実小説より奇であるというべきか、それは真実であった。

旧都市は管理者という支えを失い、そこにクレストが後釜として収まっている。暖簾を依然として旧都市に掲げたままのクレストはレイヤードの支配者：管理者D・O・V・Eの残したデータ解析に躍

起になっていた。それは管理者が隠匿し世に出さない技術があるからだという。

そしてこの男はそのプロジェクトにおける幹部の一人だった。優れたネゴシエーターとしての能力と政治センスを持つ彼は本社勤務のエリートといっても過言ではない。そんなもう壮年であり、これ以上の出世は見込めそうにもないが十分な給与と職、そして大事な一人娘との家庭に満足していた。

「あ、あのー…一応、僕もいるんですけど…」

「む、いやあ済まないね、ついつい意識の外から外してしまったよ。済まないなあ」

「むう、パパそんなこと言って…あ、鎧衣君はどの店行く？えとお、たしかここのレストランが結構おいしいって評判で…」

そう明るい話題を振りまきながら車は高速を走っていく。そこには確かに日常があった。平凡があった。

そんな穏やかな日常のある旧都市区の一部。焦げ付いた煤の臭いと鉄の香り漂う下層部に、グローバルコーテックスが正式にアーリーナの一員と認めたレイヴンが居を構える場所がある。

なぜコーテックスが出張するのか？それにはレイヴンの管理団体として三企業の協賛に成り立つ存在だからという事がある。その根本にあった。傭兵とは個人にして軍事力を行使しうる存在である。その力はレイヴン個人で大きく異なり、一般的にはA～Eまでのランクが存在し。その上に特別なランク：Sランクがある。傭兵とは各企業共通の味方にして潜在的な敵である。故にその力は出来る限り管理下に置きたいと思うのは当然のことだ。

そして個人であり名の知れた存在である、という事は日頃より生命を狙われる立場にあるということになる。故に企業はコーテックスを通じ日常生活における安全を保障する。専属契約が禁じられているがための鼻薬ともいえよう。

そんな傭兵たちであるがコーテックスの管理下にあるか否かで雲泥の差がある。未登録のレイヴンは企業にとってみれば須らく敵とするべき存在であり、使うとしてもほぼ捨て駒ないし足がつかないよう裏を取った上での契約になる。

コーテックス所属のレイヴンはコーテックスを介しその力量に見合った依頼が斡旋され、仕事の善悪を問わず様々な依頼を選べる。そして戦死せず内容を達成さえすれば企業が依頼者とコーテックスが責任を持ってレイヴンを回収するようになっていいるのだ。

もっとも選べる、といっても力量不足、実績不足の場合選択肢がない場合もあるが。

そして武もまたアマルガムという名でそのレイヴンとしての歩みを始めていた。とはいえ最初期であり底辺のEランク。どれだけ仕事を完璧にこなそうともEランクの仕事は出来て当然なのだ。故に、今の境遇は決して裕福とはいえず、むしろ底辺を彷徨っていた。

武は先の通り仕事を選ぶ余裕などない。その煤けたガレージの一角でかつての境遇に近い現状に舌打ちしつつ、乱暴に硬すぎるジャークーキーを食いちぎった。

「よお、ずいぶん苛立ってるじゃねえか」

「…あんたに言われたくはないな。サラシナさん」

武がその目を向けた先にはチーフメカニックであるサラシナがに

やついた顔で立っていた。そのなりは恰幅が良く、丸太のような二の腕をした昭和の親父といった所だ。年は30少しだというのにその厳つい顔や体格の所為で中年に思われるのは仕方のない事だろう。

「がはは、まあそんな気を落としなさんな。ワシとしても仕事がないのは退屈でな。アリーナも出禁喰らったんだろう？坊主の腕ならそろそろ大口の仕事が来る筈なんだろう」

「うっせーな…ああ、たしかにアリーナはやりすぎたと思ってはいらさ。Eランクがあんなに弱いとは思ひもなかった」

思い出すのは数日前、ランクE-2ギムレットとの対戦だ。対戦カードが組まれるや否やギムレットからは挑発じみたメールが送られて来た。「すぐに貴様の限界を思い知ることになる。それまでは雑魚を相手に楽しんでるがいい」だの言ってきたのだ。

対戦当日、アリーナの電光掲示板の前が俄かに騒がしくなってきた。

「おいおい、アマルガムは正気かよ!？」

「こりゃ死に行くのと同じだぜ？ふざけてるのか？」

「ギムレット相手にこのアセンブリ（機体構成）とはなあ…天狗の鼻も今日で折れそうだな」

彼らが口々に囁きたてるのは武の機体の事だった。そう、武は対AC戦において最も夢と浪漫と愛がなくては扱えないキワモノを装備してきたのだ。しかも、ソレ唯一つ。

射突ブレード『KWB—SBR0X』唯一つを持って対戦に臨んでいた。

変態企業キサラギのみが製造・販売する射突ブレード、通称『とつつき』とはレイヴンの中ではネタと浪漫とある一点のみに特化した実用性を持つ装備だ。重火器を持つ右腕部に近接用のブレードを装備するのだがこのブレードが通常のレーザーブレードではなく『パイルバンカー（杭打ち機）』であることがまず変態たる所以である。

杭打ち、という事は当然動作には火薬ないしそれなりの杭を加速させる為の装置が必要だ。射突ブレードでは火薬を利用しては攻撃回数に制限が発生する。しかも、軽量・安価であるが弾数はきわめて少なく当てられるチャンスはかなり少ない。

さらに、この兵器には予備動作が必要でありトリガーを引き実際に杭が打ち込まれるまで約2秒ほどのタイムラグがある。そしてその最大効果を発揮する為には射出される一瞬という完璧なタイミングで敵機にこれをぶち当てねばならない。

：時速300km/hを越え回避機動を取る敵機にこのタイミングを読んだ上で突撃しなければならぬのだ。その難易度は想像を絶するものになる。

更に言うところのギムレットの機体は腕そのものが火器となる武器腕系列のマシガン装備し、また肩には10連発射可能な小型ミサイルと無誘導中型のロケットを搭載した重2脚型ACである。ギムレット（錐）の名の通りその火力はACの装甲すら風穴をあけるほどだ。それに接近するだけでも極めて危険極まりない。

だが射突ブレードには只一つの実用性がある：それはACの防御スクリーンを軽々とブチ破り致命的損傷を一度の接触で与えることができるというものだ。武器腕を採用しているギムレットの機体は火力こそ凄まじいものの、火器を腕部装甲内に仕込むという機構の為防御に関しては極めて脆い。故に一撃必殺の威力を持つ射突ブレードを喰らえばどうなるかは一目瞭然である。

それに武も無策でこれを選んだわけではない。この時武の機体は全フレームを軽量級に換装しておりそのOB時の速度は800km/hに達し、ブーストでも470km/hを出すほどの穿ったチューニングが施されていた。

レイヴン同士が戦うアリーナはドーム状の構造物となっている。障害物はなく、純粹に乗り手の腕が問われる場所だ。この時のオッズは8・2。武が2でギムレットが8だった。武がEとしては破格の実力を持つとはいえ、とっつき一本とはそれほど勝つに厳しい武器なのだ。これに負けるとなればギムレットはさぞいい笑い物になるだろう。まあ、武に賭けた2はそれを期待していたのだが。

武がいつもの如くコックピット内でゆったりと構えていると唐突に回線が繋がった。

「おいクソガキ、聞こえるか？」

「：アリーナ内でのレイヴン同士の通話は禁止されていたいなかったか？」

アリーナ内でのレイヴン同士の通信の禁止、それは管理者崩壊以前に発覚した八百長問題が発端となり制定されたものだ。故にアリーナ内でのこのような通話は禁止されている筈だった。

「マイクパフォーマンスというやつだ新人。アリーナの観客にも聞

こえるようオープン回線で話しているんだよ。問題があったら上が止めるだろ…んで、だ。てめえ何だ、そのふざけた格好は」

「ただの予定調和だ^{プロセス}と詰まらないだろう？ 遊ぶのには良い武器だとは思わないか？」

ニヒルな笑みを浮かべそう言い切られたギムレットの額に青筋が浮かび上がる。これとない挑発だった。

「いいぜ…クソガキが、よほど風穴を開けられたいらしいな」

「てめえこそ『ギムレットにはまだ早い』だぜ、三流。エンターテインメント（喜劇）ってやつを見せてやる」

観客が沸き立つ。片や新進気鋭の新人、片やE-2の座を守る登竜門。程々にアリーナの空気が熱くなったところで遂にそのゴングが鳴った。

「死ねやクソガキがああ！！！！」

アリーナで使用されるのは実弾である。ペイント弾ではない。それは臨場感演出の為もあるのだがACの防御力は極めて高く『戦闘不能』と『撃破』には大きな差がある為でもあった。

これはレイヴンの生存率を上げるための処置であり、一定の損害が発生した時点で自動的に戦闘モードが終了するようになっている。

それを利用しアリーナでは致命的損傷が派生した時点で自動的に両機のFCSがロックされ試合終了となるのだ。

無論、そのような処置はあれども実弾は実弾、事故というモノは『必然的に』発生するものだ。特に武の機体のような軽装甲の機体では『少々やりすぎてしまうこともある』のだ。まあ、それもそれで此処にいる人間にとってはいい見世物になるのだが。

先手とばかりギムレットの愛機『エメラルドレパード』がブースタを吹かし武の機体めがけて接近しながら小型ミサイルをロック、肩

側部エクステンションに取り付けられた拡張連動ミサイル込みで5発のミサイルが高速で武の機体へと殺到する。

だが武はそれを右へと機体を振った後素早く左へと切り返すことでミサイルの旋回半径内に機体を逃す。そのまま少し浮いたかと思うとその背部に装備されたオーバード・ブースト(OB)の火を入れた。

「ツチい、ちょこまかと!!」

急加速し自分の右脇を交差しようとする武にギムレットは武装を切り替え、両腕の30mm双発式マシンガンの銃爪を引いた。

秒間10×2発という速度で射出される弾丸だがその全てが武に当たるといふ訳ではない。一瞬で射界から逃れようと700km/hで三次元に動く目標に当たるとすればせいぜいそのうちの僅か5発くらいだろう。

僅かに装甲表面を掠っただけの損害しかない武の機体は空中でOBを切り、旋回しながらギムレットの死角を取ろうとする。だがギムレットもそうはさせじと機体を前へと加速させ、そのまま右旋回し再度カメラ内にその機影を捉えんとした。

「何!?! いないだど!?!」

敵の速度を見誤ったか、とギムレットが歯噛みした瞬間、衝撃とともに機体が大きく吹き飛ばされた。

「まず一つ…」

武がその口角を釣り上げる。パイルに取り付けられた排出口から薬莖が排出され、次弾がチャンバーに装填される。その音と共に宙を待っていたひしゃげた拡張ミサイルが地面に落ち、爆発した。

武が行ったのはまず左旋回しつつ右に機体を滑らせ、そのまま円を描くようなブースト機動を行い、丁度正面にギムレットの機体があるそのタイミングで肩口にパイルが当たるよう調整しぶち込むというものだった。カメラに捉えられない敵を自分の感覚を頼りに予測し、そしてドンピシャでパイルを叩き込む：いくら相手がEランクとはいえ凄まじい技量を見せつける技だった。

だが武のターンは終わらない。リロードが完了するや否や素早くOBを吹かす。ギムレットが僅かに遅れて『武にパイルを叩き込まれた』という事実を認識しマシンガンのトリガーを引くが遅い。左右に大きく、高速で揺れる武の機体に当たり前の射撃が当たるはずもないのだ。

そのまま高速で接近し、再度右脇をすり抜けるように武の機体が機動する。そして交差するその一瞬、今度はギムレットの右腕がはじけ飛んだ。

「二つ…」

武が静かに呟く。高速機動により凄まじいGが掛かりながらも武の余裕はいまだに崩れてはいなかった。

ギムレットからすればたまったものじゃない。いくら高速機とはいえ旋回半径には限度がある。それにあの高速ではいかに速かろうとタイミングまで合わせてこの機体と接触するというのは至難の業だ。そもそも射突型ブレードとは機動性が著しく低い大型MTや隔壁を破壊する為の武装だ。それをAC相手に使うということ自体ぶっ飛んでいる。

そんなギムレットの動揺を知ってか知らずか武は上空へと機体を躍

らせ、完全な死角：後方危険円錐域に陣取る。そうなればもうすることは只一つ。

武の機体が急降下するとともに、肩に積まれていたミサイルにパイルがめり込む。そして機体が前方へ弾き飛ばされ、一瞬遅れて残っていたミサイル内の炸薬が起爆しギムレットはつんのめった様な姿勢になった。

獰猛な笑みを浮かべた武がその背後に急速接近し：そして、パイルをその無防備な臀部にぶち込んだ。

「どーだい？クソガキにカマを掘られた感想は：気持ちよすぎて逝っちゃったか？」

パイルを引き抜きオープンチャンネルで煽る：が、その返答はない。尻を突き出したような格好で転倒した機体も動かない。

「おいおい、ずいぶんとしまりのねえケツの穴だな？もうおしまいってか？俺はまだまだ逝き足りねえぜ？」

下卑たジョークを放ち、やれやれとばかりに両掌を天に仰がせるポーズを取る武。だがそれでも返答はなく、どうやらギムレットは完全に『逝った』ようだった。

あまりの圧倒的差に静まり返るアリーナへ、一発天井に向けてトリガーを引く。火薬独特のくぐもった炸裂音とパイルが突き出される音が周囲に鳴り響く。それに一瞬遅れて会場が沸き立った。誰から見ても武の完全勝利であった。

パイルの恐ろしさはその単純な威力だけではない。それが持つ着弾時の熱量もまたぶっ飛んでいるのだ。ACは被弾した際そのエネルギー

ギーの一部を熱として相転移することで被害を抑えるようにできている。そしてその熱量とジェネレータや防御スクリーン発生の為発生する熱量を冷却する為に大型のラジエータをジェネレータとは別に搭載しているのだが、それも『鉄が沸騰する温度』までは考慮に入れてはいない。

連続して4発のパイルを叩き込んだ時点でA Cの放熱能力はとうに限界を超え、コックピットは完全に蒸し風呂…というのも生ぬるい惨状になったらしい。その後すぐさまギムレットは病院送り。生存はしていたらしいが賽の河原で婆さんから逆ナンされていらしい。病室で尻を押さえて魔されていたというのだからいい笑い物だ。

その派手なパフォーマンスと圧倒的な実力で勝った武はその後Eー1に難なく勝利し、Eランク覇者の座についたのである…

コーテックス所属のレイヴンが持つ収入源は二つ。斡旋された依頼と、レイヴン同士が安全な環境下で戦うアリーナでの賞金だ。アリーナは先のA～Eのランクごとに対戦が組まれている。現在のレイヴンの総人数は武含めて30名。詳しく分けていくとAランク3名、Bランク4名、Cランク7名、Dランク7名、Eランク9名というピラミッド構造だ。

武は新人であり、最初のランクはEー9だった。だがその技術は新人にして既にCランク相応のモノを持っている。故にEー1に駆けあがるまでにそんなに時間を要しなかった。

問題はそれからだ。Eランクを制覇すれば当然Dランクへの挑戦

となるがランクの上昇には依頼をこなし実績を積まなくてはならない。当然、その間はE-1のランクを保持することになるのだが：武はあまりにも実力差がそのランクの人間とはかけ離れている為対戦を組んだとしても興行にならないのだ。当然アリーナではコーテックスが胴元となった賭けも行われている。だがオッズが1・0倍のゲームなどに賭ける人間はいない。故に、レイヴンランクが上がるまでの間アリーナへの出場停止がコーテックスから通達されるという異常事態になったのだ。

「んで、エマのお嬢からの呼び出しはなんだった？」

「：仕事の話だ」

そう武は不機嫌そうな声で呟いた。毎度毎度の仕事は『ごみ掃除』だ。派手に基地襲撃や破壊工作といった類の仕事はない。たいていは護衛もしくは陽動、あるいは反体制勢力への襲撃といったところだろうか。小口のMTにもできる仕事には相当うんざりしていた。

「ほう、それで仕事の内容は？」

「警備部隊陽動、ミラージュからの依頼だ。サイレントラインの基幹高速道路を走る輸送車を護衛する警備部隊を陽動、その殲滅だそうだ」

「：そうか、坊主も遂に来たのか」

「なんだよ、おっさん。心当たりでもあるのか？」

「いや、ただこの仕事が終われば恐らく坊主のランクが上がるってことだ。昇級試験のようなもんだな、この任務は」

そう言ってサラシナは意味ありげな笑みを零した。その笑みにある暗いモノを感じた武はこの任務の裏に何かあると感じはしたがそれを口に出す事は出来なかった。後ろから彼を呼ぶ声が聞こえてきたからだ。

「じゃあなおっさん。こいつの整備よろしく頼むぜ」

「言われんでもわかつとる。坊主もへマするんじゃねえぞ」

クソ親父が、と悪態をつきながらも武はひらひらと片手を振って去っていった。その姿をサラシナは暫く見ていた後、小さく溜息をつき天を仰いだ。

「さて、これが山場だろうなあ…坊主が本物になれるか、ソレとも地に墜ちるか…」

その眼の先には嘗て相見えた天才の姿があった。英雄と呼ばれ、全てのレイヴンの頂点に立ち忽然と姿を消した最強のレイヴン。その彼もまた通った道を武は…コードネーム『アマルガム』は通ろうとしている。

陰惨で、血塗られた絶望と恐怖の道を。

だが今それを言ったところで何も変わりはない。これはレイヴンとしての試練なのだ。上位ランカーの誰しもが通った吐き気の催す狂気の道。それは天才といえるだけの能力を持った武なら当然避け得ぬものだ。そして、コーテックスが用意するその道は極めつけに悪辣で反吐が出る代物になるだろう。

サラシナは若鴉の行く末を案じ、小さく溜息を吐くと彼の愛機の元へと歩いて行った。

戦術機が航空機を元に作られたものであるとすれば、ACは戦車を元レイヤードにしている、とでも言えはいいだろうか。開発されたのが閉ざされた世界という天井のある空しかない場所だった為、その進化は当然の結果であるとも言える。

そしてその閉ざされた世界で要求された仕様、それは『高い耐久性』
『瞬発的な加速力』『高い火力』その3点である。

まず耐久性：これは閉所という回避機動が制限される場所である為に要求されたものだ。戦場は開けた空間だけではない。資材搬入路や通気用大型ダクトと言った場所も当然戦場となりうる。そういった場所において必要とされるのは相手に打ち勝つ火力と耐久性だ。

そして瞬発的な加速力：これはその限られた空間内で機動性を持たせる為に必要とされた事だ。狭い、ということはそれだけ最高速まで加速するための時間が限られてくることになる。その為瞬間的に最高速まで加速するブースターユニットとそれを速やかに減速できるブレーキ性能が要求された。

最後の高い火力、は言わずもがな見敵即殺の為である。相手もまた装甲が厚いのならばそれ相応の火力を持って対処する必要がある：そして撃破までにかかる時間が短ければ短いほど自機の損害も少なく済む。

武の愛機は機動性を最重要とした軽量級ベースの機体構成となっている。アリーナで勝ち取った賞金と報酬、そしてコーテックスや企業からの特別報酬として支給されたパーツを利用し、初期の癖の無い：言いかえれば平均的に難がある旧型からより高機動性を求めた機体へと変貌していた。

当初はサラシナが生存率を重視したタンク型：超重装甲の戦車型機体による正面火力での圧殺を勧めていたが、武の機動を見て次に勧めたのが平面超速機動可能なフロート型、そして最後に行き着いたのが三次元高速戦闘に向いた軽量2脚型である。

軽量型の特徴としてはきわめて軽い機体重量、そしてそれ故可能と

なる三次元高速機動が挙げられる。短所はやはり軽量化の為に省かれた装甲による防御力の低下、そして軽量であるが故の低安定性、そして携行火力の小ささにあるだろう。

しかし携行火力が控えめであると言っても相応の武器がある。例えば射程が短く単発あたりの威力が小さいものの、弾数や連射速度が通常の57mmライフルを遥かに超える30mmマシンガン。その逆である高射程・高威力の76mmスナイパーライフル。そして刃毀れが存在せず共振機が焼き切れるまで使えるレーザーブレード。無誘導の小型ロケットやロックオンが極めて高速な初期型単発ミサイルと使い捨ての軽量連動ミサイルによる瞬間的な弾幕などなど。あるいは腕そのものを重火器とする『武器腕』など選択肢は幾らでもあるのだ。

そしてそれがACの持つ『強さ』の一端であった。

そして武の機体に行われた改良は幾つかあるが特に改良が施されたのが内装である。

初期の旧型AC用ジェネレータであるクレスト製ジェネレータ『CGP-ROV6』は電力を生み出す出力も、それを蓄えるコンデンサ容量も著しく低く下手にブーストを吹かすとチャージング：緊急充電によりレーザー兵器やブーストといったコンデンサ内の電力を要する行動が一切できなくなる。最軽量である事が唯一の取り柄なのだが、ブーストによる高速機動を思うように展開できない以上それは真っ先に交換すべきパーツだ。

そしてブースタもまた旧型である『CBT-00-UN1』は極めて性能が低く、空中機動をするには消費電力量も出力も不足するし地上での平面高速機動を行うにも出力不足で思うような加速が出来ない代物だ。戦闘モードを切れば長時間の飛行も可能だがそれは防

御スクリーンのないMTと変わらない。ACも防御スクリーンがなければ少々堅いMTくらいの装甲しかないのだ。

そして旧型に変わり高出力の割に重量、価格ともに控えめなミラージュ製ジェネレータ『MGP-VE905』を搭載。ブースタも全ブースタ中最高の出力を持つクレスト製『CBT-FLEET』を搭載。燃費は出力相応となった為、扱いは難しくなったものの武が欲していた高機動性を得るにいったった。

ラジエータに関しては軽量化の為現状維持とし、次に右腕に搭載する銃器を交換したのだが：最初に突撃砲と同じく連射速度の速いマシンガン『CWG-MG-500』を使ってみた所で問題が発生する。ミッション終了後の収支明細書を見た武は思わず膝をついてしまった。

「弾薬費がやばい」

その一言にマシンガンの短所がはつきりと表れていた。そう、確かに近接戦に向いた強力な装備であるが使用する弾数が洒落にならない。例えば一発一発が安くともそれを数百発とばらまくなれば：どうなるかは一目瞭然である。その日の収支は自転車操業だったことを此処に記す。

故に右腕に装備する主力火器は近接戦で高い威力を発揮するショットガン『CWG-GS-72』を採用。左腕には軽量かつ作動速度に優れるクレスト製軽量レーザーブレード『CLB-LS-2551』を搭載。肩には最大6連続発射可能な小型ミサイル『MWM-S42/6』、そして軽量レーザー『CRU-A10』を採用している。

弾薬費がコーテックス持ちであるアリーナにおいてのみ右腕に『C

WG—MG—500』を装備するようになった。

基本フレームに関して言えばクレスト系列で固めた軽量型だ。頭部は平均的性能であり信頼の厚い傑作パーツ『CHD—SKYEY E』核となるコアは最軽量のOBコア『オーバー・ブーストCC—01—NER』、腕部に軽量かつリコイルコントロール（射撃反動制御）以外に特に癖の無い『CAL—66—MACH』、放熱効率を除けば優秀な基本性能を持つ『CLL—04—LGSK』で組まれている。

スポーティーかつスマートなデザインであり、その速度も歩行時150km/h、ブースト時には400km/hを超えOBを発動させれば750km/h以上の速度を叩きだす高機動機だ。

もつとも、武が金がないとぼやく原因はこの機体構成をする為に色々と先立つ物が必要になったわけである。とはいえそれなりに依頼をこなし、アリーナで荒稼ぎをしていたのであるがそれを差し引いても軽量級の機体というモノは金がかかるものなのだ。故にその装備も理想とするものから1グレード落としたものを採用している。

「チーフ、メンテが終わったんで確認お願いします」

サラシナがその真っ白にカラーリングされた機体を眺めていると声がかけられた。部下のメカニックだった。

「おう、見せてみる」

サラシナはそう言って部下から目録を受け取り目を通す。いつもの高機動型のセッティングだ。次の任務は通路での戦闘ということもあり若干防御スクリーンに割り振る電力量を多めに設定していた。それを確認し問題ない事を確かめたサラシナはそれを部下に返し、再びその白亜の巨体を一瞥してオペレータと連絡を取る為に内線の受話器を手を取った。

「サラシナだ。『アインヘリヤル』の整備が完了した。いつでも出れるぞ」

まったく悪趣味な名前だと思いつつサラシナはその機体の名前を口にした。エンブレムは戦士を館へといざなう戦乙女。サラシナは知らなかったが、そのエンブレムは武がかつて籍を置き戦ったA—01、伊隅ヴァルキュリーズのエンブレムだった。

2nd Mission..Insane Elephant (後書き)

サブタイトルのミッションでピンと来た人。アレをやらせます、はい。

あれが武が冥夜に対し嫌われる態度を取っても平然としている理由に繋がります。

13th Stage: Noblesse oblige

13th Stage: Noblesse oblige

九條良久は五摂家が一つ、九條家の跡取りである。齢15にして衛士としての英才教育を受け、士官教育課程をも並行して受けている秀才である。その教育は五摂家であるが故の責務と、周囲の期待により課せられたものであるが彼はそれをしっかりと自らの血肉としていた。

ある時は海外の衛士を招聘しその戦訓を学び、ある時は実際に観戦武官として任務に随行したりもする。普通の衛士からすれば垂涎の環境下で学びながらその牙を研ぎ澄ましていた。

だが彼は秀才であって天才ではない。

彼がそれを自覚したのは同じく五摂家が一つ煌武院家を訪れた時の事である。その時に彼はまだ9歳にも満たない少女と会った時の事だ。

彼女の纏う空気は幼さこそ残るものの高貴さ、気品に満ち溢れたものだった。慈しむように花を愛でる仕草は息を呑むほど美しく、どれだけ難しい話であろうと真摯に理解しようと努めるその姿は正に人の上に立つ者として理想の姿であった。

事実、彼は試すように少々難しい古典の話なども持ち出したが彼女は難なくそれらについて行った。連歌といった文化的な娯楽は当然ながら、完璧にまでとはいかないものの朱子学に六韜三略といっ

た古書軍略の類までその教養は深く、そして広かった。

そして彼は察したのだ。自分はいくまで秀才どまりであり、真に人の上に、頂点に立つ存在にはなれないと。

だがそれでも彼は努力を続けていた。頂点に立てずともその支柱に、礎にならんと。確かにこのままであれば彼女は紛れもなく名君として名を残す人材であろう、だがしかし一人ではどうしても手が届かない事が起きる。如何な名君であろうとそれを支えるモノがいなければ佞臣、酷吏により世は乱れるのだ。だからこそ彼は支柱を選んだ。自らの才気の限界を悟ったがゆえに。

彼がそれを自覚してからは、ただ周囲の期待に応えようとしていただけの努力から一本芯が入った。目的が、目標が定まるというのはそれだけでも効果は大きい。具体的に取りあえず学ぶものは全部学ぶ、ではなく真に自分に必要な教養とは何か、また彼女が見えないであろうものは何かというモノを探すようになった。

弊害として少々無理をお願いしたり今回のように衛士に直接話を聞こうとしたり、またはお忍びで基地に行ったりという破天荒な所も出てしまったのであるが。

それもつき従う側からすれば可愛いものであった。むしろそれを喜んでいた。良久はそれ以前と以降では顔つきが違う。本当の男の顔になろうとしている彼を好ましく思っているのだ。

14時00分、既に模擬弾を使用した訓練は終了しJIVESによる仮想訓練が行われていた。通常の訓練ならば模擬戦からデブリーフィング、ブリーフィングから模擬戦を繰り返す為、まだ模擬弾を使用した演習が続くだったのだが：試合時間は予定通り、問題はその結果が予想とは真逆だった為予定を変更せざるを得なかった。

簡単に言うと『相手にならなかった』とか『一蹴した』とでも言うべきだろうか。自由自在に空を駆ける耀光小隊は非常に効率よく敵中隊を撃破していった。その凄まじさは隊員一人ひとりがかつての伝説『ヴァンキッシュ1』と同じ錬度だった。そしてその伝説本人はと言うと、昔のそれに更に老練さが加わり更に強くなっている。その姿は今黄忠とも言うべきものだった。

その為いつそ大隊全員で戦わせるか？という意見も出てきたが流石にそれは無理と言うモノである。そこまで開いた物量の差は衛士の質だけでは抑えきれないのだ。

その為大隊からの要請で今後の参考にと『光線属種が存在する条件下での機動戦闘訓練』、そして『対地中侵攻対応訓練』を行っている。

順に解説していくと、前者はただ闇雲に空に躍り出るのではない。そうすれば音速を超えて飛翔する戦闘機、果ては小型かつ超音速で飛来する砲弾をもいとも容易く撃ち落としたレーザーの餌食になるのは目に見えている。

この機動戦闘で特に必要なのは徹底した『跳躍目的・時間の管理』と『着地点の安全確保』である。乱数回避だけでレーザーは避けられるほど甘くはない。

光線属種と言うモノは戦場において最も危険であり最も少数の存在だ。とはいえその対空・対地砲火は人間が可能なそれとは比べ物にならない威力と射程と精度を持つ。ソレが対象に攻撃しない条件は、射線上にBETAが存在するか、地形上直接狙えないかのどちらかである。例外としてハイヴ内では此方に攻撃を加える光線属種は存在しない。

そしてその攻撃の特徴としてはまず照準の為に数秒間の一次照射を行った後、最大出力による照射での攻撃を行うという事。次の照射までには光線級、重光線級によって違いがあるが数十秒の放熱期間が必要である事が言える。

まず滞空時間の管理であるがこれは言わずもがな『照準される時間の管理』だ。一次照射から素早く身を隠す必要がある為『どんな目的で、どの場所へ、どれくらいの時間跳躍するのか』を徹底しなければ危険極まりない。

そしてその着地場所についても『予測が外れた場合』と『予測通り』の最低二つのパターンを想定しなければならないのだ。その2つもダメな場合はまた別の着地点を、となる…がその場合は最初から飛ばないだろう。常に変動する前線において悠長に考える時間など皆無なのだから。

そういった綿密なシミュレートにより生じる機動ログは一本の比較的緩やかな線で描けるようなものになる。それは武道の型のように一挙手一投足全てに意味があり、常に5秒先、10秒先の状況を想定して機体を進ませているためだ。それに平行して戦況の大きな推移や前線の状況なども頭に叩き込まなければならない。それが出来なければ…死ぬだけだ。

光線属種が存在する空間で跳ぶ、というのはこのように極めて困難である。故に、跳べるようになる為には…通常とは違うアプローチ

で、徹底した訓練が必要となるのだ。

その内容は多数のパターンがランダムで選択される『コース』の走破。そして突然降って沸くランダムでえげつなく配置した『奇襲』への対応を問われる。足を止める事は許されてはいる…が、奇襲の来る確立が時間に比例して増えていくという鬼畜っぷりだ。

それに並行する形で地中侵攻対応訓練が行われている。この訓練は非常に厳しい…地形や突撃級をはじめとするBETAの位置は毎回ランダム、また戦場も師団規模を常に想定している。状況は地中侵攻による遭遇戦からの乱戦を想定。

その中を規定時間生き残り、既定の数のBETAを葬らなければならぬ。無論小隊員の誰かが落ちれば最初からである。

厳しすぎるのではないかという疑念もあったがBETAの恐ろしさを考えればまだぬるい。帝国の試算だとBETAの投入戦力は大凡にして十万強と言われているが『実際に戦った経験のある』武影は少なくとも20万、規模によっては23万以上が必ず投入されると見ていた。

試算がずれるのはこの訓練で想定している通り地中侵攻が存在する為だ。これにより戦闘初期の戦力と同等になる戦力がいきなり後方に振って沸く。それによる被害は想像を絶する、というのはもう言うまでもない事だろう。

だからこそ地中侵攻を想定した訓練を積む。何も分からないままただ死ぬのではなく、少ない情報からでも動ける為に。そしてその状況下で生き残れる三次元機動を会得させる為に。

彼の脳裏に妥協の文字はない。ただ結果の為だけにストイックである事。それは彼の師の教えでもあったのだ。そしてそれが…それが、一番生き足掻くに適した方法だった。

そして現在、その訓練の様子を見ている人間がいた。一人はシミユレータでの訓練を一通り終えた九條良久。そしてもう一人は模擬戦の一部始終を見届けていた霧武影その人だった。

「成程、理論は納得できた。だがリスクと見合うのだろうか？第二級以上の

光線照射危険地帯でのNOEないし三次元機動戦というのは些か分が悪すぎると思うが」

モニターから目をそらさずに良久は武影に問いただした。

彼がそう思うのも道理ではある。この訓練は『跳躍不可能』とも言える環境下を想定している。リスクとリターンが釣り合わないと感じるのも道理だろう。

「九條殿下。戦場とは流転するもの…常に何が起きるか分からない。どれだけ策を練ろうとも勝敗は水物です。この訓練の想定も『想定』であって実際にはこれ以上に酷い戦域もあります」

「だが、そのような戦場にしない事こそ士官の、将官の務めであるに…」

「…そうなるのが、今の世界と言うものです」

武影は静かにそう言った。ただ淡々と事実を告げるように。そしてその事実…悲しいかな、全て偽らざるものであった。

「この訓練ではそのような『事態』に対応する為の訓練です。自分としてはまだハードにするべきかと思いましたがやりすぎて萎縮してはどうしようもないので」

確かに恐怖を克服するには恐怖に慣れるのが一番である。嘗ての空挺部隊は高さ10m以上もの場所から落下傘なしで跳び下りる訓練

を続け恐怖を克服：というより制御する術を覚えたという。

それと同様この訓練では只管に精神的恐怖を味わうことになる。照射即死亡という光線属種への恐怖。突然横合いから殴りつけてくる要撃級に足を止めれば群がる戦車級。そういったものを延々と体験し対応できるようにする訓練なのだ。

「出来るとしないの差は大きい、と言うことか？」

「左様でございます、殿下」

ただ男達は見ていた。小隊が仮想とはいえ地獄の戦場で行き足掻くさまを。

「万人がこれをする、と言うのは土台無理な話であろうな」

「はい、現在の陽炎では無理です」

「：随分とはっきり言うのだな」

「事実を述べたまでであります、殿下」

くつくと良久は笑った。この男ははっきりと『今採用されている戦術機では無理』と断言したのだ。

そう、兵器とは万人が用いるからこそ意味がある。この訓練はエースとしての才がある小隊各員だから行うものだ。元々無理な事を幾らさせても無理なモノは無理。可能性があり、出来るからこそ行う。現状の陽炎の性能でこれをするためにはこの小隊と並ぶ力量がなければ不可能、という事なのだ。

さて、変態だのバケモノだのさんざん言われる機動を実践する彼らの動きは、全て鋭角的かというところではない。

確かに緊急時は鋭角的なモノ：特に対人を想定した場合は細かい切り返しなどを織り交ぜているがBETAや無人標的を対象とする場合は緩旋回が殆どになる。敵の移動先を予測する見越し射撃の精度が甘い、もしくは近接兵器しか持っていないのであれば無理に機体

を振り回す事もないということだ。

重要なのは『必要な時に、必要な量の攻撃をする事』なのだ。過剰に撃ち込んでも、または足りなくてもいけない。外す事も当然あるだろう、だが次が続かない攻撃で外すのであれば無駄弾だ。そして急な機動と言うのは往々にしてFCSの計算を狂わせ命中率を減退させる。

ゆえに緩やかなのだ。必要な時は緩め、必要な時に急に。それだけである。極めて難しい『それだけ』であるのだが。

「この訓練は…いや、『想定』と『実際』とでは雲泥の差がある、か」

武芸において、いや万事において重要な事は極めてシンプルな基礎である。あらゆる奥義や秘伝と言われるものも全て『基礎』あつてのものであり、熟練した人物ほど基礎を怠る者はいない。そしてこの機動も純粹に言えば『基礎』である。当てるときに当てる、動く時に動く、そう言った基礎の積み重ねがこの緩やかかつ無駄のない動きになるのだ。

「しかし武影よ。この訓練、余が見るに對BETAだけを想定しているのではないな？」

良久はモニターから目を離し、横に立つ武影の双眸を見据えた。そう、BETAという種だけではない。これほどの過酷な訓練、そして状況。それを演出するのはBETAのみではない。

過剰なまでのファーストルック・ファーストキルの訓練。光線級：つまり遠距離兵装に対する対応の訓練。そしてただ物量で押すBETAには基本通じない攪乱を主体とする戦術構築。それはただBETA

TA戦の想定と言うには血生臭い物が奥底に流れているように感じられた。

「…人間の敵は、あくまで人間です。殿下」

感慨もなくそう武影は答えた。あくまで人類の敵は人類に他ならない。あの世界でも、真に人と人が手を取り合うことはなかった。表向きはそうであっても、裏では策謀が渦巻き『戦後』を巡る争いが繰り広げられる。

例えば人類が滅亡すると言われようと、その争いは決して終焉を見せはしない。あの世界では管理者、この世界ではBETA。ともに人類共通の、そして相いれない存在。

「この世界はどこまでも綺麗です。けれども人間はどこまでも醜い。BETAという敵がいようと、人は人を赦す事などあり得ない」

光を映さない武影の瞳が良久を捉える。悪意という悪意を知り、絶望という絶望に身を浸し、心の深淵をその身に封じたレイヴンとして彼は良久と相対していた。

「それが貴公の本当の姿、という訳か？如月グループ株主第二位にして同傘下如月セキュリティサービス統括責任者、『霧武影』殿」
首筋に走るちりちりとした違和感に引きつりそうになる顔を抑えつつ良久は問いかけた。

新興企業にして現在のどの企業よりも10年、20年先に行く技術力を持つ如月グループ。その創始者のひとりにして、たった単騎で基地一つを恐怖のどん底に陥れたかの『鴉』とも噂がある人物。それくらいの事はいまだ元服を迎えたばかりの身でも知っていた。いや、次期頭首と言う立場から知らざるを得なかった。

「さあ、自分もどの自分が真実か分かりません。ただ殿下と話すと

きは此方の方が正しい、と感じたまでです…これからはビジネスの話、と考えても？」

口元だけを微笑させ彼はそう答えた。その威圧は齡15の少年に相對するには相応しくないものだろう。ただしその少年が普通の少年であつたならばの話だが。

「…よからう、余も腹をくくるべきだな。武影殿。飛鳥計画への参入、秘密裏に依頼したい」

「それは近衛からの依頼でございましょうか、ソレとも摂家九條の名においてののでしょうか」

「五摂家が一つ、九條として依頼する。責は余が被ろう」

きっぱりと良久は言い切った。全ての責と資金を九條が捻出する條件で、秘密裏に近衛専用機の開発計画に着手して貰いたいという依頼。それは近衛としては相応しくない依頼である。

なぜなら近衛は歴史ある武家の軍。その発注先は歴史ある『帝国の』企業であることが望ましい。それに対し如月は本拠こそ帝国ではあるがその手は早くも欧州、東南アジアまで伸びており技術者の発掘に余念がない。さらに言えば急激な肥大化に伴い限りなく黒に近い灰色の経営をしているとも聞く。ただでさえこの耀光計画参入だけでも国内の武家や『権威』は苦虫を噛み潰したかのような顔をされているのだ。表から発注すれば国内から凄まじい反発が出るであろうことは想像に難くない。

故に秘密裏、であつた。功績を現在の帝国企業…遠田技研や河崎重工に回すことで国内の企業バランスをとろう、という思惑もあつた。

だがそれに対する武影の反応は冷ややかなモノだった。

「だめです。それではだめですよ殿下。我々は企業です。企業とは利益を求めることを第一とします。いくら九條が責を持つとはいえどもその提案は受け入れられません。それに：良久殿下。確かにあなたは次期頭首だ。だがしかしそれとこの件における責はイコールでは繋がりません」

「：それは余が正式に九條の党首として認められていないからか、とはいえ今年の4月付で正式に頭首となるぞ？」

「ソレもあります。ですが殿下：殿下はこの基地に来る最初からこの依頼を当方にする予定でしたね？」

全てを見抜いているかのような武影の言葉に良久は小さく息を呑んだ。確かに如月が台頭し始め、耀光計画の進捗を聞いた時は必死に現頭首にその有用性を説きこの商談を彼らとコンタクトが取れた際にすることを認められるように根回しをしていた。そして今回、この演習場に耀光計画開発衛士とその関係者が来る、という事で半ば強引にこの基地での訓練をスケジュールにねじこんだのだ。

「少々汚い言葉を言わせていただきますが：己が力で勝ち取ったモノを提示できないようなケツの青いガキに手を貸す事などありません」

冷淡に、感情なく彼はそう突き放した。初陣もすませぬ青二才が算盤を弾いたところで相手にはしない、と。

良久の顔がさっと朱を帯びる。この上ない侮辱、それもやんごとなき摂家に最大級の屈辱を味あわせたも同義であった。普通ならそのまま無礼討ちになっても可笑しくはない、それ程の事だった。だ

ったのだが良久はギリと奥歯を噛みしめその怒りを無理やり鎮めた。それは交渉とは己が力を対価として行い、他力本願ではいつか信頼を失うという大原則を忘れていた事に気がついたからだ。摂家であればある程度の無理がきく、というその意識を横っ面から殴りつけられたようだった。先ほどの返答も、今までの自らをどこか上位にしているような話からでは当然であっただろう。だからこそ彼はその手を白く握りしめ、湧きあがる激情を必死に抑えた。

それを見てとった武影は視線をモニターに戻す。その話はここで終わり、と言うことである。モニターではタイマーが0となり、演習が終了した事が告げられていた。ウィンドウの一つにはBETAの体液に青く染まりきったもの、そしてもうひとつにはやや煤がついた程度の陽炎が映っている。その二つとも、傷らしい傷は一つもなかった。

赤いペイント弾が飛び交うバレンタインデーの数日後、所離れて帝大。天は二物を与えたと言わんばかりの美貌と知性を持つ二人が小さなテーブルを挟み微笑を湛えていた。

「だからユニタリ変換でエラーを吐いてるのよ、アルゴリズムを構築し直さないと想定レベルまでたどり着けないわ」

「その前にデコヒーレンスをなんとかしないといけないでしょう？この方式だと振動に弱すぎます。本来なら光量子が現実的ですがこれで作れというのは無理です、観測が出来ません」

：まあ、ご一緒したい空気ではない。両者の口元こそ天然もののコーヒード錠んでいるが目元が伶俐な、いや殺気じみたモノを放っている。彼女らの口論している内容は現在開発がおこなわれている量子コンピュータについてだ。

量子コンピュータが今までのニュートン物理法則によって構成された古典的コンピュータとは比較にならない演算速度を持っているのは周知の事実である。だがしかしその虚数が入り混じる複雑なアルゴリズムの構築が困難であることや、ハードウェア面においてはデコヒーレンスの問題が深刻であり、安定した演算能力を持たせられない事などにより実用量子コンピュータ開発は暗礁に乗り上げつつあった。

それは実際に量子コンピュータ上の人格エミュレートプログラムであったセレが文字通り身を持って知っている。ハードウェア面でも都市区画一つを完全に掌握し、多数の人格をエミュレートしていたそのコンピュータの巨大さは60階建てビルもかくやというレベルであった。

それに問題はそれだけではない。夕呼の求めるスペックがかなりぶっ飛んだ数値なのだ。いくら量子コンピュータに集積率の問題はないとはいえ実用性を考えれば限界地と言うものは出てきてしまう。半導体150億個分の演算処理能力と言うのは生半可な数値ではないのだ。

「量子電導脳：常温超電導物質グレイ・ナインを使ったからと言ってそれだけで出来る代物ではありません。それに因果律量子論を組み合わせたとしてもこのままでは処理が追い付かなくなります」

「分かってるわよ：確かにセレ、あんたの言う『純粹』な量子コンピュータは確かに現実味があるでしょうね。ただしその規模は莫大なモノになるわ。それに私の望むモノは絶対に『人』でなくちゃい

けないの。その量子コンピュータじゃ人の枠に収まらないでしょう？」

「現実を見るべきです、夕呼。確かに因果律量子論を考え付いたのは称賛に価する事です、ですがこれは無理。これでは足りません」

資料を机に投げそう言い切るセレに夕呼の視線が鋭く突き刺さる。彼女とてそれが普通なら無謀だというのは知っている。だが自分の信じる理論に僅かであるがその光明が見えるのだ。だからこそこの場に座っている。それを否定する事は同僚とはいえ許せるものではなかった。

「セレ、ここは負け犬の来る場所じゃないわ」

「夢想家の来る場所でもありません」

無言の圧力の中、互いの視線が火花を散らす。セレも好きでこういう事を言っている訳ではない。因果律量子論を用いれば従来の発想では絶対出来ない代物が出来るというのも理解している。理解しているのだが現実的に考えて時間が足りない。それを安全に運用できる保証ができないでいるのだ。

「…いつものコンマ単位のブレンド、美味しかったわ。ありがとう」

「どういたしまして：夕呼、アंकルサムが馬鹿をしている御蔭で第四計画は此方側のが通りそうですが、明確なビジョンと成果を提示しなければ後が煩くなります」

「だからあなたと私で論文を書いているんでしょ：あーもう、後何枚書けばいいのよ：私はこれより本職の研究がしたいんだけど？」

「私に聞かれても困ります。軍事転用の面からすればこれを出した方が予算をふんだくれるからとしか：ただ、これが実用化できれば戦術機そのものが一変します。それだけの価値はあるはずですよ」

「はあ。第3世代の直後に第4世代が出た、って話になっても驚か

ないわよ……まあ出来ればの話だけど」

そう、彼女達の視線の先、山のように積まれた資料は全て彼女達が自分で書き上げたものである。現状において管理が厳しいG元素関係などは海外の研究者の資料を頼るほかないが、それらは殆ど彼女達の頭脳にしっかりと記憶されている為取り出す事はなく、現在はそれら纏めて本棚に封印されている。

学術的価値で言えばこの山となった資料にはそれこそ全世界の科学者が涎を垂らすほどの英知が詰まっている。その中でも難解極まりない量子力学の更にその粹とも言える部分のエキスパートが、額をぶつけ合い現在作り上げようとしている論文は戦術機を一変させる代物だ……まあ、もつともそれが予算稼ぎの論文だというのだから呆れてくる話なのだが。

「簡易ML機関、重力偏差防御幕。絶対防御のML機関を戦術機サイズに小型化できるって聞いたら連中、どんな表情になるかしらね」
夕呼はそう呟き空になったカップを眺めつつ、妖艶に笑っていた。

13th Stage: Noblesse Oblige (後書き)

そろそろ9・6作戦に入りたい：

口調がおかしくなっていたので修正。

14th Stage: UNSUNG (前書き)

遅くなりました。14話です。

14th Stage: UNSUNG

14th Stage: UNSUNG

ML機関。正式名称ムアコック・レヒテ型抗重力機関とはG元素のひとつであり抗重力反応という特性を持つグレイ・イレヴンを燃料として稼働する、現在において重力を唯一『制御』出来る機関である。ラザフォード場の急激な重力偏差によって生み出された絶対防御空間は、地上のいかなる兵器をも無力化し光線属種のレーザーをも弾く。さらにその膨大な余剰出力は不可能と考えられていた高出力荷電粒子砲の搭載を可能としたまさに人類の英知の結晶ともいえるものだ。

その歴史は意外と古く、1975年カールス・ムアコック並びにリストマッティ・レヒテ両博士の共著による重力制御理論が最初の技術提唱であった。同年にそれを基礎とし『戦艦に匹敵する火力を地上で運用する』という、もはや夢想ともいえた戦略航空機動要塞WS-110Aを生み出す計画『HI-MERF』が立案。僅差ながらも議会の承認を得たHI-MERF計画はML機関を核としたハイヴ攻略兵器XG-70と専任護衛戦術機XF-108の開発が開始された。そして1979年、計画は順調に推移しML機関の臨界実験に成功、『空飛ぶ戦艦』が現実味を帯び始めこのまま完成と行くかに思っていた。

だが、その高出力もあってかML機関の制御は困難を極めた。1980年以降開発は停滞し、試作機製造にまで至りながら試験運転の際に大惨事が発生。実戦を想定した高機動を実施したテストパイロット12名がシチューと化したのだ。その後の有人テストでも通

常機動であっても完全に安全ではなく無人制御も当時の技術力では不可能という結論に達し、1987年ついに計画中止が決定。夢の戦艦が戦場の空を舞う事は無かった。

しかし、それはあくまで『陸の戦艦』という巨大化・高出力化を追及した結果である。逆に言えば：低出力ながらも一定の防御性能、そして慣性緩和による高機動性を生み出すならはどうだろうか。

ACにも類似した技術がある。10mサイズの機体に搭載されたOB時の慣性緩和システム、防御スクリーン。小型化・実戦証明済みである代物でありその性能は世界最強の陸戦兵器として：いや、輸送機という「足場」さえあれば空中機動要塞をも叩き落とした多目的機動兵器として名を轟かすという結果を残している。

技術レベル的に遥か高みに存在するものだが、この世界には抗重力物質に反物質、常温超電導物質と科学的に反則級の代物がそろっていた。それを使いコア構想を用いれば、簡易的なML機関を18m級の戦術機サイズに封じ込めることも時間こそ必要であるが決して不可能ではない。

無論問題はある。まずはXG-70でもネックとなっていた制御装置だ。現在夕呼とセレが共同開発している量子コンピュータは必須。XG-70の制御まではできずとも相応の性能が要求される。

そして問題はもう一つ、ソフトウェアだ。いかに高性能な量子CPUとはいえ計算に必要なアルゴリズムが構築されていなければ旧物理学的なコンピュータとなんら変わらない、いやそれ以下のスペックしか出せない。そしてその構築こそが余の数学者・物理学者を大いに悩ませる代物だった。

だが現在、積載型量子電子LSI：電子を極めて狭い空間に閉じ込めることで量子的性質を持たせた電子による量子回路の開発が進んでいる。振動に比較的強いこれを使えば戦闘機動における慣性制御ぐらいならはできるだろう。

まあ、夕呼の目指す代物はさらにその上、例えるならば150億個の半導体一個一個が並列処理可能なシステムの構築だ。セレが提唱した量子電子型では追いつかないしサイズがあまりに巨大になってしまう。そのため方向性がやや異なり性能が良い光量子型が思いつくのだがこちらは振動にあまりに弱い。

とまあ、書き連ねてはみたが量子コンピュータそのものはまだ一号機もできていない未知の領域だ。性能は及ばないと分かってはいても、実際の稼働状況がどうなるのかを探るために類型機の開発は不可避であったとも言える。

そういう背景はあっても出来た実績は実績、積載型量子電子LSIが想定した性能を発揮できればそれは既存のCPUのほとんどを駆逐することになる。桁外れの並列処理能力はこれまで完全に未知だったハイヴ内構造物や物質、G元素の開発を急激に加速させるだろう。まあ、この研究は常温超伝導性を持つグレイ・シックスを利用すれば楽にできるのだろうが、G元素を米国がガメている以上代替技術でどうにかするしかない。そこは夕呼とセレの頭脳任せといったところになってしまいうだろう。

また、アルゴリズムに関しては数式そのものを理解し熟知しているセレがいる。だがこれも夕呼の求める数式とは変換の式そのものが違う。彼女の式は有機的ではなく無機的なものだった為、本命の

方は新たな数式の構築が不可欠となっていた。

「まあ、あと7年ってところかしら。私の研究のリミットは」

合成とはいえ、それなりに薰り立つコーヒーで喉を潤しながら夕呼は静かに呟いた。自分と同じ目線、並び立てる程の頭脳を持った人物が傍にいる。それは彼女に先の事まで考えられる余裕を齎していた。

「ええ、そんなところでしよう。これ、米国のG弾関連実験のレポートと国連でのロビー活動関連の報告書です」

「はつきり言ってくれるわね…ありがと、そこに置いといて」

悪びれもせず言い切るセレに夕呼は苦笑しながら資料を受け取り、目を通す。ここ最近になって米国のロビー活動はかなり活発に、そして直接的な動きを見せていた。露骨にやってくれるのは各国の反感を煽り、こちらとしてはうれしいのだが、それも限度を過ぎれば極めて厄介な話になってくる。ヒトラーも言ったように他人に頼みごとをするのはその人物が疲れ切っているときに最も有効なのだ。機を逃すのは拙い。それは共通の見解だった。

「さて、どのタイミングで公表するか、ね…」

「9月明けが妥当でしょう…そのころに中華統一戦線が動くはずですから」

「ふふ、その核心ともいえる自信はどこから？」

「さあ、女の勘、ということにしておきましょう」

セレが柔らかく微笑み、コーヒーを啜る。夕呼もやや呆れたように軽いため息をつくと喉を潤した。

「…それで、その不知火の開発状況は？」

「7割。光学兵装とジェネレータ増設は後回しにしました。こちらは飛鳥計画の方に搭載する予定です」

夕呼は小さくそう、と呟くと手元の資料を乱雑に探った。山のよ
うな資料がばさばさと倒れるが、夕呼は気にもせず目的の資料を取
るとセレの方に投げ渡した。

「…サイクルコンデンサに使う理論の拡張、もう出来ていたのです
か？」

「ハン、舐めるんじゃないわよ。私だって天才の端くれよ、それぐ
らいできなきゃここにはいないわ」

サイクルコンデンサ。それは今後戦術機に必要とされる光学・プ
ラズマ兵器の運用に必要な不可欠な代物だった。超電導物質を利用し
たギガワットクラスの高エネルギーを極小のロスで一時貯蔵できる、
画期的なコンデンサであるそれは戦略レーザー兵器や指向性プラズ
マ兵器といった次世代特殊兵器の要とも言っている。だが、理論こ
そセレは知っていたが、この世界と向こうとでは技術格差が大きい
為に理論の拡張をしなくてはG元素に頼るほかない代物だったのだ。
その壁も魔女は打ち破った。いや、魔女が魔女たる証明の一つと
して解を導き出したと言ってもいいのかもしれない。それはセレも
予想外の速度だった。ただ、そこに書かれているコストを見ると少
々眉を顰めざるを得ないが。

「予定が早まるかもしれませんがね、でもこれは…」

「トップエースの中のエース専用…青と紫、廉価版が赤、ってこと
になるでしょうねえ。ま、こんなものまともに使えるとしたらあの
バカカラスくらいじゃないかしら？」

脳裏に浮かぶのは以前この研究室にふらりと入ってきた男。セレ
の友人であり、底知れない雰囲気を持った如月のNO.2である傭
兵。

「本人がいないからといってバカカラスですか」

「バカはバカよ。初対面でいきなりカードを5枚も6枚も切る人間がいる？それもこっちから見たら全部鬼札よ：普通ならバカよね。でもそれ以上のカードを隠し持っているんだからやり辛かったらありやしないわ」

――――

香月夕呼にとってその人物は異質であった。柔和な笑みをたたえているはずなのに、その瞳は暗く、まるですべての光を吸い込んでしまうかのような印象を受ける。そして彼が切り出した最初の一言はその異質さを決定づけるに十分なものだった。

「どうも、夕呼先生。横浜のハイヴを乗っ取る算段は出来ましたか？」

「何を：言ってるのかしら？」

臆面もなく、動揺すらなく彼は「横浜のハイヴ」と言った。現時点では国内：本土にBETAが進行したという情報すらないのに、だ。一瞬狂人かと思ったがその言葉は後に続く言葉にのまれてしまった。

「ああ、そうでした。第4計画には反応炉が必須だったので：ああ、まだBETAの本土侵攻まで数年余裕があるんですね。では横浜にできない可能性もある、と。では佐渡島？いやいや国外：となると招致できない帝国に手を貸す義理は消えてしまいますね。やれや

れ、これでは因果の果てから来た意味もなくなってしまいます。星の海に逃げる臆病者に手を貸す義理はないとして：はてさて、帝国以外だとオーストラリア、ヨーロッパあたりでしょうか？」

「待ちなさいッ！　どういうこと！？　先生って？　それに因果の果てって：あんたまさか！？」

すらすらと彼の口からこぼれる単語はどれもオルタネイティブ計画についてかなり深部まで知っていなければ手に入らない情報だ。それをすらすらと口上に述べるということはそれ以上の情報を持っている、という証左に他ならない。自然と体が強張り、瞳孔が収縮する。

「ああ、自己紹介が遅れましたね。俺の名前は霧武影：傭兵ですよ。そしてこの世界にいるのは『依頼があったからから』それだけです」
「ッ：そう、その依頼って何かしら？」

——喉の奥が乾く。夕呼はひりつく様な、痛みさえ感じられるほどの緊張の中にいた。目の前に持っている男がなんなのか。仮にこの男が言っていることが現実だとして、その因果の果ての来訪者が請け負った依頼とは何なのか。

夕呼の期待と不安、緊張といったものがまじりあった視線の中、武影はゆっくりと口を開く。それはまるで禁じられた何かが、人が触れてはいけないものが開くかのようにだった。

「地球上全てのBETAの駆逐、ですよ」

絶句。現状においてそのような言葉が本心から出る人間はいない。軍人であっても、どこか現状維持ができれば最良というような空気が漂っていたのだ。本心から出るのは自分のようにすべてを捨て去ってでも成し遂げようとする狂人くらいのものだ。だがしかし彼はそれらとは違う。確固たる理性と自信をもってそう答えた。さも当然のごとく。それだけの力がその言葉には込められていた。

「地上すべて……ふふ、あはははははははははは！！　まさか私以外にそれを正面から言える人間がいるだなんて思わなかったわ……それで、二重契約って出来るのかしら、傭兵さん？」

「最初の依頼に反しない限りは、請けますよ。無論、対価は頂ますけどね」

面白い。夕呼らしからぬことだが話の主導権を奪われ、ペースをかき回されてなお彼女はそう感じていた。

まぎれもなく眼前の男は傭兵としても一流だ。眼を見ればわかる。優しそうな光を湛えておきながら、その奥底に狂人とも異常者とも違う一種の狂気を孕んだ瞳は普通の人間……軍人も含めて出来はしない。あまたの死線を乗り越え、人としての一線の先に存在する人間の眼だ。

「契約を申し込むわ。第四計画招致への協力。それと『私が主導する』第四計画への協力」

「対価は？」

「あなたが望むものすべて。契約によって得られた権限全てであなたへの協力を約束するわ」

「一押し足りないですね……ふむ、貴女が俺のものになる、を加えさせてもらいましょうか」

「……へえ、存外下心もあるのかしら？　この助平」

「それなりには、ですよ」

下卑た様子もなく、さも当然とばかりに彼はそう言った。普通なら平手の一発でも張るところだが不思議と夕呼の胸中にそういった憤りなどの感情は湧き上がらなかった。むしろ気軽に：何か数年来の友人が言っているような気軽な気持ちさえ浮かんでしまう。契約である以上、冗談ではなく本気だろう。だがしかし、そう分かってはいても彼に対する敵対心が芽吹かない。それは彼の人当たりのいい笑みか、その話術によるものか。

否、彼女はそう思った。芽吹かないのではない。芽吹くことができないのだ。それは眼前の男が常人とは違うこと：それも人間として、生物としてどこか異質であるが故に、敵に回したくないと本能が訴えているのであろうと察した。

裏を返せば、何よりも恐ろしい悪魔のような存在だと夕呼は今更ながら思った。前にいるだけで吞まれる。その優しい空気の裏に潜むどす黒い何かに気づくことなく、彼のペースに乗せられ、そのまま流されてしまうと。彼の真の目的が先の殲滅以外にあるのはその暗い何かを感じれば察しが付く。それが何かというのは分からないが、その核心に至るまで彼の術中に完全にはまるわけにはいかない。もしそれが自分の望むものと違ったとした場合に、大願を潰えさせられるわけにはいかないからだ。そのためにも心中の動揺を隠し切り、あくまで対等であると示して話をする必要があった。

「：私は安くないわよ？」

「十分承知していますよ。前回でいやというほど味わいましたから。それにまだ先生：失礼、どうしても先生と呼んでしまいますね。俺はあなたの教え子でしたから：貴女は若いんです。その時が来るまでに俺が迎えに行くにふさわしい人になってもらわないと」

「へえ、そういうこと？ それじゃさっきのは生徒と教師の禁断の

恋、ってやつかしら？ ああ、先生っていうのは気恥ずかしいけどそのままでいいわよ。どうせ駄目と言っても言うんでしょ？ でも私にふさわしい人になれだなんて…言ってくれるじゃない。今の私じゃ不服ってことかしら？」

「ええ、最低でも国連軍基地の副指令くらいにはなってもらわないと」

「ずいぶんと具体的ね…でも、それならあなたが『今』私に干渉するのは大筋から外れるんじゃない？　　というか、もうすでに遅いのかもしれないけど」

夕呼は笑みをこぼした。おそらく目の前にいる相手にはおおよその歴史の道筋というものが見えているのだろう。その一つに私が国連軍基地の副司令として権限をふるう姿を知っているのかもしれない。だが、このように干渉すればその未来は大きく崩れていくはずだ。

「ええ、そもそも自分は大筋なんて従う気はありませんよ。勝つためには根本から見直す必要があります。戦略も、戦術も、そして外交においても、です」

なるほど、それも道理だと彼女は思った。彼の知る歴史通りでは人類はBETAに勝てない。微細な修正ではただの延命に過ぎず、勝つためには彼の知る歴史とは違う、そう、根本から覆すようなことをしなくてはならないのだ。だから彼は因果の果てから来たといった。だから彼はオルタネイティブ4も発動していない、こんな早期に私と接触したのだと。

「…仮に、あなたの言う根本を改善したとして、オルタネイティブ4が成功する確率は？」

「それは夕呼先生次第ですから答えられませんよ。半導体150億

個を手のひらサイズ：それができるのは貴女だけでしょう。自分は貴女に降りかかる火の粉を消すくらいです。計画のすべては先生の双肩にかかっているんですからね」

「あれだけ啖呵切っておきながら頼りないこと言わないでよ……まあ、あたしとしては優秀な『味方』がその程度で手に入るなら喜んで、ってどこかしらね」

「へえ、『駒』とは言わないんですか」

彼が面白そうに笑う。夕呼は確かに駒と言おうかとも思った。だがしかしこの関係はそんな簡単じゃない。気を抜けば食われるのは彼女の方だった。

「それじゃ、そろそろ自分はお暇します。何分忙しい身なので」

「入学式くらいには来なさいよ？ 軍属にそんな時間あるかどうか微妙だけど……って一応民間人だったわね」

「ええ、ではこれで失礼します」

一通りの話をしたのち、彼はそう断ると静かに立ち去った。ドアが閉まると同時に夕呼の緊張が一気に解かれる。ペースは握られっぱなしだったが完全に吞まれるまでは至らなかった。とはいえ、思いなおせば契約内容をいろいろと修正すべきだったとの後悔の念が浮かぶ。特に自分の進退に関して。

「お疲れ様、夕呼。彼、どうでしたか？」

「セレ、ありがとう……厄介ね。正直、吞まれかけてたわ。あんたもよくあんなのをここに……そういえば如月ってあんたのどの……!？」

そこで今更ながらであるが重大なことに気付く。如月のトップは眼前のセレ、そしてNo. 2は先ほどの『霧武影』である。つまり、最初から夕呼は嵌められていたのだ。彼の最初の切り出しで彼自身の地位など気にもかけなかった。その能力だけに目が捕らわれてし

まった。彼女らしからぬ大失態だった。

「ご明察です。あと、私と彼は恋人だとかそういう関係じゃないので安心してください」

「その後ろの方の話はどうでもいいわよ、あんた最初からあたしをアレに会わせるためにここに入ったのね？」

「さあ、それはどうでしょうか。私は量子コンピュータの開発が第一目標です。もちろんあなたと彼を会わせるのも目標の一部ですが優先順位は決して高いものではありませんでした」

「：会わなきゃよかったわ。正直、あんなのは使いどころが難しすぎるわ。それが手に入ればそれに固執してほかが見えなくなる。かといって有効に使わなくては手札を腐らせるだけだもの」

「会わなければ、それを計算に入れることもなかったと」

「不確定のファクターの方がまだましだわ、叶うなら味方よりの第三勢力としてくれた方がね。強大すぎる力は時に害悪になりかねないもの。ハア：ただでさえ忙しいってのに、また案件が増えたわ」

ため息交じりに夕呼は応える。交渉、威圧といったスキルに関しては十分。では実際のところ、彼個人の戦力としての価値はいかほどなのか気になった。

「：アレの戦場における能力ってどれくらいなの？」

「第1・5世代機単騎で第2世代機の教導部隊クラスの小隊を仕留められるくらいです」

「それ、どんな人外よ：1・5世代機と2世代機じゃ性能差は歴然よ。しかも戦力比1…4？それ相手と同じ条件なら1…16くらい出来るって言うような話じゃない：」

ただの軍人ではないと思ったがそこまで有能とは。セレはこういう時に誇張はしないことを夕呼は知っている。だからこそその数字がどれほど恐ろしいかはわかっている。BETAと人間とでは違う。戦術機相手にそれだけ戦えるということは、BETAに対しても天

敵とすら言えるほどの戦闘能力を示す可能性が高い。

もっとも、セレはそれ以上言わなかった。本来の彼の機体であるなら、戦術機と比して1…50はおろか1…100くらいやって見せるだろうということも。故に夕呼の精神がこれ以上振り回されることなかったのだが、それを幸せというか後の不幸というかはこの場の誰にもわからない。

「ま、アレはアレなりにうまく立ち回っているらしいし、あたしもそれなりにだけど本職に専念できるってものね。セレも耀光計画に参入、そして断ったと言っておきながらしつかり飛鳥計画の情報も収集して…ぬかりないわね…たとえばこの資料、ヨーロッパ方面の新型機…ESFP(Experimental Surface Fighter Program)の開発情報とか。えげつないわねえ、どんな交渉したのかしら？」

「ACSの基礎理論と交換です、恩を売っておく意味でもいい交渉でした」

「鎖まで付けたってことかしら？」

「ふふ、さあどうでしょうか。夕呼ならどうしますか？」

「愚問ね、首輪も鎖も特大のものを用意するわよ」

時戻って現在、夕呼はセレとの雑談を再開していた。

最新鋭機の開発情報も彼女の発明に比べれば霞む。ACSやカーボンナノメタルといった新規技術の理論はそれほど価値ある情報なのだ。例えば今回渡したACSはOBLと電磁伸縮炭素帯の発展形にあたるように。

そして彼女は手に入れた情報を基に更なる技術開拓を行う…一見、

ギブアンドテイクと思うが老舗企業がそれまで何年もかけて培われたノウハウ、それらがどんどんセレの手元に集まっている、という他企業から言えば笑えない状況ができてしまった。

無論、それをかさに着てセレが攻勢を強める事は無い。今は協力関係の企業を増やし、企業体力をつけることが急務なのだ。

しかし疑問点が浮かぶ。なぜ他企業は如月に対し圧力をかけないのか、と。

普通新興の企業が躍進しようとしても、業界をリードする大企業の前に膝を屈することは珍しくもない。というのも彼らは新たな脅威に対し過敏に対応する。そう、このような業種においては裏協定を組んでつぶすくらいには。だがしかしそれがない：それがセレの恐ろしいところでもあった。交渉術を駆使し手が出せない状況を常に作り続け、実績を確実に積み上げ、さらなる人材を確保していく。そして正面からやりあえるだけの信用と企業体力を作り上げる。いふなれば虎視眈眈。セレは静かに『その時』を待っているに過ぎないのだ。

「ダッスオー社、ユーロファイタス社、サーグ社、パラヴィア・インダストリアル社：彼らもまた必死なのです。米国の巨人に踏みつぶされることを恐れて」

「それでいて、別の脅威が身近に迫っていることを知りもしない。知ることができない。知ったとして、対抗できない。まったく、ひどい女ね」

「あなたもです、夕呼。私の交渉に便乗してしっかり英国と渡りをつけてるあたり、ですね」

「あら、ばれてたの」

魔女と悪魔が笑う。極東における天才二人、現時点で彼女らを止める障害は存在していないかのように見えた。

だがしかし、それは確実に存在する。世界最高と自負するスタッフと技術、資金力、そして国家への影響力においてもとびぬけた存在でありながら、同国のライバルに僅かばかりの、致命的な後れを取った企業。

故に彼女の持つ技術力にどの企業よりも着目し、返り咲くために形振り構わずその技術の奪取を狙う企業。

それはノースロック・グラナン。米国における次期採用機のコンペティションで僅差ながら及ばず、まさに背水の陣を敷く巨人だった。

14th Stage: UNSUNG (後書き)

武影は人間ですか？ いいえ、○○○○です。またの名を○○○○です。

物語を加速させたいけど技術開発やら根回しやら書いておきたい気も…ううむ。

15th Stage: Well-meant Fiend (前書き)

遅くなりました、16話です。

15th Stage: Well-meant Friend

15th Stage: Well-meant Friend

1993年4月5日 日本帝国 帝都 新宿 モノリスビル 如月
本社社長室

「そう、それでTSF-X:不知火の開発状況はどうなっているのでしょうか？」

「6割、だな。現状のデータだが跳躍ユニットのみの最高時速が700km/h、歩行速度が240km/hだ。装甲に関しては試作の対レーザー蒸散被膜の耐久秒数が60秒:強度は最大で均質圧延防弾鋼板(RHA-Rolled Homogeneous Armor)に換算してAPFSDS弾で350mmに相当、HEAT弾は900mm。戦術機としては最上級の装甲だ、主力戦車並みに堅い。とはいえ『アレ』の稼働実験もしていない以上6割だな。3.5世代機として大々的に喧伝するためにも、拡張オプションとして『アレ』を積み込むなら確実に実戦証明:それも多大な戦果を上げないとだめだろう。大空寺重工との協力体制は大丈夫だとして、ジネラルエレクトロニクスとフィルモ・フォードとの交渉は？」

男は応接用のソファアにどっかりと腰を下ろし、女はその重厚な社長用の机で書類を決算していた。男の口からは書類も何も持っていないというのにすらすると詳細なデータスペックが諳んじられる。それは現状のTSF-Xの隔絶とした性能だった。それはまさに空飛ぶ戦車。圧倒的な火力と防御力・機動力を併せ持つそれは現状地上最強となりつつある。

だがそれでもまだ6割。真にこの魔改造不知火が魔改造たるためには『あるオプション』の積載が絶対条件だった。

「問題ありません。高密度指向性プラズマに関する研究の協力：実際のところ技術提供で向こうが折れました。『アレ』用の開発は既に済んでいるとのことですので近日中に現物が届くでしょう。大空寺重工については既に開発が終了、今すぐにでも実戦証明可能です」

「それは重畳。あの破壊力は実証済みだ。なんせBETAだらけの浜辺に橋頭堡を確保できるくらいだからな。今のTSF-Xなら空中でも十分制御できるだろう：」

男の口元が歪む。この世界でいやというほど戦い、そしてアレの威力は十分に見てきた。だからこそ、地上ではなく空中であれを使える機体を求めたのだ。圧倒的な殲滅力、弾数。それは対BETA戦において絶対的に必要なものだ。最低条件として武影が新たなTSF-Xに求めた装備の一つである。

そしてそれを装備して初めてTSF-Xの性能は7割となる。そして残り3割のうち2割を占める装備は開発が完了、今か今かその時を待っている状態だ。

「そういえばOSの方はどうなっているんだ？あれからずいぶん経つけど技術者の引き抜きも大方済んだだろう、間に合いそうなのか？」

「間に合います。言語の再構築も終わり現在はデバッグを進めている最中です。ですがやはり以前言っていたようなものほど高性能にはできませんでした」

「仕方ない、そもそもCPU自体性能が違うんだ：だが雛形だけでもできれば違う。今回の実戦証明はそれのお披露目も兼ねている。」

今後の戦術機開発に一石を投じることになればいいんだからな。贅沢は言わないさ」

そして最後の1割、それは如月内部で開発がすすめられている新規電装とOSだった。

ハードウェアの電装については言うまでもないだろう、より即応性をまし、正確にACCSを作動させるために必要な装備だ。問題はソフトウェアの方である。

彼はかつてあるゲームを楽しんでいた。それはACにもない技術である。一定の動作を先に入力することでラグをなくす『先行入力』。入力動作を短縮するために一定の動作から特定の連続したパターンを自動入力する『コンボ』と動作に割り込み処理をかける『キャンセル』。

入力の無駄をとことん省き、完成された三次元機動を身に着けた彼にとっては過去の存在だが現在の衛士には最高の宝となるだろう。それは帝国所屬となり『XM-3』としてそれを開発、広めた自身が身を以て知っていることだ。

だがしかし汎用性を求めるなら、彼が国連から帝国軍所屬になって開発されたものよりより軽量なものである必要がある：F-4の処理速度は遅い。如月で新規のCPUを開発するのは容易いがそれが全世界の全ての機体に備わるとは到底思えない。そして現状もともと配備されているF-4にも合った代物でなければ広まらないだろう。

その為には、よりシェイプされたOSが必要となる。スタンダードとして現状9割の戦術機に採用できるシステム：それは高い技術

力を持つ彼らであっても難航した。故に開発は当時よりも非常にゆっくりとしたものになっている。

夕呼にも手伝わってもらっているが、やはりCPUの処理で頭打ちとなっていた。最終的にセレと夕呼の肉体言語による語り合いの末、コンピュータそのものの言語から見直すという結論に至り開発がすすめられている。

舌戦ではなく手が出るほどぶつかり合ったおかげか完成度は加速度的に高められてきた。その間の武影は彼女たちを宥めるためにあの手この手を使う羽目になったが。

「ああ、9－6作戦が楽しみだ：なあ、セレ？」

「ええ、獅子身中の虫も一緒に排除できるでしょうし：最高のお披露目の舞台となるでしょう」

酷く歪な笑みを浮かべ、男はソファから立ち上がり社長室を辞した。セレはそれに一瞥もせずただ書類を決算し続ける：まるで機械のように。

地獄の窯の蓋が開く日は近い。

1993年5月2日 インド南西 アンダマン基地群 オースティン難民キャンプ

シスターがキャンプの子供たちにパンを配る。国連軍キャンプで

は見慣れた光景だ。住む場所を失い、財貨という財貨も持たずこの地に投げ出された人間にとっての寄り辺。それは民族的アイデンティティと：信仰だった。

「シスター、ありがとうございます：俺たちは何にもお返しできないというのに」

「いいえ、これもまた神に仕える者として当然の義務です。遠慮せずを受け取ってくださいまし。それでも、もし良心の呵責に囚われるのであれば共に祈りましょう。それが主の導きです」

シスターが食料の炊き出しを行う。それは難民キャンプでは珍しくもない光景だった。ここでは彼女らが神の教えを説き、本国から輸送した食料を奉仕する。

穏やかな笑みを浮かべ、パンとスープを難民に配る。その一方では、子供たちが牧師から神の教えを学び、大人たちは祈りを捧げる。

縫るものがなければ人間とはいともたやすく壊れてしまう。夢も希望も故郷さえもなくした彼らにとってそういった目に見える救いに縋りつくのはさして時間のかからないことだった。

「シスター・コルネーリア、お疲れ様です。食料はまだ残っていますか？」

「レクター神父、軍務の中わざわざありがとうございます。当面の間の炊き出しに必要な分は十分あります。本当に神父にはなんとお礼を言えばよろしいのやら」

「気になさる必要はありませんよ、シスター・コルネーリア。これもまた迷える子羊を導く我らの義務なのです。軍務に関して言えば、私の仕事はきっちり終わらせていますから心配する必要はありません。参謀も作戦任務がなければそれなりに時間はあるのですよ」

そう色白い神父は微笑んだ。参謀という役職に就いているだけあり、その切れ長で伶俐な瞳は優れた知性を相対するものに感じさせる。それでいてその声は優しさに溢れていた。

彼を見た難民は礼を述べ、頭を下げる。彼らが食料にありつけるのは彼のような軍の上層部にいる人間が融通してくれるからだ。そうでなくては配給以外の食事など支給できるはずがない。

日が暮れ始め、ミサも終わり教会のまわりから人々は去って行った。聖堂には神父とシスターの二人しか残っていない。この教会にはそれ以外にもシスターや神父はいるのだが、その中でもこの二人は彼らの取りまとめ役のような存在だった。

「今日も無事1日が終わりました。神に感謝を。シスター・コルネーリア、今日の礼拝はどれくらいでしたか」

「昨日よりは増えていると思います、ですがこのキャンプの人口からすればほんの数%でしょう、彼らはこれまでの信仰を捨てきれないようです」

そう、確かに極限の状況ではあるが、信仰を変えないものもいる。先祖代々の信仰を大事にする者たちだ。そういった者はこの教会に訪れる事は無い。

「まったく、救いがたいものです。ここの者たちには主上の教えを学び、私たちのよき奴隷となる義務があるというのに改宗は遅々として進まない。邪教の教えを大層大事にする：敗者の教えなんて路傍の石ほどの価値もありませんのに」

シスターの目つきが変わる。昼間の慈母のような微笑みから一転、

悪魔も裸足で逃げ出すような冷徹な瞳に。それはかつて信仰のために十字軍を率いた騎士のように曇りのない闇だった。

「そう言うな、シスター・コルネーリア。主の教えをまだ理解できないだけだ、そういきり立つな」

神父の声色も昼間のそれとは異なっていた。怜悯すぎてまるでナイフのような気を放ち、見るものに畏怖を与える姿。そこに優しい神父様といった姿はない。

「いいえ、これではこの国の民が地獄に落ちるのも道理です、ああ、主もお嘆きになります。このままでは地獄があふれかえってしまう」
「おいおい、我らが合衆国にはこの国出身の者もいるのだ。言葉は選びたまえ」

「：申し訳ありません、レクター神父。私としたことがつい熱くなってしまう。主の御言葉にて心を静めなくては」

そう言ってシスターは恍惚とした表情でその手に持つ聖書を読み始める。彼女は福音派と呼ばれる合衆国最大の宗派のひとつを信仰していた。その中でも原理主義に近い、いわば聖書絶対主義的な宗派を、である。もはやそれは洗脳に近く、狂信者とも言える信仰ぶりだった。

初めに主は光あれと言った。それこそ主が光を齎す前は世界というものが闇に包まれていたことを示す証左である。世界から闇が消えたわけではない。光が闇を覆っているだけだ。

そして慈善事業という光は、その裏に潜む闇を簡単に覆い隠す。一つの善意が4つ5つの悪意を包むことなど造作もないことだった。

1993年6月2日 インド南西部 ティルヴァナンタプラム国連
軍前線基地

四月の初めであっても熱帯の温度は最高30度に達する。ボパールにハイヴが建設されて以降、インドは南へ、南へと防衛線を下げ
ており、そのインド亜大陸における最南端の前線基地がこのティル
ヴァナンタプラムだった。

その蒸し暑い空気を割くように青のF-5（フリーダム・ファイ
ター）がジネラルエレクトロニクス製跳躍ユニットFE85-G E
-15を吹かし、飛び立っていく。いつもの哨戒出撃だ。この最南
端のティルヴァナンタプラムであっても、遠く放火の音が聞こえぬ
日はない。隊章には特徴的なトップヘビーのナイフを用いており、
それはこの基地ではある衛士たちのトレードマークだった。

その様子を鉄条網越しに彼女は幼くも、憧憬のこもった眼差しで
見つめていた。

「なあなあ、あのF-5のパイロットってグルカなんだろう!？」
「ああ、そうだ。あれは国連軍第一印度方面軍第14機甲大隊、こ
のインドやタイといった東南アジア、もちろんネパールの兵士たち
も集う部隊だ。どうだ、将来あそこに立つ身としては」

彼女の母国語でかけられたその問いに30半ばと思われる浅黒く
焼けた男が腕組みしながらにやりと笑い、同じ母国語で答えた。

「うん！すっぱえ楽しみだ…えへへ、いつかあたしもウィングマー

ク付けて…そして」
少女はF-5を眺めつつ、きらきらと輝いた瞳で大きく息を吸い込む。

「故郷^{ネパール}を 取り戻すんだ！」

人類の反抗むなくBETAの南進は止まらない。彼女もまた故郷ネパールを追われた子供だった。そして、その高い資質からグルカ兵になるべく英才教育を受ける子供の一人だったのだ。

グルカ兵とはそもそも英国に送り出すネパールの傭兵の事である。19世紀、ネパールとイギリス東インド会社軍との3度にわたる戦争（英・ネパール戦争）の停戦条約が締結される際に、ネパール山岳民族特有の尚武の気性と白兵戦能力、宗教的な制約が小さい点（ヒンドゥー教徒のインド人は近代戦の兵士に向かず、宗教的な制約が多く運用に不自由をきたしていた）に目をつけたイギリス東インド会社は、グルカ兵が傭兵として同社の軍に志願することをネパールに認めさせた。

その後、セポイの乱が発生すると、ネパールは14,000人のグルカ兵を派遣し、イギリス軍が行った鎮圧戦で大きな戦力となり、後に発足した英印軍では、シク教徒・ムスリム系インド人・パシクトウン人などとともに重要な地位を占めた。その後も第二次世界大戦においては日本軍とも交戦した。その勇猛さはグルカがいると知ると逃げ出す敵兵もいたほどである。

そして現在、BETAによって故郷を追われた人々は民族的アイデンティティをグルカに求めた。兵士はいくらいても足りない、それでいて有能で勇敢な兵士は希少価値すらあるものだ。すこしでも

死の八分を超える兵士を求めるべく、グルカのスカウトは難民キャンプでも行われ、それでお目に適う人材がいればこのように衛士基礎訓練課程を学ぶ訓練兵として引き抜かれていった。

この彼女の傍らに立つ男もグルカとして戦場に立つ益荒男であり、こういったグルカを目指す子供たちの教官でもあった。

「さて、と。昼の休憩もそろそろ時間だ。隊に戻れ、タリサ訓練兵」「了解しました！ビヤス軍曹！！」

戦場では人手が足りない。特にこのインド方面ではもはや背水の陣とも取れる様相を呈しており、訓練兵がこうして前線基地の雑務の手伝いをしながら訓練に励むというのは珍しくない光景であった。また、こうして戦場の空気に触れさせることで、少しでも死の八分を超えやすくなるようにとの計らいもあった。

この軍曹もまた教育中こそ軍曹であるが実質は大尉である。BE TAの奇襲があれば自らも復隊し前線に赴くのだ。無論、自身の訓練も欠かさずに行っている。

タリサは敬礼すると隊舎の方へと走って行った。彼女もまた、訓練兵という身分でありながら前線基地に勤める衛士見習いである。基本は訓練だが、有事・出撃要請があった場合は各部署を走り回るいわゆるパシリとして使われていた。今日は基地に対し出撃要請もなく、平時の訓練が行われる予定だった。

（あれ…だれだ？ あの人）

隊舎で装備を確認し、隊のみんながいるであろうグラウンドに向かう途中見慣れない軍人を見た。年の瀬は40手前といったところだろうか、この熱帯には不釣り合いな色白い肌をしている。金髪、

碧眼であることから白人であることは想像がついた。

別にこの基地で白人が珍しいという事はない。国連軍自体多民族混成の軍だ。当然白人もいれば黒人もいる。ただその土地によってその比率に若干の違いが出るだけだ。

だが彼女はこの男に不信感を覚えた。この暑い日差しの中シミひとつない真っ白な肌やその赤い唇、どこか爬虫類を思わせる切れ長な目つきがどうも生理的不信感を募らせていた。

とはいえその襟元に見える階級章は少佐。彼女のような訓練兵から見れば雲の上のような存在だ。ここは関わらずにさっさと行くべきだと考え、さっそく実行しようとしたところでその『嫌な人』から声がかかった。

「その訓練兵、止まれ」

「！っは、何でありますか、少佐殿」

振り向き直立不動、教官たちからからしごきにしごかれた見事な敬礼をするタリサに男は近づいていく。タリサの胸中には何か粗相をしてしまったか、もしや胡乱げな目で見ていたのに気付かれたのだろうかと思ひで一杯になっていた。

「君はなぜ軍に？」

「はっ。故郷を取り戻すためであります」

「それは周囲にそう言われたからか？」

「いえ、自ら志願しました」

「年はいくつになる」

「今年で14を迎えました、少佐殿」

「ふむ…まだ15にも満たない子供が、か…人類も末だな、嘆かわしい」

幾言か言葉を交わし、少佐は目を細めた。はたから見れば子供がこの用に軍の一端を担うことを嘆いているように見えるだろう。

だが目の前に立つタリサにはその目がひどく恐ろしいものに見えた。まるで何かを値踏みするようないやしき、暗い感情が込められている視線だった。

背筋に寒気が走る。この目の前に立つ少佐が何を考えているのかが理解できない。一刻も早く逃げ出したい、そんな気持ちでいっぱいだった。少佐の手が伸びる。怖い、助けて。そんな叫びが心の中に木霊する。

その手がタリサに伸びる。色白で、傷一つない手。戦場に不釣り合いで、どう考えても前線にいる人間の手ではないその手がひどく汚らしいものに見えた。

触るな、汚すな。あたしを、戦場にいる人間をその手で触れるな！！

そう叫びたくなった。だが決してそれを口に出すことは許されない。出せば最後、上官を侮辱したとしてどんな結末が待っているかわかったものじゃない。そしてそれを訓練で徹底的に叩き込まれている体は、本能を理性で無理やり押さえつけ不動の姿勢のままだった。

だが、その手がタリサに触れる事は無かった。

「レクター少佐殿、いかがなされましたか」

その手がタリサに触れる寸前、助け舟を出したのはビヤス軍曹だった。どうやら呼び止められている間にだいぶ時間がたっていたら

しい。それを心配した軍曹が来てくれたようだった。

「ビヤス大尉：いや、今は軍曹か。なに、こんな子供がなぜ訓練服をきて基地の中を走り回っているのかと思ってね」

「少佐殿は参謀部勤務でしたからご存じなかったのでしょうか。現在この基地にはこのタリサ訓練兵のような訓練兵が訓練の傍ら、多数勤めております」

「ふむ、たしかに私が参謀本部から出ることは少ないからな：時間を取らせたな」

「いえ、では訓練がありますので失礼させていただきます：タリサ訓練兵、いくぞ」

「はっ、失礼します」

タリサとビヤス軍曹は敬礼し、その場を辞した。

「軍曹、あの少佐は…」

角を曲がり、ある程度の距離を移動したところでタリサが口を開いた。おずおずというか、俯き加減でいつもの彼女らしくない様子に軍曹は目を細める。

「レクター少佐。この第一方面軍参謀本部付の参謀だ：どうした、大丈夫か？」

「いえ、その：なにか、言ってはならないんですけど、こう：気味が悪いというか、すみません訓練兵風情がこんなこと言って」

「いや、気にするな：俺も少々怪しく思っているんでな。有能なのは間違いないが…」

叱責されると思いきやそうこぼす軍曹にタリサは驚いてその顔を

見た。その顔は何か見えないものをにらみつけているとしか言いようがなく：今までに見せたことのない、戦士の貌だった。

そして彼らが去ったのち、レクター少佐が歪んだ笑みを浮かべこぼした一言は誰の耳にも入る事は無かった。

その夜、突如としてコード991が発令。インド中部、ハイデラバードにて停止していたBETAの南進が確認された。基地は喧騒に包まれる。

そして、そこで静かに闇はうごめいていた。善意という名の毒は静かに流れ出していたのだ。

「103訓練小隊、全員集合しました！」

「104訓練小隊、全員集合を確認しました」

「よし、103は基地内部の避難民の移動を。104は503歩兵連隊と共同し車両誘導に向かえ」

ビヤス軍曹はあわただしくも的確に指示を出していた。最南端であるこの基地は港を有している。ここからアンダマン基地軍に出る船便も当然あり、避難民はこのような港湾施設を有する基地を目指して移動する。そのためBETAの南進が開始されると基地は海を目指す輸送車両で混雑することになるのだ。

と、そこに士官が階級章と命令書を携えやってきた。この場で用

事があるとすれば軍曹しかないだろう。

「ビヤス軍曹、現時点を持って臨時大尉に省級する！大尉は302機甲中隊を率いマドウライから当基地に向かう避難車両の護衛にあたれ」

「了解、マドウライから当基地に向かう避難車両の護衛に向かいます…ガキども！あとはしっかり現地の上官の命に従え、いいな！」

ビヤスの檄に一糸乱れぬ返礼で答えた訓練兵は即座に動き出す。まだ年端もいかぬ少年少女だが濃厚な戦場の空気は彼らを戦士に、大人に仕立てあげていた。それは本来なら悲しむべきことであるが、前線であるここにおいては歓迎すべき事柄であった。それほどまでに人材の不足は深刻な問題なのだ。

それを見るまでもなく、ビヤスはハンガーへと向かった。それを見ずとも分かっているからだ。だてに厳しく鍛えているわけではない。衛士としてはまだまだ半人前にもなっていないが、今回のような後方勤務の兵士としてなら十分実用に耐えうるレベルになっていると彼は十分知っているのだ。

ハンガーからF-4が随時発進していく。インド亜大陸の中心に位置するボパールにハイヴが建設されて以降、人類は海へ、南へとその前線の移動を強いられてきた。今回の南進でも、また人類はその前線の後退を強いられるであろうことは火を見るより明らかだった。

すでに国連は先のスワラージ作戦失敗を受けてインド亜大陸からの撤退を確定させている。今回の南進は、その日が来るのを早めるだけに過ぎない…だが、それを遅れさせなければ救える命も救えな

いのだ。突如として襲い掛かる地中侵攻の恐怖から避難民を守るべく、ビヤスのF-4もまた闇夜の空へと飛び立っていった。

その喧騒の中不審な船が基地から離れた沿岸部に姿を現した。黒塗りの、大型の輸送船。本来なら港に接岸すべきそれはやや離れた沖合から小型艇を多数発進させていた。サーチライトもつけずに、だ。

月明かりの中見えるその船名はデ・フリーデ。それは合衆国慈善団体『リペイント・アメリカ』の所有する船舶だった。

1993年6月2日 日本 群馬県太田市 富嶽重工

「今度の作戦は9月6日予定、か…」

「作戦区域は遼東半島：ユーラシアもほとんどBETAの手に落ちた、というわけですね」

「インド亜大陸も陥落寸前だぜ。帝国にBETAが来るのも時間の問題だろうなあ」

そのころ苦虫を噛み潰したような顔で耀光小隊の面々は作戦に関する資料に目を通していた。この場にいるのは藤原、日野、二宮、中島と巖谷の5名だ。武影は本社の方に用事があるとのことで席を外していた。

「そういえば若がない理由って？」

「TSF-X用の強化武装…それと新型の跳躍ユニットのテストに

行ったらしい。開発は如月重工が主導、遠田技研と河崎重工との共同開発、さらに大空寺重工も一枚かんでいるらしいが：あの如月が主導している物だ。普通の品であるはずがないな」
巖谷からそれを聞いたこの場にいる全員がそれを聞いて顔をひきつらせた。

：唯でさえ桁違いの性能を持つTSF-X試作型をさらに強化するのか、と。

TSF-X試作型はデモンストレーションを兼ねておりその性能は実際に予定されている量産機に比べると幾分か高性能になっている。例えばACSにおける電磁伸縮炭素帯と強磁性形状記憶合金や、カーボンナノメタルと通常装甲の比率が違っている点。パラジウム系実用燃料電池の出力差、CPUなど各種電子兵装の違いなどだ。

そういった『お披露目のための』チューンが施されているため、試作機はコスト度外視で製作されている。そしてそれは当然乗り手を選ぶほどの高性能だということだ。現状、ぶつちぎりの最新鋭機であるTSF-Xに勝てる機体は存在しないと言っている。

そんな化物に追加する強化パーツだ。そうなればじゃじゃ馬が1ランクも2ランクも跳ね上がって赤兎馬になってしまう。しかも開発がわずか数か月でTSF-Xの性能を段違いに引き上げた如月重工。それが何を意味するかは言わずもがなというものだろう。

「：なあ、跳躍ユニットの交換ってことは：あれより速い機体って扱えるもんなのか？」

「そうですねえ：一応、今のTSF-Xは既存の跳躍ユニットを使用しているから巡航650km/h、戦闘時280km/hくらい。これより速いとなると：うーん、どうなるのかしら」

そう、今までのTSF-Xは再設計前の跳躍ユニットを利用して
いるため跳躍速度はそこまで高くない：とはいっても主脚の性能が
段違いに良くなったので主脚^{ラン}走行はさながらスプリンターのごとく、
その最高速度は100km/h弱から倍の200km/hほどに跳
ね上がり、単純な主脚による跳躍時の初速度も250km/hを越
えている。故に体感速度はそれまでの比にならないのだが。

「とりあえずあれだ。若以外に扱える代物じゃないってことだと思
うんだぜ」

その言葉にうなづく一同。もはや既存の戦術機の範疇から逸脱し
た代物であることは言わずとも分かっていた。そしてそれを嬉々と
して乗りこなす武影も容易に想像がついた。

後に『対軍深深度殲滅戦用装備（Crowd Breaker）』
と呼ばれる強化パーツ。それは来る9-6作戦のために着々と開発
がすすめられていた。

15th Stage: Well-meant Fiend (後書き)

とりあえず装甲はRPGに耐え、APFSDSに一番堅いところなら耐えきれレベルにしました。さすがに時速600km/h超えで飛び回る物体がMBTよりはるかに硬い装甲持ってたら恐ろしすぎるので…

16th Stage: God stays long but strike

お待たせしました、16話です！

16th Stage: God stays long but strikes

16th Stage: God stays long but
strikes at last — First —

1993年6月2日 インド防衛戦

「出せる機体は全部出せ！全てだ！！」

「ふざけんなッ！！弾薬も何もかも足りてねえんだよ！！目録に目を通したのか！？上層部は何を考えている！！」

「グラム中隊が帰ってくるぞ！！帰還は4！うち2が負傷！あとはKIAだ、糞！！」

「衛生兵急げ！！ちんたらしてたんじゃ助かるやつも助からねえ！！」

「大丈夫だ、大丈夫だ、しっかりしろ。家族が待ってるんだろ、だから寝るな！寝るんじゃないやねえよバカ野郎！！！！」

一言で言えば阿鼻叫喚。地獄絵図。次々と運び込まれる負傷兵に、前線から這う這うの体で帰還する傷ついた戦術機たち。ティルヴァナンタプラムより北東100kmに位置するマドウライ第3防衛線基地は喧騒に包まれていた。

廃棄された市街地を利用した仮説陣地。そこに並び立つコンクリートの構造物は僅かであるとはいえBETAの進軍を乱れさせ、迎撃を容易にする。その南の旧郊外にあるこの基地は第6機甲大隊を擁する基地であった。

だがしかし、現在その100機以上いた戦術機は半数ほどまでに

その数を減らしている。理由は簡単、BETAからの撤退戦だ。

古来より退き口なる戦は最も重要でかつ最も困難な戦であるときれてきた。足を休めれば背後より進軍する数の暴力に食い殺され、かといってただ一心不乱に逃げれば再起を図ることなくただ戦力を磨り潰されるばかりである。このインド亜大陸における戦いはそのすべてが撤退戦である。それはスワージ作戦が失敗に終わった以上、インド奪還は困難というレベルを超え不可能の域に達していた為だ。

その大地を蹂躪し尽くすBETA群の現在地はマドウライより北に200kmほどの旧セラム市街区。そしてそこから南に100kmのカール旧市街区を中心として設置された最前線にあたる第一防衛線は凄惨たる様相を示しており、まさに地獄が噴出したかのような状況となりつつあった。固定砲台から無数の弾丸を吐き出し、決して止まることのない不愉快で恐怖を煽る地響き：地獄の先兵たるBETAの足音が途切れる事は無く、迫りくる不安に心を押しつぶされPTSD、シェルショックを発症する兵士も少なからず存在していた。

カール防衛線の北を流れるカーヴィリ川の水はBETAの体液と戦術機のオイル、残骸で醜く淀み、かつて人々に恵みをもたらしたその姿はどこにもない。今あるのは核により無理やりその河川の面積を広められ、BETAに有効な防御陣として整備：いや、破壊された姿だけだ。

そしてその淀んだ川に浮かぶのは幾艘もの河川砲艦である。戦車のものを流用した100mm滑空砲単装のみという非常に少ない武装ではあるが、それは浅喫水であるためにどうしても妥協せざるを得ない部分だった。これが海峡といった大型船舶が展開できる場所であるならば戦艦の40cm級大型連装砲による支援ができるのだが、

内陸部であるカルールではそんな事などではししない。とはいえ、数が集まればその火力もそれなりのものとなり、この防衛線に一躍かっていた。

そしてその防衛ラインから南に50km、ティンドウツカル第二防衛線。そこでは旧ティンディガル・バイパスに沿って大規模な砲撃陣地が建設されていた。絶え間なくAL弾が発射され、地響きのような砲声が兵士の腹の底を否応なしにシェイクする。そしてそれが空中で高熱のレーザーにより炙られることで形成された重金属雲の下を、レーザー属種の対空防衛網にひっかからないようNOEで飛行する戦術機や戦闘ヘリが次々と前線へ向かい、その貴重な機体と命を数千というBETA――それはこの敵にして0・1%にも満たないわずかな数――と引き換えに散らしていく。

「こちら第210機甲大隊所属、アダンクオ中隊よりCP！損耗率が5割超過、残弾も3割を切った！補給後退の支援を要請する！」

前線の部隊より怒鳴るような声がCPへと届く。彼らは戦術機最大の武器である機動力を殺してまで、その場にとどまり火砲を撃ち続けていた。なぜなら彼らが引けば後はその川沿いに展開している戦車・MLRS部隊しかないからである。

そして彼らが引けない理由はもう一つある。彼らはその身をBETAの生餌としていた。自分たちがBETAをひきつけている間に河川に沿って展開した機甲部隊が支援砲撃により湧いて出てくるBETAを減らす。それが河川を利用した防衛線における人間が取れる最良の戦術だったのだ。

まさしく背水の陣：噴射跳躍により一応撤退ができる戦術機だからこそ取れる戦術だが、その心は決して穏やかなものではない。

さて、前投影面積：即ち被弾面積の大きい戦術機が徴用される理由として、その戦闘ユニットとしての性質の違いにある。純粋な陸戦：跳躍ユニットという羽がもがれた状態であれば戦術機は戦車に勝てないだろう。初速1,750m/sに達する120mm 離脱装弾筒付翼安定徹甲弾（APFSDS）に狙われては主脚走行速度100km程度の戦術機で回避することは難しく、一撃で粉碎されるのが目に見えている。

だが、これが空中機動を含む、つまり翼を手にするとなると話は違ってくる。戦車でへりに勝てるか、といえば須らく否である。もしそれが対空ミサイルを搭載したVSHORAD（Very Short Range Air Defense）システム、であれば撃ち落とせるだろうが：まあここはMBT（主力戦車）を想定しているのでNoだ。

上空から仕掛けるトップアタックに対して戦車は無力である。なぜなら戦車は陸の標的を相手にするのが目的であり、そのような仕事は高射砲のすることだからだ。そしてそれはBETA相手にも同様のことが言える。

BETAで現在対空戦闘能力を持つのは光線級のみである。ゆえに、AL弾による支援砲撃で重金属雲を展開し押さえてしまえば戦闘ヘリなどのNOE可能な戦力は十二分に活躍できる。

その対地攻撃に圧倒的優位に立てる航空戦力であるが現在、光線

級に支配された空を飛ぶことはできない。よしんば殲滅したとしても、その空を再度飛べというのはどだいリスクが大きすぎるし増援を考えると現実的ではない。ゆえに、陸戦機であり空戦もある程度でき、36mmと120mmの大型の火砲を持つ戦術機という存在が浮かび上がる。

戦車では間に合わない速度で飛翔でき、そして攻撃ヘリでは実現不可能な継戦能力と火力を持つ存在、それが戦術機だ。そしてその本質は防衛ではなく攻撃でこそ輝くもの。

だが彼らは戦力の3分の1が消失してなお踏みとどまることを選択した。その最大の長所である機動を殺してまで守りに徹しなければならなかった。それほどまで混沌とした劣勢に立たされていたのだ。

極度の緊張で目は血走り、バイタルが正常値を保っているのは各小隊長とわずかなエースくらいのものであった。だがそれでもなお、引き継ぎの部隊が来るまで、残弾を撃ち尽くすまで撤退は許されない。

「う、うわあああああ！！！！た、助けてくれ！！！！よ、寄るな！！来るな化け物おおお！！！！」

「シャーム少尉！！くそ、アダンクオ3よりアダンクオ6！！アダンクオ5に取りついた戦車級を引きはがせ！アダンクオ4はアダンクオ6の援護に回れ！！」

砲撃支援で援護射撃をしていた新任が戦車級に取りつかれていた。パニックに陥ったのか我武者羅に支援突撃砲を乱射して危険な状況だ。このままでは近づいた味方も巻き込んでしまう恐れがある。

回線でその通信を聞いていたアダンクォ1は小さく舌打ちしアダンクォ5と秘匿回線Bを繋ぐ。

「――夜の虹、黒い霧、血の雨に打たれし者よ」

「――月の雫、白い水面、魂に導かれし者よ」

「――朽ち逝く地平に幾万の鐘打ち鳴らし、鋼の墓標に刻まれし其の名を讃えよ」

「――いざ我等共に喜び行かん、死と勝利に彩られた約束の地へ……」

後催眠暗示。それは狂乱状態に陥った兵士を無理やり復帰させるために使われるコードである。アダンクォ5はまるで糸の切れた人形のように動きを止めた。そこにアダンクォ6がすぐさま短刀で取りついた戦車級を押し切り、肩を担ぐようにその機体を後方に運ぶ。

バイタルは安定していた。それはつまり後催眠暗示の成功とアダンクォ5の生存を意味する。

助かったことに安堵し小さくであるがため息をつく。まだ若い新人だ。これで散るには惜しい命だった。

――だが、現実は甘くはなかった。

「アダンクォ2よりアダンクォ1！シャーストリー中尉がやられた！くそつたれ！！！」

支援が甘くなつた隙に突撃前衛の一機が要撃級のハンマーに潰されていた。おそらくコックピットを貫かれたのであろう。ファントムの胸部は赤く染まり、彼女のコールサインであるアダンクォ10のバイタルはフラットを示していた。それは彼女のKIAを意味するものだった。

「糞、どうしてニーシャが…」

「アダンクォ11!! 感傷に浸る暇などない!! 目をつぶるな前を見ろ!!!」

俯きかけるアダンクォ11にアダンクォ2の檄が飛ぶ。シャーストリ―中尉：もう少佐か。彼女は今回の出撃の後、中アンダマン島・オースティン基地：つまり後方勤務となる辞令が出されるはずだった。変に気負いさせないように胸中に伏しておいた事だったのだが、その気遣いも意味をなさなくなってしまった。

「畜生!! 糞虫どもが!! 俺の：俺のニーシャをよくもおお!!!!」

「アダンクォ11突出するな!! ええい馬鹿者が!!!」
アダンクォ2とアダンクォ9に目くばせする。それだけで彼らはその意をくみ取ったかのようにアダンクォ11を支援するようにフォーメーションを変更した。

もともと彼の属する小隊がフォワード陣だったのが不幸中の幸いだった。突き進んでもある程度はブレーキも効く。多少押しすぎる可能性もあったが、アダンクォ5を含むC小隊が機能不全に陥っている以上、BETAの意識を他に引付けられるのならそれを利用するということ以外に最良の手はない。

これで少しは時間を稼げられれば、と目を細めるアダンクォ1に

待望の通信が繋がった。

「こちらC P、H Qよりアダンクオ中隊の撤退が承認された。30秒後に通常弾頭による支援砲撃がポイントN－5に、300秒後にハティ中隊が引き継ぎに向かう」

「了解ッ！アダンクオリーダーより中隊各機！！もうひと踏ん張りだ！なんとしても生きて帰るぞ！！」

爆炎の中生きあがく者たち。狙わずとも撃てば当たる。それほどまでの物量差の中たった一つの希望を抱き戦い続ける。そしてまた一人、また一人とその機体が無慈悲な光芒にのみ込まれていく。

辛いのは前線だけではない。後方にいる人間もだ。

もしあの時私が伝えていれば。

もしあの時私が気づいていれば。

もしあの時私が撤退を進言していれば。

そんな思いがC Pとして小さな座席に座る彼らを蝕む。

もし、という仮定で世界は回らない。掛替えのないものを失っていく悲しみは平等に、無慈悲に存在する。

現実が彼女を、彼らを打ち据える。だがそれでも退くことは許されない。

ここは戦場。ここは地獄。

漆黒の絶望の中で幽かな光明を掴み取る者だけが生き残る、それが此処だ。

——その戦場から逃げる民衆を救うべくマドウライへ向かう機上、ビヤス大尉は静かに黙考していた。いつもの撤退戦、いつもの戦場。だがしかしどうも感じられる空気が違う。

彼の腕は一般の衛士と比べそれなりにうまい、というレベルに過ぎないが、この基地においてほかの衛士にはない技能を持っていた。実際、その技能のおかげで彼の率いる部隊の損耗は他に比べると幾分か低く、被撃墜率も少なめになっている。

「大尉、どうかしたんですか？」

ふと、僚機を務めるマヘーシュ中尉が声をかける。どうやら回線を開きっぱなしにして唸っていたらしい。まずったなと苦笑いした。

「ん、いや…ちょっと胸騒ぎがして、な」

「ちょ、大尉、それ洒落になんないですって。現にカールの第1防衛線も早々に引き上げて、ティンドウツカル旧市街区の第2防衛線での戦いに移行するかもしれないって噂になってるんですよ？」

網膜に映る僚機の部下が引きつった笑いを見せる。それは当たり前のことだ。今から戦いだというのに行く前から『胸騒ぎがする』なんて縁起が悪いってレベルの話じゃない。それにそれを口走った

人間が人間だから性質が悪い。

「ん、ああそうだったな：まあカルールもよく持ちこたえた方だからなあ。それにそれとは別に：どうも、引つかかるんだよなあ」

カルールの防衛線は第1防衛線：抜かれる覚悟をした防衛線ではあるが数少ない河川を利用した防衛線である。正直、ここを抜かれると後が苦しいのは目に見えている。だからこそ、後方の基地から続々と援軍をだし少しでも時間を稼ごうとしているのだが：現実はいまならない、といった物なのだろう。

「それとは別、ですか？：また上の連中がアンダマン基地と喧嘩でも？」

「んー、そんなような、それとは違うような、だ。まあ今ぐだぐだ考えても仕方あるまい：護送トラックとの合流までは？」

「ハッ、およそ10分です」

「ふむ、そうか：」

いつも通り、万全の整備がなされたF-5は順調にマドゥライに向け移動している。主機の出力にも異常はない。迎撃後衛仕様である機体に取り付けられた36mmの予備弾倉は十分。そもそも、今回の任務は後方のマドゥライからの護送だ。地中侵攻の可能性があるとはいえ過剰ともいえる護衛だった。

だからこそ、キナ臭い。たしかに機体を遊ばせておく余裕はこの亜大陸において存在しないが、これは燃料の浪費なのではないか？ テイルヴァンタプラムの戦力をわざと減らすような行為ではないか：そんな思いがふと沸き立つ。

危機察知能力：それはただの勘だけではない。そこに至るまでの小さなファクターを感じ取り、推測し、予測を立てる能力。広い視野、積み重ねられた経験、論理的な思考力と柔軟な想像力。それらを備えて初めて花開く能力だ。

その能力が、この戦いはどこおかしいと告げている。確かにマドゥライからの避難民の護衛というのは理解できる。だがなぜ『マドゥライに近い海辺とは逆方向の』ティルヴァナンタプラムへ向かうのかということだ。マドゥライに最も近い港は『東海岸』のラーマーナータプラムであり、そこからなら迅速に海を隔てたスリランカ方面へと避難できる。それがどうして『西海岸』の基地に移動するのか？

戦力は減ってはいる。減ってはいるがわざわざ100km近く離れた基地から救援する必要があるのか？西海岸ならまだわかる。これは中央付近ではあるがどちらかといえば東海岸寄りへの救援だ。同じくラーマーナータプラムから救援する方が早いはず。

解せない。すでに撤退が決定している以上、作戦本部がなぜティルヴァナンタプラムの貴重な戦術機を出撃させたのが理解できない。

そんな疑問を抱きつつも、彼はマドゥライへと向かう。軍人にとって命令とは絶対である。軍人として与えられた責務を果たすために、彼はその疑問を胸中に留めるだけにした。

16th Stage: God stays long but strike

大変…遅くなりました…

題名の通りインド騒乱前編となります。後編でインド戦線は終了です（おい15話も前編じゃねーのかとか言わないでうわなにする石投げないで）。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2912o/>

MERCENARY return Muv-Luv World

2011年10月14日04時53分発行